



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イギリス奴隷貿易廃止運動の歴史的意義：リヴァプールのウィリアム・ロスコーを中心に
Author(s)	田村, 理
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11626号
Issue Date	2015-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k11626
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58729
Type	doctoral thesis
File Information	Tadashi_Tamura.pdf



イギリス奴隷貿易廃止運動の歴史的意義

ーリヴァプールのウィリアム・ロスコーを中心にー

田村 理

目次

序論

はじめに	1
第1節 奴隷貿易廃止運動にかんする研究史	5
第2節 ウィリアム・ロスコーにかんする研究史と史料	10
本論の概要	12

第1章 ブリテン大西洋世界の構造と展開

はじめに	16
第1節 ブリテン大西洋世界の形成と展開	17
第2節 ブリテン大西洋世界の経済史的契機	20
第3節 ブリテン大西洋世界の政治史的契機①—ブリテン諸島	23
第4節 ブリテン大西洋世界の政治史的契機②—西アフリカ諸国	27
おわりに	32

第2章 18世紀リヴァプールの政治社会構造

はじめに	35
第1節 18世紀リヴァプールの経済成長	36
第2節 リヴァプールの政治文化①—都市エリートと民衆政治	38
第3節 リヴァプールの政治文化②—アソシエーションの衝撃	45
おわりに	50

第3章 リヴァプールにおける奴隷貿易廃止運動

はじめに	55
第1節 背景①—イギリス奴隷貿易廃止運動	55
第2節 背景②—リヴァプールのウィリアム・ロスコー	62
第3節 W・ロスコーの奴隷貿易廃止論の特質①—啓蒙主義	68
第4節 W・ロスコーの奴隷貿易廃止論の特質②—帝国意識	71
おわりに	78

第4章 リヴァプールにおける「反」奴隷貿易廃止運動	
はじめに	85
第1節 リヴァプール「反」奴隷貿易廃止運動の経緯	85
第2節 リヴァプールの「反」奴隷貿易廃止論の特質①—保守主義	91
第3節 リヴァプールの「反」奴隷貿易廃止論の特質②—啓蒙主義と帝国意識	96
おわりに	101
第5章 リヴァプールにおける「国際的」奴隷貿易廃止運動	
はじめに	106
第1節 背景—1810年代のリヴァプール	106
第2節 「国際的」奴隷貿易廃止運動の経過	110
第3節 運動の特質①—都市共同体の再創造	113
第4節 運動の特質②—帝国意識の浸透	117
おわりに	120
結論	124
史料と参考文献	126

序論

はじめに

イギリス人は、アフリカに暮らす男女を、おもに北アメリカ南部やカリブ海諸島へ強制連行することを繰り返した。16～19世紀のことである。被害者の総数は、約 326 万¹。これが、あの悪名高い、奴隷貿易である。その目的は何であったか。ほかでもない。かれら・かの女らを、サトウキビ・タバコ農園などの現場で、生涯にわたる労働を行わせることである。

1780 年代になって、事態が急転した。大多数のイギリス人が、奴隷貿易は非人道的な営為であるから、ただちに廃止すべきだ、と主張し・行動しはじめたのである。これが、奴隷貿易廃止運動である。1807 年、イギリス議会は、奴隷貿易の全面的な禁止を決定した。

(1) 研究の目的

本論の目的は、イギリス奴隷貿易廃止運動の歴史的意義を、具体的事例に即して再確認することである。このことは、わが歴史学界においては、ほぼ等閑視されてきた。たしかに、この対象にかんする論考は増加している。それらは、個別事例を精密に調査し、するどい分析を加え、妥当な結論を提示してはいる²。だがそれらからは、このテーマがもつ巨大な歴史的意義を、すべて白日のもとにさらそうという、野心や迫力は感じられない。

その歴史的意義とは何か。第 1 に、奴隷貿易廃止運動が、人権思想、すなわち「万人は生まれながらにして自由・平等である」との観念を、国民のあいだに浸透させたことである。人権が擁護されるべきであることは、現代世界では常識である。少なくとも、それを正面から否定するような制度・実践は、社会的な非難を浴びせられよう。だが 18 世紀のイギリスにおいては、必ずしもそうではなかった。なぜなら、身分制やそれに源流をもつ諸制度が、確固たる影響力をもっていたからである。奴隷貿易廃止運動こそ、かかる情況に一撃を加えたさいたるものである。19 世紀に入ると、「万人は生まれながらにして自由・平等である」との前提のもと、国家・国民を改造しようとの動きが始まった。いわゆる、「自由主義」的諸改革である³。ただしそのなかには、「社会的格差は、生後における能力・努力の多寡に比例するものであるから、正当化される」との原理も含まれる。とまれ、かかる改革やそれらの成果・限界を理解しようとするさいに、奴隷貿易廃止運動を避けて通ることはできないのである。

第 2 に、奴隷貿易廃止運動は、人種差別・帝国主義のファンファーレを鳴らすものである。それは現代世界においても、各地で癒しがたい傷を残している。こう述べると、何かのまちがいはないかと思われるかもしれない。それは逆に、人種差別・帝国主義に対する抗議行動の先駆けではなかったか。だが、まちがいはない。この運動は、白いイギリス人が、黒いアフリカ人を、意のままに支配してよいとの考えを、国民のあいだに浸透させたのである。意外なことに奴隷貿易は、「反」人種差別・「反」帝国主義的な性格を強くもつ営為であった。むしろその廃止運動こ

そ、それらから「反」の字を除去する役割を果たしたのである。19 世紀後半になると、この観念のもと、イギリス人は、アジア・アフリカに進出し、その住民たちへの暴力・搾取を繰り返した⁴。かかる動きを理解しようとするさいにも、やはり奴隷貿易廃止運動を避けて通ることはできないのである。

本論では、以上に述べたことを、具体的に明らかにする。だが、ここで 1 つ疑問が生じる。すなわち、そうした巨大な意義が、なぜこれまでに解明されてこなかったのか。また、本論にはそれができるという根拠は、どこにあるのか。こたえよう。それは第 1 に、本論が、歴史学の一般的な方法の、革命的ともいってもよい変化を捉えているからである。第 2 に、本論が、これまでは注目されてこなかった史料を、新たに活用しているからである。順に説明しよう。

(2) 研究の方法①ーグローバル・ヒストリー

新たな方法について。これには 2 つあって、それらはおたがいの弱点を補完しあっている。1 つ目は、グローバル・ヒストリーである⁵。これはすなわち、過去のある対象を、同時代のグローバルな文脈のなかに位置づけて理解しようとする、歴史学の視座である。それはまた、かつて有力であった、ある想定を根もとから覆すものである。それは、いかなる対象も、現行の国家の空間的枠組みの内部にあった諸事物との関連においてしか、説明されえないというものである。かかる想定は、ふつう一国主義史観とよばれ、長らくわが歴史学界において、権威を保持していた。それゆえに、奴隷貿易やその廃止運動は、イギリス史の研究者が正面から扱うべき対象ではないと、暗黙のうちに考えられたのであろう。しかしながら、グローバル・ヒストリーの伸長にもなあって、そうした心理的障壁は撤廃されるのである。

グローバル・ヒストリーには、もう 1 つの特長がある。すなわち、それが西洋中心主義を克服したという点である。西洋中心主義とは、18～20 世紀の西洋諸国の経験を、すべての人類社会が普遍的にめざすべきゴールとみなす価値観である。そのゴールとは、具体的にいえば、物質的に豊かで、人々に自由があつて、みなが自発的に公のものごとに関与できるような、そうした社会制度を構築することであつた。かかる見解に対し、グローバル・ヒストリアンならこう反論するであろう。すなわち、そのことがかりに事実であつたとしても、偶然にそうなったに過ぎない。国境を越えた人・もの・情報の移動が契機となって、ある時間・ある空間に、ユニークな国家機構なり社会構造なりが出現したという点では、18～20 世紀の西洋諸国と、それ以外のほかの時代・地域とのあいだに差異はない。さらにいえば、かかる特質は偶然にあらわれたわけであるから、今後はどうなるのか、まったく予測がつかない、と。

しかしながら、ここでグローバル・ヒストリーの弱点が明らかとなる。なぜなら、西洋と同じ夢をみてはならないのであれば、わたしたちが目指すべきゴールとはどのようなものか、分からなくなるからである。ここから、次のような、寒々しい、荒涼とした歴史観が生み出される。すなわち、端的にいえば、そうしたゴールは存在しない。今後もおのおのの国家・社会・人々は、国境を越えた人・もの・情報の移動を契機として、さまざまに変貌をとげていくであろうが、具体的にどうなるのかは、誰にも分からない。むしろ、同じことの繰り返しである可能性が高い。グ

ローバル・ヒストリーの目的は、過去のそうした変化を記述し、またそれら内部における因果関係・相関関係を説明するのみである。

だが、こうした姿勢では、現代社会のニーズにあった歴史像を提供することはできない。それでは、現代社会のニーズとは、具体的にはどのようなものか。私見によれば、これははっきりしている。すなわち、次の問題を熟慮するさいに、有益な比較対照として描き出された歴史像である。その問題とはこうである。つまり、国境を越えた人・もの・情報の移動を契機として、既存の社会構造・国家機構が、未知の領域に向かって激変するさなかにあつて、わたしたち 1 人 1 人は、いかに考え・行動すべきか。また、わたしたちの思考・行動は、変化のゆく先に、どのくらい影響を与えられるのであろうか。

(3) 研究の方法②—文化諸理論

かかるニーズにこたえるために、グローバル・ヒストリーの成果を利用することは、必要ではあるけれども、十分ではない。それゆえに本論は、2 つ目の武器として、最近、フランス史家のリン・ハントが名づけたところの、文化諸理論 (cultural theories) の成果を併用することにした。それとは、ポストモダニズム、ポスト構築主義、言語論的転回、文化論的転回、カルチュラル・スタディーズなどとよばれた、人文科学の諸潮流を総称したものである。これらはみな、1980～90 年代の歴史学界に、革新的な変化をもたらすものとして期待されたが、2010 年代半ばの今日においては、あまり顧慮されなくなっている。その原因はさまざまであるが、もっとも深刻なのは、文化諸理論が、既存の歴史観を否定するばかりで、オルタナティブを提示しえなかったことである⁶。

とはいえ、文化諸理論には強みもある。それはすなわち、人間は、周囲で起きていることを認識するさいに、かれ・かの女が利用できる言語や文化のパターンに、かなりのていど影響されるという考えである。これは、次の問題を考察するさいに、非常に有益である。すなわち、ある 1 人の男／女は、過去のグローバリゼーション、およびそれによって引き起こされたところの、もろもろの変化を、いかに認識したのか。かれ／かの女は、そうしたユニークな主観的認識のもと、それらの変化に対して、いかなるリアクションを行ったのか。かれ／かの女のそうしたリアクションを、ほかの男／女たちはどのように認識したのか、また、どのようなリアクションを返したのか。それら思考・行動が連鎖的に作用した結果、かれら・かの女らの社会の内部、あるいはそれを越えたところに、どのような趨勢が作りだされたのか。

かかる問題は、わたしたちの寿命が、ほぼ 1 世紀未満にかぎられており、またわたしたちの活動する空間が、ふつうは地球上の 1 地点にかぎられていることを考えれば、無視しえぬ重要性をもっている。たしかにそれは、グローバル・ヒストリーの目的からいえば、どうでもいいことかもしれない。なぜなら、そうした 1 人 1 人の男女の思考・行動は、数世紀にわたり、また数個の大陸にまたがるという意味での、長期的・広域的な変化には、ほとんど影響を及ぼさないからである。しかしながら、先述のような、現代に生きる男女が関心をもち、また有益とを感じるような歴史像を提供するという目的からいえば、過去における 1 人の男／女の思考・行動、およびそ

れらがもったインパクトを明らかにすることは、無意味なことではないであろう。

以上に述べてきたとおり、本論は、第1にグローバル・ヒストリー、第2に文化諸理論を併用しつつ、イギリス奴隷貿易廃止運動という対象にアプローチする。これら2つの方法は、強みと弱みとをもっているが、決して相容れないものではない。これら2つを併用してこそ、真のブレイクスルーが生み出されるはずである。

(4) 研究の対象と史料—ウィリアム・ロスコー

本論では、1人の男の思考・行動の分析を通じて、先述の目的にせまろうとする。この男は、いったいなぜ奴隷貿易を廃止すべきであると、思惟するにいたったのか。かれは、いったいなぜ・いかにして、その目的に向かって行動したのか。かれの周囲の人々は、そのことをどう受け止め・反応したのか。それらのことが連鎖的に作用して、かれの暮らす地域社会・国民国家、あるいはそれらを越えたところに、いかなる文化・風土が形成されたのか。さらにはそうした文化・風土は、数世代のちの男／女の思考・行動にいかなるインパクトを与えたのか。これらのことが、本論の関心となる。

その男とは誰か。名はウィリアム・ロスコー (William Roscoe)。イギリス中部の港町リヴァプールで生涯を過ごした。この町の住民たちは、18世紀半ば以降、世界でもっともさかんに奴隷貿易を行っていた。つまりロスコーは、隣人たちの所得の源泉を、不正であるという理由で、つぶそうとしたのである。かれは30歳前後のとき、奴隷貿易への批判をおそろおそろ口にしたが、隣人たちの反応は冷たかった。だが、かれが60歳になったとき、状況は一変していた。かれが奴隷貿易を非難すれば、盛大な拍手に包まれた。町の有力者たちも、みなが志を1つにして、今こそ奴隷貿易の根絶を実現すべきときであると、熱弁をふるった。

ロスコーについては、伝記や研究がたくさんあり、それらを参照すれば、かなり深いところまで知ることができる⁷。かれのしたためた原稿・書簡も相当数が現存しており、それらは1つ1つ整理されて、リヴァプール文書館 (Liverpool Record Office, LiRO) に所蔵されている⁸。それゆえに本論は、忘れられた名もなき人物を、ゼロから復元し・分析したものではない。むしろ、あまたの歴史家たちによって、すでに参照された史料を用いながらも、先述した方法論を武器に、まったく新しい解釈を提示しようとするものである。とはいえ、本論の核心部分である、第5章の対象、すなわち1814年の「国際的」奴隷貿易廃止運動にまつわる史料は、これまでめったに参照されたことがなく、また分析されたこともなかった。したがって、本論の独創性とは、次のようになる。すなわち、先人たちによってすでに明らかにされていた対象を、かれら・かの女らのそれとはまた別の角度から切り込んでいったこと。さらには、ごく一部においてとはいえ、これまではよく知られていなかった対象を選択したことである。

小括

グローバル・ヒストリーと文化諸理論の成果を援用すれば、イギリス奴隷貿易廃止運動の、これまでには知られていなかった意義を明らかにすることができる。本論は、そうした新たな方法

を利用しつつ、リヴァプールのウィリアム・ロスコーにかんする個別事例を分析する。だがその前に、奴隷貿易およびロスコーにまつわる研究史を整理し、そのなかにおける本論の立ち位置を明確にしておきたい。また、史料についても簡単に説明する。

第1節 奴隷貿易廃止運動にかんする研究史

本節では、イギリス奴隷貿易廃止運動にまつわる研究史を概観する。わが歴史学界においては、先述したとおり、一国主義史観が長らく権威を保持してきたため、この対象が学問的関心を集めることは、ほぼ皆無であった。かかる状況は、英語圏の歴史学界においても大同小異である。だがこのテーマは、それなりにとはいえ、分厚い研究蓄積を有している。以下ではその研究史を、4つの契機・段階に区分して説明しよう。

(1) ホイッグ史観と人道主義理論

初期の研究は、ふつう人道主義理論とよばれる。それらは、奴隷貿易廃止運動こそ、イギリス人の高邁な精神の発露であった、と評価する。この見解はまた、ホイッグ史観の一部を構成するものでもある。ホイッグ史観とは、イギリスの歴史を、それじたい自由の進歩を体現するものとして位置づける考えである。このため人道主義理論は、のちの世代の反対者たちから、まともに検討するに値しない、イデオロギーのたぐいであるとののしられた。だがそれは、いちおうは学問研究の手順をふんだうえでの結論であることも、また事実である。むしろその反対者たちのほうこそ、特定のイデオロギーに奉仕しようとする気持ちがはやるあまり、学問研究の手順をおろそかにしている。この点は、次項において言及しよう。

人道主義理論の完成者は、レジナルド・カウブランドである。後期ヴィクトリア朝に生まれ、第1次世界大戦（1914～8年）のあとに、オックスフォード大学の教授をつとめた。かれによれば、奴隷貿易廃止運動とは、アメリカ独立革命（1776年）によって自信を喪失したイギリス人による、いわば「綱紀肅正」のころみにほかならなかった。かれはいう。

不名誉な敗北によって神妙になったイングランド人は、新たな指導者ピット（William Pitt）のもと、みずからの行動を律していこうと考えたのである⁹。

かれによれば、イギリス人は、不道德な行為を積み重ねたあげく、アメリカ13植民地を喪失した。いわば因果応報である。このためかれらは、それら不品行をすべて発見・除去し、そのことを通じて、永遠に安泰な帝国を築き上げようとしたのであった。

ネイボップの時代ももはやこれまで。以降、実践的には、必ずしも一様の方針がとられたわけではなかったけれども、あくまでも原則的には、遅れた諸民族との通商活動のさいには、道徳的な責任感がともなわねばならない、と認識されるにいたったのである。イギリスの政策のなかに、人道主義なるものが侵入した瞬間であった¹⁰。

ネイボップとは、インドで不正に巨富を蓄えたものに対する蔑称である。むろんこうした「綱紀

「肅正」論は、奴隷貿易に対する非難へと直結した。

いまやイギリス人は、アジア人に対する責務の意識にめざめたのである。こうなれば、より弱く・遅れており・悲惨な目にあっていて、アフリカ人に関心が向くことは、時間の問題であった¹¹。

かくてイギリス人は、奴隷貿易を廃止した。だが、かれらの情熱はそこで止まらなかった。われわれには徳がある、ゆえに、アジア・アフリカを統治する資格をもつはずである。そうすれば、かかる地域で貧困・無知・失政に苦しむ人々を、いっきょに救済できる。当時のイギリス人は、たしかにそう考えたのであった。

第1にキリスト教、第2に商業であった。奴隷貿易廃止論者は、ヨーロッパ人と西アフリカ人とのあいだの(奴隷貿易ではない)「合法的な」貿易こそ、双方の利益になると考えた・・・。

第3は植民地の建設である。宣教活動や事業経営を行うには、定住地が必要であろう。奴隷貿易のために海岸付近に点在している小屋や集落では、まったく話にならなかった¹²。

だが、かかる理念はなかなか結実しなかった。イギリス人は、マラリアをはじめとする病原菌のうようよいる、西アフリカの森林地帯に足を踏み入れられなかったのである。だが、そうした精神が、奴隷貿易廃止運動をとおして、じつくりと陶冶されたからこそ、1850年代以降の、イギリス人によるアフリカ進出・統治が実現したのである。

ここまでがかれの議論であるが、ある意味で妥当な解釈である。むしろ、本論の結論を先取りする要素すら見受けられる。だが、決定的に問題といえるのは、カウブランドが、かかる歴史的展開を、肯定的に評価していることである。すでに明らかなおと、かれは、アフリカ人を「遅れている」などと決めつけるレイシストである。かれの考えでは、遅れたアフリカ人が、高潔なイギリス人の支配を受けることができたのは、僥倖であった。かかる事態となったのも、すべて18・9世紀転換期における、奴隷貿易廃止運動のおかげであったという。

(2) 「黒い大西洋」史観とウィリアムズ・テーゼ

人道主義理論は、エリック・ウィリアムズなる歴史家によって、痛烈に批判された。かれの議論は、「ウィリアムズ・テーゼ」として広く知られている。それはまた、「黒い大西洋」史観のさいたるものである。「黒い大西洋」史観とは、18～20世紀の西洋の経験のうちで、とりわけポジティブな側面、たとえば産業革命・民主主義などの展開の過程における、大西洋を移動した／させられた黒人の役割を重視する考えである。これを提唱する学者としては、デュボイス (W. E. B. Du Bois)、ジェイムズ (C. L. R. James)、ロドニー (Walter Rodney) が有名であり、最近では、イニコリ (Joseph Inikori) がその継承者である。かれらはみな、イギリス帝国、およびその善性を担保するものとしての人道主義、またそれを包含するところのイギリス自由主義、さらにはそれに正統性を与えるホイッグ史観、などなどに批判的である。かれらの主たる目的は、黒人のナショナリズムを創出し、またそれをよりどころにして、現実の、とりわけ西欧社会における格差や差別をなくすことであった。かかる運動は、平和主義・民族自決のような観念が横溢し、また、社会主義のユートピアが現実感をもって語られはじめたという、第1次世界大戦後の

特異な情況と、密接な関連をもつものであった¹³。

ウィリアムズは 1911 年、イギリス領トリニダード島の、わりあい裕福な家庭に生まれた。学業優秀でもあったかれは、高い教育を受けることができた。高校時代には、ジェイムズの学恩を受けている。イギリスにわたり、オックスフォードに入学した。そこでかれは、イギリス帝国史の研究により、博士号を取得した。このときの審査には、カウブランドもかかわっている。だがかれは、研究者としてのポストをえるのに苦労した。かれが黒人であったため、人種差別を受けたことは、想像にかたくない。かれを採用したのは、ワシントン D・C のハーワード大学であった。そこは、ほかでもない、黒人のナショナリズムの震源地であった。かくてかれは、にわかにそれに傾倒しはじめた。かれはもともと、人道主義理論の継承者であったが、そうした過去はすべてかなぐり捨てた。主著『資本主義と奴隷制』（1944 年）が出版されたのは、このときである。そのあと、かれは教職を辞して政治活動に没頭し、トリニダード・トバゴ共和国の独立（1962 年）に尽力した。1981 年没。このときまで約 20 年間、首相の座にあった。

「ウィリアムズ・テーゼ」は、2 つの命題からなりたっている。第 1 に、奴隷制なくして産業革命なし。第 2 に、産業革命なくして奴隷制廃止なし。より具体的にいえば、イギリス人は、奴隷貿易によって、アフリカの市場を制覇し、また資源を搾取しえたからこそ、産業革命に必要な資本を蓄積させることができた。ところが産業革命が進展し、資本主義が確立すると、今度はその奴隷制が、じょじょに非効率な制度とみなされはじめた。奴隷は、働くことへのインセンティブをもたないため、それをもつとされた賃労働者よりも怠惰であり、なおかつよく食べる。かれらはまた、賃金を支給されないために、購買力もない。したがって、消費者になれない。それで、解放されたのである。この「テーゼ」は論争を巻き起こしたが、それじたい欠陥のある議論であるとは思われない。ただし、「奴隷制こそ、産業革命の最大の要因である」とか、「産業革命こそ、奴隷制廃止の最大の要因である」というなら、まちがいである。だが、ウィリアムズ本人は、まさにそうした考えを、強引に押し通そうとしたのである¹⁴。

ここで 1 つ問題が浮上した。つまりウィリアムズは、奴隷貿易廃止運動の意義を、ゼロとみなしたのである。なぜならかれは、イギリスが奴隷貿易を廃止したのは、産業革命が進展し、また資本主義が確立されたからであって、それ以外ではないと考えたからである。しかもかれには、黒人のナショナリストとして、イギリス帝国の善性を否定しなければならない、との使命感もあった。それゆえにかれは、奴隷貿易廃止運動こそ、偽善者たちの自己満足にほかならず、歴史の趨勢には何らの影響も与えなかったと力説した。だがこのように、政治活動家としての立場を、歴史学者としてのそれよりも優先させようとするかれの態度は、結果的にみずからの学説を台無しにした。かれは、史料の記述内容を、みずからの政治的目標に適合的となるように、ひそかにねじまげて提示したのである¹⁵。かくて、かれの議論はすべてが疑わしいものになった。かれの「テーゼ」に価値があるとすれば、それは、学界に次のような警鐘を与えたことである。すなわち、今後、奴隷貿易廃止運動を語るさいには、自覚的にせよそうではないにせよ、イギリス帝国の礼賛に終始することのないよう、肝に銘じなければならない、と。

(3) 奴隷貿易廃止運動の政治社会史研究

ウィリアムズの一撃は、長らく奴隷貿易廃止運動史研究を不毛にさせた。つまり、イギリス帝国の信奉者というレッテルを貼られることなしに、その対象を研究することが困難になったのである。だが、1960年代後半あたりから、かれの「テーゼ」を批判する研究があらわれはじめた¹⁶。それらは当初、奴隷貿易の廃止は、それを要求する運動の圧力のみによって達成されたものであって、産業革命とは直接的には関係ない、ということを証明しようとした¹⁷。だがこの見解も、その逆も、完全に論証することは不可能である。それゆえに、研究者の問題関心は、じょじょに次のようにシフトしていった。すなわち、奴隷貿易廃止運動は、18・9世紀転換期イギリスの政治や社会に、いかなるインパクトを与えたのか。とくにそれは、エリートと民衆、保守派と急進派、資本家と労働者の、どちらの利益につながったのか。本論は、かかる関心のもとで生み出された成果をまとめて、政治社会史研究と名づけることにする。

デイヴィッド・B・デイヴィスによれば、奴隷貿易廃止運動は、エリート・保守派・資本家の利益にかなうものであった。かれによれば、エリートたちは、その運動を通じて、「自由労働イデオロギー」なるものを、民衆に注入したという。それとは、「自由労働は奴隷制よりもとうとう」との理念であるが、いっぽうで、「奴隷制でさえなければ、いかなる劣悪な雇用条件でも正当化される」という詭弁に横すべりする危険性をもはらんでいる。これがもしも受容されれば、エリートたちは大手を振って、低賃金・重労働を民衆におしつけることが可能である。しかも民衆は、みずからのための労働運動に充当できたはずのエネルギーを、異国の黒人のための奴隷貿易廃止運動に注ぎこんだのである。こうなればエリートは、無抵抗の民衆から好きなだけ搾取できる。つまりデイヴィスによれば、奴隷貿易廃止運動こそ、エリートが一方的によい目をみるための装置にほかならず、しかもかれらは、まんまとそのことに成功したのである¹⁸。

シーモア・ドレッシャは、デイヴィスとは正反対の結論にたつた。かれによれば、奴隷貿易廃止運動は、民衆・急進派・労働者の利益にかなうものであった。かれは、その運動が、自由・平等・解放といった言語の社会的な流通をうながした結果、民衆はそれらを利用して、エリートの横暴に対し、力強く抵抗しうるような主体に鍛えあげられたと説明する。それにはまた、署名運動・ビラ配り・戸別訪問といった、社会運動のノウハウを拡散する効果もあった。かれの結論は、奴隷貿易廃止運動こそ、イギリスの政治や社会を変革する原動力であったということである¹⁹。この見解にほぼ同意するのは、ジョン・オールドフィールドである。ただしかれは、もはやエリートと民衆という二項対立にはこだわっていない。そのかわりかれは、それらの中間に設定された、「ミドルクラス」なるグループこそ、奴隷貿易廃止運動の受益者であると考えた²⁰。とはいえかれも、運動の革新的な性格を強調する点で、ドレッシャとは類似の立場である。

奴隷貿易廃止運動の保守的なインパクトを強調するデイヴィス、革新的なそれを強調するドレッシャとオールドフィールド。正しいのはどちらか。この問題をめぐっては、たがいの意地とプライドをかけた、熾烈な論争が繰り広げられた²¹。だがそれは、デイヴィッド・ターレイによって、次のごとく止揚された。すなわち、奴隷貿易廃止運動じたいは、国内政治的にはまったくの無色透明である。だが、保革双方が、そこからあふれ出る価値をすくい取ろうとして、懸命の

抗争を行った。したがって、そのときどきの政治情況のいかんによって、奴隷貿易廃止運動は、白色を帯びていたり、赤色を帯びていたりしたのである²²。これが、今日における大まかなコンセンサスであるといえよう。

なぜ、奴隷貿易廃止運動の政治社会史が、1960～90年代にさかんになったのであろうか。その理由はむろん1つではない。ただし、その有力な背景としては、次のことが想起される。すなわち、高度成長期を「卒業」したあとの西側諸国における、ネオリベリズムと社会民主主義とのあいだの衝突である。そうであれば、1990～2000年代にかけて、ネオリベリストが勝ちほこり、社会民主主義者が意気消沈していったことと、奴隷貿易廃止運動の研究史に変化が生み出されたこととは、密接な関係があると考えられる。ネオリベリストの要求するままに、国境を越えた人・もの・情報の移動が加速させられるような、いわゆるグローバリゼーションが進展すると、政治社会史研究に共有されたある特徴が、読み手の不満をよびおこす原因となった。その特徴とは何か。一国主義史観である。

(4) 奴隷貿易廃止運動史における「帝国論的転回」

一国主義史観を乗り越えたのは、クリストファ・L・ブラウンである。かれは、奴隷貿易廃止運動を、帝国史あるいはグローバル・ヒストリーのなかにみごと位置づけて説明した。このことを本論では、帝国論的転回とよぶ。かれは主著『モラル・キャピタル』(2006年)において、次のような議論を披瀝した。すなわち、奴隷貿易廃止運動は、アメリカ独立革命(1776年)によって損傷された、イギリス帝国の品格をとり戻すためのところみであった。それを通じてイギリス人は、複数の人種・民族が平和的に共存する帝国を構築しようとした。動機はいうまでもない。すなわち、黒人や先住民を虐待する白人の／による／ための共和政と観念された、アメリカ合衆国に対して優位を主張することである。だが、この目的を追求する以上、みずから奴隷貿易を行っていたのは、非常に不都合であった。それで、廃止したのである。ここに、実利を捨ててまで品格を守ったという、「高邁な帝国」イデオロギーが完成をみた。それこそ、19世紀後半のイギリス人の、アジア・アフリカ進出をうながす有力な要因となった²³。

この説明は、先述の人道主義理論に酷似している。じつのところ帝国論的転回とは、ある意味ではカウブランドへの回帰なのである。むろん、ブラウンほうが大量の史料を精密に分析しており、信頼性は高い。だが、両者のあいだの根本的な差異とは、奴隷貿易廃止運動が帝国主義の先鞭をつけたという事実を、手ばなしで賞賛するか、あるいは批判的・反省的に捉えるかという部分にしかないように思われる。むろんカウブランドが前者、ブラウンが後者である。かれらの議論は、イギリスに特有の人種差別のパターンが形成されるさいに、奴隷貿易廃止運動が本質的に重要な役割を果たしたことを、みごとに説明している。かかるパターンは、たとえば南アフリカのアパルトヘイトや、アメリカ合衆国の黒人リンチのごとき、いわばクレオール的な人種差別のそれらとは、やや異なった思考・実践としてあらわれた。つまりイギリス人は、文明化や人道主義の美名を掲げつつ、アジア人・アフリカ人を救済するとのふれこみで、現地の政治や社会に干渉した。そして実際には、現地住民たちの利益を犠牲にしつつ、そうした行動から、経済的かつ

／または軍事的・外交的価値を引き出したのである²⁴。

帝国論的転回は、歴史学界に大きな衝撃を与え、ここ 7～8 年のあいだ、膨大な業績を生み出す原動力となっている。この現象は、革命的というほかない。今日、17～9 世紀のヨーロッパ史を理解しようとするさい、南北アメリカの奴隷制・奴隷反乱・奴隷解放にかんする諸問題を避けてとおることはできない。このことは、4 半世紀前にはとうてい考えられなかった。だが、それにもかかわらず本論は、この情況に 100 パーセント満足するという立場をとらない。そうではなくむしろ、帝国論的転回は、いまでは前世紀の遺物として忘れ去られつつある、政治社会史研究の知見がプラスされてこそ、より大きな成果を生み出すのではないかと考えている。そうすることで、帝国のような海外の大きな問題と、イギリスの特定の場所における個別の問題とが、いかに相互に作用しあいながら、ユニークな文化・風土、あるいは知のありようを生み出していったのか、という問題が解明されるべきである。もう少し具体的にいえば、奴隷貿易廃止運動を通じて、ブラウンのいうとおり、イギリス人のあいだで人種差別・帝国意識がはぐくまれたことと、デイヴィスやドレッシャのいうとおり、国内政治・社会に保守的／革新的なインパクトが与えられたこととの関連性が、いま問われるべきなのである。

小括

人道主義理論、「黒い大西洋」史観、政治社会史研究、帝国論的転回。2010 年代半ばの今日において、奴隷貿易廃止運動に関心をもつものは、まずはこれらの研究史を念頭におかねばならない。そのうえで本論は、帝国論的転回と政治社会史研究の、双方の視座・方法を併用する必要があるとの認識をもつにいたった。帝国論的転回は、かつての人道主義理論の系譜を引いているので、本論もそこに位置づけられる。したがってそれは、「黒い大西洋」史観に批判的である。たしかに、学問研究から帝国礼賛の言語を一掃したことは、「黒い大西洋」史観の大きな功績である。だがそのこと以外に、この研究潮流においては、参考とすべき要素はあまり見つからない。これが、本論の立ち位置である。

第 2 節 ウィリアム・ロスコーにかんする研究史と史料

次に、ウィリアム・ロスコーにかんする研究史・史料について少し言及する。

(1) 研究史

ウィリアム・ロスコーは、18・9 世紀転換期のリヴァプールに暮らした、弁護士・作家・銀行家である。わが国では、ほとんど知られていない。ほんの数ヶ月だけ下院議員をつとめたが、そのことを除いては、公的な活動をほとんどしていない。作家としても有名ではなく、主著『ロレンツォ・デ・メディチの生涯』を、いまひも解くものはほとんどいない。銀行業では破産している。だがそのわりには、かれの伝記や、かれにかんする研究は、イギリスでは多くみられる。か

れの子ヘンリ（1833年）のみならず、マシューズ（1931年）、チャンドラ（1953年）、マクノートン（1996年）、ウィルソン（2008年）によって、何度も伝記が書かれた²⁵。ローズ（1961年）やセラーズ（1968年）は、ロスコーの文芸サークルにかんする論考を発表している²⁶。かれを直接的に扱ったものでなくとも、18・9世紀転換期のリヴァプールにかんする書物や論文において、その名が言及されないことはまれである。

なぜか。それはロスコーが、弁護士・作家・銀行家・下院議員のみならず、奴隷解放論者・芸術愛好家・古物蒐集家・植物学者・教育者・図書館長としての顔をももっていたことと関連する。つまりかれは、奴隷貿易によって悪銭をかせぐくらししか能のなかったリヴァプールに、道徳・芸術・知性をもたらし、その結果、住民たちの品性を、根本から鍛えなおした張本人として、高く尊敬されているのである。かれの生誕 100 周年のとき、リヴァプール市長のサミュエル・ホーム（Samuel Holme）は、次のごときスピーチを行った。

ロスコーは、品のよい知的な文化と、事業経営とが両立することを教えてくれた。アシーニウム図書館は取引所に近接していたし、植物園や王立協会も、人造港・倉庫・事務所といった商業施設のなかに溶け込んでいた。かれの文学作品は、慈愛の心に満ち溢れていた。かれは、たとえ他人の怒りを買うようなテーマを扱うときにも、そうした姿勢を変わずにもち続けた。もうお分かりであろう。『アフリカの悪』のことである。わたしたちは、かれの作品のなかに、激しい怒りと同時に、ゆるしの心をもみてとることができる。かれは、罪を憎んで人を憎まなかった。かれは、溶岩でもってすべてを破壊しつくす火山のような男ではなかった。むしろ、天のめぐみを一身に受けた、なだらかな丘陵のような男であった。その丘陵からは無数の溪流が湧き出し、それらこそ、同胞たちをたゆまず薫陶育成し、そのことはまた、大いなるよろこびをもたらしたのであった²⁷。

ここで言及された図書館・植物園・王立協会は、すべてロスコーによって建てられた施設である。『アフリカの悪』は、奴隷貿易を告発するかれの詩である²⁸。丘陵のくだりは、かれの出生地で、のちにかれの作品のタイトルから、「よろこびの丘」（Mount Pleasant）と名づけられた場所と結びつけられている。ロスコーのこうした位置づけは、今日においてもまったく変化がない。つまり、数多くの伝記・研究があるといっても、このイメージを共有するという点では、それらのあいだに差異はないのである。

本論では、このイメージをいったん脇におき、かわりに、別の角度からロスコーの思考・行動を論じる。つまり、偉大なロスコーを批判してはならないという、暗黙のタブーのようなものから、自由であろうとする。だがそうはいつでも、いわゆる「偶像破壊」をやろうとはしない。そうではなく、かれの思考・行動を、もう少し、当時の政治的・経済的・社会的文脈のなかに位置づけて説明することにつとめる、といたいのである。

（2）史料

ロスコーにまつわる史料は多い。それらの大部分は、リヴァプール文書館（LiRO）に所蔵されている。かれは作家でもあったから、何冊もの書物を出版している。本論では、そのなかでも、

奴隷貿易をテーマとするものはすべてとりあげた。そのほかのものについても、必要に応じて参照した。かれに宛てられた書簡は大量に現存するが、本論でとりあげたものはごくわずかである。遺憾ながら、手稿史料の判読は、現時点では困難である。今後の課題としたい。ただしそのなかには、かれの子ヘンリによって、活字化されているものもある。それらは利用した。

本論はまた、ロスコー以外の作家の手による、奴隷貿易にまつわる出版物をも参照している。とくに、リヴァプールの関係者によるものは、すべてとりあげた。それらには、奴隷貿易廃止論のみならず、その反対論も数多くある。インターネットを通じて無料ダウンロードが可能なものから、LiRO ないし「アシーニウム」(Athenaeum) でしか閲覧できないものまである。アシーニウムとは、1799 年にロスコーによって設立された図書館であり、リヴァプールのチャーチ通り (Church Alley) に現存する。現在では名士たちのクラブになっている。

加えて本論は、ロスコーの思考・行動を、当時のコンテキストのなかに位置づけることをこころみるから、それを把握するための史料をも利用している。それらには、議会・市当局の議事録や、地方新聞が含まれる。議会議事録は活字化されており、編纂者の姓に由来する、「ハンサード (Hansard)」の異名で知られている。市当局の議事録、および地方新聞は、LiRO において、マイクロフィルムのかたちで閲覧が可能である。地方新聞は、『ウィリアムソンズ』紙および『リヴァプール・マーキュリ』紙を用いた²⁹。

小括

本論は、ロスコーやその周囲の人々の出版物、および議会・市当局の議事録、さらには地方新聞などの史料の分析を通じて、先述の目的にアプローチする。そのさい、伝記作家や、郷土史家・自治体史家・家族史家らの成果をも援用する。ただ注意すべきは、かれら・かの女らに共有された、ロスコーの記念顕彰の物語にはくみさないことである。

本論の概要

序を終えるにあたり、本論の構成を概略的に示す。

はじめに、ロスコーの奴隷貿易廃止運動のコンテキストが整理される。そのさいに踏まえられべきは、「ブリテン大西洋世界」なる概念である。それは 1670 年ごろに、ゆっくりと姿を現した。だが、人々があつけにとられているあいだに、ヨーロッパの経済・社会・政治の全局面において、破壊的な影響力を及ぼす怪物となった。しかも重要なことに、それを究極的なところで支えていた人間の活動とは、奴隷貿易であって、それ以外ではなかった。したがって第 1 章の目的は、ブリテン大西洋世界の発展過程・内部構造を精査すること、とくにそこにおいて奴隷貿易の果たした役割を明らかにすることとなる。第 2 章では、ブリテン大西洋世界の急成長が、ロスコーの居住地リヴァプールの社会・政治に与えた影響について考察する。ここで注目すべきは、それが、当初こそ奴隷貿易を全面的に促進する諸要因を生起させたが、のちのちになって、その

廃止論を生育させる土壌をも整備したという事実である。

第3章では、ロスコーの奴隷貿易廃止運動を、それじたいとして分析の俎上にのせる。はじめに、イギリス奴隷貿易廃止運動の性格と、ロスコーの人物像について説明する。次に、かれのテキストをていねいに読み解くことを通じて、ある2つの特徴を浮き彫りにする。そのあとで、それら特徴は、奴隷貿易廃止運動の性格、およびロスコーの人物像と、いかに関連するのか、という問題が解明される。だが、もしもここで本論が閉じられてしまえば、かれの思考・行動が、同時代ないし、のちの世代の男女に対してもったインパクトを理解することはできない。

それゆえに第4章では、ロスコーの奴隷貿易廃止運動に反対した人々の思考・行動が分析される。はじめに、かれらの活動を大まかに追跡し、そのあとで、かれらの発表したテキストから、その思考パターンを復元する。最後に、かれらの発想を支える原理と、ロスコーのそれとの差異および共通性を明らかにする。だが、もしもここで本論が閉じられてしまえば、ロスコーとかれらとのあいだの衝突のなかで生み出された、都市の新しい文化・風土を理解することはできない。

それゆえに第5章では、イギリス奴隷貿易廃止（1807年）から7年後の、「国際的」奴隷貿易廃止運動なるものに、焦点が合わされる。これには、ロスコーおよびかれの支持者のみならず、かつてのかれの反対者も数多く参加した。このときかれらは、リヴァプールの住民が心を1つにして、地球上から奴隷貿易を一掃すべきことを誓い合ったのである。ここに、ロスコーおよびその反対者の衝突のなかで形成された、都市の新たな文化・風土がはっきりと姿を現した。この章では、その意味を解説しようとする。

以上を要するに、本論では、ロスコーの運動のコンテキストを整理したあと、その思考・行動およびそれらに対するリアクションを明らかにする。そして最後に、ロスコーとかれの反対派とが、はからずも協同で構築した、都市の新たな文化・風土およびそのインパクトを捉えようとする。これら作業において再確認されるべきは、奴隷貿易廃止運動の歴史的意義である。すなわち、第1にそれは、「万人は生まれながらにして自由・平等である」との観念を拡散させることを通じて、のちの時代の「自由主義」的諸改革の推進力となった。だが第2に、白いイギリス人が、黒いアフリカ人を、意のままに支配してよい／できる／すべきとの観念を拡散させることを通じて、のちの時代の帝国主義の推進力となった。それでは、順に説明しよう。

¹ デイヴィッド・エルティスほか編（増井志津代訳）『環大西洋奴隷貿易歴史地図』東洋書林、2012年、23頁。

² 主なものとしては、次のとおり。市橋秀夫「イギリス奴隷貿易廃止運動の史的分析（1787～1788年）」『三田学会雑誌』81（4）、1989年、682～703頁；浜林正夫「イギリス奴隷解放運動と急進主義」『国際研究論集』9（2）、10（3）、1996～7年；布留川正博「イギリスにおける奴隷貿易廃止運動—London Abolition Committeeの活動を中心に」『龍谷大学経営学論集』37（4）、1998年；並河葉子「反奴隷制運動にみる「文明化」されたイギリス人」『外国学研究』46、2000年。同「反奴隷制運動と出版物—西インド産砂糖ボイコット運動の事例を中心に」『外国学研究』53、2002年；同「奴隷解放の結社—クラパム派の聖者たち」川北稔編『結社のイギリス史』山川出版社、2005年。

-
- 3 「自由主義」的諸改革については、岡田与好『経済的自由主義—資本主義と自由』東京大学出版会、1987年。
- 4 人種差別・帝国主義については、永原陽子編『「植民地責任」論—脱植民地の比較史』青木書店、2009年。
- 5 グローバル・ヒストリーについては、水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社、2008年。同『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社、2010年。
- 6 Lynn Hunt, *Writing History in the Global Era*, (New York, NY, 2014), pp. 13-43.
- 7 本章第2節にて後述。
- 8 Liverpool Record Office, (LiRO), Roscoe Papers.
- 9 Reginald Coupland, 'The Abolition of the Slave Trade', in J. Holland Rose, A. P. Newton and E. A. Benians, (eds.), *The Growth of the New Empire 1783-1870*, (Cambridge, 1940), p. 193.
- 10 Reginald Coupland, *British Anti-slavery Movement*, (London, 1933), p. 63.
- 11 Coupland, 'Abolition', p. 193.
- 12 Coupland, *British Anti-Slavery Movement*, pp. 82-3.
- 13 「黒い大西洋」学派については、ポール・ギルロイ（上野俊哉ほか訳）『ブラック・アトランティック—近代性と二重意識』月曜社、2006年；小倉充夫ほか編『ブラック・ディアスポラ』明石書店、2011年。
- 14 エリック・ウィリアムズ（山本伸監訳）『資本主義と奴隷制—経済史から見た黒人奴隷制の発生と崩壊』明石書店、2004年；「ウィリアムズ・テーゼ」については、布留川正博「ウィリアムズ・テーゼ再考—イギリス産業革命と奴隷制」『社会科学』46、1991年。
- 15 Howard Temperley, 'Eric Williams and Abolition: the Birth of a New Orthodoxy', in Barbara L. Solow and Stanley L. Engerman, (eds.), *British Capitalism and Caribbean Slavery: The Legacy of Eric Williams*, (Cambridge, 1987), pp. 229-57.
- 16 たとえば、David Brion Davis, *The Problem of Slavery in Western Culture*, (Ithaca, NY, 1966); Roger Anstey, *The Atlantic Slave Trade and British Abolition 1760-1810*, (Aldershot, 1975); James Walvin, (ed.), *Slavery and British Society 1776-1846*, (Baton Rouge, LA, 1982).
- 17 Seymour Drescher, *Econocide: British Slavery in the Era of Abolition*, (Pittsburgh, PA, 1977).
- 18 David Brion Davis, *The Problem of Slavery in the Age of Revolution 1770-1823*, (New York, NY, 1975).
- 19 Seymour Drescher, *Capitalism and Antislavery: British Mobilisation in Comparative Perspective*, (Oxford, 1986).
- 20 John R. Oldfield, *Popular Politics and British Anti-Slavery: the Mobilisation of Public Opinion against the Slave Trade, 1787-1807*, (Manchester, 1995).
- 21 Solow and Engerman, (eds.), *British Capitalism* における Davis と Drescher の論考をみよ。
- 22 David Turley, *The Culture of English Antislavery, 1780-1860*, (London, 1991); id. 'British Antislavery Reassessed', in Arthur Burns and Joanna Innes, (eds.), *Rethinking the Age of Reform*, (Cambridge, 2003), pp. 182-99.
- 23 Christopher Leslie Brown, *Moral Capital: Foundation of British Abolitionism*, (Chapel Hill, NC, 2006).
- 24 人種差別のパターンについては、藤川隆男「白人研究の「見取り図」」藤川編『白人とは何か？—ホワイトネス・スタディーズ入門』刀水書房、2005年、15～57頁。
- 25 Henry Roscoe, *The Life of William Roscoe*, (Liverpool, 1833); Godfrey W. Mathews, *William Roscoe, a Memoir*, (London, 1931); George Chandler, *William Roscoe of Liverpool*, (London, 1953); Donald Macnaughton, *Roscoe of Liverpool: His Life, Writings and Treasures*, (Birkenhead, 1996); Arline Wilson, *William Roscoe: Commerce and Culture*, (Liverpool, 2008).
- 26 R. B. Rose, 'The 'Jacobins' of Liverpool, 1789-1793', *Liverpool Bulletin*, 9, (1961), pp. 35-49; Ian Sellers, 'William Roscoe, the Roscoe Circle and Radical Politics in Liverpool, 1787-

1807', *THSLC*, 120, (1968), pp. 45-62.

²⁷ Richard Brooke, *Liverpool as It Was 1775 to 1800*, (Liverpool, 1853), pp. 518-9.

²⁸ [William Roscoe], *The Wrongs of Africa, a Poem*, (London, 1787-8).

²⁹ *Williamson's Liverpool Advertiser; Liverpool Mercury*.

第 1 章 ブリテン大西洋世界の構造と展開

はじめに

1207 年 8 月 28 日、イングランド王ジョンは、「リヴァプール」なる都市の創設を命じた。この都市は、国土の北西部からアイリッシュ海に注ぐ、マージー川（Mersey）の沿岸に立地するものであった。この勅令を契機として、近隣から移住希望者がつのられた。また一定の計画にもとづき、7 本の街路と 1 基の城砦が建造されることになった。しかしながら、この都市で交易が発展し、人口が増加することは当面のところなかった。16 世紀後半のエリザベス 1 世の治世にいたっても、リヴァプールの推定人口は 1,000 人程度にとどまっていた¹。

ところが 18 世紀初頭、有名な作家ダニエル・デフォーは次のように証言している。

リヴァプールはわが国の不思議の 1 つだ・・・1680 年ごろ、わたしが初めて訪れたとき、そこは大きくてみごとに築き上げられた、発展しつつある町であった。1690 年ごろ、2 度目に訪れたときは、最初の滞在のときよりもさらに成長していた。住民たちに聞けば、ここ 20 年のあいだに 2 倍の大きさになったのだという。3 度目の滞在では、目をみはるばかりであった。2 度目に来たときよりもさらに 2 倍以上の大きさになっているではないか・・・この成長がどこまで続くのか、わたしには予測もつかない²。

デフォーが驚いてみせるとおり、この時期のリヴァプールは急成長のさなかにあった。1700 年の推定人口は 5,100 人であったが、1750 年には 18,400 人へと 3 倍増している³。しかし、いったいなぜ、市制施行から 4 世紀ものあいだ低迷を続けていた小集落が、かくも急速な発展を遂げることができたのであろうか。

その理由ははっきりしている。つまりところリヴァプールの突然の「テイク・オフ」は、「ブリテン大西洋世界」（British Atlantic World）の形成と密接な関係を有しているのである。ブリテン大西洋世界とは、環大西洋世界におけるブリテン人の主たる活動領域をさしており、具体的には、かれらの故地であるブリテン諸島、および北アメリカにおける新たな定住地、そして西アフリカ沿岸の交易拠点を含んでいる。要するにリヴァプールは、かつては陸地の突きあたりとして価値の低い場所であったが、大西洋を越えた先に「新大陸」および西アフリカという魅力的な市場が出現するや否や、ブリテン島とそれら地域とのあいだの海上交通の要所として生まれ変わり、結果として、空前の繁栄を享受することとなったのである。

本章では、リヴァプールの発展経路およびその政治社会構造を明らかにする前に、その前提となった、ブリテン大西洋世界の形成過程およびその特徴についての整理を行う。まずは、ブリテン大西洋世界の形成過程を概説することからはじめ（第 1 節）、次にその経済史的契機を明らかにする（第 2 節）。それらを踏まえうえて、ブリテン（第 3 節）および西アフリカ（第 4 節）における政治史的契機が、ブリテン大西洋世界の形成過程に与えた影響について考察する。そうすることによって、ブリテン大西洋世界と奴隷貿易との関係のみならず、1780 年代にはじまる奴隷貿易廃止運動の意味も、おのずから明らかとなるはずである。

第 1 節 ブリテン大西洋世界の形成と展開

本節では、ブリテン大西洋世界の形成・展開過程を時系列的に概説する。対象年代は、ヨーロッパ人による大西洋への本格的な進出が始まった 15 世紀半ばから、イギリスにおいて奴隷貿易廃止運動が急速に拡大した 1780 年代までの、約 300 年間とする⁴。

(1) イベリア大西洋世界への挑戦—16 世紀

ブリテン大西洋世界は、当初は「イベリア大西洋世界」(Iberian Atlantic World) との対抗関係のなかで形成された。イベリア大西洋世界とは、環大西洋地域における、ポルトガル人・スペイン人の主たる活動領域をさすものである。ポルトガル人は、サハラ砂漠の先の未知なる森林地帯から運搬されてくる金と、アフリカ南端の先の未知なる海域を経て到達できるとされたインドの香辛料や絹織物に惹きつけられて、15 世紀半ばごろから大西洋を南方へと出帆した。1482 年、かれらはギニア湾岸にエルミナ城砦を建設し、そこを拠点として、西アフリカの金の取引市場に参入した。その 5 年後には、バルトロメウ・ディアスが、アフリカ南端の喜望峰を「発見」した。さらに 11 年後にはヴァスコ・ダ・ガマが、東アフリカのムスリム商人の整備した航路を利用することで、念願のインド亜大陸に到達した。1500 年には、ペドロ・カブラルがブラジルを「発見」し、ポルトガル王によるその地の領有を宣言した。

スペイン人の大西洋での交易活動は、ポルトガル人のそれをはるかに凌駕した。カスティリヤ女王イサベル 1 世の支援を受けたジェノヴァ人のコロンブスは、大西洋を西進すればインドに到達できるとの誤解のもと、1492 年にアメリカ大陸を「発見」した。その後、エルナン・コルテスやフランシスコ・ピサロらの征服活動により、南北アメリカ大陸およびカリブ海諸島が、スペイン王の支配下に組み込まれた。かれらは、その先住民が、旧大陸からもたらされた病原菌・ウィルスによって壊滅したため、比較的たやすく資源を得ることができた。かれらは征服の直後から大量の金を収奪したが、16 世紀半ばにはボトシ銀山が開発され、年間 280 トンもの生産力をほこるという僥倖に恵まれた⁵。かくも大量の銀を所有することは、魅力的なアジアの香辛料・絹織物・陶磁器貿易にも参入しうることを意味していた。というのも、当時のアジア諸地域の大部分では、銀が主要な貨幣として流通していたからである。

ブリテン大西洋世界は、かくも伸長いちじるしいイベリア大西洋世界に挑戦しつつ構築されねばならなかった。ブリテン 2 カ国の女王エリザベス 1 世は、反スペインの外交的立場を明示すると、フランシス・ドレイクから私拿捕船長に命じて、かれらの新大陸貿易を妨害させ、またその交易拠点を襲撃してまわらせた。さらにかの女は 1588 年、スペインがほこる「無敵艦隊」をみごと撃退した。だが、こうした散発的な成功にもかかわらず、この時期のブリテン人は、南北アメリカ大陸・カリブ海諸島のどこにも定住地を確保することができなかった。つまるところブリテン大西洋世界は、いまだその一步を踏み出しえなかったのである。

(2) ブリテン大西洋世界の伸長—17 世紀

ブリテン大西洋世界は、17 世紀にスペインの没落が起これと、「オランダ大西洋世界」(Dutch Atlantic World) および「フランス大西洋世界」(French Atlantic World) と競合しつつ、飛躍的な伸長を遂げた。スペインは、1600 年代をピークに新大陸貿易が不調になるにつれて、みるみるうちに国力を低下させていった。このときのヨーロッパでは、大量の正金の長期にわたる流入の結果としてインフレが亢進していたため、銀の輸入にたよる既存の新大陸貿易の形態が、もはや利益を生み出す事業ではなくなりつつあった。しかしながら、好景気を前提とした行財政制度を即座に改善することは容易ではなかったため、スペイン王室は、ヨーロッパおよびアメリカにおける、みずからの膨張しすぎた領域を管理しきれなくなった。かくて 1640 年代には、中核であるカスティリヤを除いたほとんどの周縁地域で、反乱が相次いだのである⁶。かかる混乱は競争相手国を利することになったが、なかでもオランダとイングランドは、イベリア大西洋世界の断片をかすめ取ろうと、さかんに活動するようになった。

オランダ人は 1600~40 年代にポルトガルの東南アジアにおける香辛料貿易の拠点を次々と攻略し、西アフリカにおける金の取引市場にも割り込んでいった。かれらはまたブラジル北部のサトウキビ生産地を制圧し、北アメリカ中部のハドソン河畔にも定住を開始した。ブリテン人も 1600~40 年代に北アメリカ北部のニューイングランド、南部のチェサピーク湾岸、カリブ海のバルバドス島への入植を成功させた。1655 年になるとかれらは、オリヴァ・クロムウェルの指令のもと、カリブ海のジャマイカ島をスペインから強奪した。不運にも冷涼なニューイングランドでは、商品作物の栽培は期待できなかったが、かわりに自給自足的な農村共同体が発達した。温暖なチェサピーク湾岸ではタバコ栽培によって、あるていど満足のいく中小農園経営が軌道に乗った。しかしながらそれは、熱帯のバルバドス・ジャマイカに導入されたサトウキビ大農園のほころ価値創造力と比べれば、微々たるものであった。17 世紀末におけるイングランドの砂糖の輸入総額はタバコのその 3 倍であり、しかもその単価は 1670 年代の 2 倍に上昇していた⁷。かの狭小なカリブ海諸島でのサトウキビ栽培は、意外にもブリテン大西洋世界においてもっとも高利を生み出す事業となるにいたった。

サトウキビやタバコ農園の現場で筋肉労働を担わされたのは、ブリテンから自発的に渡航した年季奉公人と、西アフリカから強制的に連行された黒人奴隷であった。かれらはともに農園主の全人格的支配に服す身分であったから、苦汁労働に明け暮れる毎日を送るほかに選択の余地はなかった。だが、年季奉公人は契約期間をまっとうすれば解放され、土地などの報酬が与えられる決まりであったのに対し、黒人奴隷には原則として、生涯にわたる強制労働あるのみであった。それゆえに経営者の立場からいえば、砂糖・タバコブームの続くかぎり、黒人奴隷を斃れるまで酷使するほうが賢明であった。かくて年季奉公人制度は衰退に向かい、かわりに西アフリカから来航する奴隷船舶数が激増した⁸。1651~75 年にチェサピーク湾岸・ジャマイカ・バルバドスへの上陸を強いられたアフリカ人総数は 84,000 人であったが、1676~1700 年には 175,000 人と倍増している⁹。つまるところ、白人の船長・農園主が、黒人奴隷を虐待し搾取すればする

ほど、ブリテン大西洋世界の経済的パフォーマンスが向上する結果となったのである。

ブリテン人とオランダ人は、ともにイベリア大西洋世界の弛緩に乗じて台頭した二大勢力であったから、いずれ雌雄の決着が不可避であった。1651年、ブリテン共和国は航海法を制定し、オランダの海運業に打撃を加えたことで、両国間の武力抗争のきっかけをつくった。1665～7年、1672～4年にはブリテン3カ国の王チャールズ2世もオランダに戦争をしかけ、北アメリカにおける覇権を勝ち取った。オランダは、先にポルトガルからブラジル北部を奪回されていたこととあわせ、南北アメリカにおける勢威をいちじるしく減退させた。ここに、ブリテン大西洋世界の絶頂期が到来したかにみえたが、じつはこのときフランスという新たな挑戦者が着々と力をたくわえていた。かれらはすでに北アメリカ北部のケベック、カリブ海のセント・キッツ島への入植を成功させていたが、1697年にはプファルツ継承戦争後のライスウィック条約によって、スペインからカリブ海のサン・ドマングを割譲された。その2年後には、北アメリカ南部のルイジアナへの入植も開始された。これら一連の動きは、明らかにフランス大西洋世界の覇権をめざすものであり、ブリテン人にとっては大いなる脅威と感じられたのであった。

(3) ブリテン大西洋世界の勝利と挫折—18世紀

18世紀にはイギリスとフランスの大西洋世界が真っ向から衝突した。1701～13年にスペイン継承戦争が勃発すると、イギリスはフランスからアカディアを奪取するなど、北アメリカ北部における優勢を維持した。しかしながら、フランス王ルイ14世の孫にあたる、フェリペ5世のスペイン王位継承が承認されたため、この国がふたたびイギリスの敵にまわった。1739～48年にはオーストリア継承戦争が勃発したが、イギリスのフランス・スペインに対する優位は揺らがなかった。1756～63年の七年戦争において、イギリスはフランス・スペインに大打撃を与え、北米カリブ地域における覇権を確立した。イギリスは、スペインからフロリダを、フランスからミシシッピ以東のルイジアナおよびケベックを奪取した。かくてブリテン大西洋世界は拡張され、かわりにフランス大西洋世界は大幅に勢威を減退させることとなった。

イギリスは栄光を手にしたが、その代償として国家財政の危機に直面した。九年戦争（プファルツ継承戦争）終結時の税収は年間346万ポンドであったが、未償還の国債は1,670万ポンドに上っていた。七年戦争の終結時には、税収が1,000万ポンドにしか増えていないにもかかわらず、国債は1億3,300万ポンドにまで膨れ上がっていた。それゆえに、何らかの有効な手段がとられなければ、財政破綻は必至であった¹⁰。そこでジョージ3世の政府は、これまで控えてきた、北アメリカ植民地への課税強化もやむなしの方針をかためた。かくて1763～73年に砂糖・印刷物・茶などの品目で税率が次々と改定され、これまでに高負担を経験したことのなかった植民地住民を憤慨させた。ついに1775年4月19日、本国政府と植民地住民のあいだで武力抗争が勃発し、翌年7月4日には、北アメリカ13邦が連名でジョージの支配から離脱することを約した、「アメリカ独立宣言」が発布された。アメリカ人はフランスの援護をも受けて戦闘を優位にすすめ、1783年にはイギリスに敗北を認めさせた。

ここにイギリスは、大いなる挫折を味わった。長年の苦難のすえに確保した北アメリカ植民地

の大部分が、いともあっさりとかれらの手を離れ、かわりに 2 億 4,500 万ポンドの債務が残された¹¹。この状況で財政破綻を回避するためには、とにかく収入を拡充し、支出を抑制しなければならなかった。しかし、無理な課税を重ねてきたこの国にとって、新規に財源を確保することは、至難のわざというほかなかった。それゆえに、行財政制度の合理化を通じた支出の抑制が不可避となったが、巨大に成長した国家機構に寄食する利害集団にはばまれて、それも容易ではなかった。他方では、参政権を否定されつつも、これまで黙々と国家を支えてきた中小の納税者の忍耐力が限界に近づいていた。かれらは、いまやアメリカ人によって具現化された、共和主義をも受容する構えをみせていたため、政府にとって深刻な脅威となりえた。フランスでも状況はよく似ており、長期にわたる対外戦争のせいで国家財政が破綻しつつあったにもかかわらず、政府による行財政改革は、重厚な利害集団にはばまれて迷走していた。この混沌に食糧危機が加わったとき、1789 年 7 月 14 日に始まるフランス革命への道が開かれた。そしてそれは、近世の大西洋世界の全般的な再編をもたらす国際戦争の序曲となったのである。

第 2 節 ブリテン大西洋世界の経済史的契機

前節では、奴隷解放運動が発生する直前の時期までにおける、ブリテン大西洋世界の形成・展開の過程を概観した。本節は、そのブリテン大西洋世界がなぜ・いかにして存立しえたのかという問題を、経済史的観点から説明しようとするものである。

(1) ブリテン大西洋世界の成因

まず、ブリテン大西洋世界が 16 世紀には未形成であったのに、17 世紀になるとめざましい発展を遂げたことの理由について考えてみたい。

第 1 に、17 世紀の北米カリブ地域においては、新規に事業を起こす機会が生じていた。先述のとおり、1600 年代には銀の価格が低落したため、その採掘や流通によって存立していたスペインの没落が明らかとなった。他方、これまでそれに深く関与してこなかったオランダ人やブリテン人は、イベリア大西洋世界の防衛が手薄な周縁地域に侵入し、そこで貴金属の採掘とは別の事業を始める機会に恵まれたのである。それこそ、サトウキビ・タバコといった高利を生み出す商品作物の栽培であった。つまり、貨幣の魅力が相対的に失われたので、今度はものの生産によって価値を創造しようというわけである¹²。

第 2 に、このときブリテンを含むユーラシア各地では、気候変動などのさまざまな理由から、人口過剰にともなう資源不足が起こっていた。それゆえに、余剰人口の海外への排出が行われないう限り、飢餓やそれにとともなう治安の悪化が懸念されたのである¹³。この条件下において、ブリテンは幸運にも、人口が少なく沃土の多い理想的な移住先を近隣に確保することができた。それこそ、北アメリカ大陸・カリブ海諸島であった。これらの地域では、家畜や鉄器を利用した技術集約的な農業が行われていなかったため、広大な可耕地が未開発のまま残されていた。また、ア

ラワク人やカリブ人をはじめとする先住民は、旧大陸から持ち込まれた病原菌・ウィルスに対する抗体をもっていなかったために、その数を減らしていた¹⁴。

このようにブリテン大西洋世界は、第 1 に高利を生み出す事業経営への期待、第 2 に余剰人口の排出の必要にかられて発展した。むろんニューイングランドのように、第 2 の目的にしか役立たないような定住地もあった¹⁵。しかしながら、ジャマイカ・バルバドスは、砂糖を生産し流通させることで、第 1 の目的にもっとも奉仕したのである。

(2) 黒人奴隷制の導因

次に、ジャマイカ・バルバドスのサトウキビ農園において、黒人奴隷が労働力として徴用されたことの理由について考えてみたい。

第 1 に、そもそも、なぜ奴隷制が導入されたか。一般に、沃土が豊富かつ人口が僅少な空間において、労働集約的な事業がいとなまれようとする場合、そこでとられる雇用形態は、奴隷制ないしそれに類似したものになりやすいとされる。つまり、この条件のもとでは、住民は容易に自給自足できるため、いかに賃金を支給されたところで、他者のための労働に服することはないのである。逆のいい方をすれば、かれらが満足するだけの賃金を与えると、今度は雇用主の利益がマイナスとなりえた。したがって、このような空間で大農園を経営して利潤を得ようともくろむものは、労働者に対して物理的な強制力を行使するほかなかったのである¹⁶。

第 2 に、なぜカリブ海諸島の奴隷は、西アフリカから連行された黒人でなければならなかったか。それは、西アフリカには奴隷市場が常在し、そこでは、ルールさえ守ればだれでも自由に人間を購入できたからである¹⁷。対照的に、少なくとも西ヨーロッパには、そうした制度は存在しなかった。それゆえに 17 世紀のブリテン人は、国内に奴隷の供給源を確保できず、「期限つき奴隷」に等しい年季奉公人を徴集するのがやっとであった。しかし、先述のとおり、これでは終身の奴隷に比べていかにも非効率的である。そこでかれらは、現地人によろこばれる商品を持参のうえ、西アフリカの奴隷市場におもむいたのである。

西アフリカの市場で歓迎される商品のうち、ブリテン人が用意できたものは、綿織物をはじめとする布・衣類、鉄製の武器・日用品、ガラス製の装飾品など、さまざまな種類の工業製品であった。それゆえにブリテン人は、アジアから良質の綿織物を買いつけ、また自前で製造できるものは極力そのようにしたあと、それら商品を船舶に満載し、ロンドン・ブリストル・リヴァプールなどの港を出帆したのである。西アフリカに到着後、かれらは、そこですみやかに積荷を売却して奴隷を購入した後、この不運な男女を連れて、ジャマイカ・バルバドスに向かうのであった。これがすなわち、大西洋奴隷貿易である。

さて、ここでようやく大西洋「三角」貿易の全貌が浮かび上がってくる。つまり、ブリテン・西アフリカ・北米カリブ地域という 3 点を、工業製品・奴隷・砂糖という 3 つの「商品」が行き交う、複合的な国際貿易の構図があらわれたのである。この流れこそ、17 世紀後半以降における、ブリテン大西洋世界の経済的な存立基盤にほかならない。

(3) 国際分業の地域別契機

最後に、それではなぜカリブ海諸島・ブリテン・西アフリカのあいだの国際分業が、かくもみごとに成立したのか、それぞれの国・地域の固有の事情に即して考えてみたい。

第1に、カリブ海諸島は、砂糖を供給できるかわりに奴隷を欲した。近世において、砂糖はサトウキビからしか精製できず、サトウキビは高温多湿な土地にしか育たなかった。後述するように、ブリテン人は砂糖をさかんに欲しがったが、かれらが自由にサトウキビ農園を開発できる熱帯地域といえば、カリブ海諸島しかなかった¹⁸。先住民の共同体が衰滅しており、なおかつ広大な沃土と十分な日光・水が存在するような空間など、ほかにあるはずもなかった。そこで奴隷制が採用された理由については、先述したとおりなので繰り返さない。

第2に、ブリテンは、工業製品を提供できるかわりに砂糖を欲した。イングランド南東部の沃土では、少なからぬ非農業人口を養うだけの穀物が生産できた。対照的に、西部・北部・北西部には荒蕪地が多かったが、かわりにヒツジの放牧を通じた毛糸の生産が可能であった。また、これら地域の住民は、十分な食糧を生産できないため、毛織物や麻・綿織物のための労働力を提供することになった。このように、域内分業がよく発達したことで、ブリテン人は工業の比較優位を確立しえた。加えて、かれらは鉄・石炭という天然資源にも恵まれていたため、製鉄業を発展させることもできた。一方、かれらが砂糖を欲したのは、それが体積のわりに、人体にとっての巨大なエネルギー源となりうるからであった。つまり、低コストでそれを入手できれば、ますます多くの非農業人口、すなわち工業労働力を養うことが可能になるのである。したがって、ブリテンの工業生産および砂糖需要の増大は、間接的にとはいえ連動していたことになる¹⁹。

第3に、西アフリカは、奴隷を供給できるかわりに工業製品を欲した。本論でいう西アフリカとは、アフリカ大陸の大西洋沿岸のうち、サハラ南縁から赤道にかけての一带である。そこでは、海岸線に沿って潟湖や湿地が形成され、内陸にはうっそうたる森林が広がっていた。さらに奥地に進むと、今度は一転して樹木もまばらな草原地帯が姿を現し、最後には不毛なサハラ砂漠が口を開いていた。西アフリカの気候的な特色は、1年じゅう気温が高く四季がはっきりせず、そのかわりに雨季と乾季が交互に訪れることであった。また、生態学的な特徴として指摘すべきは、森林地帯には「眠り病」を媒介するツェツェバエが生息するために、大型哺乳類が分布しないことである。以上のような地理的・自然的な諸条件が、前近代における西アフリカの経済構造に大きな影響を及ぼすことになった²⁰。

その1つの特徴が、奴隷所有・売買の存在であった。この事実は、やはりそこが、沃土多く・人口少ない空間であったことに起因している。ただしそうなった理由は、疫病によって先住民の激減をみた新大陸の場合とは、まったく異なっていた。まず、西アフリカでは雨季にしか農業が行えないため、乾季には狩猟や漁労によって糊口をしのぐほかなく、広大な可耕地がみすみす遊休の状態となった。また、熱帯雨林には腐植土が蓄積しないため、土地が開発されて生産力が増加した直後に急減する性質があった。加えて、ツェツェバエのせいで家畜を利用した農業が行えなかったため、可耕地を十分に開発することができなかった。要するに西アフリカは、沃土の総面積のわりに食糧の生産性が低く、それゆえに多数の人口を養えない地域であった。しかも、そ

の沃土の開発には膨大なマンパワーが必要であった。したがってそこでは、土地は誰でも確保できるために価値をもたず、かわりに人間こそが私有財産として追求されることになった。かくてこの地域では、早くから人間を売買するための市場が整備されたのである²¹。

もう1つの特徴が、工業の生産性の低さである。この現象は、西アフリカには繊維工業や製鉄業が確固として存在し、それらの技術水準はヨーロッパのそれと遜色ないものであったにもかかわらず生じた。その背後には、やはり自然的・気候的な要因が介在している。まず、雨季に大半の労働力を投下して食糧を生産しなければならないため、綿花・藍などの工業原料の生産にエネルギーを費やせなかった。乾季になると、今度は逆に余剰労働力が発生し、この男女が限られた原料を分配しつつほそぼそと手工業に従事することとなった。このように、域内分業の発達が阻害されたために、西アフリカは、技術水準のわりに工業の比較優位を確立しえなかった。加えて致命的なことに、木炭・石炭があまり存在しなかったため、低コストで大量の鉄を生産することができなかった。かくてこの地域の住民は、生活に必要な工業製品を、外部から調達しようとする志向性を強く帯びるにいたったのである²²。

ここまでみてきたとおり、大西洋「三角」貿易は、ブリテン・西アフリカ・カリブ海の3地域それぞれの優位性を生かし、劣位性をおぎなうものであった。したがってそれは、3地域それぞれに利益をもたらすという意味で、一般的な国際分業の形態であったと評価できよう。

小活

17世紀にブリテン大西洋世界が発展したのは、カリブ海諸島における砂糖生産が軌道に乗ったからであった。その成功の鍵は、これら島々の農園主たちが、低コストで大量の奴隷を確保できたことにつく。ブリテン人は、試行錯誤のすえに西アフリカから奴隷を供給するルートを見出した。西アフリカの住民は、古来より人間を商品として扱うことに慣れていたし、何よりもブリテン人のもたらす工業製品に魅了されていた。かくて大西洋「三角」貿易は活性化し、ブリテン大西洋世界をますます繁栄させたのである。

第3節 ブリテン大西洋世界の政治史的契機①—ブリテン諸島

前節では、ブリテン大西洋世界の経済史的契機を明らかにした。しかしながら、ブリテン大西洋世界がなぜ・いかにして形成されたかを問うとき、独立した企業家の自発的な経営努力のみに着目したのでは不十分である。なぜならその背後には、かれらを支援する見返りとして、かれらから資源を徴収しようとする国家の力が、つねに作用していたからである。ただし、国家といっても一枚岩の存在ではなく、むしろ異質な宗派的・党派的背景をもつ諸集団のあいだでの抗争の場といったほうがふさわしかった。そこで本節では、かかる宗教的・政治的抗争によって規定された国家の行動が、いかにしてブリテン大西洋世界の形成・展開過程に影響を与えたのか、という問題について考えてみたい。なお、ここでいう国家とは、ブリテン諸島のものであり、西アフ

リカのものについては次節で扱う。まずは、以下の事例に注目しよう。

(1) 王立アフリカ会社の衰亡

17 世紀後半、ジャマイカ・バルバドスにおいて奴隷の需要が急増したことを察知したブリテン 3 カ国の王チャールズ 2 世は、王立アフリカ会社 (Royal African Company, RAC) なる企業の設立を命じた。この会社は、王弟ヨーク公を総裁とし、かれに忠実な貴族・商人の出資を受けていた。その活動目的は、大西洋「三角」貿易の管理統制にはかならず、それを排他的に実行するための勅許状を付与されてもいた。しかし、そこから排除された民間商人たちは不満をもち、ついには密貿易にうったえたため、会社はその摘発に苦慮することとなった。1685 年、兄王の死を受けたヨーク公は、ジェイムズ 2 世として即位したが、3 年後の名誉革命にさいして、国外逃亡を余儀なくされた。これを好機とみた民間商人たちは、RAC を批判するキャンペーンを大々的に展開する。かくて 1698 年、指導者を失った RAC の独占は廃止され、利益の 1 割さえ会社に醸出すれば、だれでも自由に奴隷貿易に参入できるようになった。この結果、RAC は民間商人との自由競争にさらされるにいたったが、10 年後には 3 割のシェアも確保できない状態にまで没落した。そこで民間商人は、醸出金制度の廃止をも主張し、1713 年にこれを実現させた。これにて RAC は事実上の操業停止に追い込まれ、民間商人の勝利が確定した。これ以降、奴隷貿易が公式の政治的アジェンダに上ることは、75 年ものあいだ皆無となった²³。

この事例は一見したところ、奴隷貿易という経済活動への「国家による統制」が、「国家からの自由」なる理念によって打破されたかのように理解できる。だがそれは皮相な見解といわねばならない。むしろ RAC は、トーリとホイッグという 2 つの敵対する党派のあいだで行われた、大西洋「三角」貿易の管理方法をめぐる抗争に巻き込まれたのである。そして、より巧妙であったホイッグの方法こそが、より拙劣であったトーリのそれを退けた結果、1780 年代まで批判を浴びることもなく運用されつづけたのであった。このことについて、もう少し掘り下げて検討したい。まずは、この 2 大党派の差異を確認しよう。

(2) 党派抗争と経済政策

トーリとホイッグとは、1679～81 年の王位継承危機のさいに出現した 2 つの党派である。このとき、ヨーク公ジェイムズの王位継承権を、かれがカトリック信徒であるという理由から否認したのがホイッグ、それにもかかわらず承認したのがトーリである。宗派的には、トーリは高教会派とよばれ、自由意志を尊重するアルミニウス派の流れを汲むものであり、それゆえにプロテスタントであったけれども、カトリックへの抵抗が弱かった。他方で、ホイッグは低教会派とよばれ、予定説をとるカルヴァン派の流れを汲むものであり、それゆえにカトリックへの抵抗が強かった。したがって外交的には、トーリは親フランス・反オランダ、ホイッグは親オランダ・反フランスの立場をとる傾向があった。

トーリとホイッグには、以上のことを除けば、固有の差異というべきものはなかった。階級的にも両者は同一であり、ともに地主貴族を中核とした。だがそれにもかかわらず、1680 年代の

トーリとホイッグには、理想とする政体についての見解の相違がみられた。すなわちトーリは宮廷派とよばれ、王権の拡充を望んだが、ホイッグは地方派とよばれ、議会による王権の制限に固執した。ただし、このように分かれたのは、トーリが本質的に専制を志向し、ホイッグが自由を愛する党派であったためとはいえない。むしろそれは、トーリであるチャールズ 2 世の政府が、ホイッグを冷遇したことに起因するのである。ホイッグのなかには、可能ならば宮廷から恩顧を拝受したいと願うものの、叶わないので地方派に与すものが多かったと想像できる。じっさい、1721 年にホイッグのウォルポール政権が発足すると、今度はホイッグから宮廷派が、トーリから地方派が現れることとなった。

これと類似の理由で、1680 年代のトーリとホイッグには、経済政策にかんする見解の相違もみられた。すなわち、トーリは独占を望んだが、ホイッグは営業の自由を要求した。しかし、これもやはり両派に固有の差異というよりは、むしろチャールズ 2 世の政府が、みずからの支持基盤である前者に独占の恩恵を享受させていたためであろう。そこでホイッグは、独占から排除されて不満をもっていた、独立の企業家たちに接近したのである²⁴。しかしながら、このホイッグの自由主義的な経済政策は、当時の大西洋「三角」貿易にかんする限りでは、生産性の向上により適合的であった。これには 2 つの理由があるので説明しよう。

第 1 に、先述のとおり、1680 年代の北米カリブ地域では、サトウキビ・タバコ農園が急速に拡大しており、とにかく低価格で大量の奴隷が早急に求められていた。このように、取引量の増加が確実な場合には、独占企業の存在は桎梏となりえた。もしも営業の自由が実現すれば、密貿易取締りのコストが削減されることはもちろん、公開競争による価格低下、パフォーマンスの向上、取引の迅速化が進展するであろう。それゆえにサトウキビ・タバコ農園主の多数派は、こぞってホイッグの経済政策を支持したのである。

第 2 に、西アフリカ市場では、衣類の 1 つをとっても、生地・色・肌触りなどにかんする消費者の選好がはげしく、しかもそれは時期と場所に応じて猫の目のごとくに変化した²⁵。したがって、大西洋「三角」貿易が巨額の投資を要する事業である以上、緻密なマーケティングが不可欠となったのであるが、これは、独占企業がもっとも不得意とするところであった。一般的に、自由競争に由来する企業家の創意工夫がはたらかないかぎり、市場の動向にフレキシブルに対応することは難しいのである。これと対照的であったのがインド市場であり、そこでは同じく独占企業である東インド会社（East India Company, EIC）が、正金を支払うかわりに綿織物などの工業製品を入手していた。正金に消費者の選好が入ることはないので、そこではマーケティングが必要なく、それゆえに独占が安定したのである²⁶。

このように、17 世紀末の大西洋「三角」貿易にかんしては、トーリよりもホイッグの経済政策のほうが、生産性の向上に適合的であった。しかしながら、RAC の独占が法的に保障されていた以上、民間商人による密貿易にはリスクがともなうことになり、実行が躊躇されえた。つまり、不運にも拿捕されて積荷が没収されてしまえば、巨額の投資が水泡に帰したのである。このことが理由で、トーリの経済政策は、全体的な生産性の向上という目的に対していえば、非合理的であったにもかかわらず存続した。だが 1688 年の名誉革命によって、ついに引導を渡される

はこびとなったのである。

(3) 大西洋「三角」貿易と国家・国民

名誉革命のわずか1年後に、大西洋「三角」貿易の管理統制の方法が、トーリ的なものからホイッグ的なものへと転換したことを端的に示す事件が発生した。すなわち、RACに拿捕されて積荷を没収されたある民間商人が、同社を相手どって損害賠償を求める裁判を起し、勝訴したのである。このとき法廷は、RACの独占の適法性を確認しつつも、密貿易摘発の執行権については、会社ではなく王にあるものとし、その裁可を経ない拿捕を違法行為と判断した。むろん新王ウィリアム3世・メアリ2世はホイッグを支持基盤としたから、RACの利益に沿う行動をとるはずがなかった。はたしてこの判決の影響で、RACの株価は大暴落し、かわって民間商人の黄金時代が到来した。その後の同社の没落は先述したとおりである²⁷。

しかしながら、ホイッグ新政府にとっても前途は多難であった。かれらは、政治的には地方派、経済的には反独占を旗印としていたために、それらと現実とのあいだの整合性をとる必要に迫られていた。つまり、政権を奪取したからといって、すぐに議会を無視したり、営業の自由を侵犯したりといった行動をとることは得策ではなかった。だが、そうはいつてもかれらは、親オランダ・反フランスの外交的立場を貫いたので、後者の脅威から自己を防衛せねばならなかった。要するにホイッグ新政府は、第1に議会の尊重を約したために、その中核を構成する地主貴族からの恣意的な徴税ができず、第2に営業の自由を約したために、独占を通じては大西洋「三角」貿易から資源を徴収できない、という二重の制約を課されながらも、同時に、強国フランスとの戦争に必要な資金を準備せねばならなかったのである²⁸。だが、結果としてかれらは、一時的とはいえ、それにみごと成功した。最後にこの点を説明したい。

名誉革命後のイギリス政府は、地主貴族に課される土地税の比重を段階的に低下させ、かわりに流通過程に課される間接税、すなわち関税や消費税の徴収を強化した。土地税は、九年戦争期には税収総額の4～5割を占めていたのに、アメリカ独立戦争の終結時にはわずか2割にまで低下した。他方で消費税は、九年戦争期には2～3割であったが、アメリカ独立戦争期には4～5割を占めるほどにまでなった。このような、「直接税から間接税へ」という重心の移動が起こった結果、税収総額それじたいは、4倍の伸長をみせることとなった。この現象は、17世紀末に開始された国際・国内商業の全般的な活性化に対する、国家の対応と判断できる²⁹。そしてその活性化の原動力こそ、カリブ海のサトウキビ農園の形成に端を発する、大西洋「三角」貿易の伸長であったことは、先述のとおりである。したがってイギリス政府は、独占企業の排除を通じて、ブリテン大西洋世界の生産性を向上させた立役者であり、なおかつそのことによって、国家財政の拡充にもみごと成功したのである。

それでは、なぜ独立した企業家たちは、独占を批判したのみにとどまり、国家から高額の間接税を徴収されることには抵抗しなかったのか。それは、かれらがあくまでも国制の手続きを通じて、独占企業の排除という目的を追求する以上、それがみずからの営利欲を満足させるためというよりは、むしろ国家・国民の利益に資するためであることを、立証せねばならなかったからで

ある。それゆえにかれらは、RACこそ私的な営利欲のみに奉仕し、国益に反する存在であることをさかんに喧伝した。たとえばスペイン継承戦争中の1710年、ある匿名の著述家は、次のようなレトリックをもちいて、RACを批判している。

・・・会社のずさんな経営、国内における不誠実な業務、イギリス国民にたいする悪事や不正の数々は、すべて経営理事、および現地代理人の責任である。かれらは、あろうことか敵国船に秋波を送り、アフリカのフランス人居住地の手合いと内通している・・・かれらは不当にも、みずからの資金で経営を行っている商人から醸出金を取り立て、何の役にも立たない城砦の防備のために充当している。かれらは、虚言や偽証を弄して、財務総監に対しても不正な請求を行っている。かれらのいう将官とは、じつは1人の兵卒も率いておらず、城砦には1丁の火器もなく、部隊長の任務はといえば、泥壁を見張るくらいである・・・これらのことが適切に考慮に入れられたならば、われわれは、会社がアフリカ貿易にもたらす重大な損失と、女王陛下に対する許されざる反逆とを、同時にみてとらざるをえない。そればかりではない。傲慢で憎むべき敵国人と馴れ合うごとき大罪を犯すことは、すなわちイギリス国民の名誉を汚すことにほかならない³⁰。

みられるとおり民間商人たちは、あからさまに愛国主義的な言説を利用したために、あとになって、それと現実とのあいだの整合性をとる必要に迫られた。いいかえれば、かれらは、国益にも貢献する場合に限り、私益の追求が許されることを、国家に約したに等しかった。したがって、かれらが、大西洋「三角」貿易を通じて獲得した利益の一部を、国家に貢納する義務を負うことは、まったく正当なことと考えられたのである。

小活

ブリテン大西洋世界は、企業家の経営努力のみでは結実しなかった。じっさいには、かれらを支援するかわりに、かれらから資源を徴収しようとする、国家の力がつねに介在していた。そしてその国家の行動は、2大党派であるトーリとホイッグの抗争における形勢のいかんによって変化した。最終的には後者が勝利した。営業の自由を約するホイッグの経済政策は、1680年代以降の大西洋「三角」貿易にかんする限りにおいては、その生産性の向上に貢献するものであったが、トーリのそれは、少なくともこの局面では不適合であった。かかるホイッグ的な経済政策は18世紀にも継承され、ブリテン大西洋世界の成長を大いに促進したといえよう。かかる国家の行動が長らく問題視されなかったという事実こそ、政府と民間商人とのあいだで、ウィン・ウィンの関係が築かれたことを示すものにほかならない。いくつもの制約を抱えた名誉革命後の政府は、大西洋「三角」貿易から利益を吸い上げなければ、対外戦争に必要な資金を集められず、その存立が危ぶまれた。他方で民間商人たちは、国家の強制力を借りなければ、最大限の利益を引き出すことができなかったのである。

第4節 ブリテン大西洋世界の政治史的契機②—西アフリカ諸国

前節・前々節を通じて、ブリテン大西洋世界は、第 1 に企業家の経営努力、第 2 にブリテンの国家の行動という、2 つの契機によって成長したことが明らかとなった。ただしこれら 2 つのみでは、まだブリテン大西洋世界は存立しえない。最後に検討すべきは、ブリテン大西洋世界の形成・展開過程における、西アフリカ諸国の内政・外交史的契機である。

(1) 西アフリカの国家の重要性

西アフリカ諸国の役割とは、とくべつ注目するに値しない論点であるように考えられるかもしれない。なぜならそれらは、みずからの国民が、ヨーロッパからの来訪者によってみすみす奴隷化され、大西洋のかなたに連行されることを阻止できないほどの、弱体な国家であったかのように見えるからである。だが、そうした考えは完全な誤りである。じつのところ西アフリカでは、複数の強力な国家が奴隷貿易を管理統制しており、またそれら諸国の行動は、内政および外交の諸局面に応じて複雑に変化した。他方でヨーロッパ人の交易者は、ただそれらに黙従するのみの、無力な主体であったといえる。それゆえに、優勢なヨーロッパ人が・劣勢なアフリカ人を搾取するという構図は、少なくとも大西洋「三角」貿易の盛期には、まったくあてはまらないのである。これには 2 つの理由があるので説明しよう。

第 1 に、ヨーロッパ人は、西アフリカに分布する熱帯性の赤痢アメーバやマラリア原虫に対する抗体を有さない場合が多く、したがって、そこに滞在することじたいが致命的となりえた。じじつ、マラリアの特効薬が開発される 1820 年代までは、そこへの定住を試みたヨーロッパ人の約半数が、1 年以内に死亡している。第 2 に、かれらは、機関銃などの新兵器が開発される 19 世紀後半までは、西アフリカにおいて、暴力の行使を通じた目的の実現を望めなかった。これを端的に示す事例を 1 つ提示しよう。すなわち 1564 年、イングランドの提督ジョン・ホーキンスは、西アフリカ沿岸の集落を襲撃し、激戦のすえ 10 人の奴隷を捕獲したものの、かわりに配下の将兵 7 名が戦死し、27 名が重軽傷を負ってしまった。このようでは、かれらが現地の政府・商人と対等ないしそれ以上の立場で交渉したり、そこの市場を自力で支配したりすることなど、まず不可能であったといわざるをえない³¹。

だが、それでもなお、ヨーロッパ人は銃の供給量を調整する戦略を通じて、西アフリカ諸国の行動を、恣意的に操作できたと考えられるかもしれない。なぜなら、銃の製造は西アフリカでは難しかったからである。しかしながら、この想定もやはり誤りである。当時の銃には、交戦相手を容易に制圧しうるほどの性能はなく、それゆえに、西アフリカの王たちによって、必ずしも熱心に追求されなかった。じじつそこでは、コンゴのルンダ国 (Lunda) や、ベニンのオヨ国 (Oyo) のように、銃をほとんどあるいはまったく装備しないにもかかわらず、軍事的な強勢をほこる国家がいくつも存在した。このようでは、銃を排他的に供給できるからといって、ヨーロッパ人の立場が強化されることはなかったといわざるをえない³²。

みられるとおり、ヨーロッパ人といえども、西アフリカを訪ればまったくの無力であった。かれらは、そこの市場への参入を希望するのであれば、現地の、できるだけ強力な国家の保護を

受ける必要があった。その見返りとしてかれらは、市場の使用料（関税）および、城砦の借地料（土地税）を、遅滞なく納入せねばならなかったのである³³。

（２）西アフリカの国家の一般的性格

次に、西アフリカの国家の一般的性格について説明したい。17・8世紀には、西アフリカでも複数の国家が並存しており、そのいずれにも所属しない男女は、基本的にはありえなかった。ここでいう国家とは、第1に固有の領域、第2に構成員から資源を徴収する能力、第3にかれら間の紛争を調停する権力、これらすべてを有する政治的共同体をさすものである³⁴。したがって、近世ヨーロッパでは主権国家体制が発展したが、同時期の西アフリカでは国家なき「部族社会」が叢生していたというのは、偏見にもとづく俗説に過ぎない。しかしながら、国家の性格にかんしていえば、ヨーロッパと西アフリカとのあいだには、共通性のみならず差異もみられた。ここで指摘すべき特徴は、次の3点である。

第1に、西アフリカでは、言語や習俗の差異にもとづいて区分されうる複数のエスニック集団が並存していたが、それらを単位とする統一国家はなく、またそこへ向かおうとする運動も皆無であった。いいかえればかれらは、同一のエスニック集団に所属するからといって、共通のアンデンティティを抱いたり、単一の政治的共同体を志向したりすることはなかったのである。たとえば、アカン人（Akan）・フォン人（Fon）・ヨルバ人（Yoruba）・イボ人（Igbo）のそれぞれの統一国家なるものは、今日にいたるまで建設されていない。したがって、いずれの国家も程度の差こそあれ、複数のエスニック集団を包含する、「多民族国家」としての性格を有していた³⁵。ここからも、単一の血族集団による政治的共同体を連想させる、「部族社会」のイメージは神話であったことが理解できる。

第2に、西アフリカの国家には、大規模なものと小規模なものがあり、総人口のおよそ3割が前者に、7割が後者に所属していた。大規模なものとしては、先にふれたルンダ国やオヨ国のほかに、アサンテ国（Asante）・ダホメ国（Dahomey）・ベニン国（Benin）などが挙げられる。小規模なものとなると枚挙に暇がないが、後述するオールドカラバル国（Old Calabar）やボニ国（Bonny）がそれに該当した。これらは、いくつかの集落の連合体に過ぎなかったが、先述の定義でいえば明らかに国家であり、世襲制の王または、選挙制の首長を必ず戴いていた³⁶。

第3に、西アフリカの異なった国家どうしは、友好・中立・敵対のいずれかの関係を相互にきり結び、いずれの場合でも、みずからの力を維持ないし強化することを目的として、戦略的に決断した。それゆえに、複雑な外交関係がつねに形成され、結果として大規模な殺戮がいつでも発生しえたことは、ヨーロッパの場合と同様である。しかしながら西アフリカには、教皇や皇帝のような、国家の上位におかれる宗教的・世俗的権力が存在しなかった³⁷。

みられるとおり、西アフリカには大小さまざまな国家が並存していたが、そのいずれも、エスニック的な観点からいえば、同質的な「国民国家」ではなかった。またそれらは、つねに変転する局面に応じて複雑な外交関係を形成し、必要ならば暴力の応酬もいとわなかったのである。

(3) ウィダ・オールドカラバル・ボニ

西アフリカの国家の一般的性格について説明したので、次には、3つの事例に注目して、それらがブリテン大西洋世界の形成・展開過程において果たした役割を、具体的に検証したい。それらとは、第1に、はじめフェダ国（Hueda）、のちにダホメ国の植民市となったベニン湾岸のウィダ（Ouidah）、第2にクロス河畔（Cross River）のオールドカラバル国、第3にニジェール三角州（Niger Delta）のボニ国である。これらはいずれも、他のヨーロッパ諸国に比して、イギリスとの強い関係をもつ国々であった。

第1のウィダは、1680～1720年代に、イギリスとの奴隷貿易のシェア第1位をほこった港市である。ここを統治したのは、内陸の都市トヴェ（Tové）を拠点とするフェダ国であった。この国の王は、強大な軍勢力を担保として、奴隷市場の平和維持を実現しえたがゆえに、ヨーロッパからの多くの交易者を引き寄せることができた。具体的にいえば、かれは、みずからの領域で商取引を行うヨーロッパ人のあいだでの私闘を禁止し、違反者を躊躇なく追放した。この勅令は、ヨーロッパで国際戦争が行われている期間においても順守され、たとえば、イギリス人とフランス人が、たがいの生命や財産を侵害しようとすることを不可能にした。逆のいい方をすれば、かれらにとっては、たとえ故国が交戦中であっても、ウィダでは危険なく業務を遂行できることになり、これは非常に好都合であった³⁸。

1727年、ウィダは内陸の都市アボメ（Abomey）から遠征してきたダホメ国の手に落ちた。フェダ軍が撤退するのをみたヨーロッパ人たちは、なすすべなくダホメ軍に投降した。ダホメ王アガジャ（Agaja）は、かれらの保護を約し、配下の将兵たちに、かれらの殺傷は死刑に値する罪であるむね布告した。ダホメ国の歴代の王たちも、フェダ国と同様に、ウィダで商取引を行うヨーロッパ人のあいだの私闘を禁止したのみならず、この規則を厳密に運用した。また王は、ウィダ長官にあたる「ヨヴォガン」（Yovogan）なる役職を設置し、かれにヨーロッパ人との奴隷貿易を統括させた。ヨーロッパ人はこれを「副王」（Viceroy）と認識して絶対的に服従し、かれに市場使用料を納付した。しかし「副王」は、失地回復を期するフェダ国や、これと呼応する小ポープ国（Little Popo）ならびにオヨ国の脅威に悩まされ、ウィダ周辺の国際情勢の安定化に必ずしも成功しなかった³⁹。かかる間隙をみたイギリス人は、いっきょに武力で奴隷市場を制圧するかと思いきや、そうではなく、より強力な国家をもつほかの地域へと、貿易の軸足を移していった。それが、クロス河畔およびニジェール三角州であった。

第2のオールドカラバル国は、1730年代にイギリスとの奴隷貿易のシェア第1位をほこった小国である。この国家は、ある程度の政治的自律性をもった複数の集落によって構成されており、それら間での平和維持を、「エクペ」（Ekpe）なる機関が担っていた。エクペは自発的結社としての性格をもっており、会費の納入が可能なるすべての成年男性に開かれていた。ただしそれは、ヨーロッパ人に対しては固く閉ざされていた。またそれは、内部が会費の多寡に応じて階層化されており、けっして民主的な組織とはいえなかった。エクペは統治の全権をわがものとしたが、その決定は、会員が仮面を着用して出席する集会の場で行われた。そこでの討論の詳細はなぞに包まれており、その内容を部外者に伝えたものは処刑された。これは、紛争の当事者や、その利

害関係者のあいだでの報復の連鎖を避けるために、政治的決定の背景を秘密にするという措置であった。しかし、エクペは18世紀後半になるにつれてその機能を低下させ、集落同士の抗争を調停できないことが多くなった⁴⁰。かかる間隙をみたイギリス人は、いっきょに武力で奴隷市場を制圧するかと思いきや、そうではなく、より強力な国家をもつほかの地域へと貿易の軸足を移していった。それが次にみる、ニジェール三角州のボニ国であった。

第3のボニ国は、1740年代～1807年に、イギリスとの奴隷貿易のシェア第1位をほこった小国である。この国は、選挙制の首長にあたる「アマニャナボ」(Amanyano)を、ペップル(Pepple)なる家系が長期にわたり独占していた点に特色があった。それゆえにヨーロッパ人は、このアマニャナボを「王」と認識し、きそってその統治下に組み込まれた。「王」はとくに、アロ人(Aro)なるエスニック集団との連携を通じて、内陸諸国から大量の奴隷を買いつける能力に長じていた。アロ人たちは、各国の市場を精力的に渉猟し、主としてそこで不要とされた男女の身柄を購入してまわった。それらとは、すなわち戦争捕虜・重罪犯・政治犯であり、反抗的な家内奴隷、知的・身体的障害者、現地のタブーに抵触する生得的特徴をもつものも含まれた。他方で、若くて従順で壮健な男性奴隷があまり供給されないという不満はあったが、それにもかかわらず、イギリス人はこのボニ国での商取引にもっとも満足した。その理由こそ、「王」による、市場とその周辺環境の平和維持および、奴隷の質ではなく量の供給の安定性であった⁴¹。じつに、1680～1807年にイギリスの船舶でボニ国から連行されていった奴隷の総数は、ウィダの約3倍、オールドカラバルの約2倍であった⁴²。

みられるとおりイギリス人は、西アフリカにおいて、統治機構の破綻した地域に侵入し、そこで自由気ままな営業を行ったのではなかった。むしろかれらが探索したのは、内陸に十分な奴隷供給地があり、なおかつ沿岸に奴隷市場の管理能力を有する国家のある場所であった。かれらは、そこで蔓延する致死的な病原菌や、周辺住民の暴力に対してまったくの無力であったため、対等の商取引を通じた利潤の獲得を欲するならば、何にもまして現地の国家からの保護を受けねばならなかったのである。

小活

ブリテン大西洋世界の命運は、西アフリカ諸国の動向によって規定されたのであって、その逆ではなかった。なぜなら、その存立基盤である大西洋「三角」貿易は、強勢なイギリス人が柔弱なアフリカ人を搾取する、という構図ではなかったからである。むしろ、強大な軍事力と優秀な統治力をほこる、いくつかのアフリカ諸国が、みずからの構成員の利益を守るという目的のもとで、奴隷市場を管理統制していた。他方のブリテン人は、紛争や不正などの防止義務を順守するかぎりにおいて、そこへの参入を許可されただけであった。それゆえにかれらは、ある市場がみずからの利益に沿わなくなったとき、そこから退出するという選択肢しかもてなかったのである。かれらじしんが暴力を行使して、その改造をはかるなどという構想は、どうみても実行不可能な夢物語に過ぎなかった。

おわりに

17・8 世紀におけるブリテン大西洋世界の物質的な存立基盤とは、ほかならぬ大西洋「三角」貿易であった。そしてこの貿易は、ブリテンの企業家による経営努力の結晶であった。かれらは、17 世紀前半の国際情勢の変化によって生じた起業の機会を鋭敏に察知し、利潤を獲得しようと苦闘した。このときブリテンの国家は、あくまでもみずからの存立のために、かれらから資源を徴収する手段を講じた。また西アフリカ諸国も、あくまでもみずからの構成員の利益のために、ブリテンからやってきた交易者たちを保護した。もしもこれら諸国の働きがなかったら、大西洋「三角」貿易の成長はすぐに停止していたはずである。それゆえに、ブリテン大西洋世界の形成・発展にもっとも寄与したのは、第 1 にブリテンの企業家、第 2 にブリテンの国家、第 3 に西アフリカの諸国家であったといえよう。

したがって、18 世紀末にイギリスの奴隷貿易廃止論者が行ったこととは、客観的には次のとおりであったといえる。すなわち第 1 に、大西洋「三角」貿易によって利益を上げようとする企業家の経営努力を全否定し、第 2 に、かれらを利用しようとするイギリスの国家のあり方を疑問視し、第 3 に、アフリカ人に奴隷貿易を断念させるべきと主張することであった。これらのことはすべて、1690 年代には夢物語であったにもかかわらず、1790 年代には、イギリス人の多数派が支持するところとなっていた。この期間に、いったい何があったのであろうか。

¹ Jenny Kermode, Janet Hollingshead and Malcolm Gratton, 'Small Beginnings: Liverpool 1207-1680', in John Belchem, (ed.), *Liverpool 800: Culture, Character and History*, (Liverpool, 2006), pp. 59-111.

² Daniel Defoe, *A Tour through the Whole Island of Great Britain*, (London, 1724), p. 255-6.

³ Jane Longmore, 'Civic Liverpool: 1680-1800', in Belchem, (ed.), *Liverpool 800*, p. 169.

⁴ 本節は、とくにことわりがないかぎり、主として次の文献によっている。Carla Rahn Phillips, 'Europe and the Atlantic', in Jack P. Greene and Philip D. Morgan, (eds.), *Atlantic History: a Critical Appraisal*, (Oxford, 2009), pp. 249-75.

⁵ *Ibid.*, pp. 260-1.

⁶ *Ibid.*, pp. 264-8; Geoffrey Parker, *Global Crisis: War, Climate Change and Catastrophe in the Seventeenth Century*, (Padstow, 2013), p. 49.

⁷ 川北稔『工業化の歴史的的前提—帝国とジェントルマン』岩波書店、1983 年、201～39 頁。

⁸ 池本幸三ほか『近代世界と奴隷制』人文書院、1995 年；川北稔『民衆の大英帝国—近世イギリス社会とアメリカ移民』岩波現代文庫、2008 年。

⁹ デイヴィッド・エルティスほか編（増井志津代訳）『環大西洋奴隷貿易歴史地図』東洋書林、2012 年、200～3 頁。

¹⁰ ジョン・ブリュア（大久保桂子訳）『財政=軍事国家の衝撃—戦争・カネ・イギリス国家』名古屋大学出版会、2003 年、99～102 頁。

¹¹ 同上、122～32 頁。

¹² Phillips, 'Europe and the Atlantic', pp. 264-71.

¹³ Parker, *Global Crisis*.

¹⁴ ジャレド・ダイヤモンド（倉骨彰訳）『銃・病原菌・鉄—1 万 3000 年にわたる人類史の謎』、草思社、2000 年；Allan Greer, 'Commons and Enclosure in the Colonization of North

America', *AHR*, 117(2), (2012), pp. 365-86.

¹⁵ ニューイングランドは、ブリテン大西洋世界において、さほど重要な経済的役割を果たしていなかった。ジャック・P・グリーン（大森雄太郎訳）『幸福の追求—イギリス領植民地期アメリカの社会史』慶應義塾大学出版会、2013年。

¹⁶ この議論は「ニエバーの仮説」とよばれ、アフリカ史研究者のあいだではよく知られている。H. J. Nieboer, *Slavery as an Industrial System*, (The Hague, 1900), pp. 383-7; Gareth Austin, 'Factor Markets in Nieboer Conditions: Pre-Colonial West Africa, c. 1500-c. 1900', *Continuity and Change*, 24(1), (2009), pp. 23-53.

¹⁷ 次項において後述する。

¹⁸ シドニー・ミンツ（川北稔ほか訳）『甘さと権力—砂糖が語る近代史』平凡社、1988年。

¹⁹ 同上；川北稔「福音主義者の理想と奴隷制の廃止」松村昌家ほか編『英国文化の世紀 1—新帝国の開花』研究社出版、1996年；坂巻清『イギリス毛織物工業の展開—産業革命への途』日本経済評論社、2009年；斎藤修『プロト工業化の時代—西欧と日本の比較史』岩波現代文庫、2013年。

²⁰ J・シュレ・カナール（野沢協訳）『黒アフリカ史—その地理・文明・歴史』理論社、1973年、19～50頁。マイケル・クロードー、グダ・アブドゥラヒ（中村弘光ほか訳）『ナイジェリア—その人々の歴史』帝国書院、1983年、11～9頁。

²¹ Gareth Austin, 'Resources, Techniques and Strategies South of the Sahara: Revisiting the Factor Endowments Perspective on African Economic Development, 1500-2000', *EcHR*, 61(3), (2008) pp. 587-624.

²² *Ibid.*

²³ Kenneth Morgan, 'Introduction', in Morgan, (ed.), *The Royal African Company*, (London, 2003), pp. 9-31; Christopher Leslie Brown, 'The British Government and the Slave Trade: Early Parliamentary Enquiries, 1713-83', in Stephen Farrel, Melanie Unwin, and James Walvin, (eds.), *The British Slave Trade: Abolition, Parliament and People*, (Edinburgh, 2007), pp. 27-41; Anne M. Carlos, and Jamie Brown Kruse, 'The Decline of the Royal African Company: Fringe Firms and the Role of the Charter', *EcHR*, 49, (1996), pp. 291-313.

²⁴ Steve Pincus, *1688: the First Modern Revolution*, (New Haven, CT, 2009), pp. 366-99; id. 'Rethinking Mercantilism: Political Economy, the British Empire, and the Atlantic World in the Seventeenth and Eighteenth Centuries', *WMQ*, 69(1), (2012), pp. 3-34; Cristopher Dudley, 'Party Politics, Political Economy, and Economic Development in Early Eighteenth-Century Britain', *EcHR*, 66(4), (2013), pp. 1084-1100.

²⁵ 小林和夫「イギリス大西洋奴隷貿易とインド産綿織物—トマス・ラムリー商会の事例を中心に」『社会経済史学』77（3）、2011年。

²⁶ Robin Hermann, 'Money and Empire: the Failure of the Royal African Company', in Daniel Carey and Christopher J. Finlay, (eds.), *The Empire of Credit: the Financial Revolution in the British Atlantic World, 1688-1815*, (Dublin, 2011), pp. 97-119.

²⁷ William Pettigrew, 'Free to Enslave: Politics and the Escalation of Britain's Transatlantic Slave Trade', *WMQ*, 64(1), (2007), pp. 3-38.

²⁸ 同様のことは、すでに30年以上前からいわれていた。金子勝「「自由主義」的行財政改革の形成（一）」『社会科学研究』34（2）、1982年、3～6頁。

²⁹ ブリュア『財政=軍事国家』、99～140頁。

³⁰ Anon., *A True State of the Present Difference between the Royal African Company and the Separate Traders...*, (London, 1710), in Morgan, (ed.), *The Royal African Company*, (London, 2003), pp. 33-4.

³¹ David Northrup, 'West African and the Atlantic, 1550-1800', in Sean Hawkins and Philip D. Morgan, (eds.), *Black Experience and the Empire*, (Oxford, 2004), p. 37-40; クロードーほか『ナイジェリア』、68頁。

³² John Thornton, *A Cultural History of the Atlantic World*, (Cambridge, 2012), pp. 68-70, 86; クロードーほか『ナイジェリア』、86頁。オヨ国はサバナにあったのでツェツェバエに悩まされることがなく、それゆえに強力な騎馬隊をそなえることができた。バジル・デビッドソ

ン（貫名美隆ほか訳）『アフリカ文明史—西アフリカの歴史、1000年～1800年』理論社、1975年、121～8頁、207～10頁。

³³ デビッドソン『アフリカ文明史』、200～2頁。

³⁴ Thornton, *Cultural History*, pp. 75-6.

³⁵ *Ibid.*, pp. 74-6.

³⁶ *Ibid.*, pp. 74-6.

³⁷ *Ibid.*, pp. 74-99.

³⁸ Robin Law, *Ouidah: the Social History of a West African Slaving 'Port'*, (Athens, OH, 2004), pp. 1-49.

³⁹ *Ibid.*, pp. 50-154; デビッドソン『アフリカ文明史』、217～9頁。

⁴⁰ Paul E. Lovejoy and David Richardson, 'African Agency and Liverpool Slave Trade', in David Richardson, Suzanne Schwarz and Anthony Tibbles, (eds.), *Liverpool and Transatlantic Slavery*, (Liverpool, 2007), pp. 43-65; デビッドソン『アフリカ文明史』、213～6頁。クローダーほか『ナイジェリア』、38～9、77～8頁。

⁴¹ Lovejoy and Richardson, 'African Agency'; G. Ugo Nwokeji, *The Slave Trade and Culture in the Bight of Biafra: an African Society in the Atlantic World*, (Cambridge, 2010).

⁴² 'The Trans-Atlantic Slave Trade Database', on *Voyages*, (www.slavevoyages.org). 『ヴォエイجز (Voyages)』は2008年1月よりインターネット上で公開されたデータベース。無料で閲覧が可能。David Eltis、David Richardson、Stephen Behrendtらを中心とする研究グループによって作成された。奴隷貿易にかんする統計資料としては、今日においてはもっとも信頼のおけるもの。

第 2 章 18 世紀リヴァプールの政治社会構造

はじめに

ブリテン 3 カ国の王政復古から約 10 年が経過したあるとき、リヴァプールでは土地をめぐる係争が発生した。その発端は、モリニュ子爵（Caryl, 3rd Viscount Molyneux）なる人物が、都市南部に広がっていた、「リヴァの入江」（Liver Pool）付近の開発を進めたことである。モリニュはランカシア（Lancashire）の古くからの地主貴族であり、当時は王から、リヴァプールの領主権を保障されていた¹。

この動きに対し、リヴァプール市当局（Town Council）は、ただちに警告を発した。いわく、入江およびその周辺の土地は、「太古の昔」からわれわれのものである。したがって、無許可の建造物は、すべて撤去されるであろう、と。はたして、モリニュの設置した橋梁は、なにものかによって破壊された。憤慨したかれは 1671 年、市当局の提訴に踏み切った²。

これを受けた市当局は、トマス・ジョンソン（以下「大ジョンソン」と表記）なる幹部（Councillor）を派遣し、モリニュとの交渉にあたさせた。結果、翌年には両者のあいだでの示談が成立した。それによれば、モリニュの橋梁設置権は承認されたものの、かわりにかれは、市当局にごく小額の借地料を支払う義務を負った。また、かれは領主権を、1,000 年のあいだ市当局に貸し出すことも承知した。これは、市当局の交渉の勝利である。かれらは晴れて、入江とその周辺の土地を自由に利用できるようになったのである³。

モリニュと市当局が、かくも必死にこの土地を争奪したのはなぜであろうか。じっさい、「リヴァの入江」は濁っていて水深もなく、大型船を係留することはできなかった。その周囲には、ヒースの生い茂る泥炭地が広がっていたが、これを農地として開発することは不可能であった。したがってそこが、長いあいだ所有権が不明なままに放置されていたとしても、さして不思議はない。しかしながらそこは、1670 年前後という特定の時期に、実力ある 2 つの主体のあいだでの、白熱をおびた争奪戦の対象となったのである。

この理由ははっきりしている。すなわちそれは、1650 年代以降に、ブリテン大西洋世界が本格的に形成されたことである。つまりこのことによって、マージー河畔の小集落の、港湾都市としての変貌が期待されはじめたのである。そうなれば、「リヴァの入江」のような、不十分とはいえ係船が可能な地点では、その所有権を確保しておく必要が生じた。また、周囲の泥炭地も、農地ではなく商業地・市街地として開発するぶんには、何ら支障はない。つまりところモリニュと市当局との闘争の背景には、こうした事情が存在したのである。

本章ではまず、ブリテン大西洋世界の形成と、リヴァプールの経済成長との関連を、明らかにする（第 1 節）。また、かかる新たな経済的条件の出現にともなう人々の思考・行動パターンの変化、および複数のそれら間の相克・交渉の結果として、都市空間のなかには独特な均衡状態、いいかえれば政治文化が生まれるが、その特質についても説明する（第 2 節）。最後に、この政治文化が自己変容をとげるなかで、当初は目立たなかった 1 つの構成要素が、じょじょに全体

に影響を及ぼすようになり、ついには既存の均衡を突き崩すことになるのであるが、そのことについてとも言及する（第3節）。重要なのは、これらすべてが、18世紀末のリヴァプールにおいて、奴隷貿易廃止運動を発生させる条件になったということである。

第1節 18世紀リヴァプールの経済成長

本節では、リヴァプールの経済成長を、ブリテン大西洋世界との関連において概説する。先述のとおり、リヴァプールは市制施行から300年あまりのあいだ、住民総数は約1,000人で増減はなく、どこにでもある河畔の小集落であり続けた。しかしながら、1650年代以降にブリテン大西洋世界が形成されると、わずか100年のあいだに、国内第2の都市にまで成長する。はたしてその原動力とは、いったい何であったのか。

（1）リヴァプールと北米カリブ市場

リヴァプールの比較優位は、重厚な後背地の存在であって、それ以外ではなかった。これこそが、北米カリブ市場の膨張に対応しうる潜在能力を有したのである。この市場の特徴は、サトウキビ・タバコをはじめとする農産物の栽培に特化するという経済構造ゆえに、食糧や日用品に対する需要が常在したのみならず、かつそれが持続的に巨大化していた点である。

食糧にかんしていえば、北米カリブの農園主・年季奉公人・奴隷たちは、ニューファウンドランド産のタラや、アイルランド産の牛・豚・ニシンを常食としたが、冷凍コンテナのないこの時代、肉類を輸送するために必要なアイテムは、塩であった。そして良質な塩は、国内ではチェシア（Cheshire）が唯一の生産地であった。ここの岩塩が開発された結果、イングランド人は、もはやフランス産の高級品を輸入する必要がなくなったのである。日用品にかんしていえば、スタッフォードシア（Staffordshire）産の陶器や、ランカシア東部産の麻・綿混合織物は、北米カリブ市場における強い競争力を保持した⁴。

もうひとつ忘れてはならないのが、ランカシア南部産の石炭である。というのも、このとき国内では森林が枯渇しており、それゆえに、低コストで木炭を確保することが困難となっていた。このことによって、スタッフォードシア製陶業、およびチェシア製塩業は、絶体絶命の窮地に追い込まれていたのである。だがそれらは、ランカシア採炭地のおかげで、「木炭から石炭へ」という熱源の転換を果たすことができ、生産効率をみごと向上させることができた⁵。

リヴァプールは、これら工業地帯および採炭地からほぼ等距離にあり、なおかつ大西洋に向けて出帆できる、絶好の地点であった。じつにそれは、半径100マイル（約161km）のうちに2,466平方マイル（約64万ha）の採炭地を擁していたが、そのような港湾都市は、国内にはほかに類をみなかった。ロンドンには、半径100マイル以内に採炭地はほぼゼロ、ブリストルには1,000平方マイル（約26万ha）が存在したが、周囲には競争相手となる港湾都市が多かった⁶。

北米カリブ市場に排出される製品と引き換えに、リヴァプールには砂糖・タバコなどの舶来品

が流入し、空前の好景気が到来した。これは 1670 年前後のことであり、まさにモリニュと市当局とが、土地の争奪戦を繰り広げた時期である。このとき、第二次英蘭戦争（1665～7 年）が終結し、海上交通の安全性が確保された。また、ペスト（1665 年）と大火（1666 年）に立て続けにみまわれたロンドンの復興が遅れたこともあって、リヴァプールに投資が集中した。いまや、利益を追求する企業家が大挙をなして、かつての河畔の小集落に殺到した⁷。むろん昔ながらの住民のなかから、この機を逃すまいとするものがあらわれた。かくてリヴァプールは、奇跡的な経済成長を実現するにいたった。「リヴァの入江」の深部は埋め立てられて商業地・市街地に、開口部は掘削されて人造港（wet dock）となり、その景観も一変した⁸。第 1 章「はじめに」で紹介した、作家デフォーの目に映じたのは、まさにこのリヴァプールであった。

（2）リヴァプールと西アフリカ市場

リヴァプールがほこる後背地の諸産業は、やがて西アフリカ市場にまで食指を伸ばし始めた。1720 年前後のことである。これに先立つ 1713 年、王立アフリカ会社（RAC）の特権が廃止され、リヴァプールを含む地方港の企業家にとって、対アフリカ貿易、すなわち奴隷貿易への参入障壁が除去された。加えて 1720 年には南海会社（South Sea Company）が破綻し、出資者であるロンドンの企業家たちが、致命的な打撃をこうむった。かかる首都の 2 つの失策は、国内首位の地方港たるブリストルの企業家に、絶好の商機を与えたかにみえた。じじつかれらは、1721～40 年に 681 回の航海を成功させ、約 18 万人の奴隷を南北アメリカに連行した。同時期のロンドンでは 478 回で約 14 万人、リヴァプールは 244 回で約 6 万人であった。ところがこのブリストルは、後背地の厚みにおいてリヴァプールの敵ではなかった。前者は次の 20 年間に 426 回で約 13 万人と伸び悩んだ一方、後者は 716 回で約 19 万人となり逆転した。これがイギリス奴隷貿易の最後の 20 年間（1788～1807 年）には大差となり、リヴァプールの 1,817 回で約 55 万人に対し、ブリストルは 167 回で 5 万人足らずの実績をあげたのみであった⁹。

リヴァプールの奴隷貿易での成功は、すべて後背地の厚みによるものであった。ランカシア東部・ヨークシア西部という、国内最大の繊維工業地帯を擁するリヴァプールが相手では、いかにロンドンやブリストルの企業家が経営努力を行おうと、互角の競争が成立する見込みはなかった。というのも、前章で述べたとおり、西アフリカ市場においては、工業製品に対する巨大な需要が常在しており、イギリス側としては、それらの供給能力こそが、奴隷貿易の成否を分けたからである。この条件を考慮すれば、リヴァプールの大西洋「三角」貿易における成功は、何ら意外ではなかった。そしてまた、1650 年代以降のブリテン大西洋世界の本質的な構成要素こそ、ほかならぬこの貿易であったことを踏まえるならば、その大半を掌握したリヴァプールの、都市としてのさらなる成長は、これまた意外ではなかった。じつに 1600 年には約 1,000 人であった人口が、1700 年には約 5,100 人、1800 年には 78,000 人へと、史上まれなる増加をみせているのである¹⁰。

小括

リヴァプールの経済成長は、2つの段階を経て起こった。すなわち、第1段階とは、後背地の厚みを活かし、北米カリブ市場を席卷した1670年以降の発展である。第2段階とは、後背地の厚みに加え、第1段階のときに整備したインフラを活用することで、西アフリカ市場を制覇した、1720年以降のそれである。むしろ西アフリカ市場を制覇するとは、すなわち大西洋「三角」貿易を掌握したということと同義である。かくてリヴァプールは、18世紀イギリスの生産力の中核に位置する都市へと生まれ変わったのである。

第2節 リヴァプールの政治文化①—都市エリートと民衆政治

本節では、近世リヴァプールの経済成長とともに生じた、政治文化の特質について説明する。ここでのキーワードは、企業家精神・愛国主義・家父長主義の3つである。18世紀リヴァプールでは、これら理念によって表現されるような思考・行動パターンが、もろもろのアクターのあいだで共有されていたのである。それぞれの点について、以下に整理しよう。

(1) リヴァプールの企業家精神

リヴァプールの企業家は、ロンドンやブリストルの競争相手と比べて、格段に経営能力が高かった。じっさい、後2者が、いわゆる「初期独占体」を組織して、海外貿易の利益を限定された少数者の手にとどめようと画策したのに対し、前者は、営業の自由を奨励し、またリスクをいとわぬ積極的な経営を実行して、みごと成果をあげた¹¹。本項では、そうした経営能力の高さが、具体的にはいかなるかたちであらわれたのか、という点について説明する。かかる企業家精神こそ、リヴァプールの政治文化の、本質的な構成要素の1つとなっていたのである。

先述したとおりリヴァプールは、北米カリブ・西アフリカの巨大市場と、ランカシア・チェシア・ヨークシアの分厚い工業地帯・採炭地との結節点に立地するという幸運に恵まれたため、あたかも自然のように発展をとげた。しかしながら、そこには不運な欠陥も備わっており、とりわけ、第1に大型船を係留できる地点が存在しない、第2に後背地との交通が不便である、といった点は致命的であった¹²。結論を先にいえば、これら2つの欠陥を解消したものこそ、リヴァプールの企業家精神であったのであるが、順にみていこう。

第1の問題について。これは、リヴァプールが中世都市として誕生する原因になったと考えられる、「リヴァの入江」にかんするものである。この入江は、かつてはプランタジネット家の王や騎士・従者たちが、アイルランドに出帆するときに利用された。しかしながらそれは、水深の不足ゆえに、近世の大型帆船には、徐々に対応できなくなってきた。しかもそこに流入する河川が、東部の丘陵地帯の土砂を運んできたため、年月を追うごとに、その水深すらも浅くなってきた。要するに、このままではリヴァプールに未来はなかった¹³。

この状況をみた市当局は、入江の開口部をあえて掘削し、人造港とすることを決断した。1700年代のことである。しかしながら、当時の市の歳入は400ポンドであったため、総工費の30,000

ポンドを捻出するには、75 年の歳月がかかるはずであった。そのうえ、かような土木技術は、国内ではいまだ類例がみられなかったから、失敗した場合のリスクは想像を絶した。だがリヴァプールの企業家たちは、この事業が成功したときのリターンを計算し、またそれを実現するための手段を講じた。具体的には、タバコ貿易商かつ、市当局幹部・下院議員のトマス・ジョンソン（大ジョンソンの子。以下「小ジョンソン」と表記）が議会に提案し、みごと 6,000 ポンドの補助金を獲得した。また市当局は、モリニュとの闘争で勝ち取った 1 等地を担保に、巨額の借入を行った。さらにかれらは、オランダの人造港に詳しい T・スティアーズ（Thomas Steers）なる設計士を招聘し、全工程の指揮にあたらせた。かくて 1719 年、国内初の人造港が完成し、入江にまつわる懸念は完全に解消された。じつにリヴァプールの出入港船総量は、人造港の着工時には年間約 30,000 トンであったが、竣工後 20 年で約 60,000 トンへと倍増している¹⁴。

このように、人造港は有利であることが分かったので、市当局は、18 世紀のうちにもう 5 つのそれらを増設した。しかしながら、リヴァプールの競争相手には、とてもそうした動きに追従することは不可能であった。後背地の貧弱さ、および企業家の経営能力の欠如ゆえに、リスクある決断が実行できなかったのである。チェスタ（Chester）は、人造港を掘削する前に、ディ（Dee）河口が土砂で埋もれてしまい、あえなく港湾都市としての「死」を迎えた¹⁵。ブリストルでは、1760 年代に人造港の建設案がもちあがったものの、企業家のあいだでの連携不足が原因で頓挫した¹⁶。ロンドンでは、1790 年代になってようやく初の人造港の建設が始まったが、そのときでさえも、企業家たちは、港湾の利便化によって失職する可能性のある労働者たちの抵抗に悩まされた。そこでかれらは、「リヴァプールの企業家精神」をひきあいに出しつつ、われわれもそれを見習うべきであると力説したのであった¹⁷。

第 2 の問題、すなわち内陸交通の不便さ、およびその解決法について説明する。まず前提として、リヴァプールは、低コストでの内陸への移動が困難な場所であった。陸上交通にかんしていえば、一般に、鉄道や自動車の発明以前には、人力や馬力にたよるほかなかったため、非効率であった。しかもリヴァプールの場合、近世までは遠隔地との商取引をほとんど行ってこなかったため、そもそも大きな道路がなかった。水上交通にかんしていえば、マージー川に限らずイングランド北西部の河川では、南東部のテムズ川などの場合とは対照的に、急激な水流が船舶の往来を阻害していた。要するに、このままでは巨大な市場と、分厚い工業地帯との結節点に位置するという、せつかくの強みも台無しであった¹⁸。

かかる事態を重くみたりヴァプールの企業家たちは、水上交通の整備に乗り出した。1690 年代末のことである。市当局幹部・下院議員のリチャード・ノリス（Richard Norris）は、マージー川とアーウェル川（Irwell）をつなぐ水路を、航行ができるよう改修する工事に着手した¹⁹。これはみごと成功し、1721 年、リヴァプール・マンチェスタ間の船舶の往来が実現した。この 11 年後には、マージー川とウィーヴァ川（Weaver）とが、さらに 9 年後にはダグラス川（Douglas）とが接合された結果、チェシアの製塩地帯と、ランカシア南部の採炭地ウィガン（Wigan）とが、リヴァプールを経由して直通することになった。1750 年代になると、既存の水路の改修にとどまらず、運河の建設もさかんになり、ランカシア南部の採炭地、ヨークシア西部の繊維工業地帯、

スタッフォードシア北部の製陶業地帯と、リヴァプールとが、さらに緊密に接合された。これらの結果、製品や石炭の輸送費が、5〜8割ほど軽減された。ここでも、リヴァプールの企業家精神が、内陸交通の不便さという欠陥を解消することに成功したといえよう²⁰。

みてきたとおり、リヴァプールは確かに幸運に恵まれた土地であったが、他方で不運な欠陥をも抱えていた。しかしながら、企業家の経営能力の高さゆえに、機敏な対応がとられた結果、後者をみごと解消することができた。この成功体験を通じて、リヴァプールでは、企業家精神を誇りとするような風土が生み出されるにいたった。このことは、のちに奴隷貿易の是非をめぐる論争のなかでふたたび表出するであろう。

(2) リヴァプール企業家の愛国主義

次に、18世紀リヴァプールの政治文化のもう1つの特徴である、いわゆる大文字の政治、すなわち宮廷・議会・戦争などに対する、企業家のコミットのあり方について説明する。本章「はじめに」で紹介したエピソードに戻って考えてみたい。なぜモリニュと市当局は、ともに港湾・市街地を発展させ、そこから利益を得たいという、共通の野心を抱いていたにもかかわらず、協力ではなく競争という道を選んだのか。これは、両者の政治的立場の差異ゆえのことと考えられる。具体的にいえば、モリニュはトーリ・カトリック・宮廷派であり、大ジョンソンら市当局幹部の多数派は、ホイッグ・低教会派・地方派であったため、両者はまさに水と油であった。以下では、この抗争の顛末をもう少し敷衍してみよう。

モリニュはイングランド内乱（1641〜9年）のとき、王党派の軍人として名をはせたが、議会派のリヴァプール住民を容赦なく惨殺したため、市内において忌み嫌われていた。1672年、かれは先述した「リヴァの入江」の争奪戦で辛酸をなめたが、4年後、クーデタという手段をもちいて、ふたたび攻勢に転じた。ここでかれは、仇敵の大ジョンソンを追い落とし、かわりに、子飼いのトーリ・高教会派・宮廷派による市当局をつくりあげた。さらに8年後、同じカトリックのジェームズ2世が即位すると、かれの権勢は頂点にたった。ところが3年後の名誉革命の結果、すべてが水泡に帰すこととなる。新王ウィリアム3世・メアリ2世の命により、かれはリヴァプール城から追放され、すべての役職をとかれ、反逆罪の容疑で審理を受ける身にまで落ちぶれた。1700年没。76歳であった²¹。

いっぽう大ジョンソンは復権をはたした。1695年、かれは満を持してクーデタを決行し、モリニュの子飼いたちを、残らず市当局から追い出した。翌年、かれはウィリアム3世より勅許状を拝受し、これを通じて市長に任命されたほか、かれの支持者40名も、あらためて市当局幹部に推挙された。このとき王は、トーリの再起をはばむという目的のもと、今後はいっさい、市長には現職の幹部しか就任できないものとし、またその幹部を終身制としたほか、転居・死亡などの理由で欠員が生じた場合にも、互選によってしか補充されないと定めた。かくてリヴァプールの市政は、きわだって非民主的な性格をもつこととなったが、大多数の企業家の立場からいえば、それで満足であった。なぜなら前章で述べたとおり、17世紀第4四半期において、北米カリブ・西アフリカ貿易の生産性を向上させるという目的に照らし合わせてみれば、トーリよりもホイ

ッグの経済政策のほうが望ましかったからである。大ジョンソンの死後は、子の小ジョンソンや、その友人ノリスらが主導権を握った。かれらこそ、企業家精神を十二分に発揮し、人造港や河川改修工事を推進した張本人であった²²。

リヴァプール市当局は、いまや名誉革命後のイギリス政府に、もっとも忠良な団体であった。1715年、ジェイムズ2世の遺児ジェイムズ・ステュアートが、王位を要求して反乱を起こしたさい、リヴァプールでは、かれに対する徹底抗戦が主張された。このとき住民たちは、市外に塹壕や水路を張り巡らせて籠城にそなえ、マージー川には武装した帆船を浮かべることで、反乱軍に対峙しようとした。戦勝後には、捕虜となった「逆賊」の数人がリヴァプールで斬首され、その遺骸はヒース野原にさらされた。30年後、今度はジェイムズの子、チャールズが同様の反乱を起こしたが、このさいにもリヴァプールでは、すぐに現王ジョージ2世に対する忠誠が表明された。市当局は、2,000ポンドの義捐金、および13トンの乾パンを集めて政府軍に献上した。また「リヴァプール青隊」(Blues)なる義勇軍も結成され、政府軍と行動をとともにした。戦勝後の翌年春には、血気にはやった住民たちが、市内のカトリック礼拝堂を焼き討ちするという事件まで起こしている²³。

かくも好戦的な愛国主義は、18世紀リヴァプールの政治文化の、1つの有力な構成要素となった。この存在ゆえに、市当局は、きわめて非民主的な統治構造を温存することができた。じっさい、大ジョンソンによって放逐されたトーリ・高教会派、およびその流れを汲む反対勢力は、住民たちがもつ民主化への志向を利用して、何度か復権をめざす運動を起こしたものの、いずれも、カトリック王ジェイムズ2世、およびその信奉者モリニュの専制政治に対するトラウマを巧みに利用した市当局に、あえなくはばまれている。ウィリアム3世、およびかれの後継王たちの治世は、断固として死守されねばならないと信じられた。他方でジェイムズ2世、およびかれの子孫の返り咲きは、いかなる代償を払ってでも阻止されねばならなかった。じじつ名誉革命の前後から、リヴァプールの港湾経済が飛躍的に成長したために、ますますそのことが、企業家たちのあいだでも強く認識されるようになったのである²⁴。

(3) リヴァプール企業家の家父長主義

最後に、リヴァプールの企業家による都市統治のあり方、およびそれによってもなつて形成された政治文化の特徴について説明する。だがその前に、前提となる諸制度について触れておこう。まず、統治の主体たる市当局であるが、これを構成したのは、市長1名を含む41名の幹部であった。かれらによって統治されるのは、法的身分に応じて区分すれば、正式市民(Freemen)・準正式市民(Townsmen)、およびその他の住民の3通りであった。これら3者の差異は、第1に市長・下院議員選挙における投票権、第2に都市営業税(Town Dues)の免除が認められる範囲である。正式市民は第1・第2ともに、準正式市民は第2のみがそれぞれ保障され、その他の住民はいずれも享受できなかった。正式市民の資格を得るためには、原則として父親、あるいは奉公先の親方が正式市民でなければならなかった。その数といえ、18世紀初頭には成人男性の大半であったが、徐々にその増加が抑制され、かわりに準正式市民の割合が多くなった。これは、

幅広い層の企業家の経営努力をあてにして、経済的な競争力を維持しようとするも、かれらに政治的権利を付与することは望まない、市当局の非民主的な性格のあらわれにほかならない。なお、18 世紀が進むにつれて、正式市民・準正式市民のいずれの特権ももたない、その他の住民の数も多くなってきた²⁵。

市当局幹部および、各身分に属する住民の社会的背景はどのようなものであったか。まず市当局幹部は、18 世紀には 7～9 割が海外貿易に従事する企業家であった。かれらのうち、奴隷貿易に対する投資経験のないものはまれであった。かれらによって統治される住民は、先述したような法的身分にしたがって区分されたが、これらは、社会階層とは必ずしも一致しなかった。つまり、たとえば特権を有しない富裕者もいれば、貧困にあえぐ正式市民もいた。社会階層についてみれば、住民はエリートと民衆の 2 通りに区分された。エリートを構成するのは、市当局幹部の多数派と同じ企業家、あるいは医師・弁護士などの専門職であった。民衆はといえば、船員と商工業者に大別でき、前者には船長から雑用係 (cabin boy) まで、後者には熟練職人・店舗経営者から、そのもとで働く見習い・労働者・店員までが含まれた。職人には、土木・建設、造船、アフリカ輸出品製造にかんする業種に従事するものが多かった。要するに、成長を続ける巨大港湾都市にふさわしい社会的分業が、日ごと進展していたといえよう。これがほかでもない、18 世紀リヴァプール社会である²⁶。

さて、企業家はいかにして民衆を統治したのか。なぜ民衆は、みずからを排除する非民主的な団体によって、みずからの運命が左右されることを容認したのか。なぜかれらは、みずからと企業家とのあいだの社会的格差に対し、抗議の声をあげなかったのか。真相は、企業家が、民衆の最低限の生活を保障するために、ときおり市場原理に反した行動をとることによって、ある種の「痛み分け」というか、均衡の維持につとめていた点にある。具体的には、かれらは物価・賃金を一定にたもつ必要に迫られていた。つまり、何らかの凶事によって食糧の価格が高騰したさいには、かれらはそれを購入したうえで、あらためて民衆に平時の価格で販売することを期待されたのである。これは、企業家が故意に損失をかぶるという、市場経済にはみられない奇妙な行動であるが、これこそ、18 世紀リヴァプールの社会的・政治的均衡を維持するための装置にほかならない。このことは、企業家・民衆のあいだで共通了解となっていた²⁷。

事例をいくつか紹介しておきたい。1756 年 12 月、七年戦争の影響で、市内の小麦価格が半年で約 3 割という異常な上昇をみせたさい、市当局は、10,000 ブッシェル (約 4.5 トン) の小麦を購入して、住民たちに低価格で販売したのみならず、買占め・売り惜しみ防止の徹底につとめた。食糧の投機取引は、リヴァプールが誇りとするはずの、企業家精神の発露として称賛されるどころか、逆に共同体の秩序を乱す行為として、きびしい非難の対象となった。不運にもそうした状況におちいったペンケス (Penketh) なる穀物商は、地元紙『ウィリアムソンズ』上で、自分は確かに 26,000 ブッシェル (約 11.7 トン) の小麦を販売したが、そのさいには「公平な」利潤しか得ておらず、むしろそのことが、住民たちを餓死から救ったのだ、とあえて弁明しなければならなかった²⁸。27 年後、アメリカ独立戦争の影響で、同様の事態が起こったさいにも、市当局は、小麦・カラス麦・えんどう豆・ジャガイモなどを、非常な低価格で販売した。このとき恩

恵に与ったのは、10,000 人以上にもものぼったという²⁹。

(4) 都市統治の危機と変容—1775 年暴動

続いて紹介する事例には、18 世紀リヴァプールの都市統治のあり方、およびそれによって形成された政治文化の特質が、集約的に示されている。それは、統治の深刻な危機、およびその後の秩序回復にかんするものである。これは逆説的に、都市の社会的・政治的均衡のあり方を、あますことなくわれわれに伝えているのである。以下にその顛末をしるす³⁰。

1775 年 8 月末、リヴァプール港には、艀装を整えたにもかかわらず、いつこうに出帆しない 1 隻の船舶があった。名はダービー (Derby) 号。大西洋「三角」貿易のために建造されたものであり、これが 2 度目の航海であった。しかし、T・イエイツ (Thomas Yates) ら船主たちが、適正とされる賃金の 3 分の 2 しか支給しないことを通告したため、乗務員がストにうったえたのである。船主が強気の姿勢をくずさないのは、このとき市内には 3,000 人の失業船員がいて、労働力の供給過剰が生じていたためである。その原因は、第 1 にアメリカ独立戦争による大西洋の交通量の激減、第 2 には北極海からの遠洋漁業船の一斉帰港であった。だが、いかなる事情があろうとも、「適正賃金」の無断改定など、船員にはとうてい承服できなかった³¹。

かれらはやがて船舶の索具を切断して、船主を威嚇しはじめた。これには、港内のほかの船舶の乗務員も同調するかまえをみせた。この行為は他者の私有財産の損壊であり、ゆえに重罪である。しかも、出帆がさらに延期となれば、巨額の損失が発生するおそれもあった。そのことを危惧した企業家たちは、保安官に要請して、実行者 9 名を確保し、リヴァプール塔 (Liverpool Tower) の石牢に叩きこんだ³²。

夕刻、2,000 人あまりの群衆が、リヴァプール塔をとりかこんだ。みな手に棍棒をもっている。治安判事が現場に急行し、騒擾法 (Riot Act) を読みあげた。こうなると、群衆はただちに解散せねばならない決まりであった。さもなければ絞首刑である。だが、かれらはその場にとどまり、先に逮捕された船員 9 名の釈放を要求した。治安判事は、かれらを制圧しうるだけの武力を有していないので、やむなくこれに応じた。狂喜した群衆は深夜まで痛飲し、大挙して市内を行進した。そして各戸をまわり、スト勝利のための義捐金を要求しはじめた³³。

だが、翌日に市庁舎で行われた交渉は決裂し、船員の要求はすべて却下された。憤怒したかれらは、市庁舎の破壊を予告する。これを受けた市当局は、300 名ほどの警備員を臨時で雇用し、各所に配置した。夕刻、怒れる群衆が市庁舎の前に集結し、治安判事はふたたび騒擾法を読みあげた。だが群衆は解散しない。ついに警備隊が発砲し、銃撃戦が開始された。このとき、酒に酔っていて統率のとれていない群衆の側にのみ、2~3 名の死者がでた³⁴。

あくる日、群衆は港内の船舶から 2~3 基の重火器を強奪し、これらを引きずりながら、市庁舎へと続く坂道をのぼっていた。また別動隊が市内の銃器店に押し入り、作業場・倉庫などから大量の商品を強奪した。そのあとかれらは、とくに評判の悪い企業家 4 名の私邸を焼き討ちにしてまわった。ダービー号の船主であるイエイツの屋敷も、むろんこの被害にあった。群衆はかれらの家具や調度品を街路に引き出し、かれらの酒を飲みつくした。ただし、これら一連の暴力

行為においては、企業家の側に死傷者はでなかった³⁵。

市当局は、自力での事態の收拾を断念し、やむなく正規軍の出動を要請した。翌日の午後、マンチェスタから王立騎兵隊が到着したが、これをみた群衆は、クモの子を散らすように逃げていった。結局、40～50 名が逮捕され、ランカシアの州都ランカスタ (Lancaster) に連行されたが、大半がすぐに釈放された。翌年 4 月に起訴されたのは 14 名であったが、かれらはみな刑罰を免除され、王立海軍への入隊が認められた。ランカスタの住民たちは、かれらのために見舞金を贈呈している³⁶。なお渦中のダービー号であるが、これはあらためて艤装を整え、事件の約 1 ヶ月後に出帆した。同船は西アフリカで 359 人の奴隷を購入し、うち生存者 328 人をジャマイカで売却したのち、1777 年 2 月に帰港した³⁷。

この事例から分かることは何か。それは、家父長主義と市場原理という、2 つの矛盾する理念のあいだでの相克である。船員たちは、船体の一部を破壊し、また重火器をも使用することで、企業家を威圧した。そのことを通じてかれらは、「適正賃金」なるものを死守しようとしたのである。じつのところ、かような暴力行為は、企業家主導の都市統治に、致命的打撃を与えようとするものではなかった。ましてそれは、酒におぼれた零落者による、自暴自棄的な破壊活動でもない。むしろそれは、企業家に対し、先述の「痛み分け」を強要するという目的のためになされたものであった。それゆえにこそ、企業家は、正規軍の到着前には劣勢であったにもかかわらず、死傷者の 1 人もださずにすんだのである。要するに群衆は、アメリカ独立戦争に由来する港湾経済の不況という異常事態のなかで、企業家に対し、家父長主義的な救済措置を期待したのである。それはすなわち、労働市場での需給関係にもとづいて決定された賃金よりもときに高額な、「適正賃金」の遵守であった。

対照的に、企業家のほうは煮え切らなかった。先述のとおり、かれらはもともと経営能力が高く、海外貿易を通じて利益をあげようとするときには、誰よりも市場経済に適応していた。ところがかれらは、都市統治のさいには、物価・賃金の安定を義務づけられており、この目的のためには、ときおり市場原理に反する行動をとる必要に迫られていた。つまり、みずから損失をかぶることで、民衆に資源を優先的に配分しなければならないのである。かれらのこの行動原理は、じつのところ、農村共同体を統治する地主貴族のそれと、大差ないであろう。だが今回の事件では、かれらは「適正賃金」の経済非合理的な性格をきらって、その支給を拒否してゆずらなかった。他方でかれらは、暴動の首謀者を公開処刑したり、またそのことを通じて、みずから信奉する市場原理の神聖性を誇示したりすることもなかった。じじつ、逮捕者の大半は裁判なしで釈放され、起訴された 14 名も、結局は刑罰を科されなかった。しかも後者は、ランカスタ住民から見舞金まで受け取っている。要するに企業家は、家父長主義と市場原理のあいだで動揺していた。かれらは、長期的には前者から後者へとひっぱられていったとはいえ、この局面では、中途半端な対応に終始してしまったと結論できよう³⁸。

小括

18 世紀リヴァプールでは、持続する経済成長を背景に、企業家精神を誇りとするような風土

が生まれていた。このことはとくに、人造港・運河の掘削という、きわめてハイリスクな投資を敢行し、みごとハイリターンを獲得したという物語のうちに、もっとも明瞭にあらわれている。だがそのみならず、大西洋「三角」貿易をはじめ、さまざまな事業での成功を1つずつ重ねることによって、河畔の小集落を、王国第2の港湾都市へと成長させたという物語も、そうした風土の構成要素となっていたのである。

だが、これらの事業は、国家の援助なくしては実現しえなかった。この点で企業家たちは、ウィリアム3世に強い恩義を感じていたのである。ウィリアムおよびかれの後継王たちは、モリニュラトリーから全権を剥奪し、それをあらためて企業家たちに付与した。またかれらは、人造港・運河の建設を支援したのみならず、王立アフリカ会社（RAC）の特権を剥奪するなどして、企業家たちの野心・努力をめいっぱい刺激した。リヴァプールの企業家たちは、王たちのかかる「慈愛」に対し、きわめて好戦的な愛国主義をもってむくいた。これは、1715年・45年における、2度のジェイムズ派（Jacobites）による反乱のときに、もっとも顕著にあらわれている。それだけではない。この愛国主義の存在ゆえに、市当局は、きわだって非民主的な内部構造を温存することができた。じじつ18世紀を通じて、リヴァプールでは住民たちによる市政の民主化運動が散発的にみられた。しかし市当局は、これらすべてに「トーリの陰謀」のレッテルを貼ることとで、最後には必ず勝利したのである。

さらに、企業家はじめ都市エリートは、家父長主義的にふるまうことによって、被支配者たる民衆とのあいだに、わりあい安定的な関係をきり結ぶことができた。具体的には、かれらは物価・賃金を一定に保つために、みずから損失をかぶることをいとわなかった。このおかげで民衆は、あるていどまでは、飢えや寒さをしのぐことができたのである。かかる行動原理は、最先端のグローバル事業にたずさわる経営者のそれとしては、やや意外に感じられるかもしれない。なるほどかれらは、北米カリブ・西アフリカの消費者をターゲットにする場合には、市場原理にしたがって、最大限の利益を生み出すやり方に精通していた。ところがこの同じ人々が、ローカルな共同体に対しては、主として農村の支配者である地主貴族と、大差のない行動をとっていたのである。だがこうした状況も、時代が下るにつれて、じょじょに変化していった。エリートと民衆とのあいだの心情的な紐帯は弛緩し、かわりに前者が、後者を資本主義的に規律化しようとする場面もみられるようになった。1775年暴動など、それがトラブルに発展したさいたる例であろう。それでは、なぜ、どのようにして、そのような変化が進展したのであろうか。これこそ、本章の最後の課題である。

第3節 リヴァプールの政治文化②—アソシエーションの衝撃

本節では、1750年前後に出現した、都市の新しい文化について説明する。これは、当初こそ、さして大きな政治的インパクトをもつものではなかった。だがそれは、おおむねアメリカ独立戦争の前後あたりから、少しずつではあるが、前節で概説したような、既存の社会的・政治的均衡

を、攪乱するほどの力をもつようになった。そしてこのことが、リヴァプールで奴隷貿易廃止運動を発生させる、もっとも有力な原因の1つとなったのである。

(1) アソシエーションの叢生

新たな文化は、アソシエーションの流行とともにやってきた。アソシエーションとは、自発的な団体・結社のことである。それは、会員と非会員とを厳密に区別し、前者には特典を享受させるかわりに、会費の負担義務を課した。結成の目的は、会員のあいだでの相互交流にかぎる場合と、それに加えて、教育・医療・福祉といった社会貢献が含まれる場合があった³⁹。アソシエーションは、1750年以前にはあまりみられなかったが、それ以降になると、異様ともいえるほどの繁栄をみせることとなった⁴⁰。背景として考えられるのは、大西洋「三角」貿易を基軸とする商工業の発展、およびそれによって励起された、都市人口の急増である。また、名誉革命および2度の反乱を経て、トーリ・高教会派が壊滅状態におちいったため、住民のあいだでの宗派・党派対立が解消されていったことも見逃せないであろう。いずれにせよ、1世紀前までは過疎ゆえに人的ネットワークが脆弱であった空間に、いまや数万人の移住者が群生していたのである。かかる状況において、無秩序・混沌をふせぐためには、ぜひともそのようなネットワークが急造されねばならない、という切迫性が根底にあったことはたしかであろう。

具体例を紹介したい。まず、社交に特化したものとしては、「ユナニマス・クラブ」(Unanimous Club)、「アグリ・フェイス・クラブ」(Ugly Face Club)、「セフトン模擬市当局」(Mock Corporation of Sefton)があった。前1者は、冬季(9月～4月)の毎週末に会食を楽しむクラブであり、後2者は、みにくい顔を競ったり、架空の「セフトン市」の統治を行ったりなど、冗談半分の活動目的を掲げていた。社会貢献をはかるものとしては、総合病院・診療所・学校・図書館などがあり、いずれも、会員の寄付金によってまかなわれていた。これらの会員のほとんどは企業家・専門職であったが、なかには市当局幹部も含まれていた。とくに高額の寄付者としては、ギルダート(Gildart)、カンリフ(Cunliffe)、ブランデル(Blundel)、タールトン(Tarleton)、ヘイウッド(Heywood)などの一家があげられる。かれらは例外なく、大西洋「三角」貿易に投資して巨富をたくわえた企業家であったが、その社会的出自には非常な多様性があった。すなわち、ギルダートとカンリフは小ジョンソンの後継者、ブランデルは船員、タールトンは古くからの住民、ヘイウッドはアイルランドからの移住者であった⁴¹。

(2) アソシエーション文化と階級形成

アソシエーションの繁栄によって、都市には新たな文化が根づくことになった。それは、会員のあいだでの民主的・平等主義的な志向、およびそのことを前提とする、人間関係の新たなルールの浸透、というかたちで発現した。つまり、アソシエーションの会費を納入したものは、その法的身分・社会的出自にかかわらず平等に扱われるべきであり、したがって、その運営に主体的に参加する権利をもつ、という理念が享有されるにいたったのである。とはいえ、みなが平等であるからといって、参加者がめいめい勝手な行動をとるようでは、秩序の維持が困難となる。そ

ここで、みなが平等であることを前提とした新たなルール、具体的には、時間厳守、および泥酔・暴言の禁止が徹底されることとなった。これらは、市場の膨張に刺激されるかたちで、商工業が急速に発達しつつある社会では、洋の東西を問わずみられる原則であろう。なぜなら、身分的・宗派的な差異にもとづいて経済活動に制限が加えられている場合、また商品の納入や債務の返済のさいに期限が厳守されない場合、あるいは飲酒や暴言が原因となって個人間トラブルが絶えない場合、ただちに事業の効率の低下が生じるからである。ゆえに 18 世紀リヴァプールのアソシエーションの会則において、これらのことが規定されていたことは、何ら不思議ではない。さらには、これらのことがあえて明記されたという事実から、当時のリヴァプール住民が、いまだそうした資質を身につけていなかったことも、また明らかである。

1753 年設立の「ユナニマス・クラブ」の会則をみてみよう。それによると、例会の集合時刻は午後 7 時であり、1 分でも遅刻すると 1 ペニーの罰金が科せられた。1 時間以上の遅刻には 2 ペンス、正当な理由なき欠席には 3 ペンスの罰金が科せられた。会食のさい、ほかの会員を侮辱したものは、1 ペンスの罰金が科せられた。酒気を帯びて会場にやってきたものや、猥談・春歌のたぐいにふけるものには、6 ペンスの罰金が科せられた。ある行為がそれらに該当するか否かについては、会員のあいだでの無記名投票によって判定された。罰金の納入をこばむものは、ただちに退会処分となった。会食がはじまると、飲酒が許可されるが、強要はされない決まりであった。むろん会食中でも、泥酔したと認定されれば 1 ペンスの罰金となった。会員の個人情報を流出させたものには、2 シリングの罰金が科せられた。また、会員が結婚した場合には、めいめい 10 シリングと 6 ペンスの祝儀を包むことが定められていた⁴²。

アソシエーションの参加者は、会費の納入とともに、かかるルールの遵守を義務づけられた。これらルールが、アソシエーションの繁栄とともに、都市生活のあらゆる場面において、少なからぬインパクトをもつにいたったのは、想像にかたくない。もはや、過度の飲酒を好むもの、言葉づかいが乱暴なもの、時間を守らないものは、公共空間からの退場を迫られることになった⁴³。逆に、これらを遵守したうえで、みずからをやしなうのに十分な資産をもつものならすべて、自由で独立した主体として尊重されることになった。そうした人は、他者と平等な処遇を受ける権利を有すのみならず、公のものごとに関与する資質ありともみなされるにいたったのである。だがこのことは、都市社会において、2 つの重大な変化をもたらした。すなわち、第 1 にエリートの凝集化、第 2 にかれらと民衆とのあいだの紐帯の弛緩である。第 1 の点にかんしては、ミドルクラスの形成ともいいかえられる。直接的なトラブルの原因となったのは、第 2 の点であった。つまり民衆は、アソシエーションの会費の支払い能力をもたず、また飲酒やけんかを好む性向をもっていたため、ミドルクラスから距離を置かれる存在となったのである。またこのことが原因でミドルクラスは、これまでどおり家父長主義的にふるまうことで、民衆の期待に応えようとするのは、まちがっていると考えようになった。

(3) アソシエーション文化とユニテリアン

アソシエーションの流行は、当初こそ政治性を帯びたものではなかったが、次第にそうなって

いった。というのも、ある特定の宗派・党派が、アソシエーションの運営にさいしての主導権を握ることで、それらを、市政の民主化運動の制度的基盤として利用しようとしたからである。それは、18世紀前半に、「右」からそうした運動を担った、トーリ・高教会派ではもはやなく、むしろ、「左」から実行された。むしろこれは、カトリックを「右」、カルヴァン主義を「左」と表現した場合である。要するにそうした運動は、カルヴァン派の流れを汲む、ユニテリアンなる宗派によって主導されたのである。しかしながら、少々まぎらわしいが、ユニテリアンは、組織こそカルヴァン派の1つである、イングリッシュ・プレズビテリアンのそれを継承していたが、教義にかんしていえば、1世紀のうちに、それとはまったく異質のものを採用するようになっていた。すなわち、ユニテリアンは啓蒙主義、いいかえれば世俗・合理主義を受容していたのである。そのことを端的にあらわすのは、かれらが三位一体論を否定する、いわゆるアリウス主義こそ正統な教えであるとの立場をとっていた事実である⁴⁴。

このようにユニテリアンは、教義・組織ともに、国教会のそれらとは非常にかけはなれていた。このことが原因でかれらは、名誉革命後の体制において、主体的に政治活動を行うことができなかったのである。具体的にいえば、審査法・地方自治体法によって、かれらの参政権が否定されていた。これら2法は、国教会に宣誓しない人物が公職につくことを禁ずるものであり、もともとは、カトリックの排除のために制定されたものである⁴⁵。だがユニテリアンは、「逆賊」とされたカトリックではないし、また、納税を行うことで国家にも貢献していたため、参政権を否定されるのは、不公平であると考えていた⁴⁶。そこでかれらは、住民のあいだで古くから共有されていた、市政の民主化志向を利用することによって、みずからの目的を追求することにした。そしてゆくゆくは、国政において変化の風を巻き起こそうと考えていたのである⁴⁷。この戦略は、実質的には、18世紀初頭におけるトーリ・高教会派のそれと変わるところがない。いずれにせよ、市当局は、ようやく「右」の敵を根絶したと思いきや、今度は「左」からの攻撃にさらされたのである。いまや同局は、明示的な転向を行っていないにもかかわらず、「右傾化」・「トーリ化」したかのように語られることとなった⁴⁸。かわってユニテリアンおよびかれらに同調するものたちが、「ホイッグ」とよばれるようになったのである。

ユニテリアンは、アソシエーションを利用することで、「ホイッグ」の組織固めをねらった。その中心にいたのが、ヘイウッド一族である。かれらはいったい、どこの何ものであったのか。来歴を示そう。ときはさかのぼり1662年、ランカシアのオームスカーク（Ormskirk）なる小都市において、ナザニエル・ヘイウッドなる人物が、カルヴァン主義に固執し、国教会への宣誓を拒否したかどで、聖職者をやめさせられた。かれこそ、ヘイウッド家の祖先である。その子リチャードは、アイルランドのドロヘダ（Drogheda）に移住した。そこはかつて海上交通の要所として栄えたが、オリヴァ・クロムウェルによって征服され、灰燼に帰していた。このときカトリックの先住民が虐殺され、かれらの土地は、ブリテン島から移住してきたカルヴァン派信徒らに分配された。したがってドロヘダは、リチャード・ヘイウッドにとって、母国政府からの宗派的迫害を逃れられるうえに、商機の遍在する理想的な新天地であった。こうしてかれは、王政復古によって肩身の狭くなった母国を脱出し、アイルランドという実質的な「植民地」において、

巨富をたくわえたのである⁴⁹。

リチャードの孫アーサーは、1731 年、父祖の地イングランドに帰還した。ただし行き先はもはや小都市オームスカークではなく、巨大都市リヴァプールであった。そこでかれは、裕福な商人のもとで修行を積んだあとで、のちに合流した弟のベンジャミンとともに起業した。かれら兄弟は、海外貿易において比類なき成功を収めたが、そのもっとも得意とした部門は、ほかならぬ奴隷貿易であった。かれらは 1745～80 年に 100 回以上の航海に投資し、20,000 人以上の不運なアフリカ人を、北米カリブ植民地に移送した。1760 年、かれらはマージー川をのぞむハノーヴァ通りで大邸宅をかまえ、1774 年には、海外貿易で蓄積した利潤をもとに、銀行の経営をはじめた。ヘイウッド兄弟のかかる物語は、18 世紀イギリスの企業家の、典型的な成功パターンをなぞるものであったといえよう⁵⁰。

ヘイウッド兄弟は、イングリッシュ・プレズビテリアンのベンズ・ガーデン (Benn's Garden) 礼拝堂の信徒であったが、やがて組織ともども、ユニテリアニズムに帰依するようになった⁵¹。かれらは、事業に成功してからは、その豊富な資金力を活かして数々のアソシエーションを主宰し、それらを通じて、ユニテリアニズムや啓蒙主義の普及に尽力するようになった。1753 年、かれらは近隣の小都市ウォリントン (Warrington) において、本格的な研究・教育機関を創設した。これは、アソシエーションの形態をとって運営されたが、その売りは、正規の大学から排除されていた、非国教徒の子どもがハイレベルな教育を受けられることであった⁵²。5 年後、かれらは、リヴァプールで最初の図書館を設立した。これもアソシエーションであり、たがいに平等な会員の寄付金によって運営されていた。それはまた、公益の増進とともに宗派的な寛容をも追求するという姿勢をとっており、この方針にもとづいて、さまざまな分野・立場の書籍が収蔵された⁵³。1774 年、かれらはリヴァプール商業会議所 (Chamber of Commerce) を結成した。これは、ユニテリアンを中核としながらも、市当局に反対する国教徒の企業家たちをも広く糾合したものであった。その活動目的は多岐にわたったが、根底にあった理念は、もっとも多く税負担を行ったものが、もっとも主体的に政治に参加する権利をもつべきだ、というものであった。ここまでくると、それはもはや、単なる社交ないし社会貢献を推進する組織ではなく、むしろ隠れた「ホイッグ」の政治団体であった⁵⁴。

小括

アソシエーションの普及とともに、新たな文化が生まれ、既存の政治的均衡がやぶられた。つまるところアソシエーションとは、新たな経済的・社会的条件に適合した、新たな人的結合の形態であった。その条件とは、海外市場の膨張に刺激された、商工業の急速な発達、さらにはそのことによって励起されたところの、都市人口の急増である。これらのことは究極には、ブリテン大西洋世界の成熟に由来するものである。もう少し具体的にいえば、アソシエーションの隆盛の背後には、北米カリブにおける奴隷制農園の発展、およびそれと密接に連動する、西アフリカ諸国による奴隷供給・製品需要の拡大があったと結論できよう。

アソシエーションが生み出した文化はそれゆえに、市場原理に適合的なものであった。それと

はつまり、安全・確実に取引を遂行する能力を有するものは、その法的身分にかかわらず、平等な処遇を受ける権利が保障され、かつ、公のことがらにかんする決定権をも付与される、という理念である。安全・確実な取引を遂行しうるか否かは、その人の財産の多寡のみならず、時間を厳守し、大酒を飲まず、乱暴な言葉づかいを避けるといった、個人的資質によっても判断された。だがこのことゆえに、アソシエーションは、ミドルクラス同士を結びつけ、同時にかれらを民衆から遠ざける効果をもったのである。

アソシエーションを生み出した文化は、まさにそのアソシエーションを制度的基盤としつつ、いわゆる大文字の政治の変革運動を推進する力をもつにいたった。この運動を担ったのが、ユニテリアンおよび、かれらを中心に組織された、「ホイッグ」である。かれらの主張はこうであった。アソシエーションは、会費を納め、ルールに従うものなら、だれでもその運営に参加できる。世の中もかくあるべきだ、と。しかるに現状は、いかに高額な納税を行おうと、身分・宗派によって参政権が制限されていた。しかも、税をほとんど納めず、時間にルーズで、大酒を飲み、粗野な言葉をはく民衆のなかには、少なからぬ正式市民がいたのである。

おわりに

モリニュー、ジョンソン、ヘイウッド。王政復古（1660年）から、アメリカ独立戦争（1775～83年）にいたる、100年あまりのリヴァプールの政治文化を、あえて3人に代表させると、このようになる。かれらはみな、持続する経済成長を背景に、さまざまな社会的条件の変化に適応しながら、政治的ヘゲモニーをめぐる抗争に明け暮れた。

カ rilル・モリニューは、ジェイムズ2世および、フランスの描く理想を追いかけた。かれは王の専制を熱烈に支持し、海外貿易という果実を、少数者の手に独占させようとした。むろんこの戦略は、いついかなるときでも非合理的であるとは断定できない。遠隔地交易が不活発で、それゆえに技術革新が未進展である場所においては、そうしたやり方のほうが、有限の資源が節約されるというメリットを活かした。これが奏功すれば、統治は安定するであろう。ところが、1670年代のリヴァプールの環境ではなかった。それゆえにかれは、十分な支持者を集めることができず、ついには打倒されたのである⁵⁵。

トマス・ジョンソン父子は、ウィリアム3世および、オランダの描く理想を追いかけた。かれらは議会の自由を支持し、海外貿易という果実を、最大多数の企業家に向けて開放した。当時のリヴァプールの置かれた状況を考慮すれば、この戦略こそ正解であった。このとき、北アメリカ・西アフリカ市場の膨張に連動して、イングランド北部の製造業が活性化し、そのことが、初期的な技術革新の契機となっていた。この場合、統治者としては、企業家の自由を最大限に認めたほうが、ますます多くの資源が開発されるというメリットを活かした。その見返りとして、かれは企業家から、高額な租税を徴収すればよい。そうすれば、統治は安定するであろう⁵⁶。

ジョンソン父子および後継者たちの体制のもとで、リヴァプールでは企業家精神が開花し、古

来まれなる経済成長が起こった。このことに恩義を感じた企業家たちは、好戦的な愛国主義を発揮して、この体制を、トーリ・高教会派の執拗な攻撃から守りぬいた。かれらはまた、外部の共同体との取引のさいには、だれよりも市場原理に適応して巨利をあげたが、他方で自己の共同体の構成員に対しては、それとは根本的に矛盾する、家父長主義的な姿勢をもつてのぞんだ。これらのことは、1680～1750年ごろのリヴァプールにおいて、経済成長と政治的安定とを両立させるための手段にほかならず、またそのことは、あるていど機能していたといえよう。

しかしながら、トーリ・高教会派が根絶された1750年ごろになると、状況は少しずつ変わっていった。もともとはトーリの復権を阻止するために導入された、身分・宗派にもとづいて参政権を制限するという規定が、いまや、新興の企業家を市政から排除するようなはたらきをしてしまい、疑問視されはじめた。また、おりしもこのとき、持続的な経済成長・人口増加にともなうて、まったく新しい人的結合の形態、すなわちアソシエーションが叢生していた。このアソシエーションは、身分・宗派ではなく、財産および社交能力をもって、公のものごとに関与する能力の基準とすべきだ、との理念を普及した。じつにこの新たな文化は、エリートに家父長主義的な振る舞いを続けることを断念させ、またそれゆえに、民衆とかれらとのあいだに溝をつくる役割をも果たしたのである。

ヘイウッド兄弟が台頭したのは、この局面であった。アーサーとベンジャミンは成功した企業家であったが、ユニテリアンであったがゆえに、政治的ヘゲモニーを獲得することは望めなかった。そこでかれらは、アソシエーションを制度的基盤としつつ、反体制派、すなわち「ホイッグ」の組織固めをはかることにした。そうしたやり方でかれらは、ジョンソン父子の後継者たちによって運営されていた、市当局をじりじりと追い詰めていったのである。

ヘイウッドの薫陶を受けたのが、次章で検討するウィリアム・ロスコーである。かれは物心のつく前から、ベンズ・ガーデン礼拝堂でヘイウッド家の人々の背中をみて育った。それゆえにかれは、すぐに啓蒙主義者としてのアイデンティティを獲得し、また「ホイッグ」の一員としての政治活動にのめりこんだ。だが、この両者のあいだには、根本的なところで意見の相違があった。それは、ヘイウッドが奴隷貿易商であったのに対し、ロスコーは奴隷貿易廃止論者であった点である。そこにはいったい、いかなる葛藤があったのであろうか。

¹ Jenny Kermode, et al., 'Small Beginnings: Liverpool 1207-1680', in John Belchem, (ed.), *Liverpool 800: Culture, Character and History*, (Liverpool, 2006), p. 105; Francis E. Hyde, *Liverpool and the Mersey: an Economic History of a Port 1700-1970*, (Newton Abbot, 1971), pp. 8-9.

² Kermode, et al., 'Small Beginnings', p. 105; Hyde, *Liverpool and the Mersey*, pp. 8-9.

³ Kermode, et al., 'Small Beginnings', p. 105; Hyde, *Liverpool and the Mersey*, pp. 8-9.

⁴ Hyde, *Liverpool and the Mersey*, pp. 1-42; David J. Pope, 'Shipping and Trade in the Port of Liverpool 1783-1793', (Unpublished PhD Thesis, Liverpool University, 1970), II, pp. 1-36; Paul G. E. Clemens, 'The Rise of Liverpool, 1665-1750', *EcHR*, 29(3), (1976), pp. 211-25.

⁵ Kermode, et al., 'Small Beginnings', p. 108; Jane Longmore, 'Civic Liverpool: 1680-1800', in Belchem, (ed.), *Liverpool 800*, p. 126-9; Hyde, *Liverpool and the Mersey*, pp. 10-42;

Clemens, 'Rise of Liverpool', p. 217; Pope, 'Shipping and Trade', II, pp. 17-26; Thomas Baines, *History of the Commerce and Town of Liverpool, and of the Rise of Manufacturing Industry in the Adjoining Counties*, (London, 1852), pp. 708-9.

⁶ Baines, *History*, pp. 708-13.

⁷ Pope, 'Shipping and Trade', II, p. 1. リヴァプールの大きな商家の多数は、17世紀末～18世紀初頭に移住してきたものたちの流れを汲む。

⁸ Kermode, et al., 'Small Beginnings', pp. 107-11; C. N. Parkinson, *The Rise of the Port of Liverpool*, (Liverpool, 1952), pp. 52-67.

⁹ Kenneth Morgan, 'Introduction', in Morgan, (ed.), *The Royal African Company*, (London, 2003), pp. 9-31; 'The Trans-Atlantic Slave Trade Database', on *Voyages*, (www.slavevoyages.org). ブリistolと奴隷貿易については、Madge Dresser, *Slavery Obscured: the Social History of Slave Trade in an English Provincial Port*, (London, 2001); Kenneth Morgan, *Bristol and the Atlantic Trade in the Eighteenth Century*, (Cambridge, 1993).

¹⁰ Jane Longmore, 'Cemented by the Blood of a Negro'? the Impact of the Slave Trade on Eighteenth-Century Liverpool', in David Richardson, et al., (eds.), *Liverpool and Transatlantic Slavery*, (Liverpool, 2007), pp. 227-51; ead., 'Civic Liverpool', p. 169; Baines, *History*, pp. 691-741.

¹¹ Longmore, 'Civic Liverpool', pp. 118-9; Diana E. Ascott, et al., *Liverpool 1660-1750: People, Prosperity and Power*, (Liverpool, 2006), pp. 8-31; Kenneth Morgan, 'Liverpool's Dominance in the British Slave Trade, 1740-1807', in David Richardson, et al., (eds.), *Liverpool and Transatlantic Slavery*, pp. 14-42.

¹² Hyde, *Liverpool and the Mersey*, pp. 11-2; François Vigier, *Change and Apathy: Liverpool and Manchester during the Industrial Revolution*, (Cambridge, 1970), p. 36; Ramsay Muir, *A History of Liverpool*, (London, 1907), pp. 2-3.

¹³ Michael J. Power, 'Politics and Progress in Liverpool, 1660-1740', *Northern History*, 35, (2000), pp. 119-38; Ascott, et al., *Liverpool 1660-1750*, pp. 24-5.

¹⁴ Longmore, 'Civic Liverpool', pp. 121-3; Ascott, et al., *Liverpool 1660-1750*, pp. 24-5; Hyde, *Liverpool and the Mersey*, pp. 13-5; Pope, 'Shipping and Trade', II, pp. 30-6; Muir, *History*, pp. 176-7.

¹⁵ Kermode, et al., 'Small Beginnings', pp. 87, 116; Ascott, et al., *Liverpool 1660-1750*, p. 8.

¹⁶ A. F. Williams, 'Bristol Port Plans and Improvement Schemes', *Transactions of the Bristol and Gloucestershire Archaeological Society*, 81, (1962), pp. 138-88.

¹⁷ William Vaughan, *On Wet Docks, Quays, and Warehouses, for the Port of London: with Hints Respecting Trade*, (London, 1793), p. 2. ロンドンの人造港の建設については、川分圭子「ロンドン港の変貌と商人たち—二つのドック建設計画をめぐって」歴史学研究会編、深沢克己責任編集『シリーズ港町の世界史 2—港町のトポグラフィ』青木書店、2006年。

¹⁸ Muir, *History*, p. 3; Hyde, *Liverpool and the Mersey*, pp. 11-2.

¹⁹ Thomas Heywood, *The Norris Papers*, (Manchester, 1846), pp. 37-9.

²⁰ Longmore, 'Civic Liverpool', pp. 127-9; Ascott, et al., *Liverpool, 1660-1750*, pp. 22-3; Hyde, *Liverpool and the Mersey*, p. 13; Pope, 'Shipping and Trade', II, pp. 26-31; Muir, *History*, pp. 178-9; Baines, *History*, pp. 401-4, 436-40, 451-3.

²¹ Kermode, et al., 'Small Beginnings', pp. 105-7; Longmore, 'Civic Liverpool', pp. 119-21; Ascott, et al., *Liverpool 1660-1750*, pp. 165-70; J. A. Picton, *Memorials of Liverpool Historical and Topographical, Including a History of the Dock Estate*, (Liverpool, 1875), I, pp. 114-7, 136, 144-5.

²² Kermode, et al., 'Small Beginnings', pp. 109-11; Longmore, 'Civic Liverpool', pp. 119-23; Ascott, et al., *Liverpool 1660-1750*, pp. 138-89; Picton, *Memorials*, pp. 138-68; Parkinson, *The Rise of the Port*, pp. 68-85; Michael J. Power, 'Councillors and Commerce in Liverpool, 1650-1750', *Urban History*, 24, (1997), pp. 301-23; id., 'Politics and Progress in Liverpool, 1660-1740', *Northern History*, 35, (2000), pp. 119-38.

²³ Picton, *Memorials*, pp. 161-4, 176-80; Muir, *History*, pp. 163-6; Baines, *History*, pp. 398-400, 410-2.

- ²⁴ Longmore, 'Civic Liverpool', pp. 124-6, 139-40; Picton, *Memorials*, pp. 172-5; Muir, *History*, pp. 167-71; Ascott, et al., *Liverpool 1660-1750*, pp. 8-31, 138-89.
- ²⁵ Vigier, *Change and Apathy*, pp. 45-7; Muir, *History*, pp. 171-4; E. M. Menzies, 'The Freeman Voter in Liverpool, 1802-35', *THSLC*, 124, (1973), pp. 85-107; F. E. Sanderson, 'The Structure of Politics in Liverpool 1780-1807', *THSLC*, 127, (1978), pp. 65-91.
- ²⁶ Ascott, et al., *Liverpool 1660-1750*, pp. 8-31; 138-61; Power, 'Councillors and Commerce', pp. 301-23; Sanderson, 'Structure of Politics'; Longmore, 'Civic Liverpool'; ead., 'Cemented by the Blood of a Negro?'.
- ²⁷ Vigier, *Change and Apathy*, pp. 26-9. 18 世紀イングランドの農村ないし小都市でかかる慣習の存在したことは、わが歴史学界においても早くから知られていた。近藤和彦「産業革命前夜の民衆運動—マンチェスタ 1757～58 年」『社会運動史』2・4、1973・5 年；同「1756～7 年の食糧蜂起について」『思想』654～5、1978～9 年。森建資「イギリス産業革命期における農業労働力の存在形態」『土地制度史学』62、1974 年。しかしながら、巨大貿易港リヴァプールにおいてもそうであった。
- ²⁸ Baines, *History*, pp. 422-3.
- ²⁹ *Ibid.*, p. 467, 717.
- ³⁰ この暴動は、18 世紀後半のイギリスで発生したものとしては、もっとも大規模である。これに匹敵するのは、ゴードン暴動（1780 年）くらい。だが、あまり知られていない。次の論考は、それを取り扱ったもの。R. B. Rose, 'A Liverpool Sailors' Strike in the Eighteenth Century', *Transactions of the Lancashire and Cheshire Antiquarian Society*, 48, (1958), pp. 85-92. また、次の論考にも言及がある。Parkinson, *Rise of the Port*, pp. 24-9; E・P・トムスン（近藤和彦訳）「1790 年以前のイギリスにおける社会運動」『思想』633、1979 年。
- ³¹ Richard Brooke, *Liverpool as It Was 1775 to 1800*, (Liverpool, 1853), pp. 328-31.
- ³² *Ibid.*, pp. 331-2.
- ³³ *Ibid.*, pp. 332-8.
- ³⁴ *Ibid.*, pp. 339-40.
- ³⁵ *Ibid.*, pp. 340-2.
- ³⁶ *Ibid.*, pp. 342-7.
- ³⁷ 'The Trans-Atlantic Slave Trade Database', on *Voyages*, (www.slavevoyages.org).
- ³⁸ 18 世紀イギリスの暴動およびその背後にある民衆の行動原理については、E・P・トムスン（市橋秀夫ほか訳）『イングランド労働者階級の形成』青弓社、2003 年；ジョージ・リュージェ（古賀秀男ほか訳）『歴史における群衆』法律文化社、1982 年；近藤和彦『民のモラル—近世イギリスの文化と社会』山川出版社、1993 年。
- ³⁹ アソシエーションについては、長谷川貴彦『イギリス福祉国家の歴史的源流—近世・近代転換期の中間団体』東京大学出版会、2014 年、41～113 頁；岩間俊彦『イギリス・ミドルクラスの世界』ミネルヴァ書房、2008 年；Robert J. Morris, 'Voluntary Societies and British Urban Elites 1780-1850: an Analysis', *Historical Journal*, 26(1), (1983).
- ⁴⁰ リヴァプールにおけるアソシエーションについては、William Moss, *Georgian Liverpool: a Guide to the City in 1797*, (Lancaster, 2007). 本書は David Brazendale による詳細な解説付き。原書は 1797 年出版。Longmore, 'Civic Liverpool', pp. 140-66; Pope, 'Shipping and Trade', II, pp. 425-75; Baines, *History*, pp. 412-4; Brooke, *Liverpool*, pp. 231-322; Arline M. Wilson, 'The Cultural Identity of Liverpool, 1790-1850', *THSLC*, 147, (1998), pp. 55-80; Jon Stobart, 'Culture versus Commerce: Societies and Spaces for Elites in Eighteenth-Century Liverpool', *Journal of Historical Geography*, 28(4), (2002), pp. 471-85; M. K. Flavell, 'The Enlightened Reader and the New Industrial Towns: a Study of the Liverpool Library 1758-1790', *British Journal for Eighteenth-Century Studies*, 8, (1985), pp. 17-35.
- ⁴¹ 前註を参照。
- ⁴² Brooke, *Liverpool*, pp. 290-3, 514-7.
- ⁴³ たとえば、アーサー・ヘイウッドの経営する銀行では、酩酊の状態出勤した行員が厳しく叱責されている。この事実から、酒気を帯びつつ業務を行っても差し支えないという価値観と、その反対のものと衝突がみてとれる。対照的に現代日本では、後者の価値観が支配的で

あるため、「酩酊した行員」はふつういない。Martins Bank LTD., *Arthur Heywood, Sons and Company: 1773-1883*, (Liverpool, 1949), pp. 11-2.

⁴⁴ 小嶋潤『イギリス教会史』刀水書房、1988年、155～217頁。

⁴⁵ 同上。

⁴⁶ [S. Heywood], *The Right of Protestant Dissenters to a Compleat Toleration Assented: Containing an Historical Account of the Test Laws, and Shewing the Injustice, Inexpediency, and Folly of the Sacrament Test, as Imposed, with Respect to Protestant Dissenters: with an Answer to the Objection from the Act of Union with Scotland*, (London, 1789).

⁴⁷ たとえば、Picton, *Memorials*, pp. 232-4.

⁴⁸ Muir, *History*, pp. 215-7.

⁴⁹ John Hughs, *Liverpool Banks and Bankers 1760-1837: a History of the Circumstances Which Gave Rise to the Industry, and of the Men Who Founded and Developed It*, (Liverpool, 1906), pp. 91-2; Martins Bank LTD., *Arthur Heywood*, pp. 3-4; 'The Trans-Atlantic Slave Trade Database', on *Voyages*, (www.slavevoyages.org).

⁵⁰ Hughs, *Liverpool Banks*, pp. 91-106; Martins Bank LTD., *Arthur Heywood*, pp. 3-15.

⁵¹ George E. Evans, *A History of Renshaw Street Chapel and Its Institutions: with Some Account of the Former Chapels in Castle Hey and Benn's Garden*, (London, 1887), pp. 1-20; Anne Holt, *Walking Together: a Study in Liverpool Nonconformity 1688-1938*, (London, 1938), pp. 126-62.

⁵² 三時眞貴子『イギリス都市文化と教育—ウォリントン・アカデミーの教育社会史』昭和堂、2012年；H. A. Ormerod, 'Extracts from the Private Ledger of Arthur Heywood of Liverpool Merchant and Banker', *THSLC*, 103, (1952), pp. 103-11.

⁵³ Flavell, 'Enlightened Reader'.

⁵⁴ Robert Bennett, *The Voice of Liverpool Business: the First Chamber of Commerce and the Atlantic Economy, 1774-c. 1796*, (Liverpool, 2010).

⁵⁵ 環大西洋世界史の文脈のなかで、17世紀におけるトーリとホイッグの党派対立を再検討しようとするところみは、近年とくにさかんである。Cristopher Dudley, 'Party Politics, Political Economy, and Economic Development in Early Eighteenth-Century Britain', *EcHR*, 66(4), (2013), pp. 1084-1100; Steve Pincus, *1688: the First Modern Revolution*, (New Haven, CT, 2009); id., 'Rethinking Mercantilism: Political Economy, the British Empire, and the Atlantic World in the Seventeenth and Eighteenth Centuries', *WMQ*, 69(1), (2012), pp. 3-34; Carey and Finlay, (eds.), *The Empire of Credit*; Nuala Zahedieh, 'Regulation, Rent-seeking, and the Glorious Revolution in the English Atlantic Economy', *EcHR*, 63(4), (2010), pp. 865-90.

⁵⁶ 前註を参照。

第 3 章 リヴァプールにおける奴隷貿易廃止運動

はじめに

1787 年 9 月上旬のある日、1 人の若い国教会牧師がリヴァプールにやってきた。名はトマス・クラークソン (Thomas Clarkson)。同年 5 月にロンドンで結成された、「奴隷貿易廃止協会」(Society of Effecting the Abolition of the Slave Trade, SEAST) の幹部をつとめていた。かれおよびかれの支持者たちは、次年度のイギリス議会において、大西洋「三角」貿易の非人道性が問題視され、その廃止への具体的な道筋が立てられることを望んでいた。その手段としてかれは、地方の協力者・資金を集めようと、全国を行脚していたのである¹。

リヴァプールでクラークソンをむかえたのが、ウィリアム・ロスコーおよびかれの友人たちであった。かれらはみな、SEAST の趣旨に賛同した、奴隷貿易廃止論者であった。じつはこの数日前、ロスコーはロンドンにいた別の協会幹部から、私信を受け取っていた。いわく、クラークソンという男は、熱意と行動力においては卓越するが、少し無鉄砲なところがあるから気をつけてほしい、と²。それゆえに、おそらくロスコーは、このとき若いクラークソンに対し、言動や行動には注意するよう釘をさしたにちがいない。

だが、クラークソンはリヴァプールでトラブルを何度も起こした。かれは、インタビューにうじた奴隷貿易商および奴隷船長を面罵し、パブでは船員や労働者たちと口論を交わしてしまった。このためかれは、はじめ好意的であった企業家たちの怒りをかい、また群衆からは暴力をふるわれそうになった³。かれが数日後にリヴァプールを去ったあと、ロスコーの友人の 1 人は、下院議員のウィリアム・ウィルバフォース (William Wilberforce) に対し、次のごとき苦情を申し立てた。「某氏 (クラークソン) を非難するつもりは毛頭ない。かれのやろうとしていることは崇高であり、そのことについては議論の余地はない。だが事實は、(奴隷貿易廃止論者と奴隷貿易商の) 両陣営ともに、ぴりぴりと苛立っているということだ。このことはよく承知しておくべきではないか⁴」。

みられるとおり、SEAST 指導部と、リヴァプールの奴隷貿易廃止論者とのあいだには、明らかな温度差がみられた。だが、ともあれ、このとき両者は、歴史的な出会いを果たしたのである。そこで本章では、まず、この両者が台頭した経緯・背景をそれぞれ説明する (第 1・2 節)。より具体的にいえば、なぜ・いかにして、ロンドンとリヴァプールにおいて、奴隷貿易廃止論が力をもつにいたったのか、ということが考察の中心となる。そして次に、かような経緯・背景を念頭に置きつつ、リヴァプールのロスコーが構想した奴隷貿易廃止論を分析し、その特質を明らかにする (第 3・4 節)。最後に、それらを総合的に踏まえつつ、ロスコーにとっての奴隷貿易廃止運動の意味についての結論を述べる。

第 1 節 背景①—イギリス奴隷貿易廃止運動

本節では、イギリス奴隷貿易廃止運動の経緯を概観したあと、その発生・展開をうながした要因について説明する。

(1) 奴隷貿易廃止運動の前史—1787 年まで

大西洋「三角」貿易が、ブリテン大西洋世界の本質的な構成要素であったことは、先述のとおりである。だが他方で、この同じブリテン大西洋世界において、奴隷貿易に対する人道主義的な非難の声がつねに聞かれたことも、また事実であった⁵。それら散発的な「声」を、現実的な「運動」に変換した主体こそ、ほかならぬクエイカ（Quakers）、正式には「キリスト友会」（Society of Friends）と称する宗教団体であった。

クエイカとは、イングランド内乱（1641～9 年）のときに叢生したセクトの 1 つである。それは、決まった聖職者や儀式をもたず、また「人間の内なる神の光」を追求するとの教えをまもっている。本論との関係で重視すべきは、このクエイカが平和・平等をむねとし、それゆえに、奴隷制を拒絶したということである。だがかれらは、みずからの信徒たちが奴隷売買に関与することを禁止したにとどまり、逆にそうした信念を、教団外部に普及することについては自重した。なぜならクエイカは、イングランド国教会の教義に同調せず、またその組織にも合流しないということで、宗派的迫害を受ける立場にあったからである。つまりかれらにとって、公然たる政治的な言動および行動は、避けたほうが賢明であった⁶。

しかしながら、北アメリカのクエイカにかんしては、やや事情が異なった。なぜならイングランドを離れたかれらにとって、国教会の迫害は、さして恐ろしいものではなかったからである。また 1750 年代までに顕著となった高教会派の没落、さらには 1763 年のフランスとの戦争の終結をへて、宗派对立がじょじょに収束していくと、状況はさらに有利となった。そこで、フィラデルフィアのクエイカは、奴隷制の非人道性を指弾するのみならず、その廃絶に向けた具体的な行動をとるよう、信徒たちに呼びかけはじめた⁷。かれらの運動は、アメリカ独立戦争（1775～83 年）によって不運にも中断されるが、戦後すぐに復活した。1784 年には「ペンシルヴェニア奴隷解放協会」（Pennsylvania Abolition Society）が再結成され、翌年には「ニューヨーク奴隷解放協会」（New York Manumission Society）が設立された⁸。

かかる情報がアメリカから入ってくるにつれて、イギリスのクエイカの意識も変わった。たしかに年長の信徒たちは、往年の被害体験を忘れることができず、それゆえに、あらゆる政治活動に反対した。しかし若手の信徒たちは、北アメリカの仲間たちと一緒にあって、ただちに奴隷貿易廃止運動を組織すべきだとの声をあげた。いく度かの論争のすえ、ついに若手が勝利を収めた。かくて 1783 年 6 月、クエイカが組織をあげて、奴隷貿易の廃止を要求する請願書を、イギリス議会に提出するはこびとなった。年長の信徒たちは、世論の反発を恐れたが、その心配は杞憂に終わった。意外なことにこの請願運動に対しては、非難やいやがらせではなく、賞賛や支援を行うものがあいついだのである。ここにクエイカは、世論のあと押しを実感した。そこで、次なる計画を実行に移したのである⁹。

(2) 奴隷貿易廃止運動の端緒—1787 年

1787 年 5 月 22 日、ディルウィン (William Dillwyn)、ハリソン (George Harrison)、ウッズ (Joseph Woods)、フィリップス (James Philips) をはじめとする 9 名のロンドンの若手クエイカが集まって、奴隷貿易廃止協会 (SEAST) の結成を宣言した。この組織の幹部は総勢 12 名であり、したがって他の 3 名は、教団外部から招聘された人材であった。そのなかの 1 人が、本章の冒頭で触れたトマス・クラークソンである¹⁰。

クラークソンは、ケインブリッジを卒業したばかりの若者であった。かれは学生時代に執筆したラテン語の論文を翻訳して出版していたが、そのテーマが、奴隷貿易の非人道性であった。かれにはタレント性があったが、スタンド・プレーを好むくせもあった。だが、この性格はトラブルの種ともなりえた一方で、かれが SEAST の実質的な広報担当としての役割を果たすことを可能にした。9 名の若手クエイカがみな堅実な実務家で、人前に立つことをきらう性格の持ち主であったことを考慮すれば、なおさらかれのような人材は貴重であった¹¹。

SEAST にとってのクラークソンのもう 1 つの価値は、ウィルバフォースとの接点であった。ウィルバフォースは、ヨークシア選出の下院議員であり、道徳的な社会改良に関心をもっていた。そこでクラークソンは前年の秋、友人たちとはかって、ウィルバフォースに対し、奴隷貿易廃止の立法活動を行うよう陳情していたのである。ウィルバフォースは、そのときまで奴隷貿易のことをよく知らなかったが、それでもこの申し出を快諾した。かれもまた、おおげさなパフォーマンスを好む若者であったからにほかならない¹²。

とまれ、ここに奴隷貿易廃止運動の布陣がととのった。すなわち、議会内での立法活動を推進するウィルバフォース、議会外での大衆運動を組織する SEAST であった。また後者のなかでも、広報担当のクラークソン、実務担当の若手クエイカという役割分担ができあがった。6 月、クラークソンは幹部会議の席で、第 1 に資金・協力者を募るため、第 2 に奴隷貿易の非人道性・非合理性の「証拠」をあばくため、みずから全国を行脚したいと申し出た。かれの性格をよく知る若手クエイカたちは期待と不安をともに抱いたが、結局はこれを了承した。かくてクラークソンは意気揚々とロンドンを出発し、地方の都市・村落を精力的に踏査した¹³。9 月にリヴァプールを訪問したとき、冒頭のエピソードが起こったのである。

(3) 奴隷貿易廃止運動の隆盛—1788～92 年

クラークソンはトラブルも起こしたが、目をみはるほどのはたらきもした。かれの精力的な活動のおかげで、1788 年度の議会開催中に、奴隷貿易廃止法の早期制定を要求する請願書が各地から 100 通も寄せられ、70,000 人をこえる署名が集まった。また、SEAST 会員も、当初の 136 名から、500 名以上に膨れ上がっていた。うち 1 人、スタッフォードシアの製陶業者 J・ウェッジウッド (Josiah Wedgwood) は、「わたしは人間ではないのか。あなたたちの兄弟ではないのか」と悲しげに問いかける奴隷をかたどったロゴマークを考案し、これをカメオにつけて売りさばいた。かれはマーケティングの達人としてすでに知られた存在であったが、ここでも、政治運

動を1つのファッションに仕立て上げ、利潤を得ようともくろんだのである¹⁴。

議会ではウィルバフォースのはたらきにより、枢密院委員会が設置され、次年度の本会議で奴隷貿易問題が討議されることになった。議員たちの反応はさまざまであったが、首相 W・ピット (William Pitt) は好意的に受け止め、野党領袖 C・J・フォックス (Charles James Fox) は熱烈な支持を表明した。それ以外の多数派は、心情的にはかれらに賛成であったものの、奴隷貿易廃止のリスクを測りかねて、まわりの様子をうかがっていた。他方で、リヴァプール選出の下院議員1名は猛然と反発し、もう1名は「時期尚早」として審議を引き延ばそうとした。これらさまざまなモーメントが作用した結果、W・ドルベン (William Dolben) の提出した法案が可決されることになった。すなわち、「中間航路におけるアフリカ人の苦しみをやわらげるため」、1隻の船舶に収容できる奴隷人数の上限が定められたのである¹⁵。

1789～91年には、議会内の情勢はなかなか好転しなかったが、議会外の大衆運動は空前の隆盛をみた。奴隷貿易を告発する書物・小冊子・詩の売れ行きは好調であり、各地の劇場や演壇で「アフリカ人救済」が声高にさげばれた。とくに G・ヴァッサ (Gustavus Vassa) なる黒人の元船員の発表した自伝は、大きなセンセーションを巻き起こした。かれは、自分はオラウダ・エクイアノ (Olaudah Equiano) という名のイボ人であり、奴隷貿易の被害者であるとして、その非人道性を世に知らしめた¹⁶。また、W・フォックス (William Fox) なる人物が著述した、『カリブ産の砂糖・ラム酒の消費自粛の妥当性について』なる小冊子は、わずか4ヶ月のあいだに70,000部が印刷された。これに触発された人々、とくに女たちは、カリブ産の砂糖の不買運動を行って、奴隷制サトウキビ農園の経営に打撃を与えようとした。この運動に参加したのは、じつに30万世帯といわれている¹⁷。

1792年になると、奴隷貿易廃止を要求する請願書が519通も寄せられ、40万人の署名が集まった。1つのテーマにかんして、1年に519通もの請願書が届けられるのは、過去に類例がなかった。また40万人は、ブリテン島の成人男性の13パーセントに相当する。こうなると、さすがの議員たちも重い腰を上げざるをえなくなった。かくて下院は、3年をかけて段階的に奴隷貿易を廃止するための法案を可決した。だがこれは上院を通過せず、すんでのところで、SEASTの手から勝利がこぼれ落ちてしまった¹⁸。むろんかれらはあきらめず、次年度に向けての活動を再開したが、それをはばむ急激な情勢の変化が発生した。

(4) 奴隷貿易廃止運動の危機と再生—1793～1807年

1793年2月、イギリスとフランスは、ほぼ10年ぶりに戦火を交えることになった。フランス人たちは、すでに王を斬首しており、また共和政・無神論をヨーロッパに普及しようと運動していた。これを脅威とみたピット首相は、イギリス国内における革命派分子の弾圧を決意した。かくてハーディ (Thomas Hardy)、セルウォール (John Thelwall)、トゥック (Horne Tooke) といった活動家が、反逆罪の容疑で逮捕された¹⁹。

これに恐怖を感じたのが、トマス・クラークソンであった。かれは、フランス革命の初期にあたる1789年秋から翌年はじめにかけて、パリを訪問していた。目的は、「黒人の友の会」(Société

des Amis de Noirs) という、現地の反奴隷制団体の幹部との懇談である。そのなかには、ブリソ、コンドルセ、ラファイエット、ラロシュフコーといった、革命の指導者も少なからず含まれていた。つまりクラークソンは、いまや革命の共鳴者とみなされて摘発される危険におびえることとなったのである。そこでかれは、体調不良と称してカンブリア (Cumbria) の湖水地方に隠遁し、以後 10 年のあいだ姿を現さなかった。かれを失った SEAST のほうも、大衆運動が革命に通じるものとみなされる恐れがあったため、大幅に活動を制約された。結果として SEAST は、遅くとも 1797 年には、事実上の活動停止に追い込まれた²⁰。

かくて奴隷貿易廃止運動は死んだ。しかし、1804 年 5 月によみがえった。このときフランス革命にはすでに終止符が打たれており、また共和政・無神論に対するイギリス人のパニックも収まっていた。翌年 10 月にはトラファルガル海戦の勝利により、フランスそのものの脅威も減退した。ただしより重要なのは、イギリスが 1802～3 年に、スペイン・オランダのカリブ植民地を奪取したことである。これら地域には未開発の沃土が大量に存在したため、労働力の大規模な投下が行われれば、商品作物の生産力の増加が期待できた。このことは、リヴァプールの奴隷貿易商にとっては朗報であったけれども、バルバドス・ジャマイカの農園主にとっては悪夢であった。なぜなら後者は、巨大な潜在力を秘めた新興の生産地と、いまや同一の関税ブロック内で競争することを迫られたからである。ここにいたってかれらは、奴隷貿易廃止のほうをよりましな選択であると考えようになった。というのも、すでに開発が進んだかれらの農園では、外部から労働力を投下したところで、さほど大きな生産力の増加は見込めないからである²¹。

この好機をとらえて SEAST は復活し、クラークソンも戻ってきた。しかしながらかれは、ウィルバフォースに主導権を奪われ、大衆運動の組織化をはばまれた。ウィルバフォースは、もはやクラークソンを必要としなかった。かれはピット首相の死 (1806 年) という政局の混乱をとらえて周到な根回しを行った結果、1807 年 3 月 25 日、奴隷貿易廃止法案の成立にこぎつけた²²。かくて、1 世紀以上にわたりブリテン大西洋世界の大動脈であり続けた「三角」貿易は、いささか唐突なエピローグをむかえることになった。このとき、往年の大衆運動は発生せず、また悲願の達成をいわう大きなセレモニーのたぐいも、いっさいみられなかった²³。

(5) 奴隷貿易廃止運動のポイント①一世論の変化

ここまでが、1787～1807 年における、イギリス奴隷貿易廃止運動の概要である。このテーマにかんしてはさまざまな論点が存在するが、ここでは、本論との関係で重要と思われるものにしばって説明する。すなわち第 1 に、なぜ奴隷貿易に批判的な世論が唐突にあらわれたのか、第 2 に、なぜ奴隷貿易廃止運動は、かくも巨大な組織を短期間で作り上げたのか、という問題が、それぞれ考察の対象となる。順にみていこう。

第 1 の問題について。先述のとおり、大西洋「三角」貿易は、ブリテン大西洋世界の形成とともに急拡大した。リヴァプールの企業家は、奴隷貿易での成功を、みずからの経営能力の高さのあかしとして誇りにすることはあっても、そのことで良心の呵責にさいなまれていた形跡はない。また 1788 年以前には、かれらに対する非難の声も、かれらが気に病むほどには大きくなら

なかった。しかし、不思議である。1783年にクエイカがはじめて奴隷貿易廃止の請願書を提出したとき、よくやってくれたと拍手を送るものはいたが、これを批判するものはいなかった²⁴。5年後にウィルバフォースがこの問題を議会にもちこんださいも、首相および野党領袖の2人から支持を表明された²⁵。さらにその4年後には、40万人のイギリス人が、奴隷貿易廃止に賛成の署名を行っている²⁶。つまり18世紀のどこかで、奴隷貿易に対する世論が正反対に変化したようなのである。さらにいえば、ウィルバフォースやSEASTの成功は、世論を変化させたことではなく、すでに好意的となっていた世論を利用したことなのである。

これは究極の難問にみえるが、正解は、世論の変化など起こらなかったということである。つまりブリテンの男女は、遅くとも近世のはじめには、自由と奴隷制とをかれらなりに峻別し、後者をタブー視するような心性をそなえていたのである。この理由は不明であるが、もしかすると、第1章で触れたような、「沃土多く・人口少ない」空間ならば強制労働のほうが有利であり、その逆もまた真であるという仮説が適用されるかもしれない。ただし本論で明言できるのは、ブリテンにおいては、大西洋世界の形成のはるかに以前から、人身売買や強制労働をきらう風土が存在していた、ということだけである。

しかし、それならば、ブリテン人が奴隷貿易や奴隷制農園を発展させたことの説明が不可能になる。だが、そのようなことはない。それらは初期には、ブリテンのほとんどの人々の目に触れることがなかったというだけである。この時代にはテレビやインターネットがなかったことはもちろん、1750年ごろまでは、新聞・雑誌・書籍に目を通すものすら限られていたため、かれら・かの女らの多くが、海外の奴隷制の実態についてのイマジネーションをはたらかせることはなかった²⁷。それでは、海外でそれらに関与していた当事者はといえば、巨大なリスクに見合ったリターンを追求することに心血を注いでいたため、タブーを犯すことには抵抗がなかった。しかもかれらにとって、出向いた土地のルールに従うことは常識であった。かれらではなく、西アフリカの商人・国家のほうが、奴隷売買における主導権を握っていたことを想起されたい²⁸。また北アメリカでは、移住者たちが先住民から奴隷を強奪されたり、あるいはかれらに売却したりということもあった²⁹。要するに海外のブリテン人は、みずからのタブーを現地の人々に強制しようとするれば、利益はおろか生命すら失いかねなかったのである。

1750年ごろになって、新聞・雑誌・書籍の普及が一定の水準にたつすると、そうした情況にも変化がみられた。むろんこれら出版物の広範な流通は、ブリテン大西洋世界の成熟にともなうところの、イギリス商工業の成長によって引き起こされたものである。なぜなら、開かれた市場を相手に製造・流通・サービスなどの事業を展開する場合、正確な情報を安く・速く・大量に収集できるか否かは、死活問題となるからである。だがそれらに付随して、純粹に娯楽や暇つぶしのための出版物も出まわるようになった。とりわけ海外のエキゾチックな文物、あるいはそういった場所で横溢する暴力やセックスなどは、人気テーマであった。かかる情報が膨大に蓄積されていった結果、イギリスのごくふつうの男女のあいだでも、次のことが意識されるようになった。すなわち、海外では人身売買・強制労働が大規模に行われていて、しかもそれらには、仲間のブリテン人やその子孫たちが一枚かんでいられるらしい、と³⁰。

(6) 奴隷貿易廃止運動のポイント②—組織の大規模化

このように、ブリテン人は早くから奴隷制に対するタブーを共有していたが、大西洋「三角」貿易は、当初はかれらのよく知らないところで行われていた。だがその実態は、遅くとも 1780 年代までには、ごくふつうの人々のあいだで語られるようになった。とはいえこの事実、奴隷貿易廃止運動が、あれほどまでに大規模なうねりをよびおこしたという事実を説明しつくすものではない。仮定してみよう。まわりの少数の人々が、道徳的タブーに抵触する行為にふけっているが、それをやめさせたところで、わたしが得られる利益はない。それどころか、不用意に干渉することで、みずからが不利益をこうむる恐れもなくはない。この場合、大多数の人は、それをやめさせるような具体的な行動にでるであろうか。要するに、この場合の「利益」がはっきりしないかぎり、運動が大規模化した理由を知ることはできないのである。

だがその前に、大規模化した運動の内部構成について触れておこう。ここで注目すべきは、ウィルバフォースが、首相と野党領袖の 2 人から賛意を表明されたという事実である。つまり奴隷貿易廃止運動は、2 大党派の両方から支持されたために、途方もなく巨大化したのである。ここでいう 2 大党派とは、首相ピットの「トーリ」と、野党領袖フォックスの「ホイッグ」である。あえて党派名をカギ括弧で囲ったのは、それらが第 1 章で登場した同名のそれらと混同されることを防ぐためである。ここでの「トーリ」・「ホイッグ」はともに、王政・国教会の護持にこだわっていたが、同時に、国家の行財政制度を、時代の変化にあわせたものに改革しようとの立場を共有していた。ただしその改革の速度は、「トーリ」よりも「ホイッグ」のほうが、急激であることを理想としていた³¹。

「トーリ」の支持層は多様であったが、その伸長にもっとも寄与した要素は、国教会の一部の信徒たちによって推進された、信仰復興運動であった。その中核にはクラパム派 (Clapham) という小さなグループがあつて、そのリーダーこそ、ほかならぬウィルバフォースであった。かれらは、国教会という組織の強化をはかりつつも、教義の面では、意外なほどカルヴァン主義に傾倒していた。いうなれば、国教会を護持しようとする点が異なるだけで、オリヴァ・クロムウェルと類似の立場である。かれらは、地上に「神の国」を創造するという責務を負っており、それゆえに、俗世間から逃避するのではなく、逆にみずからそれを変革しようとした。つまりかれらは、自分たちのみならず、すべての国民に対して、敬虔であれと命令したのである。具体的には、安息日違反および、流神的行為の撲滅に、あふれんばかりの情熱を注いだのであった³²。

「ホイッグ」の支持層も同じく多様であったが、これにもっとも強力な追い風を送っていたのは、先述の、ユニテリアンによる啓蒙主義運動であった。かれらは、さすがにイングリッシュ・プレズビテリアンの組織を国教会に導入しようとは提案しなかったが、かわりに、既存の制度的枠組みのなかで、みずからの立場が承認されることを望んだ。かれらはまた、「理性の光」によって、「迷妄の黒雲」が払拭されることに執念を燃やしていたため、「トーリ」・クラパム派の信仰復興運動を、狂信的・独善的であるとして拒絶した³³。

以上を要するに、「トーリ」はカルヴァン主義、「ホイッグ」は啓蒙主義という、それぞれ水と

油である 2 つの運動から支持された。また前者が、国教会体制を硬直的なままに維持しようとした一方で、後者は、それをより柔軟なものに改革することを志向した。ここでいう硬直的とは、国教会に宣誓しないものに対する寛容度の低さをあらわし、柔軟とはその逆をさす。じつにこの 2 大党派間の抗争は、1780～1830 年ごろのイギリスにおける、いわゆる大文字の政治の軸をなすものであった³⁴。したがって奴隷貿易廃止運動は、この両派の支持を同時に獲得したために、いやおうなく巨大化する結果となったのである。

はじめの問いに戻ろう。はたして、この 2 大党派が、奴隷貿易廃止運動に従事することで見込んだ「利益」とは何であったか。ここで注目すべきは、第 1 に、七年戦争の勝利によって、イギリスの主権のおよぶ空間が異常に拡大したこと、第 2 に、アメリカ独立戦争の敗北によって、その一部が失われたことである。これら 2 つの事件を経験して、イギリス人は、植民地の人口・資源の管理統制のあり方に対して、過去に類をみないほどの関心を抱くようになった。そしてそれは、かなり身勝手な願望となって表現されることとなった。すなわち、植民地の白人・黒人・先住民が、おのおのの牽制しあうことで秩序を維持してほしい、資源・市場をこれまでどおりわれわれの使用のために供してほしい、われわれに反逆してほしくない、と。そこでかれらは、植民地の奴隷を解放し、また先住民の地位を引き上げ、逆にみずからの脅威となりかねない、白人の力をそぐことに執心しはじめたのである。かくて奴隷・先住民は、にわかにイギリス人の同情の対象となり、逆に白人のほうは、侮蔑と憎悪にさらされることとなった。またリヴァプールの奴隷貿易商も、植民地の白人の走狗とみなされて、同様の処遇を免れなかった³⁵。

かの 2 大党派は、植民地問題にかんしては、かかる方針をとることで一致していた。だが、「トーリ」と「ホイッグ」は先述したとおり、ほかの点では水と油であったため、たがいに相手を打倒しようとうかがっていた。そこで両派とも、奴隷貿易廃止運動に賛助の意を示しつつ、ただならぬ熱意をもって支持者の動員をかけた。むろんかれらのねらいは、そのことを通じた、政治的ヘゲモニーの奪取である。かくてこの運動は、クエイカたちの当初の思いをよそに、前代未聞の規模にまでふくれあがったのである³⁶。

小括

奴隷貿易にかんしては、第 1 に、マスメディアの発達によってその実態が明らかとなり、またそれが古来より存在したタブーに抵触することが分かってきたとき、第 2 に、それが安定した植民地統治の障碍となっていたとの認識が広まったとき、ついにその廃止が有力な選択肢として浮上した。それを要求する政治運動は、そのことを通じた政治的ヘゲモニーの奪取をはかる 2 大党派のはたらきによって、前代未聞の規模にまで成長した。じつにこのことは、1780 年代に特有の現象であり、1680 年あるいは 1880 年には起こりえないことであった。

第 2 節 背景②—リヴァプールのウィリアム・ロスコー

前節で明らかにしたことをふまえつつ、以下ではウィリアム・ロスコー、すなわちリヴァプールにおいて奴隷貿易廃止運動を担った人物に焦点を合わせる。本節ではまず、かれの人となりと行動とを概観し、またその大まかな特徴を確認する。

(1) ロスコーのキャリア形成—1787 年まで

ウィリアム・ロスコーは、1753 年 3 月 18 日に生まれた。生家はリヴァプールとその近郊とがちょうど接する、マーティンデイル・ヒル (Martindale Hill) という高台の頂上付近にあった。父母はそこで居酒屋をかねた宿屋を経営しており、貧乏ではなかったが、恵まれてもいなかった。かれらはまた、ユニテリアンのベンズ・ガーデン礼拝堂の信徒であった。ロスコーの父母にまつわるそれ以外の情報は、ほとんど伝わっていない³⁷。

ロスコーは 6~12 歳のころ私塾に通い、読み・書き・算数を学んだ。その後、家業をしばらく手伝っていたが、16 歳のとき、アイズ (John Eyes) なる弁護士のもとで見習い修行をはじめた。このころ、友人の影響で古典教養に親しむようになり、ラテン語・イタリア語・フランス語を習得した。かれはまた、アーサー・ヘイウッドらによって創設された、ユニテリアンのウォリントン・アカデミーの一般向け講義にも参加していた³⁸。

21 歳のとき、かれは弁護士として独立した。共同経営者は、J・レイス (Joshua Lace) と S・アスピノール (Samuel Aspinall) である。レイスの父アンブローズ (Ambrose) と兄ウィリアムは奴隷船長であった。アンブローズはすでに船員を引退しており、企業家としてのセカンド・キャリアを歩んでいた。かれは町の名士であり、リヴァプール商業会議所をはじめとする、一流のアソシエーションに参加していた。アスピノールにかんする情報は伝わらないが、もしかすると、有力な奴隷貿易商である同姓の家系に連なるのかもしれない³⁹。いずれにせよ、ロスコーが奴隷貿易の関係者との深いつながりを有していたことは確実である。

このあとロスコーは、40 歳までに巨額の資産を蓄えている。これは、かれが 30 歳のときに、ロドニー通り (Rodney Street) なる高級住宅地を開発したことによるものである。そこはかれの実家の近所にあり、もとはなだらかな斜面に美しい野原が広がっていた。対照的に、当時のリヴァプールは、急激な経済成長・人口増加を経験するさなかであったため、市街地の中心部は、不快なまでに混み合っていた。このため、富裕層の郊外への脱出がブームとなったのであるが、ロスコーは、まさにこの商機を捉えたのである⁴⁰。ここからも、かれが大西洋「三角」貿易から、間接的にとはいえ恩恵を受けていたことが分かる。

だがロスコーは、このときすでに、いまだ目にしたことのない、南北アメリカの黒人奴隷に対して、はっきりとした同情を寄せていた。それだけではない。かれらを悲惨な境遇におとしめるイギリス人たちに、ひそやかな反感をもっていたのである。そのことは、かれが 24 歳のときに出版した、『よろこびの丘』なる散文をみることで明らかとなる。

真昼の灼熱の太陽のもと／黒いアフリカの子らの苦役に終わりはない／故郷で生きる喜びを奪われ／苦痛をいやすものもなく／朝から晩まで服従を強いられ／生きる希望もなくときは過ぎてゆく／労役と孤独に押しつぶされるその日まで・・・／人としてイギリス人とし

て恥じるべきではないか／みずから自由の果実を味わっておきながら／他人のうったえには耳を貸さないというのか／・・・かくも非人道的な蛮行が行われるのはなぜなのか／人々のあいだで利害が一致しないからなのか／もしもアフリカの子らが自由になればイギリス人は没落するとでもいうのか／断じてちがう・・・⁴¹。

ただし、『よろこびの丘』を構成する全 32 連のうち、奴隷貿易にかんする箇所はわずかに 3 連である。またこのときには、30 年後に奴隷貿易が廃止されるとは、誰も予測できなかった。ゆえに企業家たちも、かかる言説にとくに目くじらを立てるようなことはなかったのであろう。しかしながら、友人・同僚・顔見知りの事業を否定するような言辞を作品中に織り込み、またそれを実名入りで公表することは、それなりに勇気のいる行動であったと推測される。

1787 年以前のロスコーの活動について、注目すべきポイントは 2 つである。第 1 に、かれは裕福ではない家庭に育ったが、大西洋「三角」貿易によって創出された幸運、より具体的には宅地開発を通じて、短期のうちに巨額の資産を蓄えた。第 2 に、かれはユニテリアンの人的ネットワークのなかで古典教養を習得し、その延長線上で、作家としてのキャリアも歩みはじめた。かれを奴隷貿易廃止論者へといざなったのは、この第 2 の側面である。

(2) ロスコーと奴隷貿易廃止運動—1787～8 年

ロスコーにはジョン・バートン (John Barton) というクエイカの友人がいたが、この人物は、ほかならぬ奴隷貿易廃止協会 (SEAST) の幹部であった。このつながりがあったために、本章の冒頭で紹介した、クラークソンとロスコーの会談が実現したのである⁴²。このときクラークソンは、あなたの文芸的センスは卓越している、リヴァプールで奴隷貿易を批判しようとの志には感服した、などといって、ロスコーをもちあげたことはまちがいない⁴³。また、作家としてのロスコーが、そうした賛辞に気をよくしないはずもない。かくてかれは SEAST 会員となり、奴隷貿易を批判する書物・詩の執筆に情熱を注ぐのであった。

ロスコーは 1787～8 年の約 1 年間に、4 本もの奴隷貿易にかんする作品を出版した。すなわち、『奴隷貿易にかんする一般的見解』と『ハリス牧師の奴隷貿易擁護論を論破する』という 2 冊の書物、および、『アフリカの悪』と『アフリカ人』という 2 本の詩である。ロスコーが、それまでの約 10 年間に 2 作品しか出版していなかったことを考慮すれば、奴隷貿易問題こそ、かれがもっとも才能を発揮しやすいテーマであったことは明らかである⁴⁴。

しかしながら、ロスコーの活動はここで終わってしまった。これには、かれを紹介したジョン・バートンの SEAST 脱退という事件が響いている。当初よりバートンは、奴隷貿易の段階的な廃止をめざすべきとの立場であったが、クラークソンをはじめとする主流派は、即時・無条件のそれを主張してゆずらなかつた。かかる対立のすえ、孤立したバートンは排除された。かくて仲介者を失ったロスコーは、奴隷貿易問題へのコミットを減少させることになった⁴⁵。以後の 20 年間にかれは、この問題にかんするかぎりであれば、『サン・ドマング黒人反乱の原因について』(1792 年) という 1 冊の書物を出版するにとどめている。

ここでのポイントは 1 つである。すなわち、SEAST およびかれらの運動は、ロスコーの作家

としてのキャリアを高める絶好の機会を与えた。しかしながらその局面は、わずか 1 年あまりで過ぎ去ってしまったのである。

(3) ロスコーの政治活動とその挫折—1789～94 年

かくてロスコーは、奴隷貿易廃止運動とは疎遠になった。だが、かわりに「ホイッグ」としての政治活動に、かつてないほど深くのめりこむようになった。かれを熱狂させたものは、ほかならぬフランス革命である。1789 年、かれは『フランス人民によびかける歌』を完成させ、野党領袖 C・J・フォックスに贈呈した⁴⁶。1790 年、かれは『エドモンド・バークの生涯と偉大な業績』を発表し、フランス革命を批判する下院議員バーク (Edmund Burke) を笑いものにした⁴⁷。この散文は大変な人気を博し、ロンドンとエディンバラで何度も版を重ねた⁴⁸。翌年、ロスコーはバスチーユ陥落 2 周年を記念して、『自由の夜明け』という作品を発表した。

朝焼けの丘の向こう／血紅に染まったフランスの大地に／高々と上らんとする自由の朝日
を見よ／迷妄の黒雲にかすむことなく／天空のなかで新たな道を切り開いている／穏やかに、
それでいて力強い曙光が／ヨーロッパ全土を照らし出す／不毛なる漆黒と牢獄の暗闇
が／光と拮抗して争っている／おお、誰があの闇のなかにとどまろうとするものか／いま
や明け方の清新な空気を吸うことができるというのに／・・・バークはコウモリのように光
を避けて逃げてゆく／かれの目にはその光は強すぎた・・・⁴⁹。

フランス革命の影響を受けて、リヴァプールでは「ホイッグ」が勢いづいていた。1790 年 6 月の下院選挙では、かれらの支持をえた新人 B・タールトン (Banastre Tarleton) が、市当局の推薦をえた現職候補から議席を奪取した⁵⁰。翌年 1 月には、「ホイッグ」が市政の民主化運動を組織し、第 1 に、市当局幹部を有権者全員の投票によって選出すること、第 2 に、不明朗な会計を撲滅するために同局の帳簿は公開とすること、などを要求として掲げた。かれらは 1,028 人分の署名を集め、それでも事態が進展しないとみるや、市当局の提訴に踏み切った。この闘争は、かれらの費用が尽きたために、告訴の取り下げという結末になった。とはいえ、法廷での審理の過程では原告側の優勢が続いたため、市当局のほうもかなり追い詰められたことはまちがいない⁵¹。加えて同月のマンチェスターでは、宗派差別撤廃運動、より具体的には、非国教徒を排除する審査法・地方自治体法の廃止を目標とする政治運動の決起集会が開かれており、リヴァプールからも、ロスコーの友人をはじめとする数名のユニテリアンが駆けつけた⁵²。

フランスとの戦争が差し迫った 1792 年 12 月には、ふたたび市当局と「ホイッグ」とが衝突した。前者は、王によるフランス革命批判を支持する声明を出そうとしていたが、後者がそれに反対したのである。かくて住民集会が開催されたが、そこで市当局を支持するものは少数であり、かわりに「ホイッグ」の起草した声明文のほうが、正式なものとして認められた。だが、いざ署名しようとする段になって、酒に酔った群衆が大挙して会場に押し寄せ、声明文と署名とをもみくちやにしてしまった。これは、市当局がひそかに準備していた作戦であった。虚を突かれた「ホイッグ」は、またしてもすんでのところで勝利を手にしえなかったのである⁵³。

1793 年 2 月、イギリスがフランスとの反革命戦争に踏み切ると、市当局の勢いが復活した。

かれらは首都のピット政権、および地域の群衆に支持されて磐石となり、満を持して「ホイッグ」の弾圧をはじめた。いまやロスコーたちは、イギリスに共和政・無神論を広めようとする「ジャコバン」の手先であるとされ、憎悪のまととなった。かれらの行く先々では、群衆が「チャーチ、アンド、キング」（王と国教会を擁護せよ）と連呼しながら、トマス・ペインの人形を火あぶりにするというパフォーマンスを行っていた。その周囲には、かれらに酒をふるまう、身なりのよい人物の姿もあった⁵⁴。ここにロスコーは世論の逆風を痛感した。かくてかれは、1795 年ごろになると、公の場での政治的な発言や運動を自重するようになった。

まとめよう。ロスコーとその友人たちは、すでに 1789 年ごろには、奴隷貿易廃止運動から疎遠となっていた。そしてその後は、フランス革命に共鳴しつつ、「ホイッグ」としての政治活動に没頭した。だがかれらは、はじめこそ住民のあいだで共有されていた、市政の民主化志向を利用して支持を集めたものの、1792～3 年になって、フランスが共和政・無神論を推進するのみならず、イギリスを含むほかのヨーロッパ諸国とも戦火を交えるような段階になると、一転して、最大限に忌み嫌われる存在となったのである。

（４）ロスコーの復権と再度の挫折—1806～7 年

ロスコーは 43 歳で弁護士を引退し、創作活動に専念した。その前後に発表した『ロレンツォ・デ・メディチの生涯』は反響を巻き起こし、かれの名をヨーロッパ中の文壇に知らしめた。だが、かれが政治的な書物・詩などを出版することはもはやなかった。かれはまた、ランカシアのアラトン館（Allerton Hall）なるカントリー・ハウスを購入し、そこでイタリアの古書・絵画・彫刻に囲まれる生活を楽しんだ。リヴァプールでも、植物園・図書館の設立を推進し、町の名士として知られる存在になった。いまやロスコーは、趣味に没頭する毎日を送っていた。それを可能にした巨大な資産は、土地への投資や、銀行への出資を通じて運用されていた。しかしながら、かれはいつさいの政治活動から、身を引いていたのである⁵⁵。

だが、転機は 1806 年にやってきた。このとき、イギリスでのフランス革命に対するパニックはすでになく、したがって、それをたのみとする市当局の生存戦略も通用しなくなっていた。つまり市当局は、共和政・無神論に対する防波堤としての役割が失われるや否や、ふたたび、非民主的組織としての側面を問題視される存在となったのである。いまやリヴァプールの有権者が熱狂的に求めたのは、「ホイッグ」の復活であった⁵⁶。かくてロスコーは、11 月に公示された下院選挙のさいに、新人候補として擁立された⁵⁷。このとき、かれの推薦人を買って出たのが、T・リーランド（Thomas Leyland）および T・アール（Thomas Earle）という、地域の「ホイッグ」の有力者であった。だがかれらには、当代きつての奴隷貿易商としての顔もあった⁵⁸。ここにロスコーは、選挙戦において、奴隷貿易問題にかんする自説を開陳できなくなった。しかし、かかる曖昧な態度は、早くも対立候補たちに見透かされてしまった。

そろそろ諸君は気づくべきである。つまりロスコー氏は、アフリカ貿易に対する決然たる敵なのだ。かれを問いつめなければならない。かれに、諸君のかけがえのない貿易を守ろうという気構えがあるのか、またはそうではないのかを⁵⁹。

とはいえロスコーの人気は高く、トップで当選した⁶⁰。ロスコーが下院議員である。つまりそれほどまでに、旧ピット政権・市当局に対する逆風が吹いていたのであった。

翌年 2 月、ウェストミンスターのイギリス議会では、奴隷貿易廃止法案の審議が最終局面を迎えていた。このときロスコーは次のように演説し、この法案に対する賛成票を投じた。

わたしは長いことリヴァプールに住んでいたが、この 30 年間、1 度としてかの邪悪な貿易を指弾しなかったことはない。そして今、正義と人道の側に立って、奴隷貿易に反対の意を表明できるとは、これにまさる喜びはない⁶¹。

かれのこの発言、および投票行動は、選挙区における奴隷貿易の関係者にとって、許されざる裏切りであった。ロスコーはまた、カトリック解放問題についても賛意を表明した⁶²。かれはユニテリアンであったため、カトリックとは水と油のはずであるが、ここでは、同じ国教会体制の被抑圧者としての立場から、宗派的寛容のほうを優先したのである。

1807 年 5 月、下院はわずか半年で解散され、ふたたび選挙が行われることになった。この異常事態は、ナポレオン戦争のさなかでのピットの急死という、政局の混乱によるものである。ロスコーは再選を期してリヴァプールに戻ったが、その前に、次のようなことを友人に書き送った。「奴隷貿易にかんするわたしの行動が、大きな反感をよぶことは考えられない。もともとわたしの意見は、周知のことであったから⁶³」。だが、これは楽観的にすぎた。故郷でかれを待ち受けていたものこそ、棍棒を手にしたあの群衆であった。その主力は、奴隷貿易の廃止によって仕事を減らされた、船員たちである。ロスコーらが行列を組んで市街地に進むと、群衆が「ノー、ポーペリ（No, Popery、教皇主義者を打倒せよ）」と連呼しながら襲いかかってきた。軍人ウィリアムズ（George Williams）は、1 人のロスコー支持者として警護につとめたが、公的な治安担当者が駆けつけてくることはなかった。つまり、市当局がこの暴動を黙認していたか、あるいはむしろ積極的に鼓舞していたのである。これをみたロスコーは戦意喪失となり、選挙戦からの撤退を表明した。かくてかれの議員生活は、わずか半年で終わったのである⁶⁴。

まとめよう。ナポレオン戦争（1799～1815 年）の前半期におけるリヴァプールでは、市当局と「ホイッグ」とのあいだで壮絶な闘争が起こっていた。フランス革命が、いわゆるジャコバン独裁（1793 年）の段階を迎えたさいに、前者の勢威は頂点にたっしたが、ナポレオン帝政の開始（1804 年）あたりから、後者の反転攻勢がはじまった。ロスコーの当選は、この局面において生じたことである。追い詰められた市当局は、ますます群衆の動員という切り札にたよるようになった。これはいうまでもなく、リヴァプールの企業家たちがかつてもっていた、「家父長主義」の最後のきらめきである⁶⁵。

小括

1788～1807 年における、ロスコーの奴隷貿易廃止運動への貢献度は小さかった。かれは SEAST の地方支部も立ち上げていないし、請願運動も行っていない。さらにいえばこの問題は、ロスコーのキャリアのうちで大きな比重をもつものでもなかった。ユニテリアンであり、また「ホイッグ」であったかれの真のねらいとは、宗派差別撤廃であり、また市政・国政の民主化で

あった。そこに貫徹されていた原則こそ、ほかでもない、啓蒙主義であり、またそのことは、フランス革命という経験によっても増幅されたのである。

しかしながら、他方でかれの 2 度の積極的な政治活動（1787～94 年ごろ、1806～7 年）の端緒には、かならず奴隷貿易問題へのコミットがあった。これは偶然であろうか。そのことを判断するためにも、次節では、かれの奴隷貿易廃止論を詳細に分析する。

第 3 節 W・ロスコーの奴隷貿易廃止論の特質①—啓蒙主義

本節では、『ハリス牧師の奴隷貿易擁護論を論破する』（1788 年）および、『奴隷貿易にかんする一般的見解』（1788 年）という、ロスコーの 2 冊の著作を読解して、かれの奴隷貿易廃止論の特質を明らかにする。ここでのキーワードは、啓蒙主義である。つまりかれは、啓蒙主義の観点から、奴隷貿易という主題にアプローチしたのである。以下で詳細に説明しよう。

（1）教条主義的な奴隷貿易擁護論への批判

ロスコーは、キリスト教の教条主義的な奴隷貿易擁護論を痛烈に批判した。そのことは、『ハリス牧師の奴隷貿易擁護論を論破する』というかれの書物に明らかである。「ハリス牧師」の議論については次章で詳述するが、ここでも若干の説明は必要であろう。R・ハリス（Raymond Harris）は、リヴァプール近郊に住む国教会の牧師である。スペイン出身の元イエズス会士という経歴があり、約 20 年前に国外追放処分を受けて、イギリスに移住した。かれは 1788 年はじめ、『聖書にもとづく奴隷貿易擁護論』なる書物を出版し、市当局から表彰されている⁶⁶。そこでかれは、『旧約聖書』には奴隷所有・売買の場面がしばしば描写されているにもかかわらず、それらが神の怒りを買ったというような記述はみあたらないため、現代（18 世紀）の奴隷貿易・奴隷制も、キリスト教の教義に照らして問題はないとの見解を示した⁶⁷。

これに対し、ロスコーは猛然と批判する。

奴隷制への尋常ならざる愛着は、理性と常識とに対する挑戦である。この著作の底流にあるのは、卑劣さでありずるさである。これらがイングランド人の感覚とは相容れないことは明白である。だが、スペイン人のイエズス会士が思いつきそうなことではある⁶⁸。

ロスコーによれば、『旧約聖書』における個別の記述内容の正誤・善悪は、歴史的な文脈に即して判断されねばならないという。かかる判断を下すときに必要なものこそ、ほかでもない、理性であった。かれはいう。『創世記』にヤコブと 2 人の姉妹との結婚の話があるからといって、いまでも近親相姦が合法であると主張するものがあるか。ヤコブは家族をだましたにもかかわらず、神に罰せられていないから、詐欺は正しき行いとなるのか。そればかりではない。殺人・姦通・偽証・復讐も、すべて聖書に依拠して正当化できるのか⁶⁹。

要するに、聖書が神意を伝えているとしても、われわれはそれを読むさいに、自分の目を使わなければならないし、それを理解するさいに、自分の理性を使わなければならない。カト

リック教会は、信徒から思考力を奪ったばかりか、聖書を読むことも禁止した。そのうえで、聖書のあらゆる部分が等しく、また一定不変に真実であると、人々に信じこませようとしたのである。だがプロテスタントは、かかる不当な制限を撤廃した。かれらは、信徒による聖書のアクセスを許したばかりか、最大限の注意力をもって、それを精査せよと命じたのである。さて、われわれは父祖が血を流してまで勝ち取った権利を、ハリスにいわれるまま捨て去ってしまってよいのか。それとも、プロテスタントとして、聖書の教えについてみずから判断するのか。・・・(後者であれば) われわれは、古代ユダヤ人が奴隷を所有していたからといって、現代のイギリス人がアフリカ人を誘拐し、かれら・かの女らを死ぬまで奴隷の身におとしめておくことが正しい、という主張の愚かしさに気づくであろう⁷⁰。

みられるとおりロスコーは、神意そのものであるとされた聖書よりも、理性にもとづく人間の判断のほうを重視する、世俗・合理主義者であった。かれはけっして、聖書におけるどこかの字句を引用して、それらを根拠に奴隷貿易の不当性を立証しようとはしていない。そもそも、聖書の個別の記述を取り出して、それを現実にあてはめようとする発想が、かれにはないのである。だが同時に、かれはディドロやドルバックのような無神論者でもなかった。かれによれば、聖書には人間の生き方・考え方の指針が示されていることはたしかであり、それらを総体的に理解したうえで、個別的事例についての判断を行うべきであった⁷¹。

(2) 人権思想・経済合理主義にもとづく奴隷貿易批判

ロスコーはまた、奴隷貿易こそ、第1に人権侵害であり、第2に経済非合理的な制度であると考えていた。このことは、かれの最初の論文、『奴隷貿易にかんする一般的見解』に示されている。これが執筆されたのは、クラークソンとの会談の直後、すなわち1787年の冬である。翌年に発表されると、イギリスでは少なくとも1,000部が流通し、フランス語にも翻訳されて出版された⁷²。ここでの議論を、もう少し敷衍してみよう。

第1の点、すなわち奴隷貿易と人権について、かれはいう。「すべての人間は本来的に、個人としての自由・安全を享受する権利をもつ」。この原則は、「あらゆる時代のあらゆる理性ある人々のあいだで認知されてきた」ために、論争の余地はない。奴隷貿易はこれに抵触しており、それゆえに「不正義」と判断されざるをえない。したがって、その被害者たるアフリカ人には、「最大限の抵抗権」が与えられるべきである⁷³。要するにロスコーは、奴隷貿易は人権侵害であるからやめるべきだといっているのであり、それゆえにこの意見は、21世紀の国際社会における公民的価値観からも、さしてへだたったものではないと評価できる。

第2の点、すなわち奴隷貿易は経済非合理的であるというテーゼについて。かれによれば、奴隷貿易は、国内で年間1,000～1,500人もの船員を死なせているため、イギリスの海外貿易の健全な発展を阻害している。また、イギリスのアフリカ向け輸出品の製造過程は、ごく少数の企業によって担われているにすぎず、それゆえに、多くの雇用は創出されていない。加えて、カリブ植民地におけるサトウキビ・タバコ農園は、もしも現状における奴隷人口の再生産さえ奨励されたならば、もはや外部からの労働力供給を必要としていない。結論としては、「奴隷の反乱、疾

病による損失、高額な海上保険などを考慮すれば、奴隷貿易は、もはやその推進者がいうほどには、財産の蓄積には寄与していない⁷⁴。

ロスコーのこの第2の論点には、まったく説得力がない。なぜなら奴隷貿易は、営利を追求する企業家の自由意志のもとで実行されてきたからである。もしもかれらが、国家機構のある部分と政治的に癒着していたとするならば、かれらの事業が経済非合理的であるにもかかわらず、手あつく保護されたということはある。しかし、少しもそうではなかったことは、本論の第1章で示されたとおりである。想起されたい。大西洋「三角」貿易は、イギリス・西アフリカ・北米カリブの3地域が、たがいの欠点をおぎないつつ、それぞれの長所を活かしようという意味で、一般的な国際分業の形態であった。だがロスコーは、海運業・製造業・サトウキビ栽培については素人であるにもかかわらず、自分のほうが、現実にならるるを行う当事者よりも、経営に精通していると考えている。しかもかれは、そうした前提のもとづいて、後者の事業を法的に規制せよといっているのである。これはおかしい話ではないか。なぜ、市場原理にしたがって自律的に展開される事業が、経済非合理的であるのか。なぜ、そのことを理由に、該当の事業を法的に規制することが正当化されるのか。

おそらくロスコーの強調したかったのは、第1の論点のほうである。すなわち、奴隷貿易は人権侵害にあたるため、廃止されるべきだ、というものである。この論理は、18世紀ヨーロッパの啓蒙主義に源流を発しつつも、現代世界にまで脈々と継承されている、「万人は生まれながらにして自由・平等である」という原則である。だが、1788年のイギリスにおいて、理論的な武器がこれだけでは弱かった。なぜなら、当時は王政・国教会がまだ勢威をはっていたのみならず、カルヴァン主義までもが再強化されるさなかにあったからである⁷⁵。むろん国教会・カルヴァン主義は、100パーセントとはいわないまでも、啓蒙主義や人権思想とは相容れない要素を多くもっていた。したがって、必ずしもすべてのイギリス人が、人権侵害イコール絶対的悪との価値観を共有したわけではなかったのである。

そこでロスコーは、自説の補強をはかった。第2の論点である。すなわち、奴隷貿易は経済非合理的であるため、廃絶されるべきだ、というものである。この論理も啓蒙主義とは無縁ではなく、あえていえば、フィロゾフ的な思弁である。つまり、経験の裏づけがないことによる欠陥が明らかなのである。もしも利潤の追求を第1に考えたならば、大西洋「三角」貿易という国際分業の枠組みのなかで、イギリス人が、自国において自由労働に立脚した製造業を強化すべきなのは、まったく正しい。しかし、西アフリカやカリブ地域ではどうか。自然環境や資源・人口バランスなどを考慮すれば、そこでも自由労働のほうが有利であったとは到底いえない。むしろ、それら3地域が緊密に連携しつつ、また西アフリカ・カリブ地域が奴隷貿易・奴隷制をたくみに発展させたからこそ、全体として利潤が生まれ、関連するすべての事業が持続的に成長したのである⁷⁶。かかる反論に、ロスコーのテーゼは無力である。そもそも、ある事業が経済合理的であるか否かは、フィロゾフの思いつきによってではなく、それが市場原理のもとで存続しているか否かによって、判断されねばならないはずである。

小括

ロスコーは啓蒙主義を武器に、奴隷貿易を批判した。『ハリス牧師の奴隷貿易擁護論を論破する』では、キリスト教の教義よりも、理性的判断のほうがまさるとし、後者によれば、奴隷貿易が擁護されえないことは自明であった。しかしながら、かれは無神論者ではなかったため、キリスト教の教義のすべてが誤謬であるとは主張しなかった。理性による厳正な審査をパスしたものにかぎれば、そのなかにも汲むべき点は多々あるという。

『奴隷貿易にかんする一般的見解』ではさらに進んで、人権思想にもとづく奴隷貿易批判が展開された。すなわち、「万人は生まれながらにして自由・平等である」から、アフリカ人を奴隷にすることは、不正なのである。ロスコーのかかる議論は、18世紀の啓蒙主義に源流を発するものであるが、21世紀においてもまったく色あせていない。ここは高く評価すべきである。ただしかれは、奴隷貿易がなくともイギリス経済は衰退しないという命題をも、証明せねばならなかった。理想はよくとも、現実には無理、という批判にそなえるためである。そこでかれは、奴隷貿易イコール経済非合理的であるという、かなり怪しいテーゼをひねり出した。これは事実誤認に立脚しており、論理的にも破綻している。思うにロスコーは、かかる横道にはそれず、人権一筋で勝負すべきであった。つまり、奴隷貿易は人権侵害であるから、いかに利潤を生み出そうとも、容認できるものではない、と。

いっぽう、かれが誤ったテーゼを挿入したおかげで、著書が1,000部も流通したり、フランスでも読まれたりしたとも推測できる。つまり、当時はいまだ主流ではなかった人権思想が、かくも広範な人々によって受容されたのは、人権を擁護することが経済合理的でもあるという、魅力ある仮説のおかげともいえるのである。むろんこの仮説が該当するケースもままある。ただし、奴隷貿易問題にかんしていえば、誤りであった。とはいえ、人権一筋で勝負していたとしたら、ここまで注目を集められたかどうか。したがって、事実無根の珍説を拡散したロスコーの罪は、人権思想を浸透させた功によって、相殺されるとも考えられるのである。

しかしながら、100パーセントそうとも断言できない。そのヒントは、現場で事業を行う人々よりも、机上で思索にふけっている自分のほうが、経営や利潤というものを分かっている、つまりは経済合理的であるという、かれのエリート主義的な考えのなかにある。これは、その当事者たちの資質・能力を軽んじるような態度といわれてもしかたがない。この考えが、リヴァプールの奴隷貿易商やカリブの白人農園主のみならず、ついにはアフリカ人やその子孫たちにも適用されるとき、いわゆる人種差別や帝国意識が、ゆつくりと頭をもたげることになる。はたして、そうだった。これが次節のテーマである。

第4節 W・ロスコーの奴隷貿易廃止論の特質②—帝国意識

本節では、『アフリカの悪』（1787～8年）、『アフリカ人』（1788年）、『サン・ドマング奴隷反乱の原因について』（1792年）という、ロスコーの3冊の著作の読解を通じて、かれの奴隷貿易

廃止論の特質を明らかにする。ここでのキーワードは、人種差別と帝国意識である。これら 2 つは密接に関連しており、ともに啓蒙主義に源流を発するものである。

「人種差別」については、説明の必要はないと思われる。だが「帝国意識」については、ここでその意味を確認しておくべきである。帝国意識とは、端的に言って、イギリス人が、海外の多種多様なエスニック集団を、意のままに動かしてもよい（合法）、あるいはできる（可能）、すべき（責務）という発想である。この意識は、イギリス人こそ世界の中心にあり、もっとも有力・優秀なエスニック集団であるとの前提によっている⁷⁷。

ロスコーの著作においては、こうした特徴がはっきりと看取できる。しかしながら、それは 18 世紀の「時代精神」でも、イギリス人の「国民性」でもなかった。むしろそこでは、さまざまな立場・視座が混在していたのである。そうしたなかでかれは、あえてみずから人種差別・帝国意識のほうを選びとったのである。この点を明らかにするためにするために、本節の最後では、かれの友人 E・ラシュトン（Edward Rushton）の奴隷貿易廃止論にも言及する。

（1）ロスコーのアフリカ社会像

ロスコーは、ヨーロッパ人のもたらした奴隷貿易のせいで、アフリカ社会がむしばまれていると考えた。このことは、『アフリカの悪』（1787～8 年）という散文に明らかである。それによれば、かつての西アフリカでは、温和で陽気な黒人たちが、何の憂いも不自由もなく、熱帯の原始的な生活を営んでいたという。だが、ヨーロッパから奴隷商人がやってきたことで、すべては一変した。かれは告発する。

まだ見ぬ腐敗に満ちみちた／不吉な暗雲がたれこめ／かの人々に荒廃がもたらされた／アフリカの平和な岸辺に／ヨーロッパからの邪悪な災いが到来したのだ／それはとつぜん善を悪に変えた／自然は衰弱させられ、狂った手で引き裂かれた／不変不朽のアフリカらしきは一撃で粉碎され／社会のきずなも破壊された／憎悪がすべての場所で燃え上がり／際限なき復讐が繰り返された／陽気に歌い踊る人々もういない／裏切り者がわなをしかけるかもしれないから／かくて不信感人が人から人を遠ざける／名もなき山や平原を駆けめぐり／早朝に獲物を追う狩人はもういない／なぜならトラやヒョウよりも獰猛なかれの同胞に出会ったら／捕食されてしまうかもしれないから／隣接する国々のあいだでは戦争が始まった／かつてない闘争心を秘めて戦場におもむく／高貴なる征服の精神はもはやなく／恥知らずなヨーロッパ人に捕虜を売り渡そうという／憎むべき強欲のみを胸に秘めて⁷⁸。

このようにロスコーは、「邪悪な」ヨーロッパ人の誘惑によって、「無垢な」アフリカ人が奴隷貿易に手を染めるようになったと弾劾する。さらに、かれの別の著作、すなわち先述の『奴隷貿易にかんする一般的見解』によれば、ここでのイギリス人とアフリカ人とのあいだでの取引は、いわゆる不等価交換であったという。つまり、後者は前者によって「使いものにならない粗悪品」をつかまされるかわりに、貴重な人的資源を収奪されるというのである⁷⁹。

かかる想定が 100 パーセント誤りであることは、あらためて指摘するまでもない。事實は、本論の第 1 章で示されたとおりである。西アフリカにおいて、住民が何の憂いも不自由もなく、

毎日のように歌い踊っていた時代などはない。そこでは、戦争・内乱・奴隷制などの、暴力的な支配・従属の契機と、つねに隣り合わせであった。また奴隷貿易は、ヨーロッパ人のもたらす工業製品を欲したアフリカ人が、みずから選択したからこそ成立したものである。もしもかれら・かの女らがそれを少しでも拒否していれば、結果は大きく異なっていた。イギリス人は、西アフリカに 1 歩でも足を踏み入れれば、たちどころに無力な主体となってしまうため、その住民に何かを強制することなど不可能であった。それゆえに、「使いものにならない粗悪品」と、貴重な人的資源との交換も起こりえなかった。アフリカ人は、相手が必要なものを渡すかわりに、自分が必要なものを受け取ったのである。そこで犠牲になったのは、ほかでもない、アフリカ社会の寄る辺なき弱者であった。しかしながら、あわれ、事情を知らないロスコーは、みずからの偏見をみごとに露呈してしまった。すなわち、アフリカ人こそ、みずからにとっての利益が何なのかも理解できない、愚劣な人種であるというそれである。

(2) ロスコーのアフリカ人像(一)―中間航路

ロスコーは、奴隷貿易によってアフリカ人が破滅させられていると考えた。このことは、『アフリカ人』(1788 年)という散文に明らかである。これは、あるアフリカ人青年にまつわるフィクションであり、舞台は、西アフリカから南北アメリカへと向かう船舶のなかである。この旅程は、一般に「中間航路」(Middle Passage)とよばれ、奴隷貿易の恐ろしさを象徴するものとして、よくとりあげられる⁸⁰。ただし本作は、いわゆる典型的な「中間航路」の描写とは、おもむきを異にしている。全文を引用しよう。

どこまでも広がる風いだ海に／月の光が照らし出される／穏やかな夜風は次第に弱まり／宵闇のなかをゆっくりとそよぐ。

マラ톤は船首に立ち／哀しみにみちた顛末を語る／人知れぬ涙はとめどなく溢れ／ため息は夜風にかき消される。

おお哀れな者よ／故郷と自由を奪われ／悲嘆に暮れたかれは叫ぶ／おおマラトン、いつそあのかとき死んでいればよかった／潮がおまえを運ぶ前に。

アンゴラの木立を散策したあのかとき／夢や希望が胸にあふれていた／そこで恋人と物語しあったあのかとき／悲しみがやってくるとは夢にも思わなかった。

不意に茂みから人さらいが飛び出してきて／悲鳴が辺り一面にこだました／絶望のさけびには耳を貸さず／その男はかれを激しく怒鳴りつけた。

呪うべき無慈悲な縄でしばりつけられ／マラ톤は恋人から引き離された／自由がきかなくなった手から／大切なものがすべて失われた。

涙はたえず頬をつたう／まぶたからあふれて止まらない／それはあたかも心の激流をいっばいに飲み込んだ／一筋の悲しみの矢のようだ。

耳を傾ければ、夜の静寂のなかに／わたしのアディラの声が聞こえる／青白いかすかな光のなかで／いとしきかの女の姿がみえた。

なめらかな海上の平面をかの女はすべっていた／薄い靄が波のうえを覆っている／かの

女はやさしく語りかけてきた／その声はいまでもそこで聞こえるという。

かの女はさげんだ、ああマラトン急ぐのよ／こちらではもう専制は終わっているのよ／暴君は特権を剥ぎ取られたのよ／だから、アディラはもう悲しくないわ。

かすかな光に包まれて彼女は沈んでいき／その姿はおぼろげになってゆく／行かないでくれ、わたしのアディラ、ここにいてくれ／かの女は手招きしている、あとを追わねば。

あくる日、何も知らない白人は／わたしをまだ奴隷だと思っているだろう／だがわたしの足かせはすでに海のなか／そして（わたしは）勇者の国へと向かっているのだ⁸¹。

みられるとおり、アンゴラの青年マラトン（Maraton）は、アディラ（Adila）との逢瀬のさなかに、現地の奴隷商人に誘拐された。かれは恋人から引き離され、奴隷船舶に乗せられた。月夜の甲板で悲嘆に暮れていたところ、洋上にかの女の幻影をみた。結末は入水自殺である。

本作の特徴は、読み手がマラトンに感情移入できるような、表現上の工夫である。それを通じてロスコーは、黒人のマラトンも、白人の読み手も、ひとしく人間の心をもつというメッセージを伝えようとしたのである。このことは、リヴァプールの企業家・船員たちが、黒人奴隷を「商品」としてしかみていなかったことを考慮すれば、いちおうは高く評価できよう。

しかし、マラトンに主体性がみられないことは問題である。かれは、みずからのおかれた状況を直視して、みずからの運命を切り開くような行動をとっていない。かれは結局のところ、1人の受け身の犠牲者であるにすぎない。かれは「楽園」としてのアフリカ、そこでのロマンスを回想したあとで、みずからの人生に終止符を打ってしまう。こうした描写を通じて、ロスコーが読み手に伝えようとするのは、マラトンのような青年のために、外部の優秀・有力なものたちが手を差し伸べねばならない、ということである。むろんそれは、イギリス人の責務であった。ここで想起されるのは、J・ウェッジウッドの考案による、SEASTのロゴマークである。それは先述したとおり、ひざまずいて、祈るようなポーズをとりながら、「わたしは人間ではないのか。あなたたちの兄弟ではないのか」とさげふ、いかにもあわれな黒人の姿をあしらったものである⁸²。ロスコーやウェッジウッドの答えはこうであろう。諸君はもちろん人間だ、商品などではない、しかし、資質・能力において劣った人間だ。

（3）ロスコーのアフリカ人像（二）—カリブ農園

ロスコーの表現する黒人には主体性がなかったが、現実はそうではなかった。1791年8月、フランスのカリブ植民地であるサン・ドマング（Saint Domingue）において、数万人の奴隷たちが蜂起した。そればかりではない。かれら・かの女らは、農園主をはじめとする白人たちの、無差別・大量虐殺を行ったのである。いわゆる、ハイチ革命の序曲であった⁸³。この事件は全ヨーロッパを震撼させたが、とくに奴隷解放論者を慌てさせ、奴隷制擁護論者を勢いづかせた。後者は、奴隷たちに自由・平等をなまじ約束すると、かれらはみずからそれを完全なものにしようとして、陰惨なテロ行為にうったえるようになる、と力説した⁸⁴。この考えは、史実に照らしてみれば、たとえ道徳的には問題があるにせよ、情況判断としては的確である。じっさい、南北アメリカの奴隷たちは、大西洋の対岸において自由・平等がさげられるようになると、これに呼応

して、各地で武装蜂起を起こしたのである⁸⁵。

だがロスコーは、そうした言論にはがまんならなかった。そこでかれは、4年ぶりに奴隷制問題にかんする新作を上梓する。題して、『サン・ドマング黒人反乱の原因について』（1792年）である。そこにおいて、かれは次のように主張した。

かかる惨状（サン・ドマングにおける奴隷による白人の殺戮）は嘆くべきことであろうか。確かにそのとおりだ。それでは驚くべきことだろうか。いや、決してそんなことはない。重労働にあえぐ黒人の状況はどうであったか。その労働は継続的な暴力によって強制されたものではなかったか。即座の鞭打ちにおびやかされて、余儀なくされたものではなかったか。

（かれらの表面的な）献身・優しさ・忍耐は、すなわち圧制と虐待の産物にすぎないのではなかったか。アフリカ人に特有の獰猛さが、長期にわたる屈辱的な体験をとおして研ぎすまされたとき、その復讐心は誰に向かうといえようか⁸⁶。

ロスコーは、サン・ドマングにおいては、黒人奴隷の非人間的な待遇がまずあって、それが惨劇の原因であったことをほのめかした。要するにかれは、人権思想や奴隷解放論は、暴力行為の発生とは無関係であるとし、それらを免責したのである。このことは、自由・平等の擁護者を自認するかれにとって、ぜひとも強調したい点であった。

しかしながら、ロスコーは決して、反乱を起こした奴隷たちに共感を示してはいないし、ましてや、かれら・かの女らの主体性を尊重しようともしていない。かれの主張は、奴隷に対する制御が不能になったとき、「アフリカ人に特有の獰猛さ」が発露され、「嘆くべき」事態を招来したとしても、「驚くべき」ではないということである。つまり奴隷たちは、何らかの要因で統治に欠陥が生じた場合、条件反射的に残忍な行動をとってしまう生き物として想定されているのである。かれはこうもいう。

それ（反乱）を誘発させたのは、国民議会によって制定された、奴隷の統治あるいは救済のための諸法規であったか。断じてちがう。なぜなら、この問題にかんする国民議会の法令は、総じて次のごとくうたっているからである。「奴隷にかんするすべての諸法規は、農園主によって制定されるべし」。つまり、あの恐るべき無秩序の責任が、かりに国民議会にあるとすれば、（サン・ドマングに干渉しすぎたことではなく）干渉しなかったことである⁸⁷。

このようにロスコーは、フランスの国民議会が、よりもよって横暴な植民地白人に統治をゆだねてしまい、みずから適切に黒人奴隷を保護することを怠ったために、「恐るべき無秩序」が生じたのだと告発する。つまり、黒人がみずから自由を勝ち取ったり、社会を形成したりする資格や能力を有するとは、はじめから想定されていないのである。ロスコーの暗示するところはこうである。なるほど、黒人は人間であるから、商品のように扱ってはならない。しかし同時に、白人よりも残忍であり愚劣であることはたしかである。したがって、理性ある白人が、無知な黒人に自由をさずけたうえで、かれらを合理的に統治する方法を精錬すべきである、と。かかる態度は人種差別的であり、また濃厚な帝国意識に裏づけられたものである。

（4）エドワード・ラシュトンとその作品

ロスコーの作品には、人権擁護の立場が貫徹されているものの、他方で、人種差別・帝国意識が内包されている。これらを流布・拡散したかれの功罪は、いかに判定されるべきであろうか。次のように述べて、ロスコーを免罪することも可能にみえる。すなわち、18世紀末のイギリスとはそういう時代・場所であった。人種的偏見にとらわれていたのは、かれにかぎった話ではない。これは一見もっともらしい反論である。しかしながらロスコーが、ほかのコンセプトをとりいれようと思えばできたのに、あえてそうしなかったことは、指摘されるべきであろう。というのもかれは、奴隷貿易問題にまつわる作品でも、人種差別・帝国意識にはさほど「汚染」されていないものを、読み知ってはいたからである。したがってかれは、そうした可能性をあえて採用せず、主体的につぶしていたということになる。その作品とは、かれの友人によって書かれたものである。そこで本項では、その人物・作品に焦点を合わせてみたい。

その友人とは、名をエドワード・ラシュトンという。リヴァプールの貧しい理髪店主の息子として生まれ、船員となり、奴隷船舶にも乗務した。病気で失明したのちは退職し、居酒屋店主・印刷業などを転々とする。作家としても活動したが、暮らし向きはよくなかった。「ホイッグ」よりもさらに急進的な共和主義者であったが、ある時期から奴隷解放論にも共鳴するようになり、SEAST会員になった。それゆえにロスコーとも交流したが、社会的境遇・政治的立場の差異ゆえに、さほど親密なつきあいはしなかったという。かれはアメリカ独立革命に熱狂したが、新生の合衆国が奴隷制を廃絶しないことに憤慨していた。1797年、かれはアメリカ前大統領にして、チェサピーク湾岸のタバコ農園主でもあったジョージ・ワシントンに対し、奴隷の解放を勧告する手紙をしたためている⁸⁸。その後もラシュトンは、ジョン・ミルトンになぞらえられるような盲目の共和主義者として、辛酸をなめた。1814年没。58歳であった⁸⁹。

ラシュトンはさまざまなテーマの詩を書いているが、そのなかには、奴隷制問題にまつわるものもある。それらの作品に貫徹するのは、ただひたすらに自由をもとめる黒人奴隷の主体性と、それを不断に抑圧するカリブ植民地の統治構造、これら2つのあいだの相克であった。『西インドの歌』(1787年)においてかれは、ジャンバ(Jamba)なる奴隷に、次のようにいわしめている。「(白人たちは)食欲に駆られて他者を奴隷にし／かれらが享受する自由を賞賛し／しかも奴隷たちにはそれを与えない／われわれは故郷の岸辺から引き離され／そこを目にすることは2度とない⁹⁰」。かれはまた次のように述べ、友人アドマ(Adoma)に反乱の計略をもちかける。

「大丈夫、われらの崇高なる目標はいまや達成されつつある／じきに血まみれとなった抑圧者どもを目にしよう／かれらはあの背の高いサトウキビのようにざっくりと切り裂かれるのだ／かれらは苦痛にあえぎ、われらは無上の幸福を味わう／かれらの断末魔を目にすると、何と愉快なことであろう・・・⁹¹」しかし、気弱なアドマはこう述べる。

それを考えるほどにわたしの心はかき乱される／生きながら晒し台に括られたペドロのことを思うと／6日間も生き続けたかれの運命／ものすごい形相とすさまじい苦痛／かれは舌を伸ばして雨水をすすろうとしていた／かれは頭を左右に揺らしてもがいていた／かれはみずからの腕の肉にかじりついていた⁹²。

アドマは、友人ペドロ(Pedro)の最期を回想する。ペドロは、反乱への加担を疑われて捕らえ

られ、想像を絶する拷問のすえに殺された。すなわち、生きながら晒し台に固定され、水・食糧を与えられずに餓死したのである。カリブ植民地ではこのように、反抗的な奴隷を殺害するさい、死の苦痛をできるだけ延長させ、その光景を仲間たちに目撃させるという措置がしばしばとられた。カリブの白人農園主は、数において黒人奴隷におとるため、かかる陰惨なテロを行って、統治の安定化をはかっていた⁹³。つまり、かれらもまた恐怖に支配されていたのである。ラシュトンは、このあたりをじつに巧みに描写している。

追い詰められたアドマに残された最後の選択肢は、山岳地帯に逃亡して、自由の身になることであつた。しかし、陰謀をもちかけたジャンバは、適切にも次の事実を指摘する。

何と愚かな、おまえは何も知らない／密林の王はわれらが敵／かれの部下は大勢いて／逃亡奴隷を捕獲するために雇われる／（われらが）自由を求めて逃亡を試みても／身を隠すべき岩も森もない／ツグミたちですら群れをなし／追跡者たちの呪うべきたくらみに手を貸すのだ／かくて逃亡奴隷は捕らえられ／きつく縛られて暴君のもとへ送り返される／山へ逃れようと谷へ逃れようと／傷ついた黒人はいつでも敵に出会うのだ⁹⁴。

ここで言及されるのは、ジャマイカの山岳地帯などに点在した、かつての反乱・逃亡奴隷およびその子孫からなる共同体である。これはよく、自由を勝ち取った黒人たちの解放区であるかのように誤解される。しかし、そこは決してユートピアなどではなかった。そこの人々は、新たな逃亡奴隷を捕獲したり、新たな奴隷反乱の鎮圧に加担したりして、白人農園主たちとの緊張をはらんだ共存関係を維持していたのである。つまりかれらは、奴隷制農園に協力することで、みずからの独立と安全とを保障されたのである。それだけではない。かれらが、立場の弱いほかの黒人を奴隷にすることもふつうであつた。これらのこともまた、カリブ植民地という極限情況に適応しようとする、黒人奴隷の主体性のあらわれである。同じ黒人であるという理由だけで、たがいに連帯し助け合うというのは、この場合には幻想であつた⁹⁵。

ラシュトンはまた、『トゥサンより兵士たちへ』（生前未発表）において、ロスコーとはまったく違ったやり方で、サン・ドマング奴隷反乱を表現する。以下はラシュトンの想像する、反乱の指導者トゥサン・ルヴェルチュールの演説である。

黄褐色のライオンが咆哮をあげる／燃えさかる故郷の国々から引き離され／むちに追い立てられ鎖につながれ／未開の荒野を耕しながら死ぬのか／威厳ある風貌のおまえたちよ／われわれはガリアの支配に膝を屈するのか／われわれは再び鋏をもたされるのか／われわれは再びあの苦痛を味わうのか／それともわれわれは立ち上がるのか／稲妻のような力で敵を粉碎し、その行く手を阻むのか・・・。

わたしを取り巻くおまえたちの目は／怒れる魂をくつきりと映し出している／おまえたちのいかつい眉毛のはしに／自由を求める固い意志がみえる／そうだ、おまえたちの力強い表情を見ていると／フランスがじきに後悔することが確信される／かれらはじきに餓えたサメのえじきとなろう／かれらの亡骸はハゲタカに引きちぎられよう／おお何と輝かしき名誉、さあいまだ、悪人ども、かかつてこい⁹⁶。

このトゥサンは最後に、「自然の偉大な掟」を叫ぶ。すなわち、「自由に生きるか、勇敢に戦って

死ぬか、2 つに 1 つだ⁹⁷」。かれにとっての「自由」とは、心あるフランス人にひざまずいて拝領すべきものではなく、みずから生命を賭して勝ち取るべきものであった⁹⁸。

ラシュトンの描く奴隷たちは、つねにみずから考え行動し、みずから望ましい運命を選びとろうと苦闘している。かれらのなかには、残虐な刑罰を恐れるあまりに反乱への加担を躊躇するものや、白人との対等な立場での交渉を通じて、他の黒人を犠牲にしつつも、みずからの共同体の独立を維持しようとするものがいた。最後に紹介した想像上のトゥサンのように、みずからの手で自由をもぎ取るため、わが身をかえりみずに武装蜂起を組織するものもいた。かかる群像が、ロスコーの描くマラトンや、ウェッジウッドのロゴマークに登場する黒人とは性格を異にすることは、あらためて指摘するまでもない。

小括

ロスコーは、奴隷貿易問題をテーマにして、人種差別・帝国意識に「汚染」されたアフリカ社会・アフリカ人像を流布・拡散した。かれの描くアフリカ人は、素朴・陽気・従順であり、また原始人のような獰猛さをそなえ、さらには白人が手を差し伸べないかぎり、正しい道を選択することもできなかった。かれらはあるときには、何も考えずに歌い踊っており、強欲なヨーロッパ人から、簡単にだまされてしまった。またあるときにはひざまずいて、「わたしは人間ではないのか」と泣きさけび、白人たちに慈悲を請うた。そしてあるときには、突如として白人たちの無差別・大量虐殺におよんだ。ロスコーの言説はつまるところ、アフリカ人は、みずからを統治しうだけの資質・能力をもたず、したがって、啓蒙されたイギリス人がかわりにこれを担うべきである、というメッセージを伝えていたのである。

ロスコーは、無知ゆえにほかの選択肢をもっていなかったのであろうか。ある程度まではそうかもしれない。しかしながら、当時はさまざまな情報・視座が錯綜していたため、それらを比較吟味したうえで、みずからの態度を明らかにすることもできたはずである。じじつ、友人ラシュトンの描く、まったく異なったアフリカ人像も、かれの手の届く範囲に浮遊していた。しかしながらロスコーは、そうしたオルタナティヴを知ったうえで、あえてそれを取りいれなかった。つまるところかれは、人種差別・帝国意識に「汚染」されたアフリカ社会・アフリカ人像を、みずから主体的に選択し、また再生産することで、世人の好評を得たのである。

おわりに

ウィリアム・ロスコーにとって、奴隷貿易廃止運動はいかなる意味があったか。それは第 1 に、かれの作家としてのキャリアを押し上げる効果をもった。そして第 2 に、かれが啓蒙主義、およびそれに源流を発する、人権思想を普及する手助けをした。これらは、かれが当初より強く望んでいたことである。

第 1 の点について。1780 年代後半のイギリスでは、奴隷貿易問題をテーマにした論説文・小

説・詩などを発表することで、みずからの才能を世に知らしめ、名誉を獲得しうる可能性が極大になっていた。奴隷貿易は、すでにメディアの発達のおかげで、大多数の国民からよく思われていなかった。じっさいそれは、近世のブリテン島の風土とは、もともと相性がよくなかったのである。加えてそれは、ときの2大党派の両方から、イギリス帝国の安定的な統治に対する重大な障碍となっていることを、問題視されていた。七年戦争・アメリカ独立戦争の経験を経て、広大な植民地では、白人・黒人・先住民のあいだでのバランスが維持されねばならない、と考えられるようになったからである。もしも植民地において、現状のような白人の一強状態が続けば、いずれかれらは本国に反旗をひるがえすであろう、と恐れられたのである。

第2の点について。1780年代後半のイギリスでは、カルヴァン主義と啓蒙主義とのあいだで、文化的なヘゲモニー闘争が生じていた。前者は国教会体制に合流し、後者はその外縁に布陣した。かかる両派は、奴隷貿易問題という天王山において、優位を確保することにこだわった。なぜならそれは、すでに国民の大きな関心のまとなっていたからである。それゆえにカルヴァン主義者たちは、奴隷貿易こそ、国民全体が恥じるべき宗教的・道徳的な罪であり、これを放置すれば、国民共同体の頭上に天罰が落とされるなどといった⁹⁹。対照的にロスコーは、人権思想をよりどころにしつつ、「万人は生まれながらにして自由・平等である」から、奴隷貿易は容認されないと力説した。いうまでもなく、イギリスを含む21世紀の国際社会においては、すでに奴隷所有・売買は禁止されており、そのことを表現するさいには、カルヴァン主義的な贖罪思想ではなく、啓蒙主義的な人権思想にもとづく言語が用いられている¹⁰⁰。したがってロスコーは、今日においてもまったく色あせていない、生得・不可侵の人権という観念を流布・拡散したという点で、いちおうは高く評価されるべきである。

だが、奴隷貿易はイギリス人によってタブー視され、また人権侵害であり、あるいは道徳的な罪であったとしても、経済合理的な営為であったことはたしかである。ロスコーは、この事実を受け入れることができず、かわりに、フィロゾフ的な推論を駆使して、奴隷貿易イコール経済非合理的であるとのテーゼをひねり出した。これは誤謬であったが、問題はそこではない。それは、リヴァプールの企業家、カリブの農園主のみならず、アフリカ人の資質・能力をも軽んじる考えであった。さらにかれは、邪悪で強欲な前2者が、素朴で無知な後者をだまし、搾取しているなどという物語を精錬した。そのうえかれは、啓蒙されたイギリス人こそ、アフリカ人を正しき道へとといざなうべきと主張するようになった。かかる意見を表明する過程においてかれは、人種的偏見にみちたアフリカ社会・アフリカ人のイメージを再生産し、また流通させた。しかもかれは、ほかの選択肢をもっていたにもかかわらず、あえてそうしたのである。かれの行為は、19世紀のイギリスが、「文明化の使命」なる看板を掲げて、アジア・アフリカに進出したこと、そしてそのさいに激烈な差別・搾取・暴力が付随したことを考慮すれば、それらに対して抗議する国内世論を弱体化させ、結果的にそれらを推進する役割を果たしてしまったという意味で、重大な責任を問われるべきである¹⁰¹。

最後に。むろんロスコー1人が、人権思想を浸透させた栄誉に浴するのではないし、また人種差別・帝国意識を流布した責任を負うのではない。しかし、ある時代・場所に特有の文化が創造

されるのは、周囲の環境に適応しつつ、みずからの立場を少しでも改善しようと行動する、それぞれのアクター間での協調ないし相克を通じてである。したがって、ロスコーという 1 つのアクターの、奴隷貿易問題に対する思考と行動とを厳密に追跡したことは、決して無意味ではない。とはいえそれらが、後代の文化形成にいかなる影響を与えたのか、いいかえれば、19 世紀前半のリヴァプールに特有の文化を創出することに、いかに寄与したのか、という点は、もう少し解明されるべきである。だがそのためには、ロスコーの思考・行動に正面から反発した、別のアクターに注目せねばならない。そこで次章では、リヴァプールの「反」奴隷貿易廃止論者たちに焦点が合わせられるであろう。

¹ Thomas Clarkson, *The History of the Rise, Progress and Accomplishment of the Abolition of the African Slave Trade by the British Parliament*, (London, 1808), I, pp. 368-414.

² F. E. Sanderson, 'The Liverpool Abolitionists', in Roger Anstey and P. E. H. Hair, (eds.), *Liverpool, the African Slave Trade, and Abolition: Essays to Illustrate Current Knowledge and Research*, (Liverpool, 1976), p. 207.

³ Clarkson, *History*, I, pp. 368-414.

⁴ William Wallace Currie (ed.), *Memoirs of the Life, Writings, and Corresponding of James Currie, M.D., F.R.S. of Liverpool*, (London, 1831), pp. 121-2.

⁵ Reginald Coupland, 'The Abolition of the Slave Trade', in J. Holland Rose, A. P. Newton and E. A. Benians, (eds.), *The Growth of the New Empire 1783-1870*, (Cambridge, 1940), pp. 189-93; Christopher Leslie Brown, *Moral Capital: Foundation of British Abolitionism*, (Chapel Hill, NC, 2006), pp. 33-101; John Donoghue, 'Out of the Land of Bondage': the English Revolution and the Atlantic Origins of Abolition', *AHR*, 115(4), (2010), pp. 943-74.

⁶ Brown, *Moral Capital*, pp. 391-4; 山本通『近代英国実業家たちの世界—資本主義とクエイカー派』同文館、1994 年、41～77 頁。

⁷ Brown, *Moral Capital*, pp. 391-4.

⁸ John R. Oldfield, *Transatlantic Abolitionism in the Age of Revolution: an International History of Anti-Slavery, c. 1787-1820*, (Cambridge, 2013), pp. 15-6.

⁹ Brown, *Moral Capital*, pp. 412-33.

¹⁰ Judith Jennings, *The Business of Abolishing the British Slave Trade, 1783-1807*, (London, 1997), pp. 34-5.

¹¹ Brown, *Moral Capital*, pp. 433-50.

¹² *Ibid.*, pp. 333-89.

¹³ Brown, *Moral Capital*, pp. 433-50; John R. Oldfield, *Popular Politics and British Anti-Slavery: the Mobilisation of Public Opinion against the Slave Trade, 1787-1807*, (Manchester, 1995), pp. 70-95; id. 'Introduction', in Oldfield, (ed.), *The Abolitionist Struggle: Opponents of the Slave Trade*, (London, 2003), pp. xii-xiv.

¹⁴ Oldfield, *Popular Politics*, pp. 155-84; id., *Transatlantic Abolitionism*, pp. 59-60; id. 'Introduction', p. xiv.

¹⁵ Oldfield, 'Introduction', p. xiv; *Hansard*, 27, (1788-9), cols. 573-99, 638-52; 市橋秀夫「イギリス奴隷貿易廃止運動の史的分析（1787～1788 年）」『三田学会雑誌』81（4）、1989 年、682～703 頁。

¹⁶ オラウダ・イクイアーノ（久野陽一訳）『アフリカ人、イクイアーノの生涯の興味深い物語』研究社、2012 年。David Richardson, 'Through Looking Glass: Olaudah Equiano and African Experiences of the British Atlantic Slave Trade', in Sean Hawkins and Philip D. Morgan, (eds.), *Black Experience and the Empire*, (Oxford, 2004); Paul E. Lovejoy, 'Autobiography and Memory: Gustavus Vassa, alias Olaudah Equiano, the African', *S & A*,

27(3), (2006), pp. 317-347.

¹⁷ Oldfield, 'Introduction', p. xvi; 並河葉子「反奴隷制運動と出版物—西インド産砂糖ボイコット運動の事例を中心に」『外国学研究』53、2002年、109～25頁。

¹⁸ Oldfield, *Popular Politics*, pp. 41-69; id., 'Introduction', xiv-xvii; id., *Transatlantic Abolitionism*, pp. 77-8.

¹⁹ 鈴木亮（浜林正夫ほか編）『『国富論』とイギリス急進主義』日本経済評論社、2009年、167～427頁。

²⁰ Oldfield, *Transatlantic Abolitionism*, pp. 103-61.

²¹ Oldfield, 'Introduction', p. viii; id., *Transatlantic Abolitionism*, pp. 164-94.

²² Boyd Hilton, '1807 and All That: Why Britain Outlawed Her Slave Trade', in Derek R. Peterson, (ed.), *Abolitionism and Imperialism in Britain, Africa, and the Atlantic*, (Athens, OH, 2010), pp. 63-83.

²³ Oldfield, 'Introduction', p. viii; id., *Transatlantic Abolitionism*, pp. 164-94; Seymour Drescher, 'Whose Abolition? Popular Pressure and the Ending of the British Slave Trade', *Past and Present*, 143, (1994), pp. 136-66.

²⁴ 前節を参照。

²⁵ 同上。

²⁶ 同上。

²⁷ Christopher Leslie Brown, 'The British Government and the Slave Trade: Early Parliamentary Enquiries, 1713-83', in Stephen Farrel, et. al., (eds.), *The British Slave Trade: Abolition, Parliament and People*, (Edinburgh, 2007), pp. 27-41.

²⁸ 本論第1章参照。

²⁹ 北アメリカ先住民の奴隷制への関与については、Alan Galloway, *The Indian Slave Trade: the Rise of the English Empire in the American South, 1670-1717*, (New Haven, CT, 2002); Norton Garfinkle and Daniel Yankelovich, 'Introduction', in Garfinkle and Yankelovich, (eds.), *Indian Slave Trade: the Rise of the English Empire in the American South, 1670-1717*, (New Haven, CT, 2002), pp. 1-19; Christian Snyder, 'Conquered Enemies, Adopted Kin, and Owned People: the Creek Indians and their Captives', *Journal of Southern History*, 73, (2007), pp. 255-88.

³⁰ John Brewer, 'Commercialisation and Politics', in Niel McKendrick, Brewer and J. H. Plumb, *The Birth of a Consumer Society: the Commercialisation of Eighteenth-Century England*, (London, 1982), pp. 197-262; Paul Thomas, 'Changing Attitudes in an Expanding Empire: the Anti-slavery Movement, 1760-1783', *S & A*, 5(1), (1984), pp. 50-72.

³¹ 18・9世紀転換期のイギリス政治史については、Boyd Hilton, *A Mad, Bad, and Dangerous People?: England 1783-1846*, (Oxford, 2006), pp. 110-94.

³² *Ibid.*, pp. 110-94; Joanna Innes, 'Politics and Morals: the Reformation of Manners Movement in Later Eighteenth-Century England', in Eckhart Hellmuth, (ed.), *The Transformation of Political Culture: England and Germany in the Late Eighteenth Century*, (Oxford, 1990), pp. 57-118; Brown, *Moral Capital*, pp. 333-89.

³³ Hilton, *Mad, Bad*, pp. 110-94; G. M. Ditchfield, 'The Campaign in Lancashire and Cheshire for the Repeal of the Test and Corporation Acts, 1787-1790', *THSLC*, 126, (1976), pp. 109-38; [S. Heywood], *The Right of Protestant Dissenters to a Compleat Toleration Assented: Containing an Historical Account of the Test Laws, and Shewing the Injustice, Inexpediency, and Folly of the Sacrament Test, as Imposed, with Respect to Protestant Dissenters; with an Answer to the Objection from the Act of Union with Scotland*, (London, 1789).

³⁴ Hilton, *Mad, Bad*, pp. 110-94.

³⁵ Brown, *Moral Capital*; id., 'Empire without Slaves: British Concepts of Emancipation in the Age of the American Revolution', *WMQ*, 56(2), (1999), pp. 273-306; id., 'From Slaves to Subjects: Envisioning an Empire without Slavery, 1772-1834', in Sean Hawkins and Philip D. Morgan, (eds.), *Black Experience and the Empire*, (Oxford, 2004), pp. 111-140; Trevor Burnard, 'Powerless Masters: the Curious Decline of Jamaican Sugar Planters in the Foundational Period of British Abolitionism', *S & A*, 32(2), (2011), pp. 185-98; David

Lambert, *White Creole Culture, Politics and Identity during the Age of Abolition*, (Cambridge, 2005).

³⁶ Brown, *Moral Capital*, pp. 333-462.

³⁷ Godfrey W. Mathews, *William Roscoe, a Memoir*, (London, 1931), pp. 7-9; Donald Macnaughton, *Roscoe of Liverpool: His Life, Writings and Treasures*, (Birkenhead, 1996), pp. 1-4; Anne Holt, *Walking Together: a Study in Liverpool Nonconformity 1688-1938*, (London, 1938), pp. 151-2.

³⁸ Mathews, *William Roscoe*, pp. 1-18; George Chandler, *William Roscoe of Liverpool*, (London, 1953), pp. 1-52; Macnaughton, *Roscoe of Liverpool*, pp. 1-14.

³⁹ レイスとその家族については、Ray Costello, *Black Liverpool: the Early History of Britain's Oldest Black Community, 1730-1918*, (Birkenhead, 2001), p. 25; Robert Bennett, *The Voice of Liverpool Business: the First Chamber of Commerce and the Atlantic Economy, 1774-c. 1796*, (Liverpool, 2010), pp. 37, 89, 91, 115, 153, 158, 163. 奴隷貿易商のアスピノール家については、Hugh Crow, *Memoirs of the Late Captain Hugh Crow, of Liverpool: Comprising a Narrative of His Life...*, (London, 1830), pp. 66, 89-90; Walter Lewin, *Clarke Aspinall: a Biography*, (London, 1893), pp. 19-55.

⁴⁰ C. N. Parkinson, *The Rise of the Port of Liverpool*, (Liverpool, 1952), p. 128; David J. Pope, 'Shipping and Trade in the Port of Liverpool 1783-1793', (Unpublished PhD Thesis, Liverpool University, 1970), pp. 461-71.

⁴¹ William Roscoe, *Mount Pleasant, a Descriptive Poem*, (Liverpool, 1777), pp. 13-5.

⁴² Sanderson, *Liverpool Abolitionists*, pp. 207-11.

⁴³ なぜなら、クラークソンは4ヶ月前のSEAST幹部会において、そうした趣旨の発言をしているからである。Clarkson, *History*, I, pp. 279-82.

⁴⁴ ロスコーの著作物のリストは、次の伝記に掲載されている。Chandler, *William Roscoe*, pp. 153-6; Macnaughton, *Roscoe of Liverpool*, pp. 169-72.

⁴⁵ Oldfield, *Popular Politics*, p. 42; id., *Transatlantic Abolitionism*, pp. 78-80.

⁴⁶ [William Roscoe], *Ode to the People of France*, (Liverpool, 1789).

⁴⁷ [William Roscoe], *The Life, Death, and Wonderful Achievements of Edmund Burke, by the Author of the Wrongs of Africa*, (London, 1791).

⁴⁸ R. B. Rose, 'The 'Jacobins' of Liverpool, 1789-1793', *Liverpool Bulletin*, 9, (1961), pp. 38-9.

⁴⁹ William Roscoe, 'O'er the Vine-Covered Hills', in Chandler, *William Roscoe*, pp. 384-5.

⁵⁰ Anon., *The Poll, for the Election, of Members of Parliament, for the Borough of Liverpool: Taken between Colonel Tarleton, Bamber Gascoyne, Jun. Esq. The Rt. Hon. Richard Lord Penrhyn, and Thomas Townley, Esq...*, (Liverpool, 1790).

⁵¹ J. A. Picton, *Memorials of Liverpool Historical and Topographical, Including a History of the Dock Estate*, (Liverpool, 1875), I, pp. 232-34; James Touzeau, *The Rise and Progress of Liverpool from 1551 to 1835*, (Liverpool, 1910), pp. 607-18.

⁵² Ditchfield, 'Campaign in Lancashire and Cheshire'.

⁵³ Picton, *Memorials*, I, p. 235; Touzeau, *Rise and Progress*, pp. 623-8; Emily A. Rathbone, (ed.), *Records of the Rathbone Family for Private Circulation Only*, (Edinburgh, 1913), pp. 104-8.

⁵⁴ Picton, *Memorials*, I, pp. 235-41; Anon., *A Selection from the Early Letters of the Late Rev. William Shepherd, L. L. D.*, (Liverpool, 1855), pp. 46-9.

⁵⁵ Chandler, *William Roscoe*, pp. 87-130. ロスコーの文化活動については、Arline Wilson, *William Roscoe: Commerce and Culture*, (Liverpool, 2008); George Chandler, 'The Published and Unpublished Poems of William Roscoe', *Liverpool Bulletin*, 2 (1, 2), (1952), pp. 3-27.

⁵⁶ F. E. Sanderson, 'The Structure of Politics in Liverpool 1780-1807', *THSLC*, 127, (1978), pp. 65-91.

⁵⁷ Godfrey W. Mathews, 'Some Notes on the Liverpool Election of 1806', *THSLC*, 79, (1927), pp. 74-85.

⁵⁸ Anon., *History of the Election, for Members of Parliament, for the Borough of Liverpool*,

1806..., (Liverpool, 1806), p. 8.

⁵⁹ Anon., *An Impartial Collection of the Addresses, Songs, Squibs, &c. that were published at Liverpool, during the Election of Members of Parliament, in November, 1806*, (Dublin, 1806), p. 21.

⁶⁰ Anon., *History of the Election*, p. 29.

⁶¹ *Hansard*, 8 (1806-7), col. 962.

⁶² Henry Roscoe, *The Life of William Roscoe*, (Liverpool, 1833), pp. 283-5.

⁶³ *Ibid.*, pp. 289-90.

⁶⁴ *Ibid.*, pp. 290-304.

⁶⁵ 本論第2章参照。

⁶⁶ Touzeau, *Rise and Progress*, pp. 589-91. スペイン王カルロス3世は、1767年にすべてのイエズス会士を国外に追放した。

⁶⁷ Raymond Harris, *Scriptural Researches on the Licitness of the Slave-Trade, Shewing Its Conformity with the Principles of Natural and Revealed Religion, Delineated in the Sacred Writings of the Word of God*, (Liverpool, 1788).

⁶⁸ [William Roscoe], *Scriptural Refutation of a Pamphlet, Lately Published by the Rev. Raymond Harris, Intituled, 'Scriptural Researches of the Licitness of the Slave Trade' in Four Letters from the Author to a Friend*, (London, 1788), pp. 2-3.

⁶⁹ *Ibid.*, pp. 11-20.

⁷⁰ *Ibid.*, pp. 18-20.

⁷¹ *Ibid.*, pp. 65-6.

⁷² Wilson, *William Roscoe*, p. 127.

⁷³ [William Roscoe], *A General View of the African Slave-Trade, Demonstrating Its Injustice and Impolicy: with Hints Towards a Bill for Its Abolition*, (London, 1788), pp. 5-12.

⁷⁴ *Ibid.*, pp. 13-28.

⁷⁵ 本章第1節参照。

⁷⁶ 本論第1章参照。

⁷⁷ 詳しくは、木畑洋一『イギリス帝国と帝国主義—比較と関係の視座』有志舎、2008年、35～71頁。

⁷⁸ [William Roscoe], *The Wrongs of Africa, a Poem, Part 1*, (London, 1787), pp. 12-3.

⁷⁹ [Roscoe], *General View*, p. 15.

⁸⁰ たとえば、Srividhaya Swaminathan, 'Reporting Atrocities: a Comparison of the Zong and the Trial of Captain John Kimber', *S & A*, 31(4), (2010), pp. 483-99; イクイアーノ『アフリカ人』、37～46頁。

⁸¹ [William Roscoe and James Currie], 'The African', in Chandler, *William Roscoe*, pp. 272-3; Currie (ed.), *Memoirs of the Life*, pp. 127-9.

⁸² Oldfield, *Popular Politics*, pp. 155-84.

⁸³ サン・ドマング奴隷反乱（ハイチ革命）については、浜忠雄『ハイチ革命とフランス革命』北海道大学図書刊行会、1998年；同『カリブからの問い—ハイチ革命と近代世界』岩波書店、2003年；同『ハイチの栄光と苦難—世界初の黒人共和国の行方』刀水書房、2007年。David Geggus, 'The Haitian Revolution in Atlantic Perspective', in Nicholas Canny and Philip Morgan, (eds.), *The Oxford Handbook of the Atlantic World, 1450-1850*, (Oxford, 2011), pp. 531-49; Laurent Dubois, 'The Revolutionary Abolitionists of Haiti', in Richard Bessel, Nicholas Guyatt and Janet Rendall, (eds.), *War, Empire and Slavery, 1770-1830*, (Basingstoke, 2010), pp. 44-60; Sibylle Fischer, 'Unthinkable History? The Haitian Revolution, Historiography, and Modernity on the Periphery', in Lewis R. Gordon and Jane Anne Gordon, (eds.), *A Companion to African-American Studies*, (Oxford, 2005), pp. 360-76; Carolyn E. Fick, 'Dilemmas of Emancipation: from the Saint Domingue Insurrections of 1791 to the Emerging Haitian State', *History Workshop Journal*, 46, (1998), 1-16.

⁸⁴ David Geggus, 'British Opinion and the Emergence of Haiti', in James Walvin, (ed.), *Slavery and British Society 1776-1846*, (Baton Rouge, LA, 1982), pp. 123-49; id., 'Haiti and the Abolitionists: Opinion, Propaganda and International Politics in Britain and France,

1804-1838', in David Richardson, (ed.), *Abolition and Its Aftermath: the Historical Context, 1790-1916*, (London, 1985), pp. 113-40.

⁸⁵ João Pedro Marques, 'Slave Revolts and the Abolition of Slavery: an Overinterpretation', in Seymour Drescher and Pieter C. Emmer, (eds.), *Who Abolished Slavery? Slave Revolts and Abolitionism: a Debate with João Pedro Marques*, (New York, NY, 2010), pp. 18-38. 田村理「大西洋奴隷制、奴隷反乱、奴隷解放運動—S・ドレッシヤー、P・C・エマー編『誰が奴隷制を廃止したか』によせて」『北大史学』52、2012年、74～6頁。

⁸⁶ [William Roscoe], *An Inquiry into the Causes of the Insurrection of the Negroes in the Island of St. Domingo...*, (London, 1792), p. 3.

⁸⁷ *Ibid.*, p. 2.

⁸⁸ Edward Rushton, *Expostulatory Letter to George Washington, of Mount Vernon, in Virginia, on His Continuing to be a Proprietor of Slaves*, (Liverpool, 1797).

⁸⁹ William Shepherd, (ed.), *Poems and Other Writings, by the Late Edward Rushton to Which Added, a Sketch of the Life of the Author*, (London, 1824), p. ix-xxviii; Sanderson, 'Liverpool Abolitionists', pp. 204-5; Brian Howman, 'Abolitionism in Liverpool', in David Richardson, et al., (eds.), *Liverpool and Transatlantic Slavery*, (Liverpool, 2007), pp. 277-96.

⁹⁰ Edward Rushton, *West Indian Eclogues*, (London, 1787), p. 3.

⁹¹ *Ibid.*, p. 5.

⁹² *Ibid.*, p. 8.

⁹³ たとえば、David Barry Gaspar, 'The Antigua Slave Conspiracy of 1736: a Case Study of the Origin of Collective Resistance', *WMQ*, 35 (2), (1978), pp. 308-23.

⁹⁴ Ruston, *West Indian Eclogues*, p. 11.

⁹⁵ Marques, 'Slave Revolts', pp. 7-15; 西出敬一「プランテーション奴隷の生と死」『岩波講座世界歴史 17—環大西洋革命』岩波書店、1997年、283～307頁。田村理「大西洋奴隷制」、73～4頁。

⁹⁶ Edward Rushton, 'Toussant to his Troops', in Shepherd, (ed.), *Poems and Other Writings*, pp. 94-7.

⁹⁷ *Ibid.*, p. 97.

⁹⁸ 念のため付言すると、実際のトゥサンは、ラシュトンの想像するとおりの男ではなかった。かれはサン・ドマングに新たな強制労働を導入しようとし、奴隷貿易の再開をも容認した。そればかりか、反乱によって島を追われた白人農園主の帰還をも懇請している。かれは、ナポレオンの派遣したサン・ドマング征服軍に早々と投降してしまい、フランスに護送されてその地で没した。浜『ハイチ革命とフランス革命』、207～32頁。

⁹⁹ Granville Sharp, *The Law of Retribution; or a Serious Warning to Great Britain and Her Colonies, Founded on Unquestionable Examples of God's Temporal Vengeance Against Tyrants, Slave-Holders, and Oppressors*, (London, 1776).

¹⁰⁰ たとえば、「世界人権宣言」第4条。

¹⁰¹ イギリスの帝国主義については、木畑洋一『イギリス帝国と帝国主義』。

第 4 章 リヴァプールにおける「反」奴隷貿易廃止運動

はじめに

1788 年 1 月下旬、ウェストミンスターでは、あるうわさが駆けめぐっていた。すなわち、奴隷貿易の廃止を要求する請願書が各地から続々と集まっており、それらを受けた何らかのアクションが、ウィルバフォースなる下院議員によって起こされるらしい、と¹。このときロンドンに滞在していたリヴァプールの企業家、ジョン・タールトン（John Tarleton）は、故郷の弟クレイトン（Clayton）に、次のような私信を送った。

土曜の朝、ピット氏はわたしに人をよこし、官邸まで来るようにいった。わたしはそこで・・・アフリカ貿易の現状について説明した。わたしは首相を説得した。もしもわが島々への黒人の輸入を、今後は禁止とするような、ウィルバフォース氏の計画が実行に移されたならば、あるいは、もしも（奴隷貿易に対して）いいかげんで不必要な規制がかけられたならば、結果は、完全な破滅であると・・・²。

このようにジョンは、ウィルバフォースの動きを察知し、ピット首相への陳情をこころみたのである。この報告を兄から受けたクレイトンは、リヴァプール市当局幹部であった。かれはすぐに市長トマス・アール（Thomas Earle）ら、同僚たちとはかり、2 月 14 日、奴隷貿易廃止に反対する請願書の起草を行った³。

ここに、リヴァプール市当局および企業家たちの、20 年にわたるたたかいが幕を開けた。それは圧倒的多数の国民を敵にまわした、孤独なたたかいであった。そして負けた。もともと、最後まで人身売買の自由を守ろうとしたかれらは、一片の同情にも値しない。だが、それでもなお、かれらの思考・行動は、詳細な分析の対象となりうるのである。なぜなら、角逐する 2 そろいの思考・行動が存在する場合、一方だけが 100 パーセント勝利して、次代の文化形成を担うことは、人間の歴史にはないからである。善玉による悪玉の退治は、お話のなかのことにすぎない。なるほど、勝者はそのように喧伝するであろうが、じっさいには、かれらと敗者とのあいだで、マイナーな和解なり妥協なりが成立したはずである。それゆえに、ある係争問題の歴史的な意味を考察するためには、敗者によって生起させられたモーメントにも、目を向けねばならない。そこで本章では、まず、リヴァプールの「反」奴隷貿易廃止論者の動向を概観し（第 1 節）、次に、かれらののこした史料を手がかりに、その思想の特質を明らかにする（第 2・3 節）。最後に、それと、前章で考察したロスコーの奴隷貿易廃止論との比較検討を行う。

第 1 節 リヴァプール「反」奴隷貿易廃止運動の経緯

本節では、1788～1807 年のリヴァプールにおける「反」奴隷貿易廃止論者の動きを概観する。かれらも、かれらの敵対者と同様、第 1 に議会ロビー活動、第 2 にメディアを利用した宣伝活

動を行った。順にみていこう。

（１）議会ロビー活動とその主役たち—1788～92 年

議会ロビー活動を行ったのは、市当局である。具体的にいえばそれは、議員への陳情、およびかれらを通じての請願書の提出であった。冒頭で述べたとおり、かれらは 1788 年 2 月、奴隷貿易廃止に反対する最初の請願書を提出した。その後も毎年のように、類似の文面のそれらを出し続けている。かれらはまた、最初の請願書のときに、西アフリカ貿易船長ならびに同地駐在員の経験者をそれぞれ 2 名ずつ、ロンドンに派遣した。この 4 名はジョン・タールトンと合流し、商務院総裁のホークスベリ男爵（1st Baron Hawkesbury, Charles Jenkinson）のもとへ陳情に行った。ホークスベリはこの 5 人を、奴隷貿易の事業者側の証人として、枢密院に召喚した。かれはもともと、リヴァプール市当局や奴隷貿易に対し、非常に好意的な政治家であった。1796 年には、初代リヴァプール伯爵に叙せられている⁴。

市当局はまた、リヴァプール選出の下院議員 2 名をたよりにすることができた。このときの現職は、バンバ・ガスコイン（Bamber Gascoyne jr）ならびにペンリン男爵（1st Baron Penrhyn, Richard Pennant）である。かれらは、それぞれランカシアおよびウェールズの地主であり、リヴァプールの企業家ではなかった。だがともに、奴隷貿易の廃止はもちろん、それに対するいかなる制限も認めるつもりはなかった。ガスコインは市当局のあやつり人形であり、寡黙にして鈍重、無能との評判であった。ペンリンはもともと市当局から距離をおいていたため、そのぶんポイントをかせごと、本会議の場では大げさな熱弁をふるった。だが結局のところ、1788 年 6 月の、奴隷貿易制限法案の可決をさまたげることはできなかった⁵。

1790 年 6 月の下院選挙のさい、現職の 2 人にとって、強力なライバルがあらわれた。バナスタ・タールトン（Banastre Tarleton）である。かれは先述のジョンとクレイトンの兄弟にあたり、リヴァプールの由緒ある海外貿易商の家庭に生まれ育った。だが長男ではないかれは、軍人としてのキャリアを歩んだ。かれは、アメリカ独立戦争に参加したときのエピソードを書物にまとめ、好評を博した。かれの得意のしぐさは、戦闘で指を欠損した手を突き上げて、周囲に誇示することであった。画家レイノルズ（Joshua Reynolds）は、かれを戦場の英雄として、いささか美化して描いている。かれのこうした人となりは、リヴァプールの「ホイッグ」の心をがっかりと掴んだ。いっぽう、心おだやかでないペンリンは、ガスコインとそのパトロンである市当局に接近し、かれらの支持をとりつけた。だがこの工作は、逆にタールトン陣営を勢いづかせる結果となってしまふ。なぜなら、市当局が選挙を出来レースに仕立てるかわりに、市民の「自由」をないがしろにしている、との批判がよびおこされたからである⁶。

今週の木曜日、諸君の奉仕者であるはずの市当局幹部らは、あつかましくも、諸君に何の相談もなく、かの現職候補 2 名を推薦した。このことはよく胸に刻んでおかれたい。かれらのやることなすことに注意せよ……。勇氣ある有権者諸君、タールトン大佐なら、諸君の特権（投票権）を擁護してくれるはずだ……。⁷。

ガスコインとペンリンをおす市当局側は、奴隷貿易問題をもちだして反撃した。

アフリカ貿易は危機に瀕してはいないだろうか。ピット首相は廃止派ではなかったか。野党領袖のフォックス氏もそうではなかったか。下院はみなそうではなかったか。国民全体までもがそうではなかったか。アフリカ貿易を擁護するのは、ペンリン卿とガスコイン氏のほかに誰がいるというのか。かれらに1票を投じないような恩知らずはどこにいるのか。アフリカ貿易はふたたび攻撃にさらされるだろう。もしもタールトン大佐が当選し、またもしも、かれが海外の戦場にいたとしたならば、いったい誰が、諸君の貿易を、無知な連中のわめき声から守るというのか……。タールトン大佐は軍人としては優秀かもしれないが、商売にかんしてはまったくの素人だ。かれは議会の場にふさわしくない⁸。

結果はタールトンがトップ、ガスコインが2位で当選した。ペンリンは落選の憂き目をみた。このことは、市当局にとっては痛手であったが、奴隷貿易問題にかんしていえば、必ずしもそうではなかった。なぜならタールトンは、下院本会議の場で、誰よりも雄弁に「反」奴隷貿易廃止論を唱え続けたからである。

ウェストミンスターにはもう1人、リヴァプール市当局にとっての強い味方がいた。クラレンス公爵（Prince William, Duke of Clarence）である。かれはジョージ3世の王子であり、のちの国王ウィリアム4世であった。かれもまた、リヴァプールおよび奴隷貿易を擁護する言動をやめなかった。1800年、かれはリヴァプールの名誉市民に選ばれ、副賞として純金約220ポンド相当を贈呈されている⁹。このときかれは、次のような声明を発表した。

余のささやかな努力によって、余がぜひとも支援せねばならないと考えていた利益を守ることができたのならば……。これにまさる喜びはない。この利益はじつに、世人の誇張や偏見によって、多大なる被害をこうむってきた。この（奴隷貿易）問題についての議論はつくされたので、もはや反対運動が起こることはないであろう。だがもしも、余の予想に反して、今後そういったことが起こったならば、余はリヴァプール市当局に、次のことを約束する。すなわち、偏りのない正確な情報、および冷静な熟慮のもとでの結論を、ふたたび（議会の場に）提示するであろう¹⁰。

クラレンスのいうとおり、当時は反フランス革命戦争のさなかであり、それゆえにイギリス奴隷貿易廃止運動は沈静化していた。だが、それが2度と復活しないであろうという、かれの予測はみごとにはずれたのである。

まとめよう。市当局は、第1に地元選出の下院議員、第2に特定の閣僚や貴族を味方につけて、奴隷貿易廃止論者にたたかいを挑んだ。前者は、必ずしも市当局とは政治的立場を同じくしたわけではなかったが、奴隷貿易問題にかぎっていえば、志を1つにしていた。後者についていえば、リヴァプール市当局を、べったりとひいきにしていた。

（2）メディアを通じた宣伝活動とその主役たち—1788～93年

リヴァプールの「反」奴隷貿易廃止論者は、メディアを通じた宣伝活動にもとりくんだ。1788年3月、レイモンド・ハリスは、『聖書にもとづく奴隷貿易擁護論』を上梓し、物議をかもした。著者は、スペイン出身の元イエズス会士である。21年前に国外退去となり、リヴァプールに移

り住んだ。この時点でイングランド国教会に改宗し、牧師としての生活を始めたらしい。ハリスは本書で、奴隷貿易の宗教的・道徳的な正しさは、すでに証明済みであると宣言した。その論拠としてかれは、『旧約聖書』には奴隷所有・売買にまつわるエピソードであふれているにもかかわらず、それらが神の怒りを買ったという記述がみられない点を挙げた。リヴァプールの市当局や企業家たちの多くは、この教説を歓迎した。前者は、かれに 100 ポンドの報奨金を付与すると申し出た¹¹。ホークスベリ男爵は、「論駁不能の高説」とのお墨付きを与えつつ、本書を各方面に配布してまわった。いっぽうロスコーは、ハリスと泥仕合を演じた。ロスコーが「ずる賢いスペインのイエズス会士」とののしれば、ハリスは「ばちあたりなフィロゾーフ」といいかえした¹²。だが結局のところ、リヴァプールから 1 歩でも外に出れば、ハリスを支持するものはほとんどいなかった。かれは壮絶なバッシングを受け、翌年に急死した¹³。

1789 年には、ロバート・ノリス (Robert Norris) の、『アフリカ奴隷貿易についての記述』が刊行された。著者はリヴァプールの船長であり、奴隷船舶への乗務経験があった。かれはロスコーの仲間たちと近く、それゆえに、はじめは奴隷貿易廃止協会 (SEAST) に協力するかまえをみせていた。だがかれは、1788 年 2 月、市当局がホークスベリ男爵のもとへ派遣した、先述の陳情者 5 名のなかに含まれていた。説得されたのか、買収されたのか、その経緯は不明である。いずれにせよかれは、以後は一貫して、「反」奴隷貿易廃止派に与することになった。ウィルバフォースや SEAST 幹部は、ノリスのこのくら替えを、あえて許そうとはしなかった。かれらは、ノリスに対するバッシングをやめなかった。4 年後、ノリスは心身ともに衰弱して死んだ¹⁴。このとき市当局は、次のような声明を発表し、かれの死を悼んだ。

ノリスは、(奴隷貿易の擁護という) はからずも不人気となってしまった大義を奉じたがために、大勢の反対者たちから、一挙手一投足をあげつらわれた。それゆえにかれの、すでに異国の気候によってむしばまれていた健康は、いっそう悪化したのである・・・¹⁵。

市当局はノリスの妻に対し、生涯にわたる 100 ポンドの年金の支給を申し出た。

同じ年、ジョン・ウォーカ (John Walker) の、『リヴァプールとその貿易』という詩が刊行された。これもリヴァプール在住者による、「反」奴隷貿易廃止論の表現活動である¹⁶。著者は製靴工を自称するが、詳細は不明である。

1793 年、ヘンリ・ウィルッケンズ (Henry Wilckens) の『奴隷貿易およびその廃止論にかんする手紙』が刊行された。「手紙」の宛名はホークスベリ男爵、著者はリヴァプール在住の企業家である。後者はドイツのブレーメンの生まれであるが、青年期に渡英し、おもにチェシアの塩を扱って、巨富を築いた。リヴァプール商業会議所の会頭をつとめたこともある¹⁷。かれじしんは奴隷貿易に関与してはいないものの、本書は、その擁護論の立場で書かれている。

書物のほかにも、リヴァプールの「反」奴隷貿易廃止論者は、みずからの主張をおおやけにするチャンネルをもっていた。新聞である。このときリヴァプールには、主に『ウィリアムソンズ』 (Williamson's Liverpool Advertiser)、『ゴアズ』 (Gore's Liverpool General Advertiser)、『フェニックス』 (Liverpool Phoenix) という 3 つの地方新聞が存在した。これらのうち、少なくとも『ウィリアムソンズ』の 1 紙は、「反」奴隷貿易廃止論一色に染まっていた。あとの 2 紙にか

んしては、当該時期の巻号があいにく現存しないため不明である。だが、おそらくこれらも、「反」奴隷貿易廃止論に与していたと思われる。なぜなら 3 紙ともに、経済にかんする情報の伝達をねらいとしており、また企業家をターゲットにしぼっていたからである¹⁸。

このようにリヴァプールは、「反」奴隷貿易廃止論のほうメディアにおいて優勢であるという、イギリスで唯一の都市であった。だがそれゆえに、全国の世論からは袋だたきにあった。じっさい、レイモンド・ハリスやロバート・ノリスのように、そのことによって寿命を縮められるものまであらわれたのである。

(3) 最後の攻防、そして敗北—1804～7 年

反フランス革命戦争の勃発した 1793 年 2 月以降、リヴァプール市当局や、奴隷貿易の事業者たちは、ほっと一息を入れることができた。いうまでもなく、奴隷貿易廃止運動が沈静化したからである。だがそれは、1804 年に復活をとげる。市当局は、ふたたび対応を迫られることとなった。このときの地元選出の下院議員は、バナスタ・タールトンと、先述のバンバの弟にあたる、アイザック・ガスコイン (Isaac Gascoyne) であった。アイザックは兄と同様、市当局のあやつり人形であり、寡黙にして鈍重、無能との評判であった¹⁹。だがタールトンは違った。かれはもちまへの雄弁さで、奴隷貿易を擁護し、SEAST 幹部の悪口をいいたてた。かれはいう。

奴隷貿易廃止論は、人権思想とやりに依拠している。それこそ、世界中に災禍をもたらしている、かのジャコバン主義の悪しき産物にはかならない。まさかウィルバフォース氏が、それを信奉してはおられるとはいうまいが、そう受け止められても仕方あるまい……。14 年前、わたしは好奇心からパリに行った……。そこで、ジャコバン・クラブの本部をのぞいてみようとしたのだが、パリに精通する友人に止められた。タールトン、やめたまえ。きみは奴隷貿易廃止に反対だろう。それなら、反ジャコバン主義者とみなされて消されるぞ、と。もしもウィルバフォース氏がそこへ足を運ばれたなら、熱烈な歓迎を受け、指導者たちから同志とよばれて熱い抱擁を受けていたであろう。まちがいない²⁰。

ここで注目すべきは、タールトンの変節である。かれは 1790 年の選挙で、フランス革命を支持する「ホイッグ」として、さっそうたる政治家デビューを果たした。パリを訪れたのもこのためである。だが、かれは 1805 年前後には、ピット政権や市当局によって、すでに抱きこまれていたのである²¹。

このことがあだとなって、1806 年 11 月の下院選挙では、かれは「ホイッグ」の支持者たちから見捨てられた。かれらはかわりに、ウィリアム・ロスコーを擁立した。市当局への強烈な逆風、「ホイッグ」への期待が充満するなか、タールトンはあえなく落選した。当選したのはロスコーと、アイザック・ガスコインであった。ロスコーは用心深く、選挙戦では奴隷貿易問題に言及することを避けていた²²。しかし当選祝賀会では、次のように発言した。

アフリカ貿易に対するわたしの考えは、みな周知のことと思う……。だから、今ここでとかくいう必要はないだろう。よって、わたしはただ次のように述べるにとどめておきたい。すなわち、そのような貿易は、もうやめにしよう、ということである。もしも上下両院がそ

のように決定すれば、わたしは心から賛成する²³。

リヴァプール選出の下院議員が、史上はじめて奴隷貿易廃止への賛意を表明した瞬間であった。市当局にとっては、晴天の霹靂である。なぜなら、かれらがロスコーの思想を知らなかったはずはないが、かれもいったん議員に選出されたならば、「私情」を捨てて、地元民の利益につくすであろうと読んでいたからである。

市当局にとって頭の痛い問題はまだあった。すなわち、前章で述べたとおり、ジャマイカ・バルバドスの農園主までもが、奴隷貿易廃止論に傾倒しはじめたことである。ここに市当局は、奴隷貿易の廃止は必至とあきらめ、かわりに、そのさいの補償金の受け取りを画策しはじめた。ロスコーもこれに同調し、下院でそのむね提案した²⁴。だがこの動きは、ウィルバフォースらによって粉碎されてしまう。かれらの立場からいえば、これまでさんざん悪銭を稼いできた連中に、さらなる「置き銭」を用意する必要などない、とのことであった²⁵。かかる騒動のさなか、「メルカトール」(Mercator) なる人物の手による、『奴隷貿易廃止およびカリブ問題にかんする手紙』が刊行された。それによれば、奴隷貿易は人道に反するものでよくないが、これまで議会によって認可されてきたことはたしかであるから、もしもこれを廃止するのであれば、関係者のすべてが補償金を受け取れるようにするのが筋である、とのことであった²⁶。「メルカトール」の正体は、リヴァプールの企業家、ジョン・グラッドストーン (John Gladstone) であった。かれじしんは奴隷貿易の事業者ではないが、そうした人々への同情心をあえて隠していない。

1807 年 3 月、奴隷貿易廃止法案が成立した。2 月に下院を通過したときには、賛成が 283 票、反対が 16 票であり、大差であった²⁷。リヴァプールの関係者への補償金の件は、議題にすらおぼらなかつた。ウィルバフォースは勝ちほこっていた。「やあヘンリ、次は何を廃止しようかね」。いとこのヘンリ・ソーントン (Henry Thornton) にいったひとことである²⁸。いっぽう、リヴァプール市当局は重苦しい雰囲気包まれていた。かれらはささやかに、最後までたたかった協力者たちに対する、感謝の意を表明した²⁹。じつに、かれらの「反」奴隷貿易廃止運動は、さして大きな盛り上がりを見せることもなく、一方的な袋だたきにあつて終わった。それがもつて心身を病んだ仲間を、かれらは 2 人も失った。もはやかれらが直面した課題は、今回の騒動でこうむったイメージダウンを、いかに回復するかということであった。

小括

イギリス奴隷貿易廃止運動は短期間のうちに大規模化し、その反対者を圧倒した。いっぽう後者は、ほとんど孤立無援の状態におちいつてしまった。かれらは、それを擁護しようとすればするほど、奴隷所有・売買に対する国民的なタブーを刺激した。かれらはまた、当時の 2 大党派、すなわち、信仰復興運動を原動力とする「トーリ」、啓蒙主義者を中核とする「ホイッグ」の両方を敵にまわしたために、支援者をみつけるのに苦労した。かれらのたたかいが、1807 年までだらだらと長く続いたのは、当時の議会制度のおかげにほかならなかつた。それは、いかに民衆の声が高まろうと、あくまでも急激な変化をきらう体質をもっていたのである。かりに、奴隷貿易廃止の是非が、住民投票などの直接民主制によって決定される仕組みとなっていたならば、か

れらが 1788 年に敗れさっていたことは、まずまちがいなさそうである。

第 2 節 リヴァプールの「反」奴隷貿易廃止論の特質①—保守主義

本節では、リヴァプール市当局および地元選出の下院議員にかんする史料を手がかりに、かれらの「反」奴隷貿易廃止論の特質を明らかにする。ここでのキーワードは、保守主義である。かれらはそれに依拠して、奴隷貿易の正しさを主張しようとしたのである。

保守主義とは、ある時間・空間において支配的であった文化のあり方が、新たに出現したそれによって退けられようとしているにもかかわらず、なおも前者をそのままのかたちで維持しようとする立場である。したがってその内容は、カメレオンのように変化する。つまり、ある時間・空間において支配的であった文化のあり方が、どうであったかによるのである。

1788～1807 年のリヴァプールではどうか。想起されたい。そこでは、大トマス・ジョンソンの権力奪取（1695 年）から、トーリ・高教会派の没落（1750 年代）までのあいだ、きわめてユニークな文化が根を張っていた。すなわち、企業家精神・愛国主義・家父長主義の奇妙な結合である。1750 年以降、それはアソシエーション文化の繁栄とともに、少しずつ色あせていった³⁰。したがって、1788～1807 年における保守主義の内容とは、上記 3 つの結合といえる。市当局や地元議員たちは、これに依拠しながら、「反」奴隷貿易廃止論を展開したのである。

ただし、そのことを明らかにするためにも、まずは、キリスト教の教条主義的な「反」奴隷貿易廃止論に触れておきたい。そのあとで、保守主義的なそれに焦点を合わせる。

（1）教条主義的な「反」奴隷貿易廃止論—レイモンド・ハリス

元イエズス会士のレイモンド・ハリスは、リヴァプールではじめて奴隷貿易を擁護する書物を発表した。それは、キリスト教の教条主義の立場から書かれている。いいかえればそこには、聖書の記述の一字一句を、そのまま現代の日常的な思考・行動の規範として遵守すべきだ、という信念が透りぬかれている。かれはいう。『旧約聖書』において、アブラハムなる人物は、奴隷売買を行ったと明記されているにもかかわらず、「有徳の士」と称えられている³¹。ヨゼフなる人物は、700～800 人くらいのエジプト人を奴隷にしているが、とくに神のとがめを受けたという形跡はない³²。加えて『レヴィ記』には、次のような一節がある。

なんじは男女の奴隷を買うべし。なんじの土地にいる異邦人の子らを買うべし。その家族を買うべし。父を買うべし。かれらはなんじの所有物たるべし。なんじはその所有物を子にゆづるべし。かれらは永遠に奴隷であるべし³³。

しかも、「奴隷を買ってよい (may)」ではなく「買うべし (shall)」となっている³⁴。まだある。ヨシヤなる人物は、ギベオンなる地域の住民たちを奴隷にしているが、例によっておとがめはない。そもそも『旧約聖書』には、奴隷が解放されたという話はほとんど出てこない。『新訳聖書』には、奴隷所有・売買にかんする記述はあまりないものの、それらが明示的に禁止されてい

る箇所はないから、少なくとも黙認されていると解釈してよい³⁵。などなど、似たような事例を山ほど挙げたうえで、ハリスは次のように断定した。

聖書の神聖なる記述の 1 つ 1 つは、全能者の無謬なるご決定である。それらの権威とは、つまりは真実そのものである、神の本質的な真正性のうえに成立しているのである。したがって、この権威にそむくようなルールがあってはならない。つまるところ、本書における原典の引用によって明らかにされたとおり、奴隷貿易は、その本質においてよきものである。合法である。なるほど、ある時代のいく人かによって共有された意見が、これと異なることはありうる。しかし、誰が何といおうと、奴隷貿易が本質的に正しき行いであるという事実は、決して揺らがないのである³⁶。

かかる教条主義はじつのところ、18 世紀リヴァプールの文化的レパートリーのなかでは、ごくマイナーなほうであった。そもそも、聖書の概要ではなく、細部の一字一句までも厳守するような道徳観念は、企業家精神とはあいられないものである。なぜなら、市場原理に依拠した経営を追求しようとするれば、必然的に、聖書の記述のいくつかとは、矛盾をきたすからである。つまるところ、元イエズス会士の手による本書は、商工業の発達したリヴァプールでは、受け入れられないものであった。しいていえばそれは、高教会派的な教説であり、あのジェイムズ 2 世やモリニュー子爵に近い立場であった。だがあいにく、かれらの育んだ文化は、1695 年には打撃をこうむり、1750 年ごろには原型をとどめていなかった。したがってそれは、本節でいうところの、保守主義を構成する要素ではなかったのである³⁷。じっさい、ハリスの書物はすぐに忘れさられた。たしかに、はじめは市当局やホークスベリ男爵による、熱狂的な反応があった。だが、翌年のかれの死後には、かれに続いて、教条主義的な「反」奴隷貿易廃止論を構想しようとするものは、誰 1 人としてあらわれなかったのである³⁸。

(2) 保守主義的な「反」奴隷貿易廃止論(一)―市当局の請願書から

リヴァプール市当局は、キリスト教の教条主義ではなく、保守主義に依拠して奴隷貿易を擁護した。先述のとおり、ここでいう保守主義とは、すなわち企業家精神・愛国主義・家父長主義の結合である。そのことが明瞭に表現されたのが、かれらのしたための請願書である。それらはいくつか現存するが、すべて同じようなことが書かれている³⁹。ここではその最初のもの、すなわち 1788 年 2 月 14 日に採択された請願書を参照しよう。

わが名誉ある下院に。市長が、おそれつつしんで嘆願を申し上げる。わがリヴァプールの諸事業は、これまで名誉ある貴院の支援にこたえてきた。われわれは今世紀を通じて、アフリカ貿易の便益にかなう人造港の建設の認可を、いく度か受けてきた……。われわれは、かかる賞賛に値するよき事業を成功させるために、あえて莫大な資金を費やしてきた。それだけではない。市の名義で、莫大な借り入れも行ってきた。

われわれは、多くの運河ないしそのほかの交通網を通じて、内陸地域から、ますます多くの多種多様の商品が運ばれてくる現状に満足している。かかる内陸交通の整備に対しても、市や多くの民間人が投資している。これらすべての要素、とりわけ人造港の利便性と、その

ほかの地域的な優位性とが、人々の企業家精神とうまく結びついた。それゆえに、われわれはアフリカ貿易に、とりわけ熱意をもって従事できるようになったのである。いまリヴァプールは、すべての商業活動のかなめの地位を占めている。それはよかれ悪しかれ、わが国の富と繁栄とに、影響を与えずにはおかない存在である。

したがって昨今、アフリカ奴隷貿易の完全な廃止を要求する複数の請願書が、貴院に提出されている事態は残念である。奴隷貿易は、これまで議会の認可を受けてきた。それはまた、わがリヴァプールの事業の一大部門を形成してきたし、今後もそうあり続けるであろう。それだけではない。ほかのすべての部門にも、強度と活力とを与えてきたのである。

われわれはそれゆえに、この富の源泉の廃止に反対するという意見が聞き入れられ、また次の事情が酌みいれられることを願っている。すなわち、(奴隷貿易の廃止は) わがリヴァプールの港湾および市街の繁栄に、致命的な影響を及ぼすであろう。全国の地主もそのあおりを受けるであろう。わが国の製造業者も損害をこうむるであろう。わが企業家がカリブ海諸島に有する資産も、壊滅的な被害を受けるであろう。わが国の歳入は激減し、海上強国としての優位も失われるであろう⁴⁰。

まず、この請願書のなかには、キリスト教の教条主義的な議論がみられないことを確認されたい。次に、1788年のリヴァプールにおける保守主義、すなわち、企業家精神・愛国主義・家父長主義に依拠した議論が組み立てられていることにも注目されたい。詳しく分析しよう。

第1に、市当局は奴隷貿易の成功を、企業家精神のたまものであると考えている。ただ、じつさいにはそれは、イングランド北西部にまたがる重厚な後背地のおかげである。この事実はかれらも認めるところであって、「地域的な優位性」と表現されている。だが同時に、リヴァプールの住民は、大型船の係留地をもたず、内陸交通が不便という、地理的な障碍に悩まされていた。かれらの創意工夫が発揮されたのはここである。つまり、人造港・運河の建設である。この結果、大西洋「三角」貿易の合理化が進展し、マージー川流域地方における商品の製造・流通が非常に活発化した⁴¹。この状況にかれらは、「満足」しているというのである。

第2に、市当局は奴隷貿易の成功を、愛国主義に資するものであると理解している。「奴隷貿易は議会の認可を受けてきた」という主張は、それが私利私欲ではなく、国家・国民の利益にかなう営為であることを示唆している。なぜなら、たてまえの上では、議会が公益の増進に寄与しない事業を認可するはずはないからである。かれらはまた、奴隷貿易が廃止されれば、かれらのみならず、全国の土地利害・製造業者が損失をこうむると警告している。そればかりか、国家の歳入が激減し、海上における安全保障にも悪影響が及ぼされるという。これは逆にいえば、奴隷貿易こそ、国益・国防に寄与する事業であるということである。

第3に、市当局は奴隷貿易の成功を、家父長主義に資するものであると理解している。かれらは、もしも奴隷貿易が廃止されたら、その事業者のみならず、リヴァプールの港湾や市街がいきよに衰退すると警告している。これは要するに、企業家・製造業者・船員などをすべて含むところの、リヴァプール全体の繁栄に対して責任を負うのは、市当局であることを示している。かれらにそれを実現させる手段こそ、奴隷貿易である。つまり、かれらが家父長主義的な義務を果

たすためには、奴隷貿易のもたらす利益が不可欠ということである。

(3) 保守主義的な「反」奴隷貿易廃止論(二)―その他の史料から

地元議員ないし、かれらの支援者の発言のなかにも、保守主義的な「反」奴隷貿易擁護論は目立っている。まずは企業家精神、ないしは愛国主義を顕著にまとった言説をみよう。それらのエッセンスはこうである。まずは国家が、企業家精神を刺激するような政策をうつ。次に後者が、それを利用して首尾よく利潤を生み出し、租税のかたちで前者にむくいる。さらにかれらは、優秀な人材を軍隊に送り込むことによって、国防にも寄与する。最後に、これらのことによって、国家は、企業家精神を刺激するような政策をますますうちやすくなる。要するに、相乗効果が発生する。その媒介となったものこそ、奴隷貿易というのであった。

ペンリン男爵は下院本会議において、次のように発言した。

わが地元民は、議会の信用と認可のもと、長期にわたってアフリカ貿易に従事してきた。かれらはあらゆる根拠をもって、それを合法的な経営活動であると認識してきたのである⁴²。
バナスタ・タールトンは、「ホイッグ」から市当局支持へとくら替えした以降の 1805 年に、次のような演説をした。

リヴァプールに注目し、その 1 世紀前の姿と比べてみれば、奴隷貿易の真髄を知ることができる。100 年前、この都市は人口 2,500 人を擁し、100 隻ばかりの小さな船舶をあやつって、1,000 ポンドを稼いでいた。今はどうか。船舶は 5,000 隻を抱え、王立海軍の水兵としても有望な、よく訓練された船員を多く養成している。人口は 8 万から 9 万。そして、100 万ポンドを稼いでいる。この驚くべき繁栄はほぼすべて、奴隷貿易によるものである⁴³。

かれは翌年度の本会議でも、同じことをいっている。

リヴァプールは、かつて 150 あまりの小さな家屋の並ぶ、みすばらしい集落であった。だが、それから 1 世紀もしないうちに、わが国で 2 番目の商業都市に成長した。これはひとえに、アフリカ貿易のおかげである……。リヴァプールは、繁栄・富・愛国心の点で、他の追随をゆるさない。また、数多くの船員を王立海軍に供給することで、国防のうえでも多大な役割を果たしているのである⁴⁴。

次に、家父長主義的な立場からの発言をみよう。それらのエッセンスは、すなわち、エリートが民衆に対する義務を果たすためには、奴隷貿易の存続が不可欠ということである。

タールトンは、下院本会議で次のように演説した。

リヴァプールには、奴隷貿易に従事するものが 1 万人いる。間接的に従事するものを含めれば、もはや数え切れない。地元民は、断固としてウィルバフォース氏の計画に反対するよう、わたしに強く迫っている⁴⁵。

バンバ・ガスコインの支援者たちは、1790 年の選挙のとき、次の歌を合唱した。

信念をもった人を信頼せよ／われらのみじめな境遇を忘れるな／アフリカの事業がやめさせられようとしているとき／野郎ども、ガスコインがわれらの味方だ。

奴隷貿易がなければ生活が成り立たない／妻子をつれて物乞いをするしかない／港の船

は 2 度と立派な帆をはためかせない／市街は草むらとなり牛がそれを食らうだろう⁴⁶。

製靴工というウォーカは、妻ダフネ (Daphne) が、リヴァプール施療院の世話になったと述べる⁴⁷。この施設は、市当局幹部や企業家たちの寄付によって運営されていた。かれはこのことに恩義を感じたうえで、次のようにうたった。

苛酷な季節が労働貧民をしめつける／欠乏がすべての小屋のドアを急襲する／おなかをすかせた赤ん坊が泣いている／貧しい親は満足な食事も与えられない・・・／この悲しみはいかに表現されようか／わたしのダフネも苦しんだ／かの女はため息をつき、泣き、寝込んでしまった／そこに明るいきらさが舞い込んだ／すぐに多額の寄付金が集まるのだという／不況にあえぐ事業者に救いの手が差し伸べられる／だんな衆が熱心に寄付をつのつてくれた／火事や洪水のための基金があった／不作にそなえて穀物がたくわえてあった／それらを低価格で売るために・・・⁴⁸。

リヴァプールは 1 番だ／公共精神とチャリティにおいて／だからアフリカ貿易を非難することはやめよう・・・／ペンリン卿とガスコインの支持者に祝福あれ／かれらはアフリカ貿易を敢然と擁護した／ウィルバフォースがその悪口をまくしたてているときに⁴⁹。

かれの暗示によれば、奴隷貿易で資産をたくわえた企業家たちが、その一部をチャリティというかたちで住民に還元することで、共同体が安定的に維持されているのである。

小括

リヴァプールの市当局や企業家たちは、保守主義的な立場から奴隷貿易を擁護した。ここでいう保守主義とは、第 2 章で述べたところの、トマス・ジョンソン父子のリヴァプールを維持しようとする立場である。すなわち奴隷貿易は、企業家精神のたまものであり、また愛国主義・家父長主義の涵養に役立っているというのであった。

ここで注意すべきは、かれらが、奴隷にされるアフリカ人のことをまったく念頭においていない点である。かれらの考える奴隷貿易は、国家および都市の共同体のメンバーすべてに恩恵を与えるものであった。かれらは、きれいな紙にインクでしたためられた、売上高や利益をあらわす数字を眺めて満足していた。そこには、奴隷船舶における惨状・臭気・うめき声は表現されていなかった。南北アメリカで売却された奴隷の数は、西アフリカで購入されたその数を下回るものがふつうであったが、この現象は、流通過程における商品の損失であって、旅行中の人間の死とはみなされなかった。要するにかれらにとって、奴隷となったアフリカ人はもはや人間ではなく、「商品」以外の何ものでもなかったのである。

それゆえにかれらは、完全にとはいわないまでも、人種差別・帝国意識には「汚染」されていなかった。人間ではない「商品」に対し、人種的偏見をもって眺めることは、思いもよらないからである。しかもかれらは、奴隷を所有・売買するアフリカ人を、対等な取引相手として尊重していた。かれらは、アフリカ人が欲しがり、また必要とする製品は何かについて、真剣に頭を悩ませていた。かれらはまた、アフリカ市場を管理する国家に対しても従順であった。もしもかれらが、アフリカ人を見下したり、あなどったり、自分だけ利益を得ようとして、不正ないし強引

な手段にうったえたりなどすれば、即座に重大な損失につながったからである⁵⁰。要するに、人種差別的であったのは、奴隷貿易廃止論者のほうであって、かれらではなかった。ただし、この事実をもってかれらを高く評価することができないのは、いうまでもない。

第3節 リヴァプールの「反」奴隷貿易廃止論の特質②—啓蒙主義と帝国意識

しかしながら、保守主義的な「反」奴隷貿易廃止論は、2つのメジャーな議論のうちの1つであるにすぎなかった。本節ではもう1つの、啓蒙主義・帝国意識の影響を受けたそれについて明らかにする。それは一見してわかるとおり、ロスコーと類似の立場をとっている。ただし結論だけが、奴隷貿易の廃止に賛成か反対かで、180度も異なっていたのである。

啓蒙主義・帝国意識は、本節でいうところの保守主義と、原理的には対立する。たとえば、ともに企業家精神を尊重するが、後者のみ家父長主義と結びついていた。また、ともに愛国主義をもっているが、それぞれが理想とする国のあり方は、かなり異なっていた。じつのところ啓蒙主義と帝国意識は、1750年ごろより普及した、アソシエーション文化の産物にほかならなかった。それはまた、政治的には「ホイッグ」の立場をとっていた⁵¹。これらの台頭にともなって、ジョンソン父子に体现される旧来の文化が、まさに「保守主義」となったのである。

啓蒙主義的な、あるいは帝国意識に「汚染」された「反」奴隷貿易廃止論とはどのようなものなのか。順にみていこう。

(1) 啓蒙主義的な「反」奴隷貿易廃止論

啓蒙主義者たちは、世俗・合理主義を追求したので、当然ながら、「信心深く・非合理である」ことをきらった。しかもかれらは、進歩主義的な歴史観をもっていたため、宗教や迷信にしばられる人たちは遅れており、理性に導かれる人たちは進んでいると考えていた。現実には、前者は地位や財産をもっておらず、後者はそれらを有することがしばしばであったため、啓蒙主義は、すぐにエリート主義に転化した。ここからかれらは、民衆を公共空間から排除することに執心するようになった。このことが、「反」奴隷貿易廃止論にも反映されたのである。

1792年、このときは「ホイッグ」であったタールトンは、次のように演説した。

わたしはイングランド人民の議会請願を心から尊重する。だが今回ばかりはそうはいかない。なぜなら、それらが正当なやり方で集められたとは、とても思えないからである……。いくつかの集落では、物乞いと変わらない内科医や、あちこちを歩きまわっている牧師たちが、信じられないほど熱心に、あのスカパンも顔負けのいかさまをやって、病人・貧民・浮浪者たちの署名を集めているという。ほかの集落では、つづり方教室の教師が、奴隷貿易廃止協会の回しものを迎え入れている。子どもたちは、請願書に自分や近所の人たちの名前を書いたら休みにしてよいといわれ、喜んでいるときく⁵²。

みられるとおり、かれは奴隷貿易廃止論者が、「信心深く・非合理的な」群衆を動員していると告

発した。それゆえに、かれらの声を政治に反映させることは、危険であるというのであった。

地元紙『ウィリアムソンズ』には、次のような投稿記事が掲載された。

昨今、奴隷貿易を題材とした 100 近い小冊子、その倍くらいの詩歌に加えて、大量の手紙・論文、その他もろもろの出版物が出回っている。散文・韻文書きの男女、画家、風刺漫画家、メダル彫刻家などが、よきイングランド人民をあおり、もっとも有益で価値ある同胞に敵対するよう、けしかけている。演壇や劇場までもが、カリブ地域に関与するすべてのイギリス人をおとしめる手段となっている始末だ……。奴隷貿易廃止協会は、みずからに都合のよい情報を買いつけ、またそれら出版するために、群衆のすさまじい熱狂を利用している。かかる印刷物、論文、メダルにおいて、カリブ農園主やアフリカ商人は、まるで鬼や悪魔のように……。描かれている。つまりそれらは、少数の理性ある人々を説得するためというよりは、群衆の熱情と偏見とをよびおこす目的でつくられている⁵³。

この投稿者も、タールトンと同じことをいっている。すなわち、「イングランド人民」の洞察は酌みとるべきであるが、奴隷貿易廃止論者の意見は無視すべきなのである。すなわち、前者は冷静な熟慮のもとでの結論であり、後者は熱烈な感情の発露なのであった。

リヴァプール在住者による、こうした憎まれ口は、枚挙にいとまがない。ドイツ出身の塩商人ウィルッケンズは、奴隷貿易廃止運動の参加者は、「大声でさけぶ連中のまわりにむらがつてきただけの、ミスリードされたものたち」であると切り捨てた⁵⁴。製靴工というウォーカによれば、かれらは、「頭をはたらかせる前に情熱をたぎらせ」、「誇張された悪とやらに耳が麻痺し」、「大声でアフリカ貿易反対とわめきたてる」連中にほかならなかった⁵⁵。船長のノリスは、「公平性という観点からではなく、熱狂にまかせて収集された情報を、信じやすい人々の耳に吹き込み」、「はなはだしい思い違いや、問題のある表現を含む、さまざまな出版物を駆使して、群衆の熱情や偏見をあおりたててきた人々」のおかげで、奴隷貿易の事業者の名誉がおとしめられているとうったえた⁵⁶。以上のものたちはみな、みずからの、啓蒙主義に裏づけられたエリート意識をさらけだしている。かれらは、自分たちだけが公益・公序を分かっているとの確信のもと、他者がみずからに 100 パーセント同調することを期待しているのである。辛らつな非難のことばは、それが実現しないことに対する、欲求不満のあれわれ以外の何ものでもない。

このような、民衆を排除しようとする発想は、ともすれば保守主義のさいたるものであるようにみえる。だが、この場合はそうではなかった。想起されたい。18 世紀リヴァプールの民衆は、家父長主義の枠組みにおいてではあるものの、公のものごとに関与することが認められていた。かれらはしばしば投票権をもっており、みずからに便宜をはかってくれる人物を、下院議員や市長に選出できた。かれらはまた、物価の上限や賃金の下限を守るよう、市当局や企業家に要求できた。かれらはまた、かれらの文化を尊重しない、ロスコーのごとき啓蒙主義者に対して暴力をふるいながら、罪に問われないこともあった。かれらはしばしば酒に酔い、棍棒をふりかざしたが、ただやみくもに暴れまわったのではない。かれらは、そうしたかたちをとりながらも、慣習として了解される範囲のなかで、政治的な意志表示をしたにすぎないのである。要するに、1780 年代のリヴァプールにおける保守主義の立場からいえば、無産・無学な民衆といえども、その果

たすべき政治的役割は、確固として存在していた。対照的に、啓蒙主義的なエリートの意見にしたがえば、そのようなことはあつてはならなかった⁵⁷。

啓蒙主義的な「反」奴隷貿易廃止論者でも、奴隷貿易問題に限っていえば、リヴァプールの群衆と、たまたま意見が一致した。だが、両者の世界観にはもともとズレがあつた。つまり、「信心深く・非合理的」主体の政治参加が認められるか否かというところで、原理的には対立していたのである。かれらが、奴隷貿易廃止を要求する、(リヴァプールの外の) 群衆を軽蔑するとき、その態度はエリート主義的であつた。しかしかれらが、アフリカ人について論評するときは、その態度は人種差別的なものとなつた。これが次項のテーマである。

(2) 帝国意識と「反」奴隷貿易廃止論(一)ーロバート・ノリスの書物から

リヴァプールの企業家たちは、「反」奴隷貿易廃止論を構想するさいに、アフリカ人の立場を無視してはならないことに気がついた。この貿易は、リヴァプール住民のためにはなっているかもしれないが、他方でアフリカ社会をむしばみ、アフリカ人を破滅させている、という批判が広まったからである。そこでかれらは、奴隷貿易こそ、アフリカ社会には平和を、アフリカ人には幸福を、それぞれもたらしていると反論することにした。

船長のロバート・ノリスはまず、アフリカが「陽気に歌い踊る人々」の樂園では決してなく、つねに人口過剰・食糧不足におびやかされ、また社会的病理の蔓延する、絶望的な土地であるとうったえた。しかもその原因は、アフリカ人の人種的特徴にもとめられた。かれによれば、アフリカ人は性欲を抑制できないため、際限なく子どもを作ってしまう人種であつた⁵⁸。そうすると、資源の配分をめぐる紛争が起こり、あらゆる惨状が日常茶飯事となつた。一例を挙げよう。

(西アフリカでは) 大勢の人々は少数の自由人の奴隷である。王のほかに自由人がいない国すらある。ありとあらゆる情報と観察をふまえても、アフリカにおける黒人の一般的な状態とは、奴隷制であり抑圧である。ダホメ国では、王がその支配領域の住民の生死・自由・財産に対して、絶対的権力を行使する。王はかれらに対して気まぐれに、野蛮で抑制のきかぬ残虐性を発揮する。かれらの生首は、祭祀や儀式の日に、宮殿の正門に並べられる。かれらの胴体は、王の間へと続く廊下にちりばめられている。これは、訪問客に対し、王への畏敬の念を抱かせるためであろう。王の寝室の前は、捕虜の頭蓋骨で敷き詰められている。つまり王は毎日、反逆者の頭を文字通り踏みつけては、粗野な満足にひたっているのである⁵⁹。もしもこのことが事実であれば、西アフリカから奴隷を連れ出す行為は、いちがいに悪とはいえなくなる。つまりそれは、本来なら斬首されていたはずの無辜の民を、かかる苦難の土地から脱出させる効果をもつからである。だが、かれら・かの女らの行き先は、カリブ地域のサトウキビ・タバコ農園である。これでは、どちらにせよ苛酷な運命をたどるはずである。

しかしながらノリスは、ここで2本目の矢を放った。すなわち、カリブ諸島こそ、奴隷にとっての樂園であるというイメージである。

(カリブ地域の) 奴隷の家は、一般に快適で便利である。それぞれが、バナナ・プランテン・オレンジの木々に囲まれた、家庭菜園をもっている。そこで栽培される作物は、一部が家庭

で消費される。そのほかの大部分は、市場に運ばれ、日常生活には必要のない、ぜいたく品と交換される。それらはすべて、奴隷たちの私物となる。かれらの家の近辺には、「ニグロ・グラウンド」とよばれる 1 区画の土地がある。奴隷たちはそこを、好きなだけ耕作してよいことになっている。この土地は非常に肥沃であるので、さほど多くの労働力を投下する必要がない。せいぜい、1 週間に数時間ていどである⁶⁰。

ノリスは、カリブ諸島の奴隷たちの労働時間が短く、所得が多いことを強調する⁶¹。なるほど、これは夢のようである。かれはさらに続ける。

奴隷の家のなかにはたくさんの部屋があり、家具があり、調度品がある。1 そろいの立派な衣装まである。これらが奴隷の財産とは、誰が思うであろうか。かれらはまた、豚や鶏を飼育している。これらは売るためのものであるが、あまりができれば夕食のおかずになる。こうなれば、夕べの心地よいひとときである。これがあつてこそ、翌朝からのきつい労働に耐えられるだけの体力がつく。ただ、きついとはいっても、わがイギリスの労働貧民のそれと比べれば、全然たいしたことはないのであるが⁶²。

ノリスはさらにいう。病気の奴隷は、すべての労働を免除され、最高の治療を受けられる。肉・野菜・ワインもふんだんに与えられる。年老いた奴隷も同じである。かれらは労働を免除され、衣食住を保障され、家族や同郷の友人たちに囲まれて、幸せな余生を送ることができる。これでは、アフリカに帰りたいなどという奴隷は 1 人もいないであろう。むしろ、連れてこられたばかりの若い奴隷でも、仕事で失敗したり、手をぬいたりしたときに、監督から「おまえ、アフリカに帰すぞ」といわれると、本気でおびえる始末である⁶³。

このようにノリスは、奴隷貿易廃止論にひっぱられるかたちで、アフリカ人の境遇という要素を、議論に組み入れた。だが、ここでかれは、帝国意識のわなにはまった。かれによれば、黒人は暴力やセックスの衝動をおさえられない、下劣な人種にほかならなかった。またかれらは、みずからの土地・人民を適切に統治する能力を有さなかった。いっぽう、白人は理性をそなえているために、南北アメリカの平和と繁栄とを巧みに維持することができた。これらを前提としつつ、ノリスは、みずから関与した奴隷貿易こそ、人道にかなう営為であると確信した。かれのみるところ、それは、アフリカの社会的弱者を、不快な同胞たちの手から引き離し、「地上の楽園」たるカリブ地域へと移住させる役割を果たしたからである。かかる議論の基本的なよりどころは、ウィリアム・ロスコーのそれと、意外なほど一致している。もともとノリスとロスコーは、奴隷貿易廃止問題では、正面から衝突する。しかし 2 人とも、優等なイギリス人が、劣等なアフリカ人を支配してよい（合法）、できる（可能）、あるいはすべき（責務）との考えを共有している。しかも両人は、そのことが、アフリカ人じしんの幸福に帰結すると思いついていた。

（3）帝国意識と「反」奴隷貿易廃止論（二）—そのほかの書物・記事から

ノリスの議論は、リヴァプールの「反」奴隷貿易廃止論者のなかに、追従するものを多く生み出した。たとえば、製靴工というウォーカは、次のようにうたった。

・・・（リヴァプールの）いく人かは奴隷をもとめてギニア湾に船を出す／黒人の虜囚たち

を破滅から救うために／公正な取引をしたあとで危険な航海にのぞむ／かれらを文明の地に運ぶために／そこでかれらの無知蒙昧な頭に知恵がつく／人として洗練された生活の喜びを味わうこともできる⁶⁴。

ドイツ出身の塩商人ウィルッケンズも、アフリカ人が、みずからの土地・人民を適切に統治できる、という考えに否定的である。

黒人たちは、統治・慣習・道徳・知恵のどれをとっても、未開で野蛮なままで、まったく進歩していない。300年前のかれらの先祖たちと、同じ状態のままである。しいていえば、ヨーロッパ人と交流するようになったことで、ずる賢さが増したくらいである⁶⁵。

かれによれば、西アフリカには群小国家が分立しており、それらのあいだではひっきりなしに紛争が起きていた。捕虜たちは、運がよければ奴隷にされ、そうでなければ、「殺されるか、生贄にされるか、食べられた⁶⁶」。つまりアフリカには、「太古の昔から奴隷制があった⁶⁷」。

アフリカでは、奴隷の生殺与奪は主人によって握られている。主人は奴隷を殺したとしても、罪に問われることがない。奴隷はしばしば、高位者の追悼のためと称して殺される。奴隷の財産は、すべて主人の管理のもとにある。奴隷の労働は、無知蒙昧な頭脳と、絶対的な権力とをあわせもった、主人の命ずるままである⁶⁸。

だが、カリブ地域にかんしていえば、情況はまったく異なっていた。かれはいう。

・・・カリブ地域においては、たとえ主人といえども、奴隷を殺したものは死刑に処される。そこでは、奴隷を保護するための法律が整備されている・・・。奴隷の労働基準も、法律または慣習によって定められている。奴隷の私有財産も守られている・・・。主人は、奴隷の健康に留意しておかねばならない。病気の奴隷を治療せねばならない。奴隷がささいな罪を犯した場合には、寛大な処罰を与えねばならない・・・。かれは法律によって、年老いた、あるいは障害をもった奴隷の面倒をみることを義務づけられている⁶⁹。

これらのことをふまえてかれは、カリブ地域における奴隷の処遇は、西アフリカのそれに比べて、はるかによいものであると力説した。かれはさらにいう。

・・・アフリカから黒人を移送することは、結局のところ、かの地を有効に活用するための、唯一の手段なのだ。所与の証拠に照らし合わせてみても、黒人に特有の怠惰な性質は、かの地では、絶対に矯正することができない・・・⁷⁰。

ウィルッケンズによれば、奴隷貿易はアフリカ人を幸福にするのみならず、かれらを有用な人材として活用する役割をも果たしていた。それはまた、アフリカから余剰人口を排出させることで、結果的に、資源不足およびそれに付随する紛争を抑制する効果もあった。要するに奴隷貿易は、アフリカ人・アフリカ社会の両方に、プラスの影響を与えているのである。

地元紙『ウィリアムソンズ』の寄稿者も、同じ意見であった。この人物によれば、かりに奴隷貿易が存在しなかったとしたら、アフリカの戦争捕虜は、「おどろおどろしい信仰にもとづいて考案されたあらゆる拷問」のすえに惨殺されるはずであった。対照的に、奴隷貿易廃止こそ、アフリカの弱者から、南北アメリカに移住する機会を奪うことにほかならず、許しがたいものであった⁷¹。また別の寄稿者は、次のようにいっている。

・・・文明のない地域には、人間の生来の性質である、裏切り・背信・敵意がはびこり、野蛮な状態である・・・。アフリカ人は、かれらがヨーロッパ人との交易を始める以前にも、現在と同じように、戦争に明け暮れていた。捕虜はといえば、かれらとヨーロッパ製品との交換がまだ行われていなかったため、容赦なく殺された。かれらは、かかる理不尽な死や、不可避的な無知蒙昧から引き離されて、文明世界に足を踏み入れさえすれば、むしろ有益な存在となり、精神の改良をも受けて、ひとかどの人間になることができる。・・・信頼のおける情報筋によると、かかる手に負えない蛮族たちは、キリスト教徒の奴隷になったとたん、これまで繰り返してきた非人間的な行為を、いっさい行わなくなったとのことである⁷²。

この寄稿者もやはり、ノリスやウィルッケンズと同様、人種差別・帝国意識に「汚染」された「反」奴隷貿易廃止論を抱いている。かれらが共有するのは、アフリカ人は、その人種的特性、すなわち無知・怠惰・凶暴・放縦ゆえに、みずからの土地・人民をうまく統治できないという確信である。アフリカ人によるアフリカ人の統治は、やればやるほど失敗するのである。したがって、優等なイギリス人が、かわりにそれを担うべきであった。奴隷貿易ならびにカリブ奴隷制は、そのもっとも成功した事例である。これが、かれらの議論のエッセンスであった。

小括

リヴァプールの啓蒙主義者たちは、イギリスの民衆による政治参加および、アフリカ人によるアフリカ統治など、よい結果をもたらすものではないと決めつけた。なぜなら、自分たちだけが理性をもち、公序・公益とは何かについて、適切に判断できると考えたからである。かれらは、イギリスの民衆が、全員に最低限の資源をゆきわたらせるという目的のもと、合理的に考え・行動しているとは、思っていなかった。かれらはまた、アフリカの人々が、その独特な自然的・地理的な条件のもとで、つねに最善の統治方法を模索しており、そのことが結果として、平和と繁栄をもたらすこともあれば、貧困と暴力の温床になることもあるとは、考えられなかった。われわれには理性がある。したがって、われわれにやらせてもらえれば、何もかもがうまくいく。この姿勢が、かれらの奇妙な自信のあらわれであった。

かかる人々には 2 種類がいた。第 1 には、ロスコーのような奴隷貿易廃止論者。第 2 には、ノリスやウィルッケンズのごとき、その反対者である。かれらはともに、1750 年ごろより芽吹いた、都市のアソシエーション文化と深くかかわっていた。かれらは、市当局とは反目していたか、少なくとも距離をとっていた。かれらは総じて、イギリスの民衆にもアフリカ人にも、敬意をはらっていなかった。その人種差別的な世界観のもと、アフリカ社会・アフリカ人を、意のままに支配してよい（合法）、できる（可能）、あるいはすべき（責務）と考えていたのである。

おわりに

リヴァプールの「反」奴隷貿易廃止論者は、全国的な世論の袋だたきにあって孤立していたが、かれらのあいだでは、よく統率がとれていた。かれらは一致団結し、奴隷貿易の廃止はむろんの

こと、それに対するいかなる制限も認められないとの原則をつらぬいた。かれらは、みずからの本拠地においては、ウィリアム・ロスコーをはじめとする奴隷貿易廃止論者の動きを、あるていどまでは封じ込めることができた。

しかしながら、かれら全員が共有したのは、奴隷貿易廃止に反対であるとの一点のみであった。じつのところかれらは、保守主義的な価値観をもつものと、啓蒙主義的なそれをもつものとに大別され、ほかの係争問題にかんしていえば、たがいに意見をぶつけあっていた。保守主義者は、市当局に近い企業家に多くみられ、企業家精神・愛国主義・家父長主義の複合体を守ろうと奮闘していた。また大多数の民衆も、かれらと気脈を通じていた。さらに重要なことに、かれらにとっては、海外の土地・人民を全面的に統治することは、魅力的ではあったかもしれないが、高い優先順位で現実に取り組むべき課題ではなかった。

いっぽうの啓蒙主義者は、市当局から距離をおく新興の企業家・専門職のあいだでますます仲間を増やしており、保守主義者たちを圧倒しつつあった。その主張するところといえば、家父長主義がぶらさがっていないという意味での、より高度な企業家精神の陶冶にほかならなかった。そしてそのためには、たんに商業的な成功をめざすだけではなく、文化・道徳のレベルをもあわせて向上させねばならなかった。また、国家・国民のあり方にも、変革が加えられねばならなかった。これらのプロセスにおいて、無産・無学な民衆が果たすべき役割は、皆無とされた。さらに重要なことに、かれら啓蒙主義者たちは、あからさまに人種差別的・自民族中心的な世界観にもとづき、海外の土地・人民を全面的に統治しようと、しきりにうったえていた⁷³。

¹ F. E. Sanderson, 'The Liverpool Delegates and Sir William Dolben's Bill', *THSLC*, 124, (1972), pp. 61-2.

² Quoted in *Ibid.*, pp. 61-2.

³ Gomer Williams, *History of the Liverpool Privateers and Letters of Marque with an Account of the Liverpool Slave Trade 1744-1812*, (London, 1897), pp. 609-10.

⁴ Sanderson, 'Liverpool Delegates'; id., 'Bibliographical Essay: Liverpool and the Slave Trade: a Guide to Sources', *THSLC*, 124, (1972), pp. 164-5; James Touzeau, *The Rise and Progress of Liverpool from 1551 to 1835*, (Liverpool, 1910), pp. 589-93, 654-8.

⁵ Sanderson, 'Bibliographical Essay', pp. 165-6; id., 'The Structure of Politics in Liverpool 1780-1807', *THSLC*, 127, (1978), pp. 65-91; *Hansard*, 27, (1788-9), cols. 573-99, 638-52.

⁶ Ian Sellers, 'William Roscoe, the Roscoe Circle and Radical Politics in Liverpool, 1787-1807', *THSLC*, 120, (1968), p. 55; F. E. Sanderson, 'Structure of Politics'; *Anon., The Poll, for the Election, of Members of Parliament, for the Borough of Liverpool: Taken between Colonel Tarleton, Bamber Gascoyne, Jun. Esq. The Rt. Hon. Richard Lord Penrhyn, and Thomas Townley, Esq...*, (Liverpool, 1790).

⁷ *Anon.*, *Poll, for the Election*, pp. 20-1.

⁸ *Ibid.*

⁹ J. A. Picton, *Municipal Archives and Records, from A. D. 1700 to the Passing of the Municipal Record Act, 1835*, (Liverpool, 1886), I, pp. 219-20.

¹⁰ Quoted in Touzeau, *Rise and Progress*, p. 682.

¹¹ *Ibid.*, p. 591.

¹² Raymond Harris, *Scriptural Researches on the Licitness of the Slave-Trade, Shewing Its Conformity with the Principles of Natural and Revealed Religion, Delineated in the Sacred*

Writings of the Word of God, (Liverpool, 1788); [William Roscoe], *Scriptural Refutation of a Pamphlet, Lately Published by the Rev. Raymond Harris, Intituled, 'Scriptural Researches of the Licitness of the Slave Trade' in Four Letters from the Author to a Friend*, (London, 1788). ハリスは、ロスコーの批判を受けて出版した第2版において、かれのことを、理性を過信する「フィロゾーフ (philosopher)」と述べた。また、最近はやりの (modern) 人権とやうに執心するあまり、宗教をおろそかにしているとも批判した。なおハリスは、ロスコーのテキストを、かれを含む3人の共作であると考えていた。第2版、114～214頁。

¹³ Williams, *History*, pp. 572-5; Touzeau, *Rise and Progress*, p. 591.

¹⁴ Sanderson, 'Liverpool Delegates', pp. 63-4; Robin Law, 'The Slave Trader as Historian: Robert Norris and the History of Dahomey', *History in Africa*, 16, (1989), pp. 219-35.

¹⁵ Quoted in Touzeau, *Rise and Progress*, p. 597.

¹⁶ T. Burke, 'Humanity is Now the Pop'lar Cry': Laboring-Class Writers and the Liverpool Slave Trade, 1787-1789', *The Eighteenth Century*, 42(3), (2001), pp. 245-63.

¹⁷ Robert Bennett, *The Voice of Liverpool Business: the First Chamber of Commerce and the Atlantic Economy, 1774-c. 1796*, (Liverpool, 2010), pp. 22, 48, 51, 55-7, 63, 148, 152-3, 158, 163.

¹⁸ J. R. Harris and B. L. Anderson, 'The Founding of an Eighteenth-Century Newspaper: the Partnership Agreement of *Williamson's Liverpool Advertiser*', *THSLC*, 116, (1964), pp. 229-34; David J. Pope, 'Shipping and Trade in the Port of Liverpool 1783-1793', (Unpublished PhD Thesis, Liverpool University, 1970), I, pp. 1-35; id., 'The Eighteenth Century Liverpool Newspapers as a Source for Maritime History', *Maritime History*, 5, (1977), pp. 116-35.

¹⁹ Sellers, 'William Roscoe', pp. 55-7.

²⁰ *Hansard*, 3, (1805), cols. 655-6.

²¹ Sellers, 'William Roscoe', pp. 56-7.

²² Anon., *History of the Election, for Members of Parliament, for the Borough of Liverpool, 1806, Containing the Addresses of the Different Candidates, with a List of the Freeman's Names who Voted*, (Liverpool, 1806); Anon., *An Impartial Collection of the Addresses, Songs, Squibs, &c. that were Published at Liverpool, during the Election of Members of Parliament, in November, 1806*, (Dublin, 1806).

²³ Anon., *History of the Election*, p. 41.

²⁴ *Hansard*, 8, (1806-7), col. 943.

²⁵ *Ibid.*

²⁶ [John Gladstone], *Letters Concerning the Abolition of the Slave Trade and Other West India Affairs*, (London, 1807); id., *Third Letter on the Abolition of the Slave Trade and Other West India Affairs*, (London, 1807).

²⁷ John R. Oldfield, 'Introduction', in Oldfield, (ed.), *The Abolitionist Struggle: Opponents of the Slave Trade*, (London, 2003), p. xviii; id., *Transatlantic Abolitionism in the Age of Revolution: an International History of Anti-Slavery, c. 1787-1820*, (Cambridge, 2013), pp. 165-94; 布留川正博「イギリスにおける奴隷貿易廃止運動—London Abolition Committeeの活動を中心に」『龍谷大学経営学論集』37 (4)、1998年、42頁。

²⁸ Quoted in Cassandra Pybus, 'A Less Favourable Specimen': the Abolitionist Response to Self-Emancipated Slaves in Sierra Leone, 1793-1808', in Stephen Farrel, et al., (eds.), *The British Slave Trade: Abolition, Parliament and People*, (Edinburgh, 2007), p. 97.

²⁹ Touzeau, *Rise and Progress*, pp. 741-5.

³⁰ 本論第2章参照。

³¹ Harris, *Scriptural Researches*, pp. 5-13.

³² *Ibid.*, pp. 13-29.

³³ *Ibid.*, p. 35.

³⁴ *Ibid.*, p. 34-7. ただし新共同訳聖書では、次のように訳されている。「……あなたの男女の奴隷が、周辺の国々から得た者である場合は、それを奴隷として買うことができる。あなたたちのもとに宿る滞在者の子供や、この国で彼らに生まれた家族を奴隷として買い、それを財産

とすることもできる。彼らをあなたの息子の代まで財産として受け継がせ、永久に奴隷として働かせることもできる」(202 頁)。

³⁵ Harris, *Scriptural Researches*, pp. 46-57.

³⁶ *Ibid.*, p. 73.

³⁷ 本論第 2 章参照。

³⁸ Williams, *History*, p. 575.

³⁹ たとえば、LRO, 900 MD 3, Petition of the Corporation of Liverpool to the House of Lords, against the Bill for the Abolition of the African Slave Trade, [1796]; Liverpool Record Office (LiRO), 352 MIN/COUI/1/14, Liverpool Town Book, Jan, 1807.

⁴⁰ Liverpool Town Book, (LTB), (1776-92), Liverpool Record Office, (LiRO), 352 MIN/COUI/1/12, pp. 539-41.

⁴¹ 本論第 2 章参照。

⁴² *Hansard*, 27, (1788-9), col. 582.

⁴³ *Hansard*, 3, (1805), cols. 654-5.

⁴⁴ *Hansard*, 6, (1806), cols. 586-7.

⁴⁵ *Hansard*, 3, (1805), col. 522.

⁴⁶ *Anon.*, *Poll, for the Election*, p. 22.

⁴⁷ John Walker, *A Descriptive Poem, on the Town and Trade of Liverpool*, (Liverpool, 1789), pp. i-iii.

⁴⁸ *Ibid.*, p. 36.

⁴⁹ *Ibid.*, p. 59.

⁵⁰ 本論第 1 章参照。

⁵¹ 本論第 2 章参照。

⁵² *Hansard*, 29, (1791-2), col. 1092. スカパンは、モリエールの喜劇に登場する詐欺師。モリエール (鈴木力衛訳) 『スカパンの悪だくみ』岩波文庫、2008 年。

⁵³ *Williamson's Liverpool Advertiser*, (WLA), 25 May 1789.

⁵⁴ [Henry Wilckens], *Letters, Concerning the Slave Trade; and, with Respect to Its Intended Abolition: by a Merchant to his Friend, on the Continent*, (Liverpool, 1793), p. 3.

⁵⁵ Walker, *Descriptive Poem*, p. 36.

⁵⁶ Robert Norris, *A Short Account of the African Slave-Trade*, (London, 1789), pp. 26-7.

⁵⁷ 本論第 2 章参照。

⁵⁸ Norris, *Short Account*, pp. 9-11.

⁵⁹ *Ibid.*, pp. 11-2. ダホメ国については、本論第 1 章参照。

⁶⁰ *Ibid.*, pp. 33-4.

⁶¹ *Ibid.*, pp. 32-6.

⁶² *Ibid.*, p. 34.

⁶³ *Ibid.*, pp. 32-6.

⁶⁴ Walker, *Descriptive Poem*, p. 55.

⁶⁵ [Wilckens], *Letters*, pp. 20-2.

⁶⁶ *Ibid.*, p. 6.

⁶⁷ *Ibid.*, p. 7.

⁶⁸ *Ibid.*, p. 14.

⁶⁹ *Ibid.*, p. 15.

⁷⁰ *Ibid.*, pp. 16-7.

⁷¹ WLA, 17 Mar 1788.

⁷² WLA, 25, Jun 1789.

⁷³ リヴァプールの「反」奴隷貿易廃止論のなかに、保守主義と啓蒙主義の両方の言説がみいだされたことは、さして不思議ではない。この両者は原理的には対立するものであり、また、発話者の立場と、その採用する言説とが、概して一致したことはたしかである。しかしながら、「反」奴隷貿易廃止論が発せられるときには、保守主義と啓蒙主義との対立が一時的に留保され、あくまでもその目的のために説得力が高いと思われる理論が選択されたためか、同一のテ

クストのなかに 2 つの言説がともにみいだされる場合もなくはなかった。ここが、現実の一筋縄ではいかないところである。一例として、製靴工というウォーカの詩が挙げられよう。

第 5 章 リヴァプールにおける「国際的」奴隷貿易廃止運動

はじめに

イギリスで奴隷貿易が廃止されてから 7 年後にあたる 1814 年の初夏、リヴァプール市当局は、次のような声明を発表した。

われわれは、ヨーロッパの平和と安寧とについて、永続的な枠組みが構築されることになるであろう、きたる講和会議の場において、アフリカの人々を、わが国では非合法とされている貿易活動の有害な影響から、より効果的に保護することの必要性が、同盟諸国のあいだでの厳粛なる審議のなかで、ゆめ軽んぜられることのないよう、強く要望する¹。

これは要するに、ナポレオン戦争が終結したいま、すべてのヨーロッパ諸国が話し合いによって、「わが国では非合法とされている貿易活動」、すなわち奴隷貿易を廃止し、そのことを通じて、アフリカ人を救済すべきだ、といているのである。

このことを知ったグロスタ公爵（Prince William Frederick, Duke of Gloucester）は、ウィリアム・ロスコーに宛てた私信のなかで、次のように述べた。

・・・このうえない喜びである。われらが偉大な事業（奴隷貿易廃止運動）のすべての仲間たちは、リヴァプールが、かの忌まわしき貿易の廃止に向けて最大限の努力を惜しまないことに、大きな喜びを感じている。このことが、リヴァプールの名誉をいやがうえにも高め、もっとも有益な効果をもたらすであろうことを確信している²。

このあと市当局は、イギリス政府が、奴隷貿易をやめさせるために、すべてのヨーロッパ諸国に外交的な圧力をかけることを要求する請願書を作成した。それは、リヴァプール住民だけで 21,000 人分の署名を集めたため、全国の人々をおどろかせた³。リヴァプール市当局および多数派の住民は、わずか 7 年前にはあれほど熱心に奴隷貿易を擁護していたのに、いまやその廃止派の陣営へと、あざやかな転向を果たしたからである。

本章では、この運動を「国際的」奴隷貿易廃止運動とよび、分析の俎上にのせる。じっさいそれは、ロスコーの奴隷貿易廃止運動（第 3 章）と、それに反対する運動（第 4 章）とが衝突しあったすえに形成された、都市の新たな文化を表現するものである。それはまた、18・19 世紀転換期イギリスにおける、奴隷貿易廃止論の影響力を理解するうえでも、見落とせない対象である。そこで本章では、まず、「国際的」奴隷貿易廃止運動を生み出した背景を概説し（第 1 節）、次にその経緯について触れ（第 2 節）、最後にそれがもった意義・特質を明らかにしたい（第 3・4 節）。主要な史料は地域紙『リヴァプール・マーキュリ』であるが、ロスコーの私信や、議会議事録、同時代の書物なども適宜参照する。

第 1 節 背景—1810 年代のリヴァプール

本節では、リヴァプールにおいて「国際的」奴隷貿易廃止運動を生み出した経済的・社会的背景について説明する。これを理解するためのポイントは、1793年から続く反フランス革命〜ナポレオン戦争および、1807年の奴隷貿易廃止である。

(1) 1810年代リヴァプールの経済成長

奴隷貿易が廃止されても、リヴァプールの港湾に船舶が寄りつかなくなり、市街地が草むらになるようなことはなかった。むしろ逆である。1820年代前半には、奴隷貿易が行われていたころの2倍の船舶が、リヴァプールを発着している。1830年代前半にはこれが3倍、後半には4倍となっている⁴。この現象はいうなれば、リヴァプールの3度目の「テイク・オフ」である。1度目はといえば、チェサピーク湾・カリブ市場を確保した1680年代、2度目は西アフリカ市場を制覇した1720年代である⁵。

何が起こっていたのか。それはほかでもない、ナポレオン戦争における、とくに大西洋上でのイギリスの優位である。この結果、リヴァプールの企業家たちは、途方もなく巨大な南北アメリカ市場を、いっきに総取りできることとなった。対照的に、ナント・ボルドー・ルアーヴルといったフランスの港湾都市は、みる影もなく没落した。いまやフランスの企業家たちは、大西洋「三角」貿易からの収益を断念せねばならなかった。かれらの手配する船舶が、大西洋を安全に航行できる見込みはなかった⁶。そのうえ、かつてはカリブ最大の砂糖生産量をほこっていたサン・ドマング植民地は、もはやどこにも存在していなかった。それは「ハイチ」とよばれる、奴隷制のない黒人たちの共和国となっていたのである⁷。

それにもまして、リヴァプールの企業家たちを小躍りさせたのは、ラテンアメリカの情勢であった。その大半を保有していたスペインは、はじめフランス革命政府、ついでナポレオンの実質的な支配下におかれたため、イギリスとの戦いに巻き込まれて連敗し、ついには植民地との連絡を遮断されてしまった。こうなると、ラテンアメリカのクリオーリョたちは、たよりのない本国政府を相手にせず、かわりにイギリスの企業家との取引を希望するようになった。かれらのこうした態度が、植民地の独立運動へと成長するまでには、さほど時間はかからなかった。いっぽうポルトガルは、ブラジルを領有していたものの、フランス・スペインの両国におびやかされ、存亡の危機に立たされていた。そこでかれらは、ブラジルの広大な資源・市場を差し出す代わりに、イギリスの庇護を受けることを余儀なくされた。これら一連の変化は、リヴァプールの企業家のみならず、ランカシアの製造業者にとっても、このうえない朗報であった⁸。

このように、リヴァプールの第3の「テイク・オフ」は、ナポレオン戦争を契機とするところの、南北アメリカ市場の制覇によるものである。それは、奴隷貿易の廃止がもたらした損失を、おぎなうて余りあるものであった。しかしながら、貪欲なリヴァプールの企業家たちはそれだけでは満足せず、今度はさらに広大なアジア市場にまで食指を動かした。この結果、17世紀以来ずっと守られてきた、東インド会社の独占権が、ついに非難の対象となった。この会社はもともと、正金と引き換えに、東洋の特産品を入手するという事業を行っていた。しかしいまや、ランカシアの製造業者たちは、逆にみずからの商品をたずさえて、東洋の市場に殴りこみをかけよう

というのである。それゆえに東インド会社には、早々に退場してもらわねばならなかった⁹。

(2) 1810 年代リヴァプールの社会変動

リヴァプールの企業家たちは繁栄を謳歌したが、製造業者たちはまったく逆であった。1810年代のリヴァプールでは、船舶・陶器・ガラス・パイプ・銅板などの製造業が急速に衰退している。しかも、それらは2度と復活しなかった。この現象の背後には、奴隷貿易廃止がある。つまりは、西アフリカ市場をターゲットにした事業者たちが、窮地に立たされたのである。しかもかれらは、ラテンアメリカ市場に乗り換えることができなかった。なぜならそれは、あまりにも広大であり、かれらの手には負えなかったからである。かれらは、ランカシアの内陸に出現した、巨大工業地帯との競争に、あえなく敗れてしまった。その中核にはマンチェスタという都市がどっしりとかまえており、安く・速く・大量に商品を生産することにおいて、右に出るものは存在しなかった。かくてリヴァプール・マンチェスタ間での役割分業が進展した。すなわち前者が流通、後者が製造の拠点である。これは経済学的にみれば、じつに効率的であった。だがその背後で、リヴァプールの製造業者・店舗経営者たちが犠牲になったのである¹⁰。

こうなると企業家たちは、安いパンと高い報酬を要求する、地元の製造業者たちをうとましく感じるようになった。かれらが必要としたのは熟練工ではなく、港湾荷役労働者であった。むしろその理由は、リヴァプールの港湾の規模が2倍、3倍、4倍に巨大化していた事実である。そこで企業家たちは、1801年に新しく連合王国の構成国となった、アイルランドからの移住者をあてにしはじめた。アイルランドは、アイリッシュ海を挟んで対岸にあつて、アクセスもよかった。アイルランド人は、貧困・無学・非熟練であつたうえ、イングランドの労働慣行をよく知らなかったため、雇用者のいいなりで低賃金・重労働を行うことが期待された。したがって、リヴァプールの製造業者の立場からいえば、これまでに修得したみずからの技能を生かすことのできる仕事はもはやなく、ならば生存のためにと港湾荷役労働を行おうとしても、それらはアイルランド移民によって、すでに占有されている状況であつた¹¹。

したがって、19世紀前半のリヴァプールが、激烈なる階級・エスニック闘争の震源地となつたとしても、まったく不思議ではなかつた。いまや没落した民衆は、おのれを見捨てた企業家たちと、おのれの仕事を奪ったアイルランド人たちとを、ともに憎んでいた。かくてかれらの破壊・暴力行為は、統治者にとって、きわめて頭の痛い問題であり続けることになった。

(3) 1810 年代リヴァプールの党派抗争

ミドルクラスはといえば、かれらも一枚岩ではなく、2つの党派に分裂していた。リヴァプールでは、企業家たちが家父長主義的な態度をとらなくなったため、本論でいうところの保守主義が弱体化した。これはいいかえれば、市当局によって脈々と継承されてきたジョンソン父子の路線が、もはやまったくの時代おくれになったということである¹²。それでは、かれらはみな啓蒙主義的な「ホイッグ」になったのかというと、決してそうではなかつた。ついに、遅ればせながらリヴァプールでも、カルヴァン主義的な「トーリ」の出現をみたのである。

その立役者は、ジョン・グラッドストンなる企業家であった。かれはスコットランドのリース（Leith）の生まれであるが、22歳のときリヴァプールに移住し、おもにアメリカ合衆国とのタバコや小麦の取引によって巨富を築いた。かれは、イングランド在住のスコティッシュ・プレズビテリアンという立場にあって、カルヴァン主義という信仰をとるか、プレズビテリアンという組織をとるか、という選択に迫られた。かれははじめ後者を選び、ユニテリアンの礼拝堂に通ったほか、「ホイッグ」としての政治運動にも参加した。しかし、ロスコーの思想に象徴されるような世俗・合理主義は、かれの肌には合わなかったらしい。やがてかれは仲間とともに、リヴァプールではじめての、スコティッシュ・プレズビテリアンの礼拝堂を立ち上げた。だがそこでもしっくりこず、1800年ごろ、とうとうイングランド国教会に改宗した。そのことは、かれの、ウィルバフォースのそれにも比肩するような、あつい信仰心をみたすためであった。かれは1810年代には、それぞれ学校を附属させた2つの教会の設立に尽力した。それらは、ランカシアにおける信仰復興運動の中心地となることを期待されたのである¹³。

グラッドストンの「トーリ」が伸長するにつれて、保守主義はまったく衰退した。かつて後者を支持していたものの多くは、じょじょに前者に吸収されていった。かれらは、もともと確保していた北米カリブ・西アフリカ市場の拡充はもちろん、ラテンアメリカ市場への進出にも熱心であり、そのためなら、クリオーリョのスペインからの独立運動にも反対しなかった。またかれらは、インド・中国市場へもしきりに参入したがった。さらに重要なことに、かれらはリヴァプールの民衆に対し、家父長主義的な態度で接することをやめた。かわりにかれらは、民衆が信仰にめざめ、禁酒・節制を励行するようになれば、社会秩序は守られると確信した。そう思うばかりではなく、かれらは、じっさいにそうした運動に没頭するようになったのである¹⁴。

かくてリヴァプールでは、グラッドストンの「トーリ」と、ロスコーの「ホイッグ」とが正面からぶつかりあうことになった。1812年の下院選挙では、「トーリ」は外務大臣のジョージ・カニング（George Canning）を、「ホイッグ」は気鋭の若手ヘンリ・ブルーアム（Henry Brougham）を、それぞれ擁立した。かれらが奪おうとしていたのは、実質的には1議席であり、もう1議席は、当時の旧態依然たる選挙制度のもとでは、市当局の推薦するアイザック・ガスコインによって確保されることが、事前に明らかであった。しかし、「ホイッグ」の指導者ロスコーは、自派で2議席を奪おうと欲を出し、もう1人候補を立ててしまった。この結果、本命のブルーアムまでもが落選してしまう。とはいえ、かかる判断ミスがなければ、どちらが勝利してもおかしくはないほどに、両者の勢力は拮抗していたのである¹⁵。

小括

奴隷貿易が廃止されてもリヴァプールは衰退しなかったが、未曾有の社会的・政治的变化を経験した。企業家たちは、南北アメリカ市場を総取りし、インド・中国市場にもにらみをきかせ、意気軒昂としていた。いっぽう製造業者たちは負け犬となり、かれらを見捨てた企業家たち、およびその子飼いとかれらが信じたアイルランド移民への憎悪を強めた。かれらはもはや、社会秩序を破壊しかねない、危険な不満分子とみられるようになっていた。

企業家・専門職などからなるミドルクラスは、「トーリ」と「ホイッグ」とに分裂して、たがいに争っていた。両者はともに、自由で開かれた市場におけるみずからの競争力に自信があり、またみずからのそうした能力が発揮されやすいように、国家・国民を改造しようともくろんだ。かれらは、無産・無学な民衆は、規律化されるか、さもなければ排除されるべきとの考えを共有していた。しかしながら、この両者の構想する未来図は、プロテスタント信仰の復興か、それとも世俗・合理主義の徹底かという点で、一致をみななかったのである。

第2節 「国際的」奴隷貿易廃止運動の経過

本節では、リヴァプールにおける「国際的」奴隷貿易廃止運動の経緯を概観する。そのタイムスパンは、1814年5月から7月までの、およそ2ヶ月のあいだである。発端は4月末～5月に生じた、ナポレオン戦争の終結、およびフランス王政復古である。

(1) フランス王政復古と奴隷貿易問題

1813年10月、ドイツ東部のライプツィヒにおいて、フランス皇帝ナポレオン1世は、オーストリア・プロイセン・ロシアなどの同盟軍に敗北をきった。前年のロシア遠征に失敗して意気消沈していたかれは、さらに退却を続け、とうとう1814年3月、首都パリを攻略されてしまう。いっぽう南フランスでは、スペインを制圧したウェリントン公爵の率いるイギリス軍が、快進撃を続けていた。4月、ナポレオンはもはやこれまでと退位を決意し、地中海のエルバ島に移されることとなった。5月、ブルボン家のルイ18世が、亡命先のイギリスから帰国したことで、フランス王政復古が実現した。イギリスの立場からいえば、ここに、20年間にわたって続けられた、反フランス革命～ナポレオン戦争の勝利が確定した。もともと、翌年にはナポレオンのエルバ島脱出、「百日天下」、そしてワーテルローの戦いが控えているのであるが、むしろこの時点では、誰もそのようなことは予想していない。

イギリス政府は、ただちにタレイランなる人物を首班とするフランス新政府との講和会議に入ったが、このとき国内では、その内容に大きな注目が集まっていた。5月2日、下院本会議において、ウィルバフォースは次のように演説した。

もしもわれわれが、全ヨーロッパのために苦闘したそのあとで、領土や賠償金といった政治的・経済的な見返りを要求することもせず、ただ人類普遍の幸福に深く結びついた大義（奴隷貿易廃止）の樹立にのみ貢献したとすれば、どうであろう。わが国の品格は、また一段と高まるのではなからうか¹⁶。

これは要するに、戦勝国イギリスは、敗戦国フランスに対して、ただ1つの要求を突きつけるべきだ、とのことである。その1つこそ、フランスから奴隷貿易廃止の確約をとることにほかなかった。なぜこのことが問題になったのかといえば、戦争が終わって、大西洋の安全な航行が可能になれば、ナント・ボルドー・ルアーヴルの奴隷貿易が息を吹き返すからである。さらにフ

ランスが、イギリスとの戦争に充てていた兵力を、今度はサン・ドマングの再征服に投入することすら、ありえない話ではなかった。そうなれば、イギリスの奴隷貿易廃止論者にとっても、西アフリカ・カリブ貿易に従事する企業家にとっても、ともに悪夢であった。前者にとっては、何よりも大切な人道が公然と踏みにじられることになるし、後者にとっては、奴隷貿易をできないという足かせをつけられた状態で、フランスの企業家と競争せねばならないからである¹⁷。それゆえにウィルバフォースの提案に対しては、すべての出席議員が賛意を表明した。

ところが 30 日に締結された講和条約には、次のような条項が含まれていた。

フランス政府は、5 年以内に奴隷貿易を全面的に廃止すること。またこの猶予期間内においても、奴隷の国内での流通は禁止とする。ただし植民地における場合は、例外とする¹⁸。これはつまりフランスが、少なくとも 5 年のあいだは何の制限もなく、大西洋「三角」貿易に従事できることを意味している。このことが 1 週間後にイギリス議会で明らかにされると、大変な騒ぎとなった。野党領袖のグレンヴィル男爵は、「この条約の、奴隷貿易にかんする条項を読んで、最大級の落胆と怒りとを隠すことができない¹⁹」と述べた。ウィルバフォースも次のように述べ、失望感をあらわにした。

わたしは現在、このうえなく深い落胆と失望に打ちひしがれている。あの忌まわしき悪はほぼ根絶されたと思っていたのに、その再開を目の当たりにすることになるとは。外交上の先例からいっても、あのフランスが、5 年が経ったからといって、奴隷貿易をやすやすと廃止するであろうとは、わたしにはどうてい考えられない²⁰。

講和会議の全権であった、外務大臣のカーズルレー子爵（Viscount Castlereagh）は、議員たちによるかくも強烈な非難に直面して、自己弁護を繰り返すほかなかった。

わが国が奴隷貿易廃止に固執することで、これまでに国際秩序の枠組みを担ってきた諸国の足並みが、もしも乱れてしまったとしたならば、それは正しいことであろうか……。この問題について、多国間での合意が少なくとも得られたのであるから、われわれとしては、その義務を十分に果たしたとはいえないであろうか……。思うに、われわれのなし遂げたことについては過小評価されている一方で、なしえなかったことについては、不当に責められているようである²¹。

みてきたとおり、1814 年の初夏にナポレオンが没落し、フランス王政復古が実現すると、この国の奴隷貿易がどうなるのかについて、イギリス人の多くが固唾を飲んで見守った。しかし、ふたを開けてみると、イギリス政府はこの問題に対して、フランスに大幅に譲歩してしまった。このことに対し、議員たちのあいだでは、不満の声が相次いだのである。

（2）「国際的」奴隷貿易廃止運動の発生と展開

政府の対応を批判したのは、むろん議員たちだけではなかった。ただちにフランスに圧力をかけて、奴隷貿易廃止を確約させるべしとの意見は、イギリスのあらゆる地域で聞かれるようになった。かくてそのことは、約 20 年ぶりの、大衆請願運動の組織化に帰結した。これを指導したのは、奴隷貿易廃止協会（SEAST）の後身である、アフリカ協会（African Institution, AI）で

あった。その活動目的は、奴隷の密貿易の撲滅と、西アフリカおよびカリブ地域の「文明化」であった。この団体には、ウィルバフォースやクラークソン、ロスコーといった、わりあい高齢のメンバーから、ヘンリ・ブルーアムをはじめとする若手政治家まで、幅広い年齢層の人々が参加していた²²。会長をつとめたのは、冒頭で触れたグロスタ公爵である。かれは、病床の王ジョージ 3 世のおいにあたる人物であった。摂政をつとめる王太子ジョージ（のちのジョージ 4 世）とは、いどこにあたる。かれは、AI 会長としての立場から、先述の講和条約における奴隷貿易にかんする条項に反対の意を明らかにし、大衆請願運動の必要性をよびかけた。6 月 1 日の上院本会議においては、次のように演説している。

わたしは、奴隷貿易こそ人道に反するものであり、かつ政策的にも不利なものであるという、両院での満場一致の決議が（5 月 2 日に）行われて以降、もはやそのことを支持する請願運動のごときものは、必要ないと考えていた。ところが、かの講和条約のなかに記された 1 つの条項によって、状況は一変した。この条約はすでに効力をもってしまっているものの、きたるウィーン国際会議の場においてなら、あのあわれな人々、すなわち黒人の苦悩を緩和するために、多くのことができるかもしれない。上院でこの問題が検討されることを要求する請願書の 1 つは、ロンドンとその近郊からのものであり、3,900 人が署名している。この貿易に反対する請願書は、わが国の全土から続々と到着している。宗教・正義・人道、そしてわれわれの名誉が、奴隷貿易の廃止を要求している²³。

みられるとおり、かれおよびかれの仲間たちの望みは、9 月に予定されていたウィーン会議において、奴隷貿易問題がふたたび討議されることであった。そしてそのためならば、カースルレーをはじめとする閣僚たちにはたらきかけるのみならず、ロシア皇帝アレクサンドル 1 世や、「ハイチ王」を名乗るアンリ・クリストフ（Henri Christophe）との連携すら模索した。前者が、農奴制をもつ国の君主であり、後者が、軍事独裁政権の頭目であったことは、特筆に値しよう。とまれ、かかる一連の活動への支持を集めるために、かれらは、久しぶりの大衆請願運動を組織したのである²⁴。

リヴァプールでは、AI 幹部に名を連ねていたロスコーが、これを指導することになった。かれはさっそく市当局に対し、住民集会の開催を要求した。7 月 19 日、それは市長の責任において実現した²⁵。そこでは、後述するが、「ホイッグ」と「トーリ」のあいだでの、重大な意見対立がみられた。とはいえ、都市をあげて「国際的」奴隷貿易廃止運動に参加するという、基本方針そのものに異議をとねえる人物はいなかった。つまり、フランスが奴隷貿易を再開するなら、われわれもそれを復活させよう、といったたぐいの意見は出なかったのである。22 日、完成した請願書に対し、21,000 人のリヴァプール住民が署名した²⁶。3 日後、それはウェストミンスターに到着し、グロスタ公爵の手で、上院に提出されたのである²⁷。議会閉会后、この問題にかんしては、全国から 850 通の請願書が届けられ、100 万人の署名を集めていたことが判明した²⁸。これは、空前絶後と思われた 1792 年の同じ運動を、ゆうに上回るほどの規模である。

小括

ナポレオン戦争が終結して、フランスの奴隷貿易の帰趨が、イギリス人の関心のまとなった。もしもそれが再開されてしまえば、あるいは最悪のシナリオとして、サン・ドマング植民地までもが復活をとげたならば、イギリスの国際商業における優位は、たちどころに危うくなった。かくてイギリスでは、「国際的」奴隷貿易廃止運動が勃発し、リヴァプールのミドルクラスのほぼ全員が、それに賛意を表明したのである。この行動は、かれらの恐るべき変わり身の早さを示すものであったが、それでも、ほかのイギリス人からは拍手喝采を浴びた。とはいえかれらは、そこでイギリス奴隷貿易の復活を、あらためて主張することもできたはずである。だが、それをしてしまえば、ふたたび全国世論からのバッシングを受けることは、目にみえていた²⁹。この事実こそ、イギリス奴隷貿易廃止論の影響力の甚大さを、明瞭に示している。

第3節 運動の特質①一都市共同体の再創造

リヴァプールにおける「国際的」奴隷貿易廃止運動は、18・9世紀転換期における、都市の新たな文化を表現するものである。またそのことは、当事者たちによっても強く意識されていた。いいかえればかれらは、都市の新たな文化、およびそれによって維持されるところの、新たな共同体の創出を模索していたのである。そしてそれは、「過去との訣別」という物語を精錬することによって実行された。本節では、この点をもう少し敷衍してみたい。

(1) 「過去との断絶」の創出

ロスコーは7月19日の住民集会の開催にさいして、次のように述べた。

わたしは今日、市長の招集に応じ、アフリカ奴隷貿易問題にかんする住民集会に駆けつけられた諸君を前にして、万感の思いである。長年のあいだ、ここリヴァプールでは、わが国のどの地域よりも大規模に奴隷貿易が行われていた。それゆえに、この地において生じた世論の決定的な変化は、ほかの地域に居住するわが国民にも多大な影響を与え、さらにはかれらと一体となって、ついには奴隷貿易の廃絶に向けた努力へと帰結するであろうことが期待できる。諸君、それが発揮される機会は、今を除いてほかにないのである³⁰。

かれによれば、リヴァプールでは、かつて奴隷貿易がさかんに行われていたが、いまではみなその廃止を願っているのであり、そのことをすべての国民に知らしめるべきであった。ロスコーの第1の支持者である軍人ジョージ・ウィリアムズは、これに呼応して次のように述べた。

かつてリヴァプールの評判が、奴隷貿易問題によっていかに汚されてきたかを思い返す必要がある。そして今回、(請願書を提出することで)それがどれほど回復するかということ、を考えようではないか³¹。

このようにかれは、リヴァプールが奴隷貿易のせいでこうむったイメージダウンを、その廃止運動への参加によって帳消しにしようと提案する。奴隷貿易によって傷つけられた名誉が、奴隷貿易廃止運動を通じて回復するという発想は、ここでの鍵である。

この住民集会を報道する地域紙『マーキュリ』は、次のような見解を披露した。

本紙が報道した住民集会の決議内容は、まさにリヴァプールの名誉となるにふさわしいものであった。これにより、われわれのなかに、かつてわれわれが関与していた悪弊（奴隷貿易）のなごりがいまだに存在するのではないかという、ほかの地域の人々によってあまりにも一般的に抱かれている疑念は、完全に払拭されたであろう……。

ロスコー氏は、奴隷制およびそれがもたらす虐待に対し、断固たる反対の意を表明したが、そのさい、無理解なヤジや罵倒を受けることは皆無であった。かわりにかれは、住民諸氏の、温かい拍手に包まれたのである……。なお、この集会において、（奴隷貿易を正当化するような）個人的な悪しき追憶にひたった出席者が 1 人もいなかったことは、高い賞賛に値する。というのも、リヴァプールに居住する大多数の人々は、かつては奴隷貿易から得られた利益を、直接的なり間接的に享受してきたからである³²。

この新聞も、奴隷貿易問題にかんして、イギリスのほかの地域の人々が、リヴァプールをどう思っているのかについて気をもんでいる。翌週、かれらは満足げに、次のことを報道した。

7 月 25 日、グロスタ公殿下が、リヴァプールからの（奴隷貿易の廃止を要求する）請願書を提出された。殿下は、かかる請願がリヴァプールから発せられたことじたい、この都市の名誉を大いに高める結果になるだろうとおおせられた³³。

秋になると、かれらは次のような詩を掲載している。

イギリス人はそう遠くないあそこ／アフリカの奴隷市場をわがものとしていた／海岸につながれた黒いとらわれ人たち／みな涙を流し、呪いの言葉をはいていた／深い嘆きの声、耳をつんざく金切り声……母親の狂おしく悲痛な声／そして満足そうな悪魔のほほえみ／ああ、その奴隷商人は母子を引き離したのだ／その瞬間ですらかれは笑っていた／だがそれもいまは昔、輝かしい真実がわが町に舞い降りた／かつてかの貿易で悪名高かった／リヴァプールの市庁舎で、わたしはおまえの声を聞いた／おお真実よ、勝利の女神はおまえを選んだのだ³⁴。

リヴァプール住民は、「国際的」奴隷貿易廃止運動に参加するという行為を通じて、奴隷貿易に従事していた過去との訣別を、外部に向けてアピールした。そのことはまた、後者によって傷つけられた名誉を、前者によって回復させようとする試みにほかならなかった。その目的はすなわち、「ホイッグ」と「トーリ」のあいだで共有される価値観を創出することで、両者のあいだの、むき出しの衝突を回避することであった。じっさい、奴隷貿易廃止のあと、かれらをつなぎとめる文化的象徴は不在であった。いっぽう、かれらのあいだでの不信感が解消されなければ、商取引にも悪影響が及ぼされ、ついには都市の経済にとって、マイナスの効果が生み出されえた。それゆえに、いかに対立する両派のあいだでも、どこかにコミュニケーションの余地が残されておかねばならなかった。この点を踏まえれば、奴隷貿易廃止に同意する、「生まれ変わった都市」としての姿勢を誇示し、そのことを通じて、ほかのイギリス国民からの賞賛を得ておくことは、きわめて有力な戦略となりえた。なぜならそのことによって、すべてのミドルクラスの、都市共同体に対する、最低限の帰属意識くらいは醸成されるからである³⁵。

しかしながら、奴隷貿易が不名誉とは、18 世紀前半のジョンソン父子の後継者たちが聞いた
ら、大いに憤慨するであろう。ところが、1810 年代のリヴァプールにも、かれらの生き残りは
たしかにいた。民衆である。かれらは、かつて奴隷貿易を下から支えていて、大いにたよりにさ
れていた。しかしいまでは、酒に酔ったトラブル・メーカーとしてしか認識されなくなっていた。
かれらが誇りにしていた奴隷貿易は、いまや「ホイッグ」・「トーリ」の両方のミドルクラスから、
不名誉の烙印を押されたのである。かわりにミドルクラスは、奴隷貿易廃止陣営にくら替えする
ことで、自分たちだけまんまと名誉を回復したといえる。いっぽう、汚名を着せられたままの民
衆が、かつてのように主体的に政治に参加しうる機会は、さらに遠のいた。いやむしろ、そもそ
も「ホイッグ」と「トーリ」が、奴隷貿易問題を通じて連携したのは、まさにこの民衆の動きを
封じ込めつつ、都市を「適切に」管理統制するために、たがいに協力しあう必要があったからと
もいえよう。

(2) 名誉の分配をめぐる争い

とはいえ、党派対立はここでも表面化した。7 月 19 日の住民集会において、「トーリ」を率い
るジョン・グラッドストンが、ロスコーに論争を挑んだのである。

ロスコー氏は、わが国の商業利害にかんする条項を、請願書に盛り込むべきではないとのお
考えであるが、わたしは異なった意見のもち主である……。この点をぜひ、この公開討論
の場において深めようではないか³⁶。

この挑発に対し、ロスコーは次のように切り返した。

わたしはグラッドストン氏の意見に必ずしも賛成できない。ただ、わたしたちは、奴隷貿易
を廃止すべきだという主張をもつ点においては、意見を同じくする。異なるのは議論の筋道
である……。氏によれば、奴隷貿易が正義や人道に反するものだというほかに、政策的に
も望ましくない点が強調されるべきとのことである。なぜなら、フランスや他の国々が奴隷
貿易に従事することで、かれらがイギリスの企業家に対して優位に立つからとのことであ
る。しかしながら、私見によれば、奴隷貿易に反対するさいには、理性と正義という 2 つの
原則にのみ立脚していればよい……。ある命題の妥当性について考察する場合、それが道
徳的に不正であるということさえ立証できれば、それがわれわれの利益にかなうか否か、と
いうことを考えても意味がないし、正義にも反するのではなかろうか³⁷。

これは要するに、ロスコーが、人道的観点から奴隷貿易を廃止すべきとの趣旨で請願書を作成し
たところ、グラッドストンは、人道も大事だが、フランスが奴隷貿易を再開することによって生
じる、イギリスの経済的な損失についても言及すべきだ、と指摘したのである。

ここに 2 つ意見が衝突した。争点は、「人道か経済か」ではない。「人道のみか人道プラス経済
か」である。このあと集会は紛糾したようであるが、「ホイッグ」の手で書かれた議事録しか現
存しないため、かれらが一方的に優勢であったかのように伝えられる。軍人のウィリアムズが次
のような演説を行ったとき、市庁舎には割れんばかりの拍手が鳴り響いたという。

諸君、グラッドストン氏のいわれるような議論を展開することについて、わたしは断固反対

である。経済的観点からこの問題を論じることは、まったくもって汚らわしい。わたしはロスコー氏に賛成である。ものごとの重要性を判断するさいに、目的の純粹さを忘れてはならぬ……。われわれの動機なり行動なりが、目先の損得勘定によって曇らされるようなことがあってはならない。諸君、金はむろんよいものだ。しかし、最良のものでは決してない。名誉、品格、これらのほうが、1,000 倍も好ましいものである。われわれが追求すべきはそれらであろう³⁸。

ここで勝負あり。あわれ、グラッドストンは、次のような敗戦の弁を述べるほかなかった。

ロスコー氏の意見に、まったく賛成する。個人的には別の議論も加えたかったが、多数意見とはならなかった。それゆえにわたしは、大いに満足してこの請願書に署名しよう³⁹。

この集会において、ロスコーが終始優勢であったか否かについては疑問が残るものの、多数決の結果、かれが勝利したということだけは事実である。

この騒動は、「ホイッグ」が奴隷貿易廃止運動によって生じる名誉の取り分を多く確保しようとしたことに対する、「トーリ」の牽制として読み解くことができる。「ホイッグ」の多くは、1788 年の段階で奴隷貿易廃止論者であったという強みがあるため、1814 年の運動においても、主導権を握りやすかった。だが、じっさいのところかれらは、1780 年代の運動には、できるだけ目立たないように、おそるおそる参加したうえ、大した貢献をなさなかった。ロスコーはそのさいたるものである⁴⁰。しかし、そうした過去は巧妙に書き換えられた。いまやロスコーは、周囲を敵に囲まれたリヴァプールにおいて、ただ 1 人で奴隷貿易に立ち向かった英雄であった。このイメージは、ウィルバフォースら AI の同僚からのお墨付きをももらっている⁴¹。いっぽうの「トーリ」には、もともと奴隷貿易に従事しており、最近になって廃止論者に転向したものが多かった。したがってかれらが、「ホイッグ」の主張を丸のみすれば、「国際的」奴隷貿易廃止運動によって生じた名誉を総取りされる、と憂いたとしても不思議ではない。そうなれば、「ホイッグ」の勢力拡大、世俗・合理主義の伸長、信仰復興運動の退潮は必至である。そこでかれらは、少しでもみずからの意思を請願書のなかにねじ込もうと、さかんに要求したのであった。

小括

「国際的」奴隷貿易廃止運動に参加するという行為は、1810 年代のイギリスという文脈においては、名誉を生み出す源泉であった。リヴァプールのミドルクラスにとっては、「ホイッグ」・「トーリ」を問わず、これを利用しない手はなかった。そのことを通じてかれらは、はげしい党派対立にもかかわらず、都市における経済的・政治的な相互交流に必要な、最低限の仲間意識を共有しなければならなかった。もしも両者のあいだでの協力が遮断されると、単純に言えば経済効率が半減し、また都市に常在するさまざまな諸問題、より具体的には、民衆の管理統制にかんするそれらにうまく対処できず、きわめて深刻な事態が発生しえた。これに対し、「名誉ある都市」としてほかの地域から賞賛されたという実績があれば、少しでもそれを維持しようという、党派を超えたミドルクラスの努力が引き出されえたのである。

しかしながら、そのことによって、党派対立が解消するということにはならなかった。

リヴァプールにかぎっていえば、奴隷貿易廃止論は「ホイッグ」と親和性があり、「トーリ」とはそうではなかった。それゆえに奴隷貿易廃止論が、都市の名誉の切り札ということになれば、「ホイッグ」の勢力拡大が予測されえた。とはいえ「トーリ」としても、ほかに有効な手段はなかった。奴隷貿易廃止に反対するわけにもいかず、さりとて「ホイッグ」の言い分を無修正で通すわけにもいかない。そこでかれらは、「人道プラス経済」ゆえに奴隷貿易は不正、という代案を立てて、ライバルの「人道のみ」の立場を牽制しようとしたのである。

第4節 運動の特質②—帝国意識の浸透

「国際的」奴隷貿易廃止運動によって創出され、浸透した新たな文化は、第3節で述べたものとどまらなかった。もう1つの要素が、「トーリ」・「ホイッグ」のあいだで、ほとんど無意識のうちに共有されたのである。それこそ、人種差別・帝国意識に「汚染」された、自己および他者に対するまなざしである。それは、繰り返し述べてきたとおり、18世紀末リヴァプールの保守主義にはみられない要素であったが、ロスコーら奴隷貿易廃止論者、および啓蒙主義的な「反」奴隷貿易廃止論者によって、じわじわと広められてきたものであった。それはまた、この1814年の「国際的」奴隷貿易廃止運動を通じて、都市の文化のなかに、あらためて強固に根を張ることとなったのである。

(1) 奴隷貿易廃止と「アフリカ文明化」

グラッドストンは7月19日の住民集会において、次のように発言した。

先日の講和会議において、わが政府がカリブ植民地の返還問題に先立ち、アフリカ奴隷貿易の即時廃止を、強力かつ迅速に押し出すことができなかった点は、まことに遺憾である。これで、奴隷貿易が少なくとも5年間は継続されることが決定してしまった。現在のところ平和と安寧とを回復しているアフリカは、今回の決定により、ふたたび大いなる悪と絶望のふちに追いやられるであろうことが予想される⁴²。

この発言は、「トーリ」の指導者が、奴隷貿易こそアフリカ人を「大いなる悪と絶望のふち」に追いやる営為であり、またその廃止が「平和と安寧」をもたらすということを認めたという点で、きわめて重要である。ここからも、かれが「過去との訣別」を意識していること、つまり保守主義とははっきりと一線を画そうとしていることがうかがえる。

いっぽう、「ホイッグ」の支持者たちは、さらに率直な発言を行った。

かの野蛮で唾棄すべき貿易に、わが同胞が長年にわたって関与していたことは、いかんともしがたい事実である。わたしたちは、わが同胞がアフリカの罪なき不運な住民に対して、無慈悲にもはたらいてきた犯罪行為、そしてまたかれら・かの女らを苦しめてきたことに対し、心から反省せねばならない。わたしたちはかつてアフリカの侵略者であった。だがいまや、かれら・かの女らの防壁としての役割を果たすべきである⁴³。

ジョージ・ウィリアムズは、次のような大仰な演説をぶって、またしても割れるような拍手喝采に包まれたという。

アフリカの人々は、かれらの土地への侵略行為、および自由への脅威から解放されたことで、着実に進歩しているようである。フランスやその他の諸国に向かってこう宣言しようではないか。なにものも進歩に向かって努力しているものを妨げてはならない。かれらはいま、文明への貴重な第一歩を踏み出しているのである⁴⁴。

みられるとおり、リヴァプールの「ホイッグ」・「トーリ」が共有するのは、次のような物語であった。すなわち、第1に、奴隷貿易は「無慈悲な侵略者」たるイギリス人が、アフリカの「罪なきものたち」にはたらいた蛮行である。第2に、いまやイギリス人は、アフリカ人が奴隷貿易をやめる手助けをすることで、その罪はろぼしをすべきである。それによって、後者は「救済」され、また「文明化」されるであろう。

しかしながら、この物語は重大な問題をはらんでいる。まず、第1の想定であるが、これは明らかに事実無根である。奴隷貿易はアフリカ人によって主導されたものであり、イギリス人の役割はごく従属的なものであった。したがって、奴隷所有・売買をやめないアフリカ人に、「罪がない」とはとうていいえない。では、はからずも奴隷にされてしまったアフリカ人のほうはどうか。この男女は想像を絶する不幸に直面したが、他方でかれらは、みずからが奴隷主となることにはやぶさかではなかったから、奴隷貿易や奴隷制という営為そのものをしっかりと支える主体であったとみなすことができる。したがって、かれらにも「罪がない」とはいえない。念のため付言すれば、むろんイギリス人にも、「罪がない」とは絶対にいえない⁴⁵。次に、第2の想定であるが、これは人種差別的であり、帝国意識のあからさまな表現である。その背後には、アフリカ人が人種的に劣等な存在であるとの確信のもと、かれら・かの女らの運命を、イギリス人が自由に決定してよい、との意味が隠されているのである。

(2) 「アフリカ文明化」論の構造

いまや「トーリ」・「ホイッグ」ともに、「アフリカ文明化」を口にすることで、たがいに相手を賞賛しあった。だがこの「アフリカ文明化」論は、どのような内部構造をもっているのか。具体的には、それはいかなる目的のもと、いかなる手段で実行されるべきとされたのか。これらのことも、7月19日の住民集会において表明されている。このとき「ホイッグ」の出席者の1人は、次のように説明している。

かの奴隷貿易が一掃されたからには、アフリカ大陸をヨーロッパ人の日用品の供給源とすることに、まったく障碍はなくなった。とくにそのことは、農業やその他の産業の活性化を通じて行われるべきものである。だがそのためには、われわれが、沿岸の住民たちに、規則正しい組織労働の習慣を教え込む必要がある。そうすれば、必ずや合法的な貿易に必要な資質を、かれらに身につけさせることができるであろう⁴⁶。

ここに、かれらの目的・手段が明らかである。つまりかれらは、「アフリカ文明化」を通じて、その資源を、ヨーロッパ人の使用のために供したいと考えているのである。そしてそのために

は、規律化された賃労働を普及する必要があった。

アフリカに規則正しい組織労働を導入しようとする試みはほとんどすべて、いまだ継続されている奴隷貿易のせいで、もろくも挫折させられてきた。アフリカの首長たちは狭量にも、配下のものたちに組織労働をさせようとしな。なぜならかれらはヨーロッパ人の走狗となつて、配下のものたちや、隣接する諸地域のものたちを捕獲し、奴隷として売りさばくことができたからである。末端のものたちはというと、まったく自由を享受していないので、やはり規則正しい組織労働に従事する様子はなかった。だがここ 3、4 年、わが政府が法の徹底に乗り出し、ウィンドワード海岸に軍艦を航行させるようになると、ヴェルデ岬からパルマ岬にかけての奴隷貿易が一掃され、あとはポルトガルの植民地であるビサウを残すのみとなった……。アフリカの繁栄を願うほかのすべての人々も、この喜びを共有するであろう。いまや、偉大で崇高なプログラムの数々が、すでに実行に移されている。あと 1 世紀か 2 世紀もすれば、必ずやアフリカは文明化されることであろう⁴⁷。

この人物は、奴隷貿易廃止を徹底するため、アフリカ沿岸にイギリスの軍艦が配備されたことを喜んでいる。かれのねらいは、暴力を用いてでも奴隷貿易を鎮圧すること、そしてアフリカ人に、イギリスで行われているような賃労働を強制することである⁴⁸。これらが奏功すれば、イギリス人は、アブラヤシやゴムといった、アフリカの特産物を容易に確保しえた。またそこに、奴隷制のない、サトウキビやワタの農園を開発することすら、夢ではなかった⁴⁹。むろんアフリカ人にとっても悪い話ではなく、野蛮状態から抜け出し、文明人の仲間入りができるとのメリットがあった。だが、悲しいかな、当のアフリカ人にとって、それは魅力的な提案ではなかった。かれらの要求は、ただひたすら奴隷貿易を継続・拡大することであつた⁵⁰。しかしながらイギリス人は、かれらの視点に立って考えるという姿勢を、もはやどこかになくしていたのである。

ヨーロッパ諸国がおしなべて奴隷貿易を廃止すれば、「アフリカ文明化」が進展するという。しかもそのことは、イギリスの経済にもプラスとなるはずであつた。だがかれらは、アフリカの資源・市場を確保するために、奴隷貿易廃止をとらえたのではない。逆である。かれらのいう「利益」のすべては、じつのところ、かれらの物語の内部で設定された目的にすぎなかつた。かれらの真のねらいは、奴隷貿易廃止運動からあふれ出る名誉の獲得であつて、実利なるものは、それを正当化するためのレトリックであつた。いいかえれば、奴隷貿易廃止という目的への動機づけのために、架空の利益が捏造されたということである。それはちょうど、かつてロスコーが啓蒙主義を普及させるために、奴隷の人権擁護イコール経済合理的、という珍説を拡散したと類似する。じっさい、かれらがそろって強調した、「アフリカ文明化」イコール利益という図式は、あえなく現実の壁にはばまれた。19 世紀前半のイギリス人による、アフリカ植民地化の事業は、すべてが悲惨な失敗に終わった。そこでは、奴隷所有・売買が根絶されることも、規律化された賃労働が定着することも絶無であつた。カリブ植民地に対して競争力をもつような、サトウキビ・ワタ農園の開発など、夢物語でしかなかった⁵¹。だが、かれらはめげずに、しばらくのあいだ、その実現に向けた努力を続けるのであつた。

小括

1810年代のリヴァプールでは、「国際的」奴隷貿易廃止運動を通じて、人種差別・帝国意識に「汚染」された自己および他者イメージが、「トリー」・「ホイッグ」のあいだで共有されることとなった。それはすなわち、優秀なイギリス人が、愚劣なアフリカ人を管理統制することこそ、おたがいの利益にかなう、というものであった。前者は、何をおいても、奴隷貿易の廃止を徹底する重責を担っているものであり、これをまっとうするためには、アフリカに軍艦を配備することすらためらうべきではなかった。かかる想像力そして行動力は、18世紀に奴隷貿易を実行してきた企業家には、ほとんどみられないものであった。

ところが、アフリカの資源・市場を巧みに利用したのは、じつは奴隷貿易業者のほうであって、その廃止論者ではなかった。「アフリカ文明化」論の欠陥は、それが人種差別的であるというのみならず、経済非合理的であったという点にもある。第1章・第2節で述べた理由から、このときのアフリカに、規律化された賃労働を導入し、またそれに依拠した商品作物の栽培農園を開発することなどは、明らかに非現実的であった。勇敢にもそれに挑んだイギリスの入植者たちは、マラリアなどにかかってばたばたと死んでいった。

しかしながら、「国際的」奴隷貿易廃止運動によって、イギリス人によるアフリカ統治が、いつの日か到達すべきゴールとして定められたことは、たしかであった。それはまた、甚大なコストをものとしめない、数々の涙ぐましい努力を引きだした。かくて1850年代以降、イギリス人が、世界のすべての国・地域をしのぐほどの、生産力・科学技術をほこるようになったとき、かれらは、自分たちがいよいよそのゴールに近づきつつあることを実感した。かれらはいまや、機関銃や鉄道を作ることができた。手には、マラリアの特効薬キニーネをもっていた。この局面において、かれらが、アフリカ・アジアへ進出することに異議をとなえるものは、ほとんど現れなかった。なぜなら、リヴァプールやほかの地域ではすでに、人種差別・帝国意識に「汚染」された自己・他者イメージが浸透していたからである。

おわりに

1810年代リヴァプールにとって、「国際的」奴隷貿易廃止運動には、2つの意味があった。1つは、名誉のあふれ出る源泉であり、これは即座に大きな効用をもった。これには、対立する「トリー」・「ホイッグ」の両派が殺到した。なぜなら、そこから出た名誉をすくい取ることができれば、それを利用して、当時の社会的・経済的な諸変化に適合した、新たな都市共同体を創出しえたからである。そうなれば、党派をこえた幅広い商取引が活発化し、また都市に常在するさまざまな社会問題への対応が、よりスムーズになるはずであった。ただしこの共同体のなかには、奴隷貿易と運命をともにした民衆の活動する余地は残されていなかった。むしろかれらは、社会問題の構成要素の1つとして位置づけられたのである。

「国際的」奴隷貿易廃止運動のもう1つの意味は、それがイギリス人主導の「アフリカ文明化」を、たんなる特異な価値観から、論争の余地なき真実へと、変換する機能を有したことであ

る。だがこちらは、1つ目の意味とは対照的に、即座にではなく、あとあとになってから、甚大な破壊力をもつこととなった。イギリス人によるアフリカ統治は、1810年代には依然として夢物語にすぎなかったが、他方で、それが現実に試行するに値する目標として設定されたことは、大きかった。そうなれば、それを実現させようとする、人間の不屈の努力が生み出されえたからである。いっぽう、それを批判しようとする人物に対する社会的信頼は、すぐに低下した。かくて19世紀後半、アフリカ・アジアの植民地化が物理的に可能になったとき、イギリスの男女によるそれへの抵抗力は微弱であり、逆にそれへの推進力は巨大であった。要するに、イギリス奴隷貿易廃止運動は、かれら・かの女らのあいだで帝国意識を涵養し、またそのことを通じて、将来の帝国主義的膨張を肯定するような主体を作り上げたのである。

¹ *Liverpool Mercury*, (*LM*), 22 Jul 1814.

² LiRO, Roscoe Papers, 1789, A. S. letter from William Frederick, Duke of Gloucester, to Wm. Roscoe, 15 May, 1814.

³ *LM*, 12 Aug 1814.

⁴ Francis. E. Hyde, *Liverpool and the Mersey: an Economic History of a Port 1700-1970*, (Newton Abbot, 1971), p. 237.

⁵ 本論第2章参照。

⁶ Thomas Baines, *History of the Commerce and Town of Liverpool, and of the Rise of Manufacturing Industry in the Adjoining Counties*, (London, 1852), pp. 722-4.

⁷ ハイチ革命については、浜忠雄『ハイチ革命とフランス革命』北海道大学図書刊行会、1998年；同『カリブからの問い—ハイチ革命と近代世界』岩波書店、2003年；同『ハイチの栄光と苦難—世界初の黒人共和国の行方』刀水書房、2007年。

⁸ Hyde, *Liverpool and the Mersey*, pp. 38-42; Baines, *History*, pp. 725-41.

⁹ Hyde, *Liverpool and the Mersey*, pp. 41-2; Sidney G. Checkland, *The Gladstones: a Family Biography 1764-1851*, (Cambridge, 1971), pp. 61, 72; Baines, *History*, p. 556; J. A. Picton, *Memorials of Liverpool Historical and Topographical, Including a History of the Dock Estate*, (Liverpool, 1875), I, pp. 320-1.

¹⁰ Jane Longmore, 'Cemented by the Blood of a Negro'? the Impact of the Slave Trade on Eighteenth-Century Liverpool', in David Richardson, et. al., (eds.), *Liverpool and Transatlantic Slavery*, (Liverpool, 2007), pp. 227-51.

¹¹ John Belchem, 'Introduction: the Peculiarities of Liverpool', in Belchem, (ed.), *Popular Politics, Riot and Labour: Essays in Liverpool History, 1790-1940*, (Liverpool, 1992), pp. 1-20; Kevin Moore, 'This Whig and Tory Ridden Town': Popular Politics in Liverpool in the Chartist Era', in *Ibid*, pp. 38-67.

¹² 本論第2章参照。

¹³ Checkland, *Gladstones*, pp. 10-81; id, 'John Gladstone as Trader and Planter', *EcHR*, 7(2), (1954), pp. 216-29; Anon, *A Brief Account of the Churches of St. Andrew, Renshaw Street, and Toxteth Park, Written to Commemorate the Centenary of the Consecration of the Former, on December 16, 1815*, (Liverpool, 1915). かれは、のちの首相ウィリアム・グラッドストーン（1809～98年）の父にあたる。

¹⁴ Checkland, *Gladstones*, pp. 43-81. グラッドストーンは、「貧民の状態改善協会」（1809年設立）の指導者であった。この団体については、長谷川貴彦『イギリス福祉国家の歴史的源流—近世・近代転換期の中間団体』東京大学出版会、2014年、179～236頁。

¹⁵ S. G. Checkland, *Gladstones*, pp. 64-70; id, 'American versus West Indian Traders in Liverpool, 1793-1815', *Journal of Economic History*, 18, (1958), pp. 141-60; B. H. Tolley, 'The

Liverpool Campaign against the Order in Council and the War of 1812', in J. R. Harris, (ed.), *Liverpool and Merseyside: Essays in the Economic and Social History of the Port and Its Hinterland*, (London, 1969), pp. 98-156; Baines, *History*, pp. 550-4; Picton, *Memorials*, I, pp. 298-318.

¹⁶ *Hansard*, 27, (1813-4), cols. 638-42.

¹⁷ David Geggus, 'British Opinion and the Emergence of Haiti', in James Walvin, (ed.), *Slavery and British Society 1776-1846*, (Baton Rouge, LA, 1982), pp. 123-49; 'Haiti and the Abolitionists: Opinion, Propaganda and International Politics in Britain and France, 1804-1838', in David Richardson, (ed.), *Abolition and Its Aftermath: the Historical Context, 1790-1916*, (London, 1985), pp. 113-40.

¹⁸ 'Extract from the Definitive Treaty of Peace between Great Britain and France, Signed at Paris the 30th of May, 1814' in *Irish University Press of British Parliamentary Papers Correspondence Returns and Other Papers Relating to the Slave Trade*, 61, (Dublin, 1971), p. 695.

¹⁹ *Hansard*, 27, (1813-4), col. 1069.

²⁰ *Ibid.*, cols. 1078-9.

²¹ *Hansard*, 1st ser. 28, (1814), cols. 280-1.

²² アフリカ協会については、Wayne Ackerson, *The African Institution (1807-1827) and the Antislavery Movement in Great Britain*, (Lewiston, NY, 2005).

²³ *LM*, 1 Jul 1814.

²⁴ Ackerson, *African Institution*.

²⁵ *LM*, 22 Jul 1814.

²⁶ *LM*, 12 Aug 1814.

²⁷ *LM*, 29 Jul 1814.

²⁸ *LM*, 12 Aug 1814.

²⁹ 本論第 4 章参照。

³⁰ *LM*, 22 Jul 1814.

³¹ *Ibid.*

³² *Ibid.*

³³ *LM*, 29 Jul 1814.

³⁴ *LM*, 28 Oct 1814.

³⁵ 18・9 世紀転換期のリヴァプールでは、文化・道徳・教育に力を入れることで、共同体のアイデンティティの再確立をはかる動きが進展していた。それらを主導したのは、ほかならぬロスコーであったが、他方で、「トーリ」の積極的な参加も目立っていた。一例を挙げれば、かれの設立した、「アシーニウム」(本論序論参照)の初代会長 G・ケース (George Case) は、元奴隷貿易商の「トーリ」であり、市当局の上級幹部 (Alderman, 市長経験者) でもあった。詳しくは、Arline Wilson, 'The Cultural Identity of Liverpool, 1790-1850', *THSLC*, 147, (1998), pp. 55-80; 'The Florence of the North? the Civic Culture of Liverpool in the Early Nineteenth Century', in Alan Kidd, and David Nicholls, (eds.), *Gender, Civic Culture and Consumerism: Middle-Class Identity in Britain, 1800-1940*, (Manchester, 1999), pp. 34-46; *William Roscoe: Commerce and Culture*, (Liverpool, 2008).

³⁶ *LM*, 22 Jul 1814.

³⁷ *Ibid.*

³⁸ *Ibid.*

³⁹ *Ibid.*

⁴⁰ 本論第 3 章参照。

⁴¹ Henry Roscoe, *The Life of William Roscoe*, (Liverpool, 1833), II, pp. 287-8. ウィルバフォースは、アフリカ協会の第 1 回会議において、そうした趣旨の発言を行っている。

⁴² *LM*, 22 Jul 1814.

⁴³ *Ibid.*

⁴⁴ *Ibid.*

⁴⁵ 本論第 1 章参照。

⁴⁶ *LM*, 22 Jul 1814.

⁴⁷ *Ibid.*

⁴⁸ イギリス海軍による奴隷貿易の鎮圧については、Keith Hamilton and Patrick Salmon, (eds.), *Slavery, Diplomacy and Empire: Britain and the Suppression of the Slave Trade, 1807-1975*, (Eastbourne, 2009); Richard Huzzey, *Freedom Burning: Anti-Slavery and Empire in Victorian Britain*, (Ithaca, NY, 2012); 君塚直隆「自由主義外交の黄金期—パーマストンと奴隷貿易」田所昌幸編『ロイヤル・ネイヴィーとパックス・ブリタニカ』有斐閣、2006年。ただし君塚には、イギリス海軍による奴隷貿易の鎮圧が、帝国意識によるものとの認識がうすい。かれは、どちらかといえばそれを評価しており、この意味では、ロスコーと類似の立場をとっているといえよう。

⁴⁹ トマス・クラークソンは、「アフリカ箱」なるものを持参し、企業家たちにさかんに売り込みをかけていた。そのなかには、アフリカで栽培が可能とされた植物の見本が、ぎっしりと詰め込まれていた。Stephen Farrel et al, (eds.), *The British Slave Trade: Abolition, Parliament and People*, (Edinburgh, 2007), pp. 308-9.

⁵⁰ 奴隷貿易廃止前後のアフリカについては、Frederick Cooper, 'Conditions Analogous to Slavery: Imperialism and Free Labor Ideology in Africa', in Frederick Cooper, et al, (eds.), *Beyond Slavery: Explorations of Race, Labor and Citizenship in Postemancipation Societies*, (Chapel Hill, NC, 2000), pp. 107-49.

⁵¹ *Ibid.*; Huzzey, *Freedom Burning*; Gareth Austin, 'Resources, Techniques and Strategies South of the Sahara: Revisiting the Factor Endowments Perspective on African Economic Development, 1500-2000', *ECHR*, 61(3), (2008) pp. 587-624.

結論

奴隷貿易廃止運動の歴史的意義とは何であったか。2つあるので、順に説明しよう。

第1に、それが啓蒙主義に依拠する人権思想、すなわち「万人は生まれながらにして自由・平等」との観念を拡散する機会をもたらしたことである。イギリスでこれを実行したのは、ユニテリアン。リヴァプールでは、その指導者ロスコーであった。かれは世俗・合理主義をむねとし、それゆえに、国教会体制やカルヴァン主義に対して、決然と勝負を挑んだ。奴隷貿易廃止運動は、まさにかれのようなものたちにチャンスを与えたといえよう。18・9世紀転換期よりもあと、かれらは「自由主義」的諸改革を力強く主導した。それらを通じて、身分制に源流を発するさまざまな制度・慣習を、骨抜きにしていっただのである。

とはいえ人間の歴史では、対立するいっぽうが、他方に100パーセント勝利するようなことはありえない。あたかも勸善懲惡のフィクションや、社会学的なモデルのように、すっきりとはいかないのである。じっさい、ロスコーら「ホイッグ」が勢いづいたとき、ウィルバフォースやグラッドストンらに代表される「トーリ」、すなわち国教会信徒かつ／またはカルヴァン主義者たちも、啓蒙主義に違和感をもつものたちを糾合して、力をのばしはじめた。そればかりではない。1780～1810年代のほとんどの局面で、かれらは「ホイッグ」よりも多少、ときにはかなり優勢であった。だが、そうはいってもやはり、先手をとって攻撃をしかけていたのは「ホイッグ」であり、「トーリ」はいつも対応に苦慮していた。後者は、運動内部における主導権を確保して、前者を抑圧したり、懐柔したりすることにつとめたが、それを内部に取り込んだことがきっかけとなって、かえって人権思想や、世俗・合理主義の伸長に歯止めをかけられなくなった。このことこそ、かれらがもっとも恐れていた事態なのである。

このように、奴隷貿易廃止運動が、人権思想およびそれを前提とするところの、「自由主義」的諸改革を推進する力をもったといっても、決してシンプルな話ではなかった。運動の主導権を奪取し、これを永続的に確保しようとしてつとめる、保革両派の争いのなかで、ゆっくりと1つの趨勢があらわれてきたのである。むろんそれとは、人権擁護こそ、問答無用の正義であるとの観念が、イギリスのみならず、国際社会において広く定着していった事実にはかならない。そしてこの趨勢は、今日にいたるまで、大きくは変化していないといえよう¹⁾。

第2の意義に移る。すなわち、それは帝国意識を社会に浸透させ、人種差別を助長した。このことを理解するためには、奴隷貿易が、ほんらい「反」帝国主義的な営為であった事実を確認しておかねばならない。これは、当時のイギリス人が、アフリカ人をみずからの製品の顧客として遇さねばならなかったこと、またアフリカ市場での取引を現地の権力から許可されただけであったことを踏まえての認識である。さらにいえば、かれらが購入した奴隷も、ものいわぬ「商品」としてしか扱われなかったから、そのうえで、あえてとくべつに劣等人種とみなされる必要はなかった。奴隷貿易廃止論者こそ、そうした状況に異議を申し立てたのである。かれらの立場からいえば、イギリス人は自由を愛する国民であるのに、アフリカに出かけたとたん、先方の

慣習にしたがって、奴隷貿易に手を染めるようになるのはおかしかった。そうではなく、むしろかれらが率先して、アフリカ人に文明を教え、またそのことを通じて、アフリカの国家・社会・経済のしくみを、根底から作り直すべきであった。その手始めとして、「奴隷貿易のないアフリカ」を創造することが目標となったのである。そう考える根拠こそ、イギリス人が、アフリカ人よりも優等人種であるということであった。

かかる考えが社会的に受容されるスピードは、人権思想や、それを前提とする「自由主義」的諸改革のそれよりも、はるかに速かった。なぜなら、「ホイッグ」と「トーリ」の双方からの全面的な支持を受けたからである。後者の立場からいえば、前者が「アフリカ文明化」に専念するあまり、国内の諸問題に目を向けなくなれば、むしろ好都合であった。とはいえ現実には、「アフリカ文明化」が「成果」をあげるようになるのは、早くて 1850 年代以降、実質的には 1880 年代のことであった。むしろ、それを可能にする物理的条件が欠けていたからにほかならない。それまでのあいだ、イギリス人は、アフリカにおいて、現地住民と武力で互角にわたりあうことができなかった。しかも、マラリアやアメーバ赤痢にかかれば、それまでであった。したがって、もしもかれらがそうした障碍を克服しうるだけの経済力・軍事力、そして科学技術を身につけなかったならば、奴隷貿易廃止も、「アフリカ文明化」のための諸事業も、長くは維持できなかったはずである。これはまちがいない。しかし、現実はそのようなものではなかったのである。

このように、奴隷貿易廃止運動は、帝国意識を社会的に浸透させ、人種差別を助長するはたらきをした。かくて、ある 1 つの趨勢が、目をみはるスピードで表出することとなった。むしろそれとは、優等なイギリス人（またはヨーロッパ人）が、劣等なアフリカ人を、意のままに支配してよい／できる／すべきといった観念が、国際社会において定着していった事実にはほかならない。この趨勢は、いわゆる脱植民地化がおおむね完了してから、約 50 年が過ぎた今日においても、なおしつこく残存しているように思われる²。

¹ リン・ハント（松浦義弘訳）『人権を創造する』岩波書店、2011 年。

² アフリカの人道支援・人権擁護のふれこみで行われる、ヨーロッパ人やアメリカ人の諸事業のなかで、現地住民の主体性を無視し、なおかつ、実行国（者）が一方的に経済的利益ないし、軍事・外交的価値を享受するような仕組みが、いまなお存在していたとしよう。それは、18・9 世紀転換期の奴隷貿易廃止運動を直接の祖先とするような、人種主義的・帝国主義的な営為にはほかならない。

史料と参考文献

短縮形

AHR, *American Historical Review*.

EcHR, *Economic History Review*.

LiRO, Liverpool Record Office.

S & A, *Slavery and Abolition*.

THSLC, *Transactions Historic Society of Lancashire and Cheshire*.

WMQ, *William and Mary Quarterly*.

未刊行史料・定期刊行物

Autobiographical Memoirs of Thomas Fletcher of Liverpool, (OBIT 1850), Written in the Year 1843, (Liverpool, Printed Privately for Circulation in the Family, 1893), LiRO.

Parliamentary Debates from the Year 1803 to the Present Time.

Parliamentary History of England from the Earliest Period to the Year 1803.

Liverpool Mercury.

Liverpool Town Book, LiRO.

Petition of the Corporation of Liverpool to the House of Lords, against the Bill for the Abolition of the African Slave Trade, [1796], LiRO.

Roscoe Papers, LiRO.

Williamson's Liverpool Advertiser.

同時代文献 (1850 年以前)

Aiken, J, [1795], *A Description of the County from Thirty to Forty Miles around Manchester*, London.

Clarkson, T, [1808], *The History of the Rise, Progress and Accomplishment of the Abolition of the African Slave Trade by the British Parliament*, London.

--- [1787], *A Summary View of the Slave Trade, and of the Probable Consequences of Its Abolition*, London.

Crow, H, [1830], *Memoirs of the Late Captain Hugh Crow, of Liverpool; Comprising a Narrative of His Life, together with Descriptive Sketches of the Western Coast of Africa; Particularly of Bonny; the Manners and Customs of the Inhabitants, the Productions of the Soil, and the Trade of the Country*, London.

Currie, W. W., [1831], *Memoirs of the Life, Writings, and Corresponding of James Currie, M.D, F. R.S. of Liverpool*, London.

Defoe, D, [1724-6], *A Tour Thorough the Whole Island of Great Britain*, London.

- Enfield, W, [1773], *An Essay towards the History of Liverpool, Drawn up from Papers Left Mr George Perry, and from Other Materials since Collected, with Views of the Principal Public Structures, a Chart of the Harbour, and a Map of the Environs*, Warrington.
- [Gladstone, J], [1807], *Letters Concerning the Abolition of the Slave Trade and Other West India Affairs*, London.
- [1807], *Third Letter on the Abolition of the Slave Trade and Other West India Affairs*, London.
- Harris, R, [1788], *Scriptural Researches on the Licitness of the Slave-Trade, Shewing Its Conformity with the Principles of Natural and Revealed Religion, Delineated in the Sacred Writings of the Word of God*, Liverpool.
- [Harrison, G], [1810], *Some Remarks on a Communication from WM. Roscoe to the Duke of Gloucester, Dated March 20, 1809, as Stated in the Appendix of the Third Report of the African Institution; Respectfully Submitted to the Duke*, London.
- [Heywood, S], [1789], *The Right of Protestant Dissenters to a Compleat Toleration Assented; Containing an Historical Account of the Test Laws, and Shewing the Injustice, Inexpediency, and Folly of the Sacrament Test, as Imposed, with Respect to Protestant Dissenters; with an Answer to the Objection from the Act of Union with Scotland*, London.
- Heywood, T, [1846], *The Norris Papers*, Manchester.
- Anon., [1806], *History of the Election, for Members of Parliament, for the Borough of Liverpool, 1806, containing the Addresses of the Different Candidates, with a List of the Freemen's Names who Voted*, Liverpool.
- Anon., [1806], *An Impartial Collection of the Addresses, Songs, Squibs, &c. that were Published at Liverpool, during the Election of Members of Parliament, in November, 1806*, Dublin.
- Moss, W, [1796], *The Liverpool Guide; Including a Sketch of the Environs: with a Map of the Town*, Liverpool.
- Anon., [1807], *A Letter, Addressed to Mercator, in Reply to His Letters on the Abolition of the Slave Trade*, London.
- Norris, R, [1789], *A Short Account of the African Slave-Trade*, London.
- Anon., [1790], *The Poll, for the Election, of Members of Parliament, for the Borough of Liverpool; Taken between Colonel Tarleton, Bamber Gascoyne, Jun. Esq. The Rt. Hon. Richard Lord Penrhyn, and Thomas Townley, Esq...*, Liverpool.
- Porteus, B, [1808], *A Letter to the Governors, Legislatures, and Proprietors of Plantations, in the British West-India Islands*, London.
- [1784], *A Sermon Preached before the Incorporated Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts; at their Anniversary Meeting in the Parish Church of St. Mary-*

- le-Bow, on February 21, 1783, London.*
- Roscoe, H, [1833], *The Life of William Roscoe*, Liverpool.
- Roscoe, W, [1777], *Mount Pleasant, a Descriptive Poem*, Liverpool.
- [Roscoe, W], [1788a], *A General View of the African Slave-Trade, Demonstrating Its Injustice and Impolicy: with Hints Towards a Bill for Its Abolition*, London.
- [1792], *An Inquiry into the Causes of the Insurrection of the Negroes in the Island of St. Domingo...*, London.
- [1791], *The Life, Death, and Wonderful Achievements of Edmund Burke, by the Author of the Wrongs of Africa*, London.
- [1789], *Ode to the People of France*, Liverpool.
- [1788b], *Scriptural Refutation of a Pamphlet, Lately Published by the Rev. Raymond Harris, Intituled, 'Scriptural Researches of the Licitness of the Slave Trade' in Four Letters from the Author to a Friend*, London.
- [1793], *Thoughts on the Causes of the Present Failures*, London.
- [1787], *The Wrongs of Africa, a Poem, Part 1*, London.
- [1788c], *The Wrongs of Africa, a Poem, Part 2*, London.
- Rushton, E, [1797], *Expostulatory Letter to George Washington, of Mount Vernon, in Virginia, on His Continuing to be a Proprietor of Slaves*, Liverpool.
- [1787], *West Indian Eclogues*, London.
- Sharp, G, [1776], *The Law of Retribution; or a Serious Warning to Great Britain and Her Colonies, Founded on Unquestionable Examples of God's Temporal Vengeance Against Tyrants, Slave-Holders, and Oppressors*, London.
- [1807], *'The System of Colonial Law' Compared with the Eternal Laws of God; and with the Indispensable Principles of the English Constitution*, London.
- Shepherd, W, (ed.), [1824], *Poems and Other Writings, by the Late Edward Rushton to Which Added, a Sketch of the Life of the Author*, London.
- Anon., [1710], *A True State of the Present Difference between the Royal African Company and the Separate Traders: Shewing the Irregularities and Impositions of the Joint-Stock Managers; the Uselessness of Their Forts...*, London.
- [Wallace, J], [1795], *A General and Descriptive History of the Ancient and Present State of the Town of Liverpool...*, Liverpool.
- Walker, J, [1789], *A Descriptive Poem, on the Town and Trade of Liverpool*, Liverpool.
- Wilberforce, W, [1789], *The Speech of William Wilberforce, Esq. Representative for the County of York, on Wednesday the 13th of May, 1789, on the Question of the Abolition of the Slave Trade...*, London.
- [Wilckens, H], [1793], *Letters, Concerning the Slave Trade; and, with Respect to Its Intended*

Abolition: by a Merchant to his Friend, on the Continent, Liverpool.

英語文献（1850 年以降）

Ackerson, W, [2005], *The African Institution (1807-1827) and the Antislavery Movement in Great Britain*, Lewiston, NY.

Adelman, J, [2008], 'An Age of Imperial Revolutions', *AHR*, 113 (2), pp. 319-40.

Afigbo, A, E, [2009], 'Africa and the Abolition of the Slave Trade', *WMQ*, 66(4), pp. 705-14.

Albertone, M and De Francesco, A, (eds.), [2009], *Rethinking the Atlantic World: Europe and America in the Age of Democratic Revolutions*, Houndmills.

Allen, R, B, [2009], 'Suppressing a Nefarious Trade: Britain and the Abolition of Slave Trading in India and the Western Indian Ocean, 1770-1830', *WMQ*, 66(4), pp. 873-94.

Anstey, R, [1975], *The Atlantic Slave Trade and British Abolition 1760-1810*, Aldershot.

Anstey, R and Hair, P. E. H., (eds.), [1976], *Liverpool, the African Slave Trade, and Abolition: Essays to Illustrate Current Knowledge and Research*, Liverpool.

Arajo, A. L., [2012], 'Dahomey, Portugal and Bahia: King Adandozan and the Atlantic Slave Trade', *S & A*, 33(1), pp. 1-19.

Armitage, D and Subrahmanyam, S, (eds.), [2010], *The Age of Revolutions in Global Context, c. 1760-1840*, London.

Ascott, D. E., et al., [2006], *Liverpool 1660-1750: People, Prosperity and Power*, Liverpool.

Austin, G, [2009], 'Factor Markets in Nieboer Conditions: Pre-Colonial West Africa, c. 1500-c. 1900', *Continuity and Change*, 24(1), pp. 23-53.

--- [2008], 'Resources, Techniques and Strategies South of the Sahara: Revisiting the Factor Endowments Perspective on African Economic Development, 1500-2000', *EcHR*, 61(3), pp. 587-624.

Baines, T, [1852], *History of the Commerce and Town of Liverpool, and of the Rise of Manufacturing Industry in the Adjoining Counties*, London.

Bannister, J and Riordan, L, (eds.), [2012], *The Loyal Atlantic: Rethinking the British Atlantic in the Revolutionary Era*, Toronto.

Behrendt, S. D., et al., [2001], 'The Cost of Coercion: African Agency in the Pre-Modern Atlantic World', *EcHR*, 54(3), pp. 454-76.

Belchem, J, (ed.), [2006], *Liverpool 800: Culture, Character and History*, Liverpool.

Benite, Z, B-D., [2011], 'Modernity: the Sphinx and the Historian', *AHR*, 116(3), pp. 638-52.

Bennett, R, [2010], *The Voice of Liverpool Business: the First Chamber of Commerce and the Atlantic Economy, 1774-c. 1796*, Liverpool.

Bessel, R, et al., [2010], (eds.), *War, Empire and Slavery, 1770-1830*, Basingstoke.

Bhambra, G. K., [2011], 'Historical Sociology, Modernity, and Postcolonial Critique', *AHR*,

- 116(3), pp. 653-62.
- Blanning, T. C. W., and Wende, P, (eds.), [1999], *Reform in Great Britain and Germany, 1750-1850*, Oxford.
- Bogart, D, [2011], 'Did Glorious Revolution Contribute to the Transport Revolution? Evidence from Investment in Roads and Rivers', *EcHR*, 64(4), pp. 1073-1112.
- Booth, A, [1983], 'Popular Loyalism and Public Violence in the North-West of England, 1790-1800', *SH*, 8(3), pp. 295-313.
- Borsay, P, [1977], 'The English Urban Renaissance: the Development of Provincial Urban Culture c. 1680-1760', *Social History*, 5, pp. 581-603.
- Botsman, D. V., [2011], 'Freedom without Slavery? 'Coolies', Prostitutes, and Outcasts in Meiji Japan's 'Emancipation Moment'', *AHR*, 116 (5), pp. 1323-47.
- Boulukos, G, E, [2007], 'Olaudah Equiano and the Eighteenth-Century Debate on Africa' *Eighteenth-Century Studies*, 40(2), pp. 241-55.
- Breen, T, [1985], *Tobacco Culture: the Mentality of the Great Tidewater Planters on the Eve of Revolution*, Princeton, NJ.
- Brewer, J, [1982], 'Commercialisation and Politics', in Niel McKendrick, Brewer, J and Plumb, J. H., *The Birth of a Consumer Society: the Commercialisation of Eighteenth-Century England*, London, pp. 197-262.
- [1980], 'English Radicalism in the Age of George III', in J. G. A. Pocock, (ed.), *Three British Revolutions 1641, 1688, 1776*, Princeton, NJ, pp. 323-67.
- Anon., [1915], *A Brief Account of the Churches of St. Andrew, Renshaw Street, and Toxteth Park, Written to Commemorate the Centenary of the Consecration of the Former, on December 16th, 1815*, Liverpool.
- Brooke, R, [1853], *Liverpool as It Was 1775 to 1800*, Liverpool.
- Brown, C. L., [1999], 'Empire without Slaves: British Concepts of Emancipation in the Age of the American Revolution', *WMQ*, 56(2), pp. 273-306.
- [2006], *Moral Capital: Foundation of British Abolitionism*, Chapel Hill, NC.
- T. Burke, [2001], "Humanity is Now the Pop'lar Cry": Laboring-Class Writers and the Liverpool Slave Trade, 1787-1789', *The Eighteenth Century*, 42(3), pp. 245-63.
- Burnard, T, [2012], 'Making a Whig Empire Work: Transatlantic Politics and the Imperial Economy in Britain and British America', *WMQ*, 69(1), pp. 51-6.
- [2011], 'Powerless Masters: the Curious Decline of Jamaican Sugar Planters in the Foundational Period of British Abolitionism', *S & A*, 32(2), pp. 185-98.
- Burns, A and Innes, J, (eds.), [2003], *Rethinking the Age of Reform: Britain, 1780-1850*, Cambridge.
- Canny, N and Morgan, P. D., (eds.), [2011], *The Oxford Handbook of the Atlantic World, 1450-*

- 1850, Oxford.
- Carey, B and Kitson, P. J., (eds.), [2007], *Slavery and the Cultures of Abolition: Essays Marking the Bicentennial of the British Abolition Act of 1807*, Cambridge.
- Carey, D and Finlay, C. J, (eds.), [2011], *The Empire of Credit: the Financial Revolution in the British Atlantic World, 1688-1815*, Dublin.
- Carlos, A. M., and Kruse, J, B, [1996], 'The Decline of the Royal African Company: Fringe Firms and the Role of the Charter', *EcHR*, 49, pp. 291-313.
- Carrington, S. H. H, [2002], *The Sugar Industry and the Abolition of the Slave Trade, 1775-1810*, Gainesville, FL.
- Chandler, G, [1953], *William Roscoe of Liverpool*, London.
- Checkland, S. G., [1958], 'American versus West Indian Traders in Liverpool, 1793-1815', *Journal of Economic History*, 18, pp. 141-60.
- [1952], 'Economic Attitudes in Liverpool, 1793-1807', *EcHR*, 5(1), pp. 58-75.
- [1958], 'Finance for the West Indies, 1780-1815', *EcHR*, 10(3), pp. 461-69.
- [1971], *The Gladstones: a Family Biography 1764-1851*, Cambridge.
- [1954], 'John Gladstone as Trader and Planter', *EcHR*, 7(2), pp. 216-29.
- Clemens, P. G. E., [1976], 'The Rise of Liverpool, 1665-1750', *EcHR*, 29(3), pp. 211-25.
- Conrad, S, [2012], 'Enlightenment in Global History: a Historiographical Critique', *AHR*, 117(4), pp. 999-1027.
- Coupland, R, [1940], 'The Abolition of the Slave Trade', in Rose, J. H., et al., (eds.), *The Growth of the New Empire 1783-1870*, Cambridge, pp. 188-216.
- [1933], *British Anti-slavery Movement*, London.
- Davis, D. B., [1975], *The Problem of Slavery in the Age of Revolution 1770-1823*, New York, NY.
- [1984], *Slavery and Human Progress*, New York, NY.
- Dewald, J, [2008], 'Crisis, Chronology, and the Shape of European Social History', *AHR*, 113(4), pp. 1031-52.
- Ditchfield, G. M., [1976], 'The Campaign in Lancashire and Cheshire for the Repeal of the Test and Corporation Acts, 1787-1790', *THSLC*, 126, pp. 109-38.
- Donoghue, J, [2010], 'Out of the Land of Bondage': the English Revolution and the Atlantic Origins of Abolition', *AHR*, 115(4), pp. 943-74.
- Draper, N, [2008], 'The City of London and Slavery: Evidence from the First Dock Companies, 1795-1800', *EcHR*, 61(2), pp. 432-66.
- Drescher, S, [2009], *Abolition: a History of Slavery and Anti-Slavery*, Cambridge.
- [1991], 'British Way, French Way: Opinion Building and Revolution in the Second French Slave Emancipation', *AHR*, 96(3), pp. 709-34.

- [1986], *Capitalism and Antislavery: British Mobilisation in Comparative Perspective*, Oxford.
- [1977], *Econocide: British Slavery in the Era of Abolition*, Pittsburgh, PA.
- [1990], 'People and Parliament: The Rhetoric of the British Slave Trade', *Journal of Interdisciplinary History*, 20(4), pp. 561-80.
- [2012], 'The Shocking Birth of British Abolitionism', *S & A*, 33(4), pp. 571-93.
- [1988], 'The Slaving Capital of the World: Liverpool and National Opinion in the Age of Abolition', *S & A*, 9(2), pp. 128-43.
- [1994], 'Whose Abolition? Popular Pressure and the Ending of the British Slave Trade', *Past and Present*, 143, pp. 136-66.
- Drescher, S and Emmer, P. C., (eds.), [2010], *Who Abolished Slavery? Slave Revolts and Abolitionism: a Debate with João Pedro Marques*, New York, NY.
- Dresser, M, [2001], *Slavery Obscured: the Social History of Slave Trade in an English Provincial Port*, London.
- Dubois, L, [2006], 'An Enslaved Enlightenment: Re-thinking the Intellectual History of the French Atlantic', *Social History*, 31(1), pp. 1-14.
- Dudley, C, [2013], 'Party Politics, Political Economy, and Economic Development in Early Eighteenth-Century Britain', *EcHR*, 66(4), pp. 1084-1100.
- Ellis, J, [2003], 'For the Honour of the Town': Competition and Civic Identity in Eighteenth-Century England', *Urban History*, 30(3), pp. 325-37.
- Eltis, D, [1987], *Economic Growth and the Ending of the Transatlantic Slave Trade*, Oxford.
- [1999], 'Slavery and Freedom in the Early Modern World', in Engerman, S, (ed.), *Terms of Labor: Slavery, Serfdom, and Free Labor*, Stanford, CT., pp. 25-49.
- [2009], 'Was Abolition of the U. S. and British Slave Trade Significant in the Broader Atlantic Context?', *WMQ*, 66(4), pp. 717-36.
- Evans, G. E., [1887], *A History of Renshaw Street Chapel and Its Institutions: with Some Account of the Former Chapels in Castle Hey and Benn's Garden*, London.
- Evans, E. W., and Richardson, D, [1995], 'Hunting for Rents: the Economics of Slaving in Pre-Colonial Africa', *EcHR*, 48(4), pp. 665-86.
- Farrel, S, et al., (eds.), [2007], *The British Slave Trade: Abolition, Parliament and People*, Edinburgh.
- Fenoaltea, S, [1999], 'Europe in the African Mirror: the Slave Trade and the Rise of Feudalism', *Rivista Di Storia Economica*, 15(2), pp. 123-65.
- Fergus, [2009], 'Dread of Insurrection': Abolitionism, Security, and Labor in Britain's West Indian Colonies, 1760-1823', *WMQ*, 66(4), pp. 757-80.
- Ferrer, A, [2012], 'Haiti, Free Soil, and Antislavery in the Revolutionary Atlantic', *AHR*,

- 117(1), pp. 40-66.
- Fick, C. E., [1998], 'Dilemmas of Emancipation: from the Saint Domingue Insurrections of 1791 to the Emerging Haitian State', *History Workshop Journal*, 46, pp. 1-16.
- Fischer, S, [2005], 'Unthinkable History? The Haitian Revolution, Historiography, and Modernity on the Periphery', in Gordon, L. R. and Gordon, J. A., (eds.), *A Companion to African-American Studies*, Oxford, pp. 360-76.
- Fladeland, B, [1966], 'Abolitionist Pressures on the Concert of Europe, 1814-1822', *Journal of Modern History*, 38(4), pp. 355-73.
- Flavell, M. K., [1985], 'The Enlightened Reader and the New Industrial Towns: a Study of the Liverpool Library 1758-1790', *British Journal for Eighteenth-Century Studies*, 8, pp. 17-35.
- Gallay, A, [2002], *The Indian Slave Trade: the Rise of the English Empire in the American South, 1670-1717*, New Haven, CT.
- Garfinkle, N and Yankelovich, D, (eds.), [2002], *Indian Slave Trade: the Rise of the English Empire in the American South, 1670-1717*, New Haven, CT.
- Gaspar, D. B., [1978], 'The Antigua Slave Conspiracy of 1736: a Case Study of the Origin of Collective Resistance', *WMQ*, 35 (2), pp. 308-23.
- Geggus, D. P., [1985], 'Haiti and the Abolitionists: Opinion, Propaganda and International Politics in Britain and France, 1804-1838', in Richardson, D, (ed.), *Abolition and Its Aftermath: the Historical Context, 1790-1916*, London, pp. 113-40.
- Ghosh, D, [2012], 'Another Set of Imperial Turn?', *AHR*, 117(3), pp. 721-93.
- Gluck, C, [2011], 'The End of Elsewhere: Writing Modernity Now', *AHR*, 116(3), pp. 676-87.
- Goldstone, [2009], *Why Europe? The Rise of the West in World History, 1500-1850*, New York, NY.
- Gould, E. H. and Onuf, P. S., (eds.), [2005], *Empire and Nation: the American Revolution in the Atlantic World*, Baltimore, MD.
- Gordon, D. M., [2008], 'The Abolition of the Slave Trade and the Transformation of the South-Central African Interior during the Nineteenth Century', *WMQ*, 66(4), pp. 915-38.
- Greer, A, [2012], 'Commons and Enclosure in the Colonization of North America', *AHR*, 117(2), pp. 365-86.
- Greene, J. P. and Morgan, P. D., (eds.), [2009], *Atlantic History: a Critical Appraisal*, Oxford.
- Hagemann, K., et al., (eds.), [2010], *Gender, War and Politics Transatlantic Perspectives, 1775-1830*, Houndmills.
- Haggerty, S, et al., (eds.), [2008], *The Empire in One City?: Liverpool's Inconvenient Imperial Past*, Manchester.
- Hall, C and Rose, S, (ed.), [2006], *At Home with the Empire: Metropolitan Culture and the*

- Imperial World*, Cambridge.
- Hamilton, K and Salmon, P, (eds.), [2009], *Slavery, Diplomacy and Empire: Britain and the Suppression of the Slave Trade, 1807-1975*, Eastbourne.
- Harris, J. R., and Anderson, B. L., [1964], 'The Founding of an Eighteenth-Century Newspaper: the Partnership Agreement of *Williamson's Liverpool Advertiser*', *THSLC*, 116, pp. 229-34.
- Hawkins, S and Morgan, P. D., (eds.), [2004], *Black Experience and the Empire*, Oxford.
- Hawthorne, W, [2010], *From Africa to Brazil: Culture, Identity, and Atlantic Slave Trade, 1600-1830*, Cambridge.
- Hellmuth, E, (ed.), [1990], *The Transformation of Political Culture: England and Germany in the Late Eighteenth Century*, Oxford.
- Heuman, G and Burnard, T, (eds.), [2011], *The Routledge History of Slavery*, New York, NY.
- Heywood, T, [1846], *The Norris Papers*, Manchester.
- Hilton, B, [2006], *A Mad, Bad, and Dangerous People?: England 1783-1846*, Oxford.
- Holt, A, [1938], *Walking Together: a Study in Liverpool Nonconformity 1688-1938*, London.
- Hoppit, J, (ed.), [2003], *Parliaments, Nations and Identities in Britain and Ireland, 1660-1850*, Manchester.
- Hughs, J, [1906], *Liverpool Banks and Bankers 1760-1837: a History of the Circumstances Which Gave Rise to the Industry, and of the Men Who Founded and Developed It*, Liverpool.
- Hunt, L, [2014], *Writing History in the Global Era*, New York, NY.
- Huzzey, R, [2012], *Freedom Burning: Anti-Slavery and Empire in Victorian Britain*, Ithaca, NY.
- Hyde, F. E., [1971], *Liverpool and the Mersey: an Economic History of a Port 1700-1970*, Newton Abbot.
- Hyde, F. E., et al., [1952], 'The Nature and Profitability of the Liverpool Slave Trade', *EcHR*, 5(3), pp. 368-77.
- [1951], 'The Port of Liverpool and the Crisis of 1793', *Economica*, 18 (72), pp. 363-78.
- Inikori, J. E., [2007], 'Africa and the Globalization Process: Western Africa, 1450-1850', *Journal of Global History*, 2(1), pp. 63-86.
- Innes, J, [1998], 'The Local Acts of a National Parliament: Parliament's Role in Sanctioning Local Action in Eighteenth-Century Britain', *Parliamentary History*, 17, pp. 23-47.
- Kitteringham, G, [1982], 'Science in Provincial Society: the Case of Liverpool in the Early Nineteenth Century', *Annals of Science*, 39, pp. 329-48.
- Jennings, J, [1997], *The Business of Abolishing the British Slave Trade, 1783-1807*, London.
- Lambert, D, [2005], *White Creole Culture, Politics and Identity during the Age of Abolition*, Cambridge.

- Layton-Jones, K, [2008], 'The Synthesis of Town and Trade: Visualizing Provincial Urban Identity, 1800-1858', *Urban History*, 35(1), pp. 72-95.
- Law, R, [2003], 'Introduction', in Law, R, (ed.), *The Operation of the Slave Trade in Africa*, London.
- [1991], 'King Agaja of Dahomey, the Slave Trade, and the Question of West African Plantation: the Embassy of Bulfinch Lambe and Adomo Tomo to England, 1726-32', *Journal of Imperial and Commonwealth History*, 19, pp. 137-63.
- [2004], *Ouidah: the Social History of a West African Slaving 'Port'*, Athens, OH.
- [1989], 'The Slave Trader as Historian: Robert Norris and the History of Dahomey', *History in Africa*, 16, pp. 219-35.
- Lecky, W. E. H., [1921], *History of European Morals from Augustus to Charlemagne*, New York, NY.
- Lewin, W, [1893], *Clarke Aspinall: a Biography*, London.
- Anon., [1884], *Liverpool and Slavery: an Historical Account of the Liverpool-African Slave Trade by a Genuine 'Dicky Sam'*, Liverpool.
- Lovejoy, P. E, [2006], 'Autobiography and Memory: Gustavus Vassa, alias Olaudah Equiano, the African', *S & A*, 27(3), pp. 317-347.
- Mackenzie-Grieve, A, [1941], *The Last Years of the English Slave Trade Liverpool 1750-1807*, New York, NY.
- Macnaughton, D, [1996], *Roscoe of Liverpool: His Life, Writings and Treasures*, Birkenhead.
- Martins Bank LTD., [1949], *Arthur Heywood, Sons and Company: 1773-1883*, Liverpool.
- Mason, K, [2013], 'The Absentee Planter and the Key Slave: Privilege, Patriarchalism, and Exploitation in the Early Eighteenth-Century Caribbean', *WMQ*, 70(1), pp. 79-103.
- Mathews, G. W., [1931], *William Roscoe, a Memoir*, London.
- [1927], 'Some Notes on the Liverpool Election of 1806', *THSLC*, 79, pp. 74-85.
- Menzies, E. M., [1973], 'The Freeman Voter in Liverpool, 1802-35', *THSLC*, 124, pp. 85-107.
- Midgley, C, [1996], 'Slave Sugar Boycott, Female Activism and Domestic Base of British Anti-Slavery Culture', *S & A*, 17(3), pp. 137-62.
- Miers, S and Kopytoff, I, (eds.), [1977], *Slavery in Africa: Historical and Anthropological Perspectives*, Madison, WI, pp. 3-81.
- Miller, J. C., [2009], 'Introduction: Atlantic Ambiguities of British and American Revolution', *WMQ*, 66(4), pp. 677-704.
- Minchinton, W. E., [1963], *Politics and the Port of Bristol in the Eighteenth Century*, Bristol.
- [1983], 'Williams and Drescher: Abolition and Emancipation', *S & A*, 4(2), pp. 81-105.
- Mintz, S, [1996], 'Models of Emancipation during the Age of Revolution', *S & A*, 17(2), pp. 1-21.

- Money, J, [1971], 'Birmingham and the West Midlands, 1760-1793: Politics and Regional Identity in the English Provinces in the Later Eighteenth Century', *Midland History*, 1.
- Moore, K, [1989], 'Liverpool in the "Heroic Age" of Popular Radicalism, 1815-1820', *THSLC*, 138, pp. 137-57.
- Morgan, K, [1993], *Bristol and the Atlantic Trade in the Eighteenth Century*, Cambridge.
- [2003], 'Introduction', in Morgan, K, (ed.), *The Royal African Company*, London, pp. 9-31.
- [2007], *Slavery and the British Empire: from Africa to America*, Oxford.
- Morris, R. J, [1983], 'Voluntary Societies and British Urban Elites 1780-1850: an Analysis', *Historical Journal*, 26(1).
- Muir, R, [1907], *A History of Liverpool*, London.
- Muir, R and Platt, E. M., [1906], *A History of Municipal Government in Liverpool from the Earliest Times to the Municipal Reform Act of 1835*, London.
- Nelson, W. M., [2010], 'Making Men: Enlightenment Ideas of Racial Engineering', *AHR*, 115(5), pp. 1364-94.
- Nieboer, H. J, [1900], *Slavery as an Industrial System*, The Hague.
- Northrup, D, [2000], 'Igbo and Myth Igbo: Culture and Ethnicity in the Atlantic World', *S & A*, 21(3), pp. 1-20.
- Nottingham, L, [1992], *Rathbone Brothers: from Merchant to Banker 1742-1992*, London.
- Nwokeji, G. U, [2010], *The Slave Trade and Culture in the Bight of Biafra: an African Society in the Atlantic World*, Cambridge.
- O'Brien, P, [2011], 'The Nature and Historical Evolution of an Exceptional Fiscal State and Its Possible Significance for the Precarious Commercialization and Industrialization of the British Economy from Cromwell to Nelson', *EcHR*, 64(2), pp. 408-46.
- Oldfield, J. R., [2003], 'Introduction', in Oldfield, J. R., (ed.), *The Abolitionist Struggle: Opponents of the Slave Trade*, London, pp. ix-xxix.
- [1995], *Popular Politics and British Anti-Slavery: the Mobilisation of Public Opinion against the Slave Trade, 1787-1807*, Manchester.
- [2013], *Transatlantic Abolitionism in the Age of Revolution: an International History of Anti-Slavery, c. 1787-1820*, Cambridge.
- Ormerod, H. A, [1952], 'Extracts from the Private Ledger of Arthur Heywood of Liverpool Merchant and Banker', *THSLC*, 103, pp. 103-11.
- Page, A, [2011], 'A Species of Slavery': Richard Price's Rational Dissent and Antislavery', *S & A*, 32(1), pp. 53-73.
- Parkinson, C. N., [1952], *The Rise of the Port of Liverpool*, Liverpool.
- Parker, G, [2013], *Global Crisis: War, Climate Change and Catastrophe in the Seventeenth Century*, Padstow.

- Pearl-Rosenthal, N, [2012], 'Generational Turns', *AHR*, 117(3), pp. 804-13.
- Peterson, D. R., (ed.), [2010], *Abolitionism and Imperialism in Britain, Africa, and the Atlantic*, Athens, OH.
- Pettigrew, W, [2007], 'Free to Enslave: Politics and the Escalation of Britain's Transatlantic Slave Trade', *WMQ*, 64(1), pp. 3-38.
- Pétre-Grenouilleau, O, (ed.), [2004], *From Slave Trade to Empire: Europe and the Colonisation of Black Africa 1780s-1880s*, London.
- Picton, J. A., [1875], *Memorials of Liverpool Historical and Topographical, Including a History of the Dock Estate*, Liverpool.
- [1886], *Municipal Archives and Records, from A. D. 1700 to the Passing of the Municipal Record Act, 1835*, Liverpool.
- Pincus, S, [2009], *1688: the First Modern Revolution*, New Haven, CT.
- [2012], 'Rethinking Mercantilism: Political Economy, the British Empire, and the Atlantic World in the Seventeenth and Eighteenth Centuries', *WMQ*, 69(1), pp. 3-34.
- Pope, D. J, [1977], 'The Eighteenth Century Liverpool Newspapers as a Source for Maritime History', *Maritime History*, 5, pp. 116-35.
- [1970], 'Shipping and Trade in the Port of Liverpool 1783-1793', Unpublished PhD Thesis, Liverpool University.
- Power, M. J., [1997], 'Councillors and Commerce in Liverpool, 1650-1750', *Urban History*, 24, pp. 301-23.
- [1992], 'The Growth of Liverpool', in Belchem, J, (ed.), *Popular Politics, Riot and Labour: Essays in Liverpool History, 1790-1940*, Liverpool, pp. 21-37.
- [2000], 'Politics and Progress in Liverpool, 1660-1740', *Northern History*, 35, pp. 119-38.
- Rathbone, E. F., [1905], *William Rathbone (1819-1902): a Memoir*, London.
- Rathbone, E. A., (ed.), [1913], *Records of the Rathbone Family for Private Circulation Only*, Edinburgh.
- Richardson, D, et al., (eds.), [2007], *Liverpool and Transatlantic Slavery*, Liverpool.
- Rose, R. B., [1958], 'A Liverpool Sailors' Strike in the Eighteenth Century', *Transactions of the Lancashire and Cheshire Antiquarian Society*, 48, pp. 85-92.
- [1961], 'The 'Jacobins' of Liverpool, 1789-1793', *Liverpool Bulletin*, 9, pp. 35-49.
- Ryden, D. B., [2001], 'Does Decline Make Sense? The West Indian Economy and the Abolition of the British Slave Trade', *Journal of Interdisciplinary History*, 31(3), pp. 347-374.
- [2009], *West Indian Slavery and British Abolition, 1783-1807*, Cambridge.
- Sanderson, F. E., [1972], 'Bibliographical Essay: Liverpool and the Slave Trade: a Guide to Sources', *THSLC*, 124, pp. 154-76.
- [1972], 'The Liverpool Delegates and Sir William Dolben's Bill', *THSLC*, 124, pp. 57-84.

- [1978], 'The Structure of Politics in Liverpool 1780-1807', *THSLC*, 127, pp. 65-91.
- Anon., [1855], *A Selection from the Early Letters of the Late Rev. William Shepherd, L. L. D.*, Liverpool.
- Sellers, I, [1968], 'William Roscoe, the Roscoe Circle and Radical Politics in Liverpool, 1787-1807', *THSLC*, 120, pp. 45-62.
- Sherwood, M, [2007], *After Abolition: Britain and the Slavery since 1807*, London.
- Snyder, C, [2007], 'Conquered Enemies, Adopted Kin, and Owned People: the Creek Indians and their Captives', *Journal of Southern History*, 73, pp. 255-88.
- Solow B. L. and Engerman, S. L., (eds.), [1987], *British Capitalism and Caribbean Slavery: The Legacy of Eric Williams*, Cambridge.
- Spiegel, G. M., (ed.), [2005], *Practicing History: New Directions in Historical Writing after the Linguistic Turn*, New York, NY.
- Stobart, J, [2002], 'Culture versus Commerce: Societies and Spaces for Elites in Eighteenth-Century Liverpool', *Journal of Historical Geography*, 28(4), pp. 471-85.
- [2003], 'Identity, Competition and Place Promotion in the Five Towns', *Urban History*, 30 (2), pp. 163-82.
- Storrs, C, (ed.), [2009], *The Fiscal Military State in Eighteenth Century Europe*, London.
- Surkis, J, [2012], 'When Was the Linguistic Turn? A Genealogy', *AHR*, 117(3), pp. 700-22.
- Sutton, I, [2010], 'Unitarians and the Constitution of History and Biography, 1740-1820', *English Historical Review*, 513, pp. 314-39.
- Swaminathan, S, [2009], *Debating the Slave Trade: Rhetoric of National Identity, 1759-1815*, Farnham.
- [2010], 'Reporting Atrocities: a Comparison of the Zong and the Trial of Captain John Kimber', *S & A*, 31(4), pp. 483-99.
- Sweet, J. H, [2009], 'Mistaken Identities? Olaudah Equiano, Domingos Álvares, and the Methodological Challenges of Studying in the African Diaspora', *AHR*, 114(2), pp. 279-306.
- Sweet, R, [1999], *The English Town, 1680-1840: Government, Society and Culture*, New York, NY.
- [1998], 'Freeman and Independence in English Borough Politics c. 1770-1830', *Past and Present*, 161, pp. 84-115.
- Symes, C, [2011], 'When We Talk about Modernity', *AHR*, 116(3), pp. 715-26.
- Tolley, B. H, [1969], 'The Liverpool Campaign against the Order in Council and the War of 1812', in J. R. Harris, (ed.), *Liverpool and Merseyside: Essays in the Economic and Social History of the Port and Its Hinterland*, London, pp. 98-156.
- Thomas, J. A., [2012], 'Not Yet Far Enough', *AHR*, 117(3), pp. 794-803.
- Thomas, L. M., [2011], 'Modernity's Failings, Political Claims, and Intermediate Concepts',

- AHR*, 116(3), pp. 727-40.
- Thomas, P, [1984], 'Changing Attitudes in an Expanding Empire: the Anti-slavery Movement, 1760-1783', *S & A*, 5(1), pp. 50-72.
- Thornton, J, [2012], *A Cultural History of the Atlantic World*, Cambridge.
- Toledano, E. R, [1982], *The Ottoman Slave Trade and its Suppression*, Princeton, NJ.
- Touzeau, J, [1910], *The Rise and Progress of Liverpool from 1551 to 1835*, Liverpool.
- Trepp, J, [1928], 'The Liverpool Movement for the Abolition of the English Slave Trade', *Journal of Negro History*, 13, pp. 265-85.
- Turley, D, [1991], *The Culture of English Antislavery, 1780-1860*, London.
- Vigier, F, [1970], *Change and Apathy: Liverpool and Manchester during the Industrial Revolution*, Cambridge.
- Wahrman, D, [2001], 'The English Problem of Identity in the American Revolution', *AHR*, 106(4), pp. 1236-62.
- Walvin, J, [1994], 'Freedom and Slavery and the Shaping of Victorian Britain', *S & A*, 15(2), pp. 246-59.
- (ed.), [1982], *Slavery and British Society 1776-1846*, Baton Rouge, LA.
- Watts, R, [1998], *Gender, Power and the Unitarians in England 1760-1860*, London.
- Whale, J. C., [2005], 'The Making of a City of a Culture: William Roscoe's Liverpool', *Eighteenth-Century Life*, 29(2), pp. 91-107.
- Wilder, G, [2012], 'From Opic to Topic: the Foreclosure Effect of Historiographic Turns', *AHR*, 117(3), pp. 723-45.
- Williams, A. F., [1962], 'Bristol Port Plans and Improvement Schemes', *Transactions of the Bristol and Gloucestershire Archaeological Society*, 81, pp. 138-88.
- Williams, G, [1987], *History of the Liverpool Privateers and Letters of Marque with an Account of the Liverpool Slave Trade 1744-1812*, London.
- Wilson, A. M., [1998], 'The Cultural Identity of Liverpool, 1790-1850', *THSLC*, 147, pp. 55-80.
- [1999], '“The Florence of the North”? the Civic Culture of Liverpool in the Early Nineteenth Century', in Alan Kidd, and David Nicholls, (eds.), *Gender, Civic Culture and Consumerism: Middle-Class Identity in Britain, 1800-1940*, Manchester, pp. 34-46.
- [2008], *William Roscoe: Commerce and Culture*, Liverpool.
- Wilson, K, [1995a], 'Citizenship, Empire, and Modernity in the English Provinces, c. 1720-1790', *American Society for Eighteenth Century Studies*, 29(1), pp. 69-96.
- [1995b], *The Sense of the People: Politics, Cultures and Imperialism in England, 1715-1785*, Cambridge.
- Zahedieh, N, [2010], 'Regulation, Rent-seeking, and the Glorious Revolution in the English

Atlantic Economy', *EcHR*, 63(4), pp. 865-90.

邦語文献

- 青木康〔1997〕『議員が選挙区を選ぶ—18世紀イギリスの議会政治』山川出版社。
- 秋田茂〔2012〕『イギリス帝国の歴史—アジアから考える』中公新書。
- 一ほか編〔2010〕『デニス・フリナーグローバル化と銀』山川出版社。
- 一ほか編〔2013〕『グローバル・ヒストリーと帝国』大阪大学出版会。
- アーミテージ、D〔2005〕(平田雅博ほか訳)『帝国の誕生—ブリテン帝国のイデオロギー的起源』日本経済評論社。
- 一〔2012〕(平田雅博ほか訳)『独立宣言の世界史』ミネルヴァ書房。
- アレン、R・C〔2012〕(グローバル経済史研究会訳)『なぜ豊かな国と貧しい国が生まれたのか』NTT出版。
- イクイアーノ、O〔2012〕(久野陽一訳)『アフリカ人、イクイアーノの生涯の興味深い物語』研究社。
- 池本幸三ほか〔1995〕『近代世界と奴隷制』人文書院。
- 市橋秀夫〔1989〕「イギリス奴隷貿易廃止運動の史的分析(1787～1788年)」『三田学会雑誌』81(4)。
- 伊藤航多〔2009〕「市民文化としての「郷土研究」—19世紀イングランド都市における歴史文化とその社会的理念」『史学雑誌』118(10)。
- 稲垣春樹〔2008〕「ウィリアム・ウィルバーフォースの福音主義とミッション運動—1813年東インド会社勅許改訂を中心に」『クリオ』22。
- 一〔2012〕「帝国と宣教—19世紀イギリス帝国史における宗教の復権」『史学雑誌』121(6)。
- 井野瀬久美恵〔2007〕『大英帝国という経験』講談社。
- 岩井淳編〔2012〕『複合国家イギリスの宗教と社会』ミネルヴァ書房。
- 岩間俊彦〔2008〕『イギリス・ミドルクラスの世界』ミネルヴァ書房。
- ウィリアムズ、E〔2004〕(山本伸監訳)『資本主義と奴隷制—経済史から見た黒人奴隷制の発生と崩壊』明石書店。
- 梅垣千尋〔2011〕『女性の権利を擁護する—メアリ・ウルストンクラフトの挑戦』白澤社。
- 江口朴郎〔1975〕『帝国主義時代の研究』岩波書店。
- 一〔1954〕『帝国主義と民族』東京大学出版会。
- エリス、J・M〔2008〕(松塚俊三ほか訳)『長い18世紀のイギリス都市—1680～1840』法政大学出版局。
- エルティス、Dほか編〔2012〕(増井志津代訳)『環大西洋奴隷貿易歴史地図』東洋書林。
- 大澤広晃〔2013〕「宗教・帝国・「人道主義」—ウェズリアン・メソディスト宣教団とベチュアナランド植民地化」『史学雑誌』122(1)。
- 一〔2012〕「宣教師と植民地政治批判—19世紀ケープ植民地東部境界地帯におけるウェズリアン

- ン・メソヂスト宣教師の動向を中心に」『歴史学研究』890。
- 太田秀通〔1977〕「奴隷概念の再検討」『思想』641。
- 一〔1977〕「奴隷制と奴隷制社会について」『歴史学研究』477。
- 大野誠編〔2009〕『近代イギリスと公共圏』昭和堂。
- 大峰（藤井）真理〔2013〕「18世紀前半フランス・ナントの海運業—史料「船舶艀装申告書」を手がかりに」『社会経済史学』79（1）。
- 一〔2001〕『フランス・インド会社と黒人奴隷貿易』九州大学出版会。
- 岡倉登志〔2001〕『アフリカの歴史—侵略と抵抗の軌跡』明石書房。
- 一編〔1996〕『アフリカ史を学ぶ人のために』世界思想社。
- 岡田与好〔1987〕『経済的自由主義—資本主義と自由』東京大学出版会。
- 岡本充弘〔2013〕『開かれた歴史へ』御茶の水書房。
- 小川晃一〔1992〕『英国自由主義体制の形成—ウィッグとディセンター』木鐸社。
- 小川了〔2002〕『奴隷商人ソニエー18世紀フランスの奴隷交易とアフリカ社会』山川出版社。
- 小倉充夫ほか編〔2011〕『ブラック・ディアスポラ』明石書店。
- 小嶋潤〔1988〕『イギリス教会史』刀水書房。
- カーティン、P・D〔2002〕（田村愛理ほか訳）『異文化交易の世界史』NTT出版。
- 金子勝〔1982〕「「自由主義」的行財政改革の形成」『社会科学研究』34（2）・（3）。
- 一〔1997〕『市場と制度の政治経済学』東京大学出版会。
- 樺山紘一ほか編〔1997〕『岩波講座世界歴史 17—環大西洋革命』岩波書店。
- 川北稔〔1983〕『工業化の歴史的的前提—帝国とジェントルマン』岩波書店。
- 一〔2008〕『民衆の大英帝国—近世イギリス社会とアメリカ移民』岩波現代文庫。
- 川端正久ほか編〔2012〕『アフリカと世界』晃洋書房。
- 川分圭子〔2011〕「奴隷貿易廃止期のイギリス議会と西インド利害関係者」『京都府立大学学術報告（人文）』63。
- 一〔2006〕「ロンドン港の変貌と商人たち—二つのドック建設計画をめぐって」歴史学研究会編、深沢克己責任編集『シリーズ港町の世界史 2—港町のトポグラフィ』青木書店。
- 木畑洋一〔2008〕『イギリス帝国と帝国主義—比較と関係の視座』有志舎。
- 一編〔1998〕『大英帝国と帝国意識—支配の深層を探る』ミネルヴァ書房。
- 一ほか編〔2012〕『帝国と帝国主義』有志社。
- 紀平英作ほか編〔2006〕『グローバリゼーションと帝国』ミネルヴァ書房。
- 君塚直隆〔2006〕『パクス・ブリタニカのイギリス外交—パーマストンと会議外交の時代』有斐閣。
- ギルロイ、P〔2006〕（上野俊哉ほか訳）『ブラック・アトランティック—近代性と二重意識』月曜社。
- グリーン、J・P〔2013〕（大森雄太郎訳）『幸福の追求—イギリス領植民地期アメリカの社会史』慶應義塾大学出版会。

- クローダー、M ほか〔1983〕（中村弘光ほか訳）『ナイジェリアーその人々の歴史』帝国書院。
- 児島秀樹〔2004a〕「イギリス大西洋奴隷貿易廃止のための政治経済学」『明星大学経済学研究紀要』36（1）。
- 〔2004b〕「イギリス大西洋奴隷貿易擁護論」『明星大学経済学研究紀要』35（2）。
- 〔2003〕「イギリス奴隷貿易廃止と宗派」『明星大学経済学研究紀要』34（2）。
- 小林和夫〔2011〕「イギリス大西洋奴隷貿易とインド産綿織物—トマス・ラムリー商会の事例を中心に」『社会経済史学』77（3）。
- 〔2009〕「ウィリアムズ・テーゼと奴隷貿易研究」『パブリック・ヒストリー』6。
- コリー、L〔2000〕（川北稔監訳）『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会。
- 近藤和彦〔1978・9〕「1756～7年の食糧蜂起について」『思想』654・645。
- 〔1973・5〕「産業革命前夜の民衆運動—マンチェスター 1757～58年」『社会運動史』2・4。
- 〔1988〕「宗派抗争の時代—1720、30年代のマンチェスターにおける対抗の構図」『史学雑誌』97（3）。
- 〔1984〕「商業革命・帝国・ジェントルマン—川北稔『工業化の歴史的的前提』」『思想』720。
- 〔1983a〕「ジョン・ライランズと「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」」『思想』714。
- 〔1989〕「政治文化の社会史にむけて—『パリのフランス革命』・イン・コンテクスト」『思想』776。
- 〔1993〕『民のモラル—近世イギリスの文化と社会』山川出版社。
- 〔1983b〕「マンチェスターにおけるヘゲモニー集団—1700～1850年」『史学雑誌』92（9）。
- 〔1976〕「民衆運動・生活・意識—イギリス社会運動史から」『思想』630。
- 編〔2008〕『歴史的ヨーロッパの政治社会』山川出版社。
- 近藤尚武〔1985〕「イギリス植民地における奴隷制廃止の研究史的考察」『三田商学研究』28（3）。
- 〔1987〕「「反奴隷制協会」の研究—19世紀前半イギリスにおける反奴隷制運動の一断面」『三田商学研究』30（4）。
- 斎藤修〔2013〕『プロト工業化の時代—西欧と日本の比較史』岩波現代文庫。
- 坂下史〔2003〕「近代イギリス地方都市における行政改革の実践」『東京女子大学史論』56。
- 〔1997〕「名誉革命体制下の地方都市エリート—ブリストルにおけるモラル・リフォーム運動から」『史学雑誌』106（12）。
- 坂巻清〔2009〕『イギリス毛織物工業の展開—産業革命への途』日本経済評論社。
- 三時眞貴子〔2012〕『イギリス都市文化と教育—ウォリントン・アカデミーの教育社会史』昭和堂。
- シュレ・カナール、J〔1973〕（野沢協訳）『黒アフリカ史—その地理・文明・歴史』理論社。
- 杉山忠平〔1974〕『理性と革命の時代に生きて—J・プリーストリ伝』岩波新書。
- 鈴木亮〔2009〕（浜林正夫ほか編）『『国富論』とイギリス急進主義』日本経済評論社。
- ステッドマン・ジョーンズ、G〔2010〕（長谷川貴彦訳）『階級という言葉—イングランド労働者階級の政治社会史、1832～1982年』刀水書房。

- ダイヤモンド、J〔2000〕（倉骨彰訳）『銃・病原菌・鉄—1万3000年にわたる人類史の謎』、草思社。
- 高橋裕悠〔2009〕「17～18世紀イギリスのアフリカ貿易に関する学説史的検討—イギリス王立アフリカ会社を中心として」『経済論究』135。
- 竹内真人〔2012〕「イギリス帝国主義と武器＝労働交易」横井勝彦ほか編『軍拡と武器移転の世界史—兵器はなぜ容易に広まったのか』日本経済評論社。
- 竹田泉〔2013〕『麻と綿が紡ぐイギリス産業革命—アイルランド・リネン業と大西洋市場』ミネルヴァ書房。
- 田所昌幸編〔2006〕『ロイヤル・ネイヴィーとパックス・ブリタニカ』有斐閣。
- 玉木俊明〔2012〕『近代ヨーロッパの形成—商人と国家の近代世界システム』創元社。
- 〔2009〕『近代ヨーロッパの誕生—オランダからイギリスへ』講談社。
- 田村理〔2013〕「イギリス奴隷解放論の歴史的形成—リヴァプールにおける「反」奴隷解放運動（1788～93年）」『西洋史学』251。
- 〔2010〕「イギリス奴隷貿易廃止運動史研究の射程—「ウィリアムズ理論」、「モラル資本」論をこえて」『北大史学』50。
- 〔2008〕「近代イギリス都市における政治文化と奴隷貿易—リヴァプール1689～1787年」『北大史学』48。
- 〔2011〕「クリストファ・ブラウンの「モラル資本」論—イギリス反奴隷制運動史研究における先端的議論の紹介」『北大史学』51。
- 〔2012〕「大西洋奴隷制、奴隷反乱、奴隷解放運動—S・ドレッシュャー、P・C・エマー編『誰が奴隷制を廃止したか』によせて」『北大史学』52。
- 遅塚忠躬〔2010〕『史学概論』東京大学出版会。
- デズモンド、Aほか〔2009〕（矢野真千子ほか訳）『ダーウィンが信じた道—進化論に隠されたメッセージ』NHK出版。
- デビッドソン、B〔1975〕（貫名美隆ほか訳）『アフリカ文明史—西アフリカの歴史、1000年～1800年』理論社。
- トムスン、E・P〔1979〕（近藤和彦訳）「1790年以前のイギリスにおける社会運動」『思想』633。
- 〔2003〕（市橋秀夫ほか訳）『イングランド労働者階級の形成』青弓社。
- 長澤勢理香〔2009〕「イギリス奴隷貿易研究の動向と課題—奴隷貿易決済システムに関する研究の可能性」『経済学論叢』61（1）。
- 中野忠ほか編〔2012〕『18世紀イギリスの都市空間を探る—「都市ルネサンス」論再考』刀水書房。
- 永原陽子編〔2009〕『「植民地責任」論—脱植民地の比較史』青木書店。
- 並河葉子〔2000〕「クラバム派のソーシャル・リフォーム運動—ジェントルマンの新しいパターンリズムのかたち」山本正編『ジェントルマンであること』刀水書房。
- 〔2005〕「奴隷解放の結社—クラバム派の聖者たち」川北稔編『結社のイギリス史』山川出版

- 社。
- 〔1996〕「西アフリカにおけるチャーチ・ミッショナリー・ソサエティーの活動とイギリス福音主義」『西洋史学』181。
 - 〔2002〕「反奴隷制運動と出版物—西インド産砂糖ボイコット運動の事例を中心に」『外国学研究』53。
 - 〔2000〕「反奴隷制運動にみる「文明化」されたイギリス人」『外国学研究』46。
- 西出敬一〔2012〕「間大西洋における奴隷制の廃止と南北戦争」『アメリカ研究』46。
- 〔1984〕「南カロライナ黒人奴隷制の成立—カリブ型奴隷制社会としての諸特徴」『西洋史学』133。
- ネーデル、G ほか〔1983〕（川上肇ほか訳）『帝国主義と植民地主義』御茶の水書房。
- バーク、E〔1978〕（半澤孝麿訳）『フランス革命の省察』岩波書店。
- 長谷川貴彦〔2014〕『イギリス福祉国家の歴史的源流—近世・近代転換期の間団体』東京大学出版会。
- 〔2011〕「イギリス労働者文化のメタヒストリー—「経験」から「物語」への転回」『歴史評論』737。
 - 〔1993〕「階級・文化・言語—近代イギリス都市社会史研究から」『思想』828。
 - 〔2004〕「修正主義と構築主義の間—イギリス社会史研究の現在」『社会経済史学』70（2）。
 - 〔2013〕「文化史研究の射程—「転回」以降の歴史学のなかで」『思想』1074。
 - 〔2010〕「物語の復権／主体の復権—ポスト言語論的転回の歴史学」『思想』1036。
- パターンソン、O〔2001〕（奥田暁子訳）『世界の奴隷制の歴史』明石書店。
- 浜忠雄〔2003〕『カリブからの問い—ハイチ革命と近代世界』岩波書店。
- 〔1998〕『ハイチ革命とフランス革命』北海道大学図書刊行会。
 - 〔2007〕『ハイチの栄光と苦難—世界初の黒人共和国の行方』刀水書房。
 - 〔2010〕「フランス革命とハイチ—最近の研究動向から」『歴史評論』718。
- 浜林正夫〔1996・7〕「イギリス奴隷解放運動と急進主義」『国際研究論集』9（2）・10（3）。
- ハント、L〔2011〕（松浦義弘訳）『人権を創造する』岩波書店。
- 藤川隆男〔2011〕『人種差別の世界史—白人性とは何か？』刀水書房。
- 編〔2005〕『白人とは何か？—ホワイトネス・スタディーズ入門』刀水書房。
- プライス、R〔1966〕（永井義雄訳）『祖国愛について』未来社。
- フランク、A・G〔2000〕（山下範久訳）『リオリエント—アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店。
- 布留川正博〔2008〕「19世紀前半シエラ・レオネにおける解放アフリカ人」『経済学論叢』60（3）。
- 〔1998〕「イギリスにおける奴隷貿易廃止運動—London Abolition Committee の活動を中心に」『龍谷大学経営学論集』37（4）。
 - 〔2010〕「イギリスにおける奴隷制廃止運動—漸進的廃止から即時廃止へ」『経済学論叢』62（1・2）。

- [2006]「イギリスのアボリショニズムとシエラ・レオネ植民地」『経済学論叢』57 (4)。
- [1991]「ウィリアムズ・テーゼ再考—イギリス産業革命と奴隷制」『社会科学』46。
- [2003]「エリック・ウィリアムズの「衰退理論」再考—奴隷貿易廃止期における英領西インドの経済」、『経済学論叢』54 (4)。
- ブリュア、J [2003] (大久保桂子訳)『財政＝軍事国家の衝撃—戦争・カネ・イギリス国家』名古屋大学出版会。
- 古矢旬ほか編 [2007]『権力と暴力』ミネルヴァ書房。
- ベイリン、B [2007] (和田光弘ほか訳)『アトランティック・ヒストリー』名古屋大学出版会。
- ポーコック、J・G・A [1993] (田中秀夫訳)『徳・商業・歴史』みすず書房。
- [2008] (田中秀夫ほか訳)『マキアヴェリアン・モーメント—フィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統』名古屋大学出版会。
- [1989] (福田有広訳)「「保守的啓蒙」の視点—英国の啓蒙と米・仏の革命」『思想』782。
- ポランニー、K [2004] (栗本慎一郎ほか訳)『経済と文明—ダホメの経済人類学的分析』ちくま学芸文庫。
- 正木慶介 [2008]「ロッキンガム派ウィッグの政治理念とその歴史的意義—ヨークシャ運動を手がかりにして」『西洋史論叢』30。
- 松浦高嶺 [2005]『イギリス近代史論集』山川出版社。
- マックウィリアム、R [2004] (松塚俊三訳)『19世紀イギリスの民衆と政治文化』昭和堂。
- 松塚俊三 [1978]「1790年代イギリスの民衆運動—1793、94年のコンヴェンション(Convention)」『歴史学研究』461。
- [1983]「1835年の都市自治体法と地域政治史—ニューカースル・アポン・タインの Whig middling ranks」『社会経済史学』49 (3)。
- [1989]「イギリス近代の地域社会と「第二の科学革命」—「ニューカースル文芸・哲学協会」をめぐって」『史学雑誌』98 (9)。
- [1981]「スペンス (Thomas Spence) 観の変遷—ラディカリズムから千年王国主義へ」『史学雑誌』90 (1)。
- [1981]「トーマス・スペンスの思想と行動—1790年代のイギリス・ラディカリズムと千年王国主義」『西洋史学』123。
- [2001]『歴史のなかの教師—近代イギリスの国家と民衆文化』山川出版社。
- 峯陽一ほか編 [2010]『アフリカから学ぶ』有斐閣。
- ミンツ、S [1988] (川北稔ほか訳)『甘さと権力—砂糖が語る近代史』平凡社。
- 森建資 [1974]「イギリス産業革命期における農業労働力の存在形態」『土地制度史学』62。
- [1988]『雇用関係の生成—イギリス労働政策史序説』木鐸社。
- 矢内原勝ほか編 [1989]『アフリカ・ラテンアメリカ関係の史的展開』慶應義塾大学地域研究センター。
- 山本通 [1994]『近代英国実業家たちの世界—資本主義とクエイカー派』同文館。

リューデ、G〔1982〕（古賀秀男ほか訳）『歴史における群衆』法律文化社。

和田光弘〔2000〕『紫煙と帝国—アメリカ南部タバコ植民地の社会と経済』名古屋大学出版会。